

京都府遺跡調査報告集

第192冊

1. 北野台遺跡第7次
2. 平野古墳群
3. 小樋尻遺跡第13次
4. 新名神高速道路整備事業関係遺跡
下水主遺跡第10～12次

2023

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



掘立柱建物写真(南から)

序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和 56 年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。また、その調査成果を地域の歴史教育などに活用していただけるように、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する綾部市北野台遺跡は、府営農地整備事業に伴い京都府中丹広域振興局の依頼を受けて実施し、正方位に主軸をもつ掘立柱建物や墨書土器を検出しました。また、亀岡市平野古墳群は、中谷川砂防事業に伴い京都府建設交通部の依頼を受けて実施し、円墳の墳丘裾部の状況を確認しました。一方、小樋尻遺跡は、国道 24 号寺田拡幅事業に伴い近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施しました。調査では、弥生時代後期から奈良時代の土地利用の変遷を明らかにできました。また、同城陽市下水主遺跡は、小樋尻遺跡に隣接した遺跡であり、名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて、令和元年度から令和 3 年度にかけて発掘調査を実施しました。調査では、中近世の鳥畑などを確認しましたが、本冊では、平成 24 年度の第 1 次調査から平成 27 年度の第 7 次調査の成果を含め、総括的な報告を行いました。このたび、整理等作業が完了し、調査成果をまとめましたので、『京都府遺跡調査報告集第 192 冊』としてここに刊行する次第です。これらの調査成果は、今後、地域史や日本史研究を進めるうえで、重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました京都府建設交通部をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、心より御礼を申し上げます。

令和 5 年 3 月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

- (1)北野台遺跡第7次
- (2)平野古墳群
- (3)小樋尻遺跡第13次
- (4)下水主遺跡第10～12次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
1.	北野台遺跡第7次	綾部市位田町	令和4年9月8日～ 令和4年12月21日	京都府中丹広域 振興局	竹原一彦
2.	平野古墳群	亀岡市千歳町千歳 地内	令和4年11月8日～ 令和5年1月6日	南丹土木事務所	中尾真琴
3.	小樋尻遺跡第13次	城陽市富野小樋尻	令和3年9月6日～ 令和4年3月2日	山城北土木事務所	小泉裕司
4.	下水主遺跡第10次 下水主遺跡第11次 下水主遺跡第12次	城陽市水主大將軍・ 倉貝、寺田金尾	令和2年1月30日～ 令和2年5月27日 令和2年5月28日～ 令和2年12月17日 令和3年4月26日～ 令和3年9月21日	西日本高速道路 株式会社	加藤雅士

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。

5. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係調査員武本典子が行った。

本文目次

1. 北野台遺跡第7次発掘調査報告

1. はじめに-----	1
2. 綾部市の地理と歴史環境	
1) 地理的環境-----	1
2) 歴史的環境-----	2
3. 調査概要	
1) 第1トレンチの調査-----	4
2) 第2トレンチの調査-----	8
4. 出土遺物-----	8
1) 土器-----	11
2) 墨書土器-----	11
3) 土製品-----	14
4) 石製品-----	14
5) 柱材・木製品-----	16
5. まとめ-----	16

2. 平野古墳群発掘調査報告

1. はじめに-----	27
2. 位置と環境	
1) 地理的環境-----	28
2) 歴史的環境-----	28
3. 調査の経緯・方法-----	29
4. 平野古墳群の概要-----	30
5. 調査概要	
1) A地区-----	30
2) B地区-----	33
6. 出土遺物	
1) 須恵器-----	34
2) 土師器-----	34
7. まとめ-----	34

3. 小樋尻遺跡第13次発掘調査報告

1. はじめに	37
2. 遺跡の環境	
1) 地理的環境	38
2) 歴史的環境	38
3. 調査概要	
1) 基本層序	40
2) 検出遺構	40
4. 出土遺物	50
5. 調査の成果	50
付編 小樋尻遺跡における放射性炭素年代測定報告	
1. はじめに	54
2. 試料と方法	54
3. 結果	55
4. 所見	56

4. 新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第10～12次発掘調査報告

1. はじめに	59
2. 遺跡の環境	
1) 地理的環境	61
2) 周辺遺跡	62
3) 歴史的環境	63
3. 調査の報告の方法	
1) 既往の調査	64
2) 調査場所	64
3) 調査工程	64
4) 基本層序	66
5) 遺構記号	66
6) 小グリッドの設定	67
4. F15・19・16区の調査	68
1) F15区の調査	69
2) F19区の調査	72
3) F16区の調査	74
5. F13・20・14区の調査	75
1) F13区の調査	76

2) F 20区の調査	81
3) F 14区の調査	84
6. F 17・21・18区の調査	86
1) F 17区の調査	87
2) F 21区の調査	91
3) F 18区の調査	94
7. F 22区の調査	98
8. 出土遺物	101
1) F 15区出土遺物	101
2) F 19区出土遺物	101
3) F 16区出土遺物	103
4) F 13区出土遺物	103
5) F 20区出土遺物	105
6) F 14区出土遺物	107
7) F 17区出土遺物	107
8) F 21区出土遺物	109
9) F 18区出土遺物	109
10) F 22区出土遺物	109
9. 総括	
1) 下水主遺跡の時期別変遷	110
2) 下水主遺跡F地区の地形変遷	112
10. 下水主遺跡における島畑の再検討	113
11. 今後の課題	117
付編 1. 下水主遺跡第4次F地区調査報告の問題点	121
1) F 1区	121
2) F 3区	121
3) F 4区	121
4) F 5区	122
5) F 8区	122
6) F 9区	122
7) F 10区	122
8) F 11・12区	123
付編 2. 放射性炭素年代測定	124
1. はじめに	124
2. 試料	124

1) 試料の採取状況	124
2) F13区での採取状況	124
3) F18・F21区での採取状況	127
3. 方法	129
4. 結果	129
5. 考察	
1) F13区	130
2) F18区・F21区	131
付編3. 花粉分析、大型植物遺体分析、樹種同定	
1. はじめに	134
2. 試料	
1) F13区	134
2) F18区・F21区	134
3. 分析方法	
1) 花粉分析	134
2) 植物珪酸体分析	135
3) 大型植物遺体分析	139
4) 樹種同定	139
4. 結果	
1) 花粉分析	139
2) 植物珪酸体分析	141
3) 大型植物遺体分析	141
4) 樹種同定	147
5. 考察	
1) F13区	147
2) F18区・F21区	150

挿 図 目 次

1. 北野台遺跡第7次発掘調査報告

第1図	調査地周辺遺跡分布図	3
第2図	調査トレンチ平面図	4
第3図	第1トレンチ・第6次調査地遺構平面図	5
第4図	第1トレンチ東壁・南壁土層図	6
第5図	掘立柱建物S B01実測図	7
第6図	溝S D02・焼土坑S X03実測図	8
第7図	第2トレンチ遺構平面図	9
第8図	第2トレンチ北壁柱状土層図・東壁土層図	9
第9図	沼状地S X20木製品出土状況図	10
第10図	沼状地S X20土層断面図	10
第11図	出土遺物1(弥生土器・土師器)	12
第12図	出土遺物2(須恵器)	13
第13図	出土遺物3(墨書土器)	14
第14図	出土遺物4(土製品)	15
第15図	出土遺物5(石製品)	16
第16図	出土遺物6(柱材)	17
第17図	出土遺物7(木製品)	17

2. 平野古墳群発掘調査報告

第1図	亀岡市の位置	27
第2図	周辺遺跡分布図	29
第3図	平野古墳群分布図	30
第4図	調査区配置図	31
第5図	A地区トレンチ配置図	31
第6図	A地区トレンチ北東部遺物等分布状況	32
第7図	A地区土層断面図	33
第8図	出土遺物	35

3. 小樋尻遺跡第13次発掘調査報告

第1図	周辺遺跡分布図	39
第2図	周辺調査区配置図	41

第3図	遺構配置図	42
第4図	北壁土層断面図1	43
第5図	北壁土層断面図2	44
第6図	北壁土層断面図3	45
第7図	井戸S E 11実測図	47
第8図	土坑S K 13・竪穴建物S H 02・21実測図	48
第9図	出土遺物1	51
第10図	出土遺物2	52

4. 新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第10～12次発掘調査報告

第1図	城陽市の位置	59
第2図	遺跡把握の変遷	60
第3図	周辺地質分布図	61
第4図	周辺遺跡と歴史的環境	63
第5図	下水主遺跡調査区配置図	65
第6図	小グリッドの設定原理	67
第7図	F 15・19・16区配置図	68
第8図	F 15区遺構平面図	69
第9図	F 15区北壁土層断面図	70
第10図	F 15区N R 1502遺物出土状況	71
第11図	F 19区遺構平面図	72
第12図	S D 1903土層断面図	73
第13図	F 19区北壁土層断面図	73
第14図	F 16区遺構平面図	74
第15図	F 16区南壁土層断面図	75
第16図	F 13・20・14区配置図	76
第17図	F 13区遺構平面図(基盤層面)	77
第18図	F 13区北壁土層断面図	78
第19図	F 13区遺構平面図(基盤層下)	78
第20図	S D 1301土層断面図	79
第21図	F 13区S D 1303敷粗朶検出状況(2面目)	79
第22図	F 13区西壁断ち割り土層断面図	79
第23図	F 13区南壁断ち割り土層断面図	80
第24図	F 13区N R 1304自然木出土状況	81
第25図	F 20区遺構平面図	82

第26図	F 20区 S D 2001・2002・2005・2006土層断面図	82
第27図	F 20区北壁断ち割り土層断面図	83
第28図	F 14区遺構平面図	85
第29図	F 14区南壁土層断面図	85
第30図	F 17・21・18区配置図	86
第31図	F 17区遺構平面図(中世面)	87
第32図	F 17区北壁土層断面図	88
第33図	F 17区中世面検出遺構土層断面図	89
第34図	F 17区遺構平面図(基盤層面)	90
第35図	基盤層中遺物出土状況	90
第36図	F 17区南壁断ち割り土層断面図	90
第37図	F 21区遺構平面図(中世面)	91
第38図	F 21区 S P 2101・2102・2103土層断面図	91
第39図	F 21区遺構平面図(基盤層面)	92
第40図	F 21区北壁土層断面図	92
第41図	F 21区東壁断ち割り土層断面	93
第42図	F 18区遺構平面図(中世面)	94
第43図	F 18区北壁土層断面図	95
第44図	F 18区中世面検出遺構土層断面図	95
第45図	F 18区遺構平面図(基盤層面)	96
第46図	F 18区流路 N R 1821畦土層断面図	97
第47図	F 18区西壁断ち割り土層断面図	97
第48図	F 22区配置図	98
第49図	F 22区遺構平面図	99
第50図	F 22区北壁土層断面図	100
第51図	F 22区西壁土層断面図	100
第52図	F 15・F 19区出土遺物	101
第53図	F 13区出土遺物	102
第54図	F 20・F 14区出土遺物	104
第55図	F 17・F 21区出土遺物	106
第56図	F 18区出土遺物	108
第57図	F 22区出土遺物	110
第58図	下水主遺跡 F 地区地形変遷	112
第59図	農地改良の種類と歴史的名称	114
第60図	鴨川の洪水発生回数と河床高	115

第61図	F 13区の試料採集地点の柱状図と試料採集位置	126
第62図	F 18区・F 21区の試料採集地点の柱状図と試料採集位置	128
第63図	F 13区の花粉分析図	137
第64図	F 18区・F 21区の花粉分布図	139
第65図	F 13区の植物珪酸体分布図	140
第66図	F 13区の大型植物遺体分布図	143
第67図	F 18区の大型植物遺体分布図	146

付 表 目 次

1. 北野台遺跡第7次発掘調査報告

付表 1	出土土器・土製品観察表	20
付表 2	柱材、木製品観察表	26

2. 平野古墳群発掘調査報告

付表 1	出土土器観察表	36
------	---------	----

3. 小樋尻遺跡第13次発掘調査報告

付表 1	測定試料及び処理	55
付表 2	測定結果	56
付表 3	出土遺物観察表	57

4. 新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第10～12次発掘調査報告

付表 1	分析試料一覧	124
付表 2	測定資料及び処理	125
付表 3	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	129
付表 4	F 13区の産出花粉孢子一覧表	136
付表 5	F 18区・F 21区の産出花粉孢子一覧表	138
付表 6	F 13区の試料 1 g 当りのプラントオパール個数	140
付表 7	F 13区の大型植物遺体	142
付表 8	F 18区・F 21区の大型植物遺体	145
付表 9	F 13区・F 15区の出土木材の樹種同定結果	147
付表10	F 13区・F 15区の出土木材樹種同定結果	147
付表11	出土遺物観察表	153

写真目次

写真1 植物遺体サンプル-----135

図版目次

巻頭図版 北野台遺跡第7次

掘立柱建物写真(南から)

1. 北野台遺跡第7次

- 図版第1 (1)調査地遠景(南東から)
(2)第1トレンチ遺構検出作業(北東から)
(3)第1・2トレンチ遠景(東から)
- 図版第2 (1)第1トレンチ全景(上が北)
(2)第1トレンチ全景(南から)
(3)掘立柱建物S B01全景(南西から)
- 図版第3 (1)S B01-P13検出状況(西から)
(2)S B01-P13掘形分割調査状況(西から)
(3)S B01-P12検出状況(西から)
- 図版第4 (1)S B01-P12掘形分割調査状況(から)
(2)焼土坑S X03検出状況(南から)
(3)焼土坑S X03埋土分割調査状況(南から)
- 図版第5 (1)S X03完掘状況(南から)
(2)第1トレンチ南東角断割土層(北から)
(3)第1・2トレンチ遠景(西から)
- 図版第6 (1)第2トレンチ全景(上が北)
(2)沼状地N X20調査状況(東から)
(3)水路N X21全景(東から)
- 図版第7 (1)第2トレンチ全景(南東から)
(2)N X20セクション1土層堆積状況(東から)
(3)N X20セクション2土層堆積状況(東から)

- 図版第8 (1) N X20須恵器杯B出土状況(西から)
(2) N X20須恵器蓋出土状況(南から)
(3) N X20墨書土器出土状況(南東から)
- 図版第9 (1) N X20碧玉製管玉出土状況(東から)
(2) N X20第3区板材出土状況(北から)
(3) N X20第3区板材出土状況(東から)
- 図版第10 (1) N X20第1区北壁断割1土層(南から)
(2) N X20第3区北壁断割2土層(南から)
(3) N X20第4区北壁断割3土層(南から)
- 図版第11 出土遺物1 弥生土器・土師器・須恵器
- 図版第12 出土遺物2 須恵器・墨書土器・石鏃・管玉
- 図版第13 出土遺物3 土錘
- 図版第14 出土遺物4 S B01柱根

2. 平野古墳群

- 図版第1 (1) A地区 調査区全景(南西から)
(2) A地区 土師器・須恵器出土状況(北から)
- 図版第2 (1) A地区 堰堤(南西から)
(2) A地区 調査区東壁断面(西から)
- 図版第3 (1) B地区 1・3トレンチ全景(南東から)
(2) B地区 1トレンチ東側斜面(西から)
- 図版第4 (1) B地区 1トレンチ全景(南から)
(2) B地区 断ち割り1(北から)
- 図版第5 (1) B地区 2トレンチ(北から)
(2) B地区 断ち割り2(西から)
- 図版第6 (1) B地区 3トレンチ全景(西から)
(2) B地区 3トレンチ西側断面(北東から)
- 図版第7 出土遺物1
- 図版第8 出土遺物2

3. 小樋尻遺跡第13次

- 図版第1 (1) 調査地西半遠景(西から)
(2) 調査地東半遠景(東から)

- 図版第2 (1) 調査トレンチ西半全景(上が南)
(2) 調査トレンチ西半全景(西から)
(3) 調査トレンチ西半全景(東から)
- 図版第3 (1) 調査トレンチ東半全景(上が北)
(2) 調査トレンチ東半全景(西から)
(3) 調査トレンチ東半全景(東から)
- 図版第4 (1) 井戸S E 11上層検出状況(北東から)
(2) 井戸S E 11下層土器出土状況(北東から)
(3) 井戸S E 11完掘状況(北東から)
- 図版第5 (1) 土坑S K 13(北東から)
(2) 溝S D 06・土坑S K 13(南東から)
(3) 溝S D 06・07・08・09土坑S K 13(南から)
- 図版第6 (1) 竪穴建物S H 02(西から)
(2) 竪穴建物S H 02・21(北東から)
(3) 溝S D 01(北東から)
- 図版第7 (1) 溝S D 05(南東から)
(2) 溝S D 24・35(北西から)
(3) 溝S D 14(北西から)
- 図版第8 (1) 井戸S E 34(北から)
(2) 土坑S K 33(北から)
(3) 土坑S K 16・溝S D 19(東から)
- 図版第9 出土遺物1
- 図版第10 (1) 出土遺物2
(2) 出土遺物3

4. 下水主遺跡第10～12次

- 図版第1 (1) F 15区完掘状況(北西から)
(2) F 15区完掘状況(西から)
- 図版第2 (1) F 15区S D 1502遺物出土状況(北西から)
(2) F 15区北壁土層断面(南東から)
(3) F 15区下層調査西壁断割土層断面(北東から)
- 図版第3 (1) F 19区完掘状況(南から)
(2) F 19区完掘状況(南東から)
- 図版第4 (1) F 19区S D 1904検出状況(北から)
(2) F 19区北壁土層断面(南東から)

- (3) F 19区下層調査北壁断割土層断面(南東から)
- 図版第5 (1) F 16区完掘状況(北東から)
(2) F 16区完掘状況(南東から)
- 図版第6 (1) F 16区完掘状況(東から)
(2) F 16区北壁土層断面(北西から)
(3) F 16区下層調査東壁断割土層断面(南西から)
- 図版第7 (1) F 13区基盤層面完掘状況(東から)
(2) F 13区基盤層面完掘状況(西から)
- 図版第8 (1) F 13区 S D 1302検出状況(東から)
(2) F 13区 S D 1302遺物出土状況(北西から)
(3) F 13区 S D 1303敷粗朶検出(1面)状況(北から)
- 図版第9 (1) F 13区 S D 1303敷粗朶検出(1面)状況(東から)
(2) F 13区 S D 1303敷粗朶検出(2面)状況(北東から)
(3) F 13区 S D 1303南半部護岸横木検出状況(東から)
- 図版第10 (1) F 13区 S D 1303南半部護岸横木検出状況(北東から)
(2) F 13区 S D 1303完掘状況(北から)
(3) F 13区 S D 1304検出状況(南東から)
- 図版第11 (1) F 13区下層調査 S D 1304自然木出土状況(東から)
(2) F 13区下層調査 S D 1304自然木出土状況(南西から)
- 図版第12 (1) F 13区下層調査西壁断割土層断面(東から)
(2) F 13区下層調査南壁断割土層断面(北から)
(3) F 13区下層調査完掘状況(南から)
- 図版第13 (1) F 20区完掘状況(東から)
(2) F 20区完掘状況(北東から)
- 図版第14 (1) F 20区遺構検出状況(北西から)
(2) F 20区島畑112(北東から)
(3) F 20区 S D 2002・2003完掘状況(北から)
- 図版第15 (1) F 20区 S D 2001北畦土層断面(南から)
(2) F 20区 S D 2006土層断面(南西から)
(3) F 20区下層調査北壁断割土層断面(南東から)
- 図版第16 (1) F 14区完掘状況(北から)
(2) F 14区完掘状況(北東から)
- 図版第17 (1) F 14区 S D 1402完掘状況(北西から)
(2) F 14区遺物(第55図84)出土状況
(3) F 14区南壁土層断面(北西から)

- 図版第18 (1) F 17区中世面完掘状況(西から)
 (2) F 17区中世面完掘状況(北西から)
- 図版第19 (1) F 17区中世面 S E 1710遺物出土状況(北東から)
 (2) F 17区 S E 1710断割土層断面(北から)
 (3) F 17区 S X 1705遺物出土状況(西から)
- 図版第20 (1) F 17区中世面 S P 1707(S B 1723)土層断面(西から)
 (2) F 17区中世面 S P 1712土層断面(南から)
 (3) F 17区中世面 S D 1709南畦土層断面(北から)
- 図版第21 (1) F 17区基盤層面完掘状況(西から)
 (2) F 17区基盤層面島畑113(南西から)
- 図版第22 (1) F 17区基盤層面島畑110(南東から)
 (2) F 17区基盤層中遺物出土状況(西から)
 (3) F 17区下層調査南壁断割土層断面(北から)
- 図版第23 (1) F 21区中世面完掘状況(南東から)
 (2) F 21区中世面完掘状況(北東から)
- 図版第24 (1) F 21区中世面遺構検出状況(南から)
 (2) F 21区中世面 S P 2101(S B 2104)土層断面(南から)
 (3) F 21区中世面 S D 2103土層断面(東から)
- 図版第25 (1) F 21区基盤層面完掘状況(南西から)
 (2) F 21区基盤層面完掘状況(北西から)
- 図版第26 (1) F 21区基盤層面島畑114(北東から)
 (2) F 21区北壁土層断面(南から)
 (3) F 21区下層調査東壁断割土層断面(北西から)
- 図版第27 (1) F 18区中世面完掘状況(西から)
 (2) F 18区中世面完掘状況(南東から)
- 図版第28 (1) F 18区中世面 S P 1810(S B 1801)土層断面(北西から)
 (2) F 18区中世面 S P 1806(S B 1801)土層断面(北西から)
 (3) F 18区中世面 S P 1817(S B 1801)土層断面(南東から)
 (4) F 18区中世面 S P 1818土層断面(南西から)
 (5) F 18区中世面 S D 1808土層断面(北から)
 (6) F 18区中世面 S D 18109南畦土層断面(北から)
 (7) F 18区中世面 S D 1816土層断面(北から)
 (8) F 18区中世面 S D 1815土層断面(北から)
- 図版第29 (1) F 18区基盤層面完掘状況(西から)
 (2) F 18区基盤層面完掘状況(南東から)

- 図版第30 (1) F 18区下層調査完掘状況(北から)
(2) F 18区下層調査有機物層面の検出状況(北から)
(3) F 18区下層調査西壁断割土層断面(南東から)
- 図版第31 (1) F 22区完掘状況(東から)
(2) F 22区完掘状況(北東から)
- 図版第32 (1) F 22区 S D 2202検出状況(南東から)
(2) F 22区島畑115断割状況(北から)
(3) F 22区北壁土層断面(南東から)
- 図版第33 下水主遺跡調査対象地全景(木津川右岸から宇治丘陵を望む、西から)
- 図版第34 (1) 出土遺物 1 下水主遺跡 F 15・F 19区出土遺物
(2) 出土遺物 2 下水主遺跡 F 15区出土遺物
- 図版第35 出土遺物 3 下水主遺跡 F 13区出土遺物
- 図版第36 (1) 出土遺物 4 下水主遺跡 F 20区出土遺物
(2) 出土遺物 5 下水主遺跡 F 14区出土遺物
- 図版第37 出土遺物 6 下水主遺跡 F 17・F 21区出土遺物
- 図版第38 (1) 出土遺物 7 下水主遺跡 F 18区出土遺物
(2) 出土遺物 8 下水主遺跡 F 18区基盤層出土遺物
- 図版第39 出土遺物 9 下水主遺跡各調査区出土遺物

北野台遺跡第7次発掘調査報告書

1. はじめに

今回の発掘調査は、府営農地中間管理機構関連農地整備事業に伴い、京都府中丹広域振興局からの依頼を受けて、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施したものである。

北野台遺跡は、京都府北部を流れて若狭湾に注ぐ、由良川の中流域右岸の沖積地に位置する。北野台遺跡は、これまで綾部市教育委員会^(注1)と京都府教育委員会^(注2)による発掘調査(第1～6次調査)が実施され、今回の調査が第7次調査となる。現地調査にあたっては、京都府教育委員会、綾部市教育委員会をはじめ、各関係機関のご指導、ご助言をいただいた。記して感謝します。

なお、調査にかかる経費は、全額、京都府中丹広域振興局が負担した。

本文は現地調査を担当した調査課の竹原一彦が執筆した。

〔調査体制〕

調査責任者 調査課長 小池 寛

調査担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉
同 副主査 竹原一彦

調査場所 京都府綾部市位田町

現地調査期間 令和4年9月8日～令和4年12月21日

調査面積 1,150㎡

〔整理作業体制〕

整理作業責任者 調査課長 小池 寛

整理作業担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉
同 副主査 竹原一彦

整理作業期間 令和4年12月1日～令和5年3月31日

2. 綾部市の地理と歴史環境

1) 地理的環境

京都府北部を流れて若狭湾に注ぐ由良川は府下第一の河川で、標高約500mの三国岳に源流をもち、全長146kmを測る。由良川は河口部に扇状地を形成せず、中流域(福知山市・綾部市)に東西約18km、南北2～5kmを測る府北部最大の平坦地である福知山盆地が広がる。綾部市は福知山盆地東端部の沖積地に中心市街地が広がり、近世の城下町を継承して発展してきた。地質的に

は、北側の山地はよく風化した斑レイ岩などの火成岩(夜久野岩類)、南側は砂岩(丹波帯)などが分布する。特に福知山盆地は、この二つの地質構造の境界部にあたっている。由良川の盆地の出口となる北西部、福知山市下天津は狭隘部となり、出水時には由良川の流れが滞る。このため、福知山盆地と下流域は度々、大規模な河川氾濫の被害を受けてきた。

2) 歴史的環境(第1図)

福知山盆地とその周辺部の歴史を概観してみる。

旧石器時代では、福知山市域の稚児野遺跡、綾部市域の以久田野遺跡(ナイフ形石器)・旗投遺跡(彫器)の3遺跡が知られる。中でも福知山市北西部、由良川支流の牧川に近い台地上に立地する稚児野遺跡(後期旧石器時代)では、約600点の石器が出土している。これらの石器は19か所の^(注3)ブロックに分かれて環状に分布し、石器にはナイフ形石器などの剥片石器や局部磨製石斧がみられる。綾部市の2遺跡は採集遺物である。

縄文時代に入ると由良川流域は飛躍的に遺跡数が増加する。福知山盆地では、福知山市武者ヶ谷遺跡から、草創期の刺突文小型丸底土器の出土が知られる。そのほかに上野平遺跡、半田遺跡、石本遺跡、荒堀遺跡が知られる。また、綾部市では有舌尖頭器が出土した西原遺跡をはじめ味方遺跡、新庄遺跡、小貝遺跡、絵熊遺跡が知られる。

弥生時代では、福知山盆地西部の和久寺下層遺跡、半田遺跡、石本遺跡、奥野部遺跡(中期)、前田遺跡、宝蔵山遺跡、興・観音寺遺跡が主要遺跡として知られる。特に興・観音寺遺跡は深さ1.4mの大溝で囲われた中期の環濠集落跡である。環濠の内側では竪穴建物跡多数と環濠内から土器が多量に出土した。過去、銅剣形石剣が採集されており、大型石鎌・分銅形土製品が発掘調査で出土している。大型石鎌に使用された石材は香川県産のサヌカイト製で、分銅形土製品は吉備地方の影響を強く受けたものと考えられ、土器には河内や瀬戸内地方の胎土や文様をもつものが含まれる。加えて丹後・播磨・摂津の特徴をもつ土器の存在からも、広域で活発な交流が認められる拠点集落の一つとみられる。

綾部市では盆地東部の館遺跡、三宅遺跡、庄村遺跡、青野西遺跡(弥生～中世)、青野遺跡(弥生中期～奈良)、味方遺跡が知られる。庄村遺跡では後期の方形周溝墓6基、青野西遺跡では後期から終末期の竪穴建物跡と方形周溝墓が検出されている。

古墳時代では、盆地を取り巻く周辺丘陵に多数の古墳群が築かれる。福知山市域では、牧古墳群(後期)、豊富谷古墳群(弥生後期～古墳中期)、妙見古墳群(中期～後期)、向野西古墳群(後期)、廣峯古墳群(前期～中期)、稲葉山古墳群(後期前半)、宝蔵山古墳群(前期)、奉安塚古墳(後期後半)などが知られる。このうち前方後円墳は、牧古墳群の牧正一古墳(全長35m)、廣峯15号墳(同40m)、猪崎古墳群中の稲葉山10号墳(同38m)、妙見11号墳(同39m)がある。妙見1号墳(中期後半)は一辺43mの方墳である。いずれも首長墳である。廣峯15号墳は前期末築造とみられ、朱が施された木棺直葬の棺内から景初四年銘をもつ盤龍鏡1面が出土したことでも知られる。奉安塚古墳は無袖式横穴式石室で、副葬品として豪華な鉄地金銅張の馬具金具がほぼ一揃いで出土している。

綾部市域では盆地中央部北側丘陵に京都府内最大の円墳である私市円山古墳(中期中頃)が築か



第1図 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000 福知山東部・綾部)

- | | | | | | |
|------------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 北野台遺跡 | 2. 瀬戸東古墳群 | 3. 瀬戸古墳群 | 4. 梅ノ木原遺跡 | 5. 北ノ前遺跡 | 6. 瀬戸北古墳群 |
| 7. 栗城跡 | 8. 桧前古墳群 | 9. 位田遺跡 | 10. 宮越古墳群 | 11. 位田宮越城館跡 | 12. 位田城跡 |
| 13. 岩井古墳群 | 14. 里遺跡 | 15. 久田山古墳群 | 16. 久田山遺跡 | 17. 三反畑遺跡 | 18. 味方遺跡 |
| 19. 青野遺跡 | 20. 青野南遺跡 | 21. 何鹿郡衙推定地 | 22. 綾中廃寺 | 23. 綾中遺跡 | 24. 綾部城跡 |
| 25. 青野大塚古墳 | 26. 青野西遺跡 | 27. 西町遺跡 | 28. 上ノ切遺跡 | 29. 大將軍遺跡 | 30. 延遺跡 |
| 31. 岡町遺跡 | 32. 明智遺跡 | 33. 新庄遺跡 | 34. 東光院窯 | | |

れる。直径約70m、造り出しを含む全長は80m、墳丘高は約10mである。墳丘は三段築成、葺石・埴輪を伴う。造り出し部には家・短甲・蓋埴輪が設置されていた。墳頂には南北2基の埋葬施設が並列し、鉄製の武器・武具・農耕具、玉類、壺などの副葬品が出土した。中でも北側埋葬施設副葬品の一つである胡籙金具は、細かな文様と金箔で装飾された貴重なものである。盆地北東部では、中期後半の方墳である聖塚古墳・菖蒲塚古墳が築造される。2基の古墳はともに墳丘が二段築成で、造り出し、葺石、埴輪、周濠をもつ。聖塚古墳は一辺54m、菖蒲塚古墳は一辺32mの規模を測る。聖塚古墳の埋葬施設は粘土槨とみられ、仿製神獸鏡、鉄製の武器・武具・玉類などの副葬品が出土している。

奈良・平安時代では、古代寺院跡として、福知山盆地の西端に和久寺廃寺(奈良～平安時代)、

東端に綾中廃寺(白鳳期～平安時代)が存在する。和久寺廃寺の寺域は約100m四方とみられ、左右対称に並ぶ塔跡・金堂跡の基壇や僧坊・回廊・工房跡などが確認されている。綾中廃寺は小規模調査が多く、明確な寺院遺構が検出されていないが、瓦積基壇状遺構や多量の古瓦で埋まった溝が見つまっている。綾中廃寺の北に隣接する青野南遺跡では大型掘立柱建物が発見され、当時の郡役所である何鹿郡衙跡と推定されている。当時の寺院は地方豪族の氏寺であったことや、有力な地方豪族が郡司に任じられていたことから、当地が何鹿郡の中心地であったと推定される。古代の役所や寺院では、多量の須恵器や土師器が使用された。綾部市域の奈良時代の須恵器窯は西原窯跡群(奈良末～平安中期)、上延窯跡群(奈良)、東光院窯跡(奈良)、東光院南窯跡(古墳～奈良)、安場窯跡(古墳～奈良)が知られる。

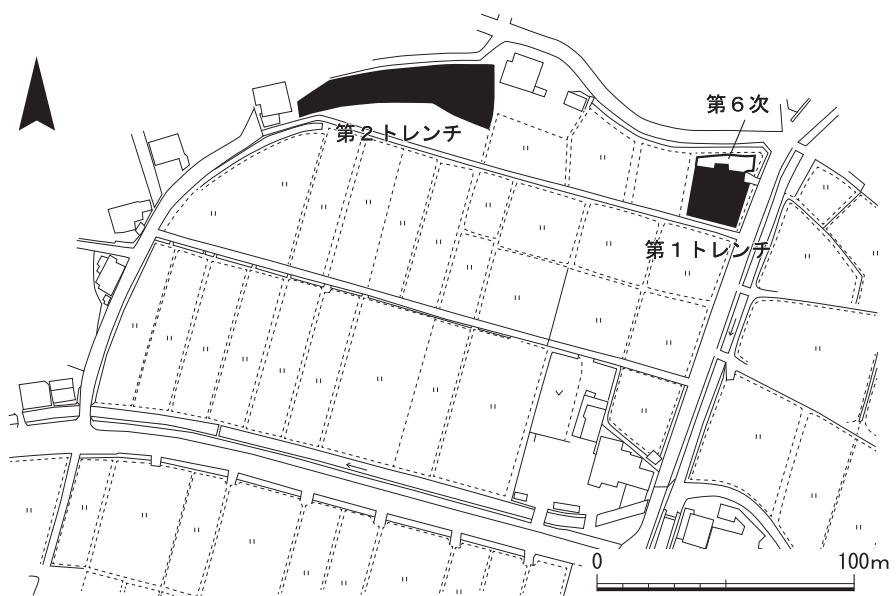
北野台遺跡のある位田町の周辺域は中世には栗村庄などに含まれていたが、位田町の所属は不明である。『安国寺文書』の寛正2(1461)年記事には、「上位田、下位田」の記載がある。戦国時代に入ると周辺丘陵に山城が築かれる。北野台遺跡に近いところでは、遺跡西側丘陵に栗城(一尾城)跡、東に位田宮越城館跡、東にやや離れて位田城跡がみられる。丹波国一揆(1489～93)は船井郡から奥三郡にまたがる広域で強力な一揆であり、位田城はその中心拠点(上原氏)であり、激しい攻防戦が繰り広げられたとされる。

3. 調査概要

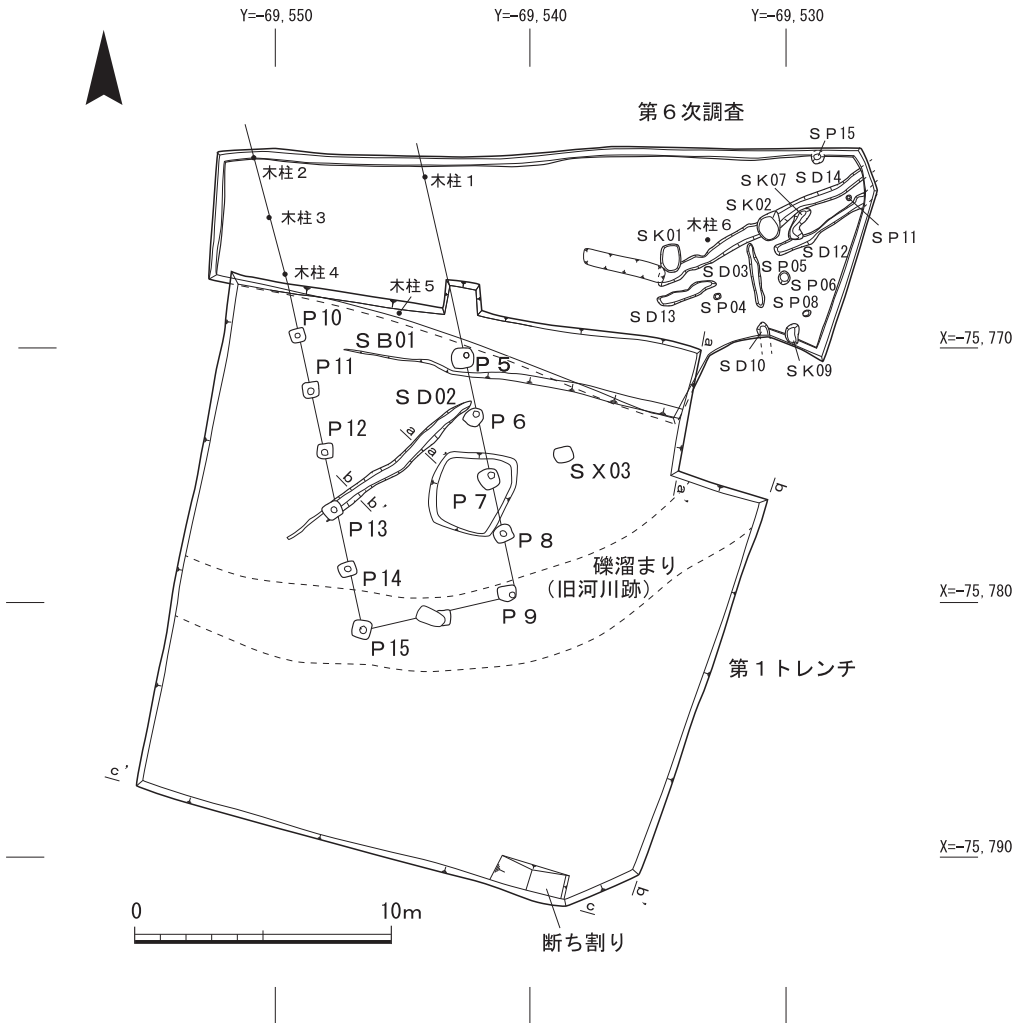
今回の調査は、農地整備事業において、遺構面まで掘削の及ぶ切土地点のうち、過去の小規模及び発掘調査の成果をもとに、遺跡北部の東西2か所にトレンチを設定し、面的調査を行った(第2図)。東側調査地を第1トレンチ、西側に約100m離れた調査地を第2トレンチとした。両トレンチは由良川右岸の沖積地北端に位置し、その北側は丘陵裾の台地となる。

1) 第1トレンチの調査(第3～6図)

第1トレンチは、北東の谷奥から南流する由良川支流の瀬戸川右岸に位置する。現在の瀬戸川は過去の耕地整備に伴い直線的なコンクリート護岸でその流れが規制されているが、地元の方の話では、整備以前は台地の裾を流れる川が存在したようである。



第2図 調査トレンチ平面図

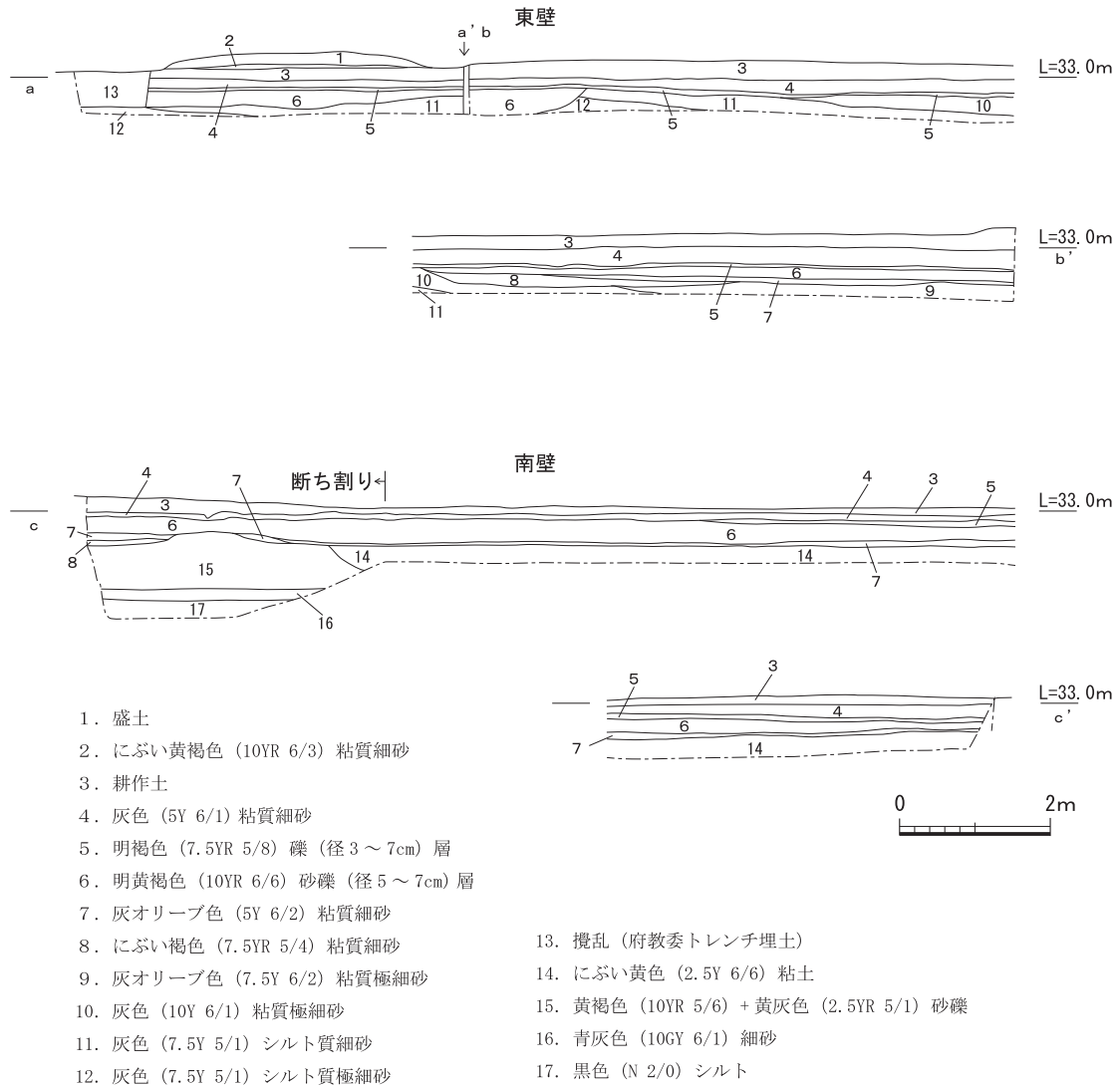


第3図 第1トレンチ・第6次調査地遺構平面図

第1トレンチの北隣の水田は、京都府教育委員会が調査(第6次)を行い、素掘り溝・焼土坑・小柱穴・木柱が検出されていた。

第1トレンチでは、掘立柱建物跡SB01、素掘り溝SD02、焼土坑SX03を検出した。遺構面の標高は32.5~32.7mであり、緩やかに北西から南東方向に下がる傾斜をもつ。遺構面は北部が粘質土、中央部から南側は3~10cmの厚さで川原石砂礫が堆積する。また、トレンチ中央部において、南に弧状に張り出す川原石からなる砂礫(3~6cm大)帯が確認された。この砂礫層は幅約3.5mを測り、旧河川痕跡と判断した。砂礫内に遺物は含まれない。SB01-P9・P15との切り合い関係から、この旧河川跡はSB01以前の時期と判断される。

掘立柱建物SB01(第5図) 検出位置はトレンチ中央北部であり、建物北端は第6次調査地に延びる。建物は南北棟であり、主軸はN-12°-Wを測る。トレンチ内で検出した建物規模は南北桁行5間(約12.0m)以上、東西梁間2間(約3.3m)を測る。なお、北隣りの第6次調査地では、西側桁行柱穴から北方向に延びる木柱3基と、東側桁行の延長上で1基の木柱が検出されている。そのことから、SB01は南北の桁行が8間(19.2m)以上の規模であることが判明した。柱穴掘形の平面形は方形を主とするが、辺が弧状を呈する掘形もみられる。柱穴掘形は一辺0.6m前後の

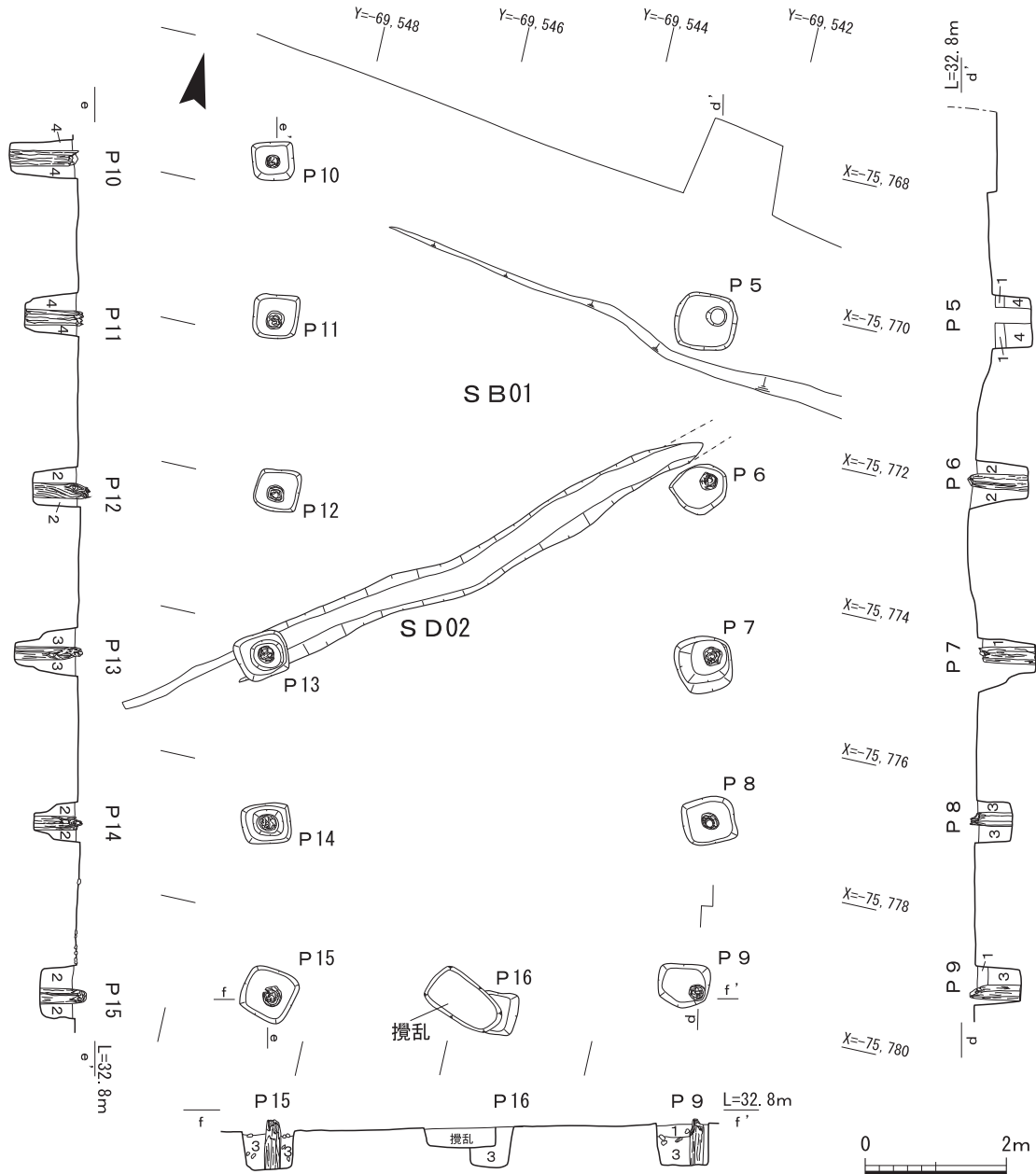


第4図 第1トレンチ東壁・南壁土層図

規模を測るが、深さは0.5~0.85m (P 8・13)と個々の柱穴で異なる。ほぼ全ての柱穴内には柱根が存在したが、一部では後世の攪乱等で柱根が失われた例もある。検出した柱根は、1間の心々間距離が南北桁行で約2.4m、東西梁間が3.1mを測る。柱掘形埋土は川原石(2~10cm大)混じりの細砂を主体とする。この川原石は柱穴周辺部の地層に多数存在するものである。柱穴掘形に伴う遺物はわずかで、柱穴P16の掘形内から須恵器蓋の口縁破片(第12図39)が唯一出土した。今回の調査では、柱穴掘形を調査中、全ての柱穴で湧水をみた。掘形底面付近からの湧水が特に著しく、地下水位が高いことが柱根が残った原因と考えられる。

溝S D02(第6図) 北東から南西方向に斜行する素掘り溝である。S B01-P13と重複関係にあり、P13がS D02を掘り込む。溝幅0.5m、深さ0.06m前後の規模を測る。埋土は黄灰色粘質極細砂であり、遺物の出土はみられない。S D02と第6次調査地S D14との位置関係から、2つの溝が同一溝であった可能性は高い。

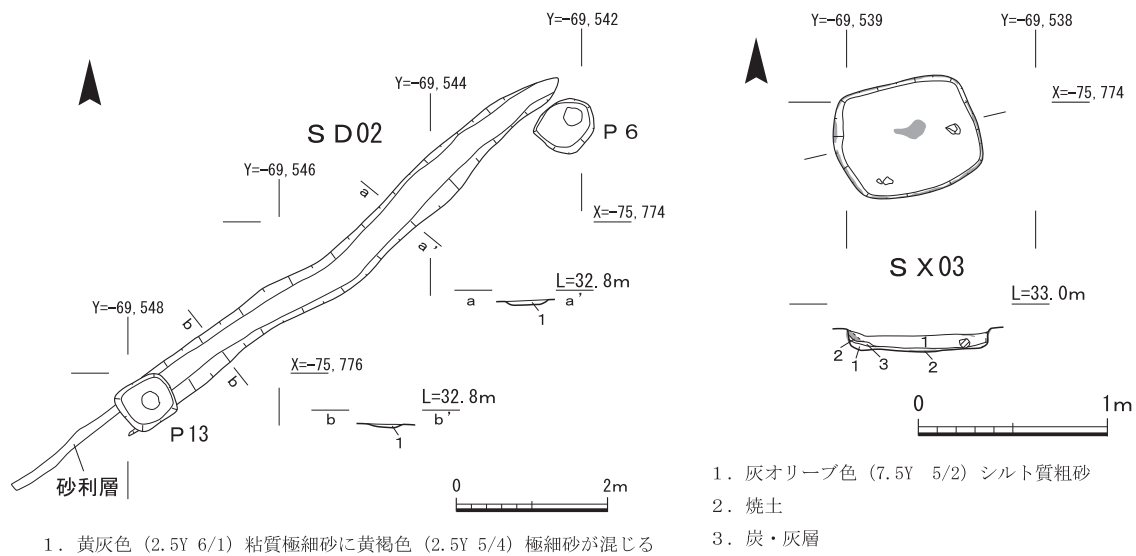
焼土坑S X03(第6図) S B01-P7から北東約2.2m離れた位置から検出した。掘形の平面



- | | |
|---|--|
| 1. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 粘質極細砂に暗黄褐色 (2.5Y 6/6) 粘質極細砂が混じる | 3. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 細砂に径3～5cm大の河原石を含む |
| 2. 褐色 (7.5YR 4/4) 細砂に径2～5cm大の河原石を多数含む | 4. 緑灰色 (10G 5/1) シルト |

第5図 掘立柱建物S B01実測図

形は隅丸方形である。掘形の壁面に沿って焼土が取り巻く状況を確認した。掘形の軸線はS B01とほぼ同軸で、北から西に振っている。掘形は東西0.75m、南北0.62m、深さは0.2mの規模を測る。底面は平坦に近く、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面には1cmほどの厚さで黒色の炭層が堆積し、壁付近では炭層上の一部に焼土の堆積物が認められた。炭層の上には灰オリーブ色シルト質細砂が埋土として存在したが、遺物は含まれない。火葬墓の可能性もあり慎重に調査を行ったが、埋土中に焼骨・遺物は存在しなかった。炭層を除去した底面の一部、中央付近に焼土がみられたが底面全体には広がらない。

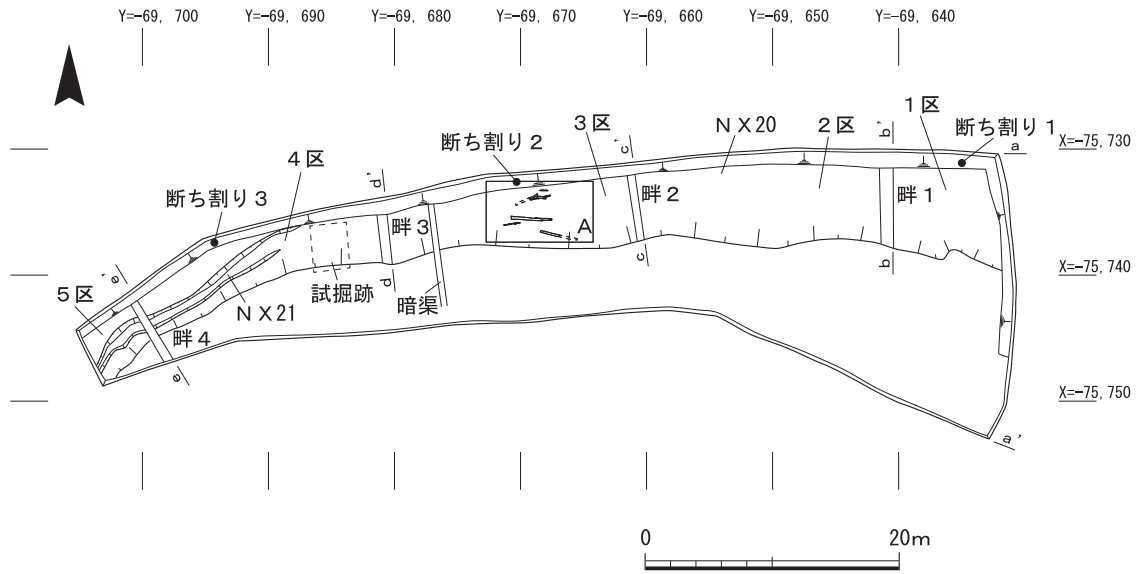


第6図 溝S D02・焼土坑S X03実測図

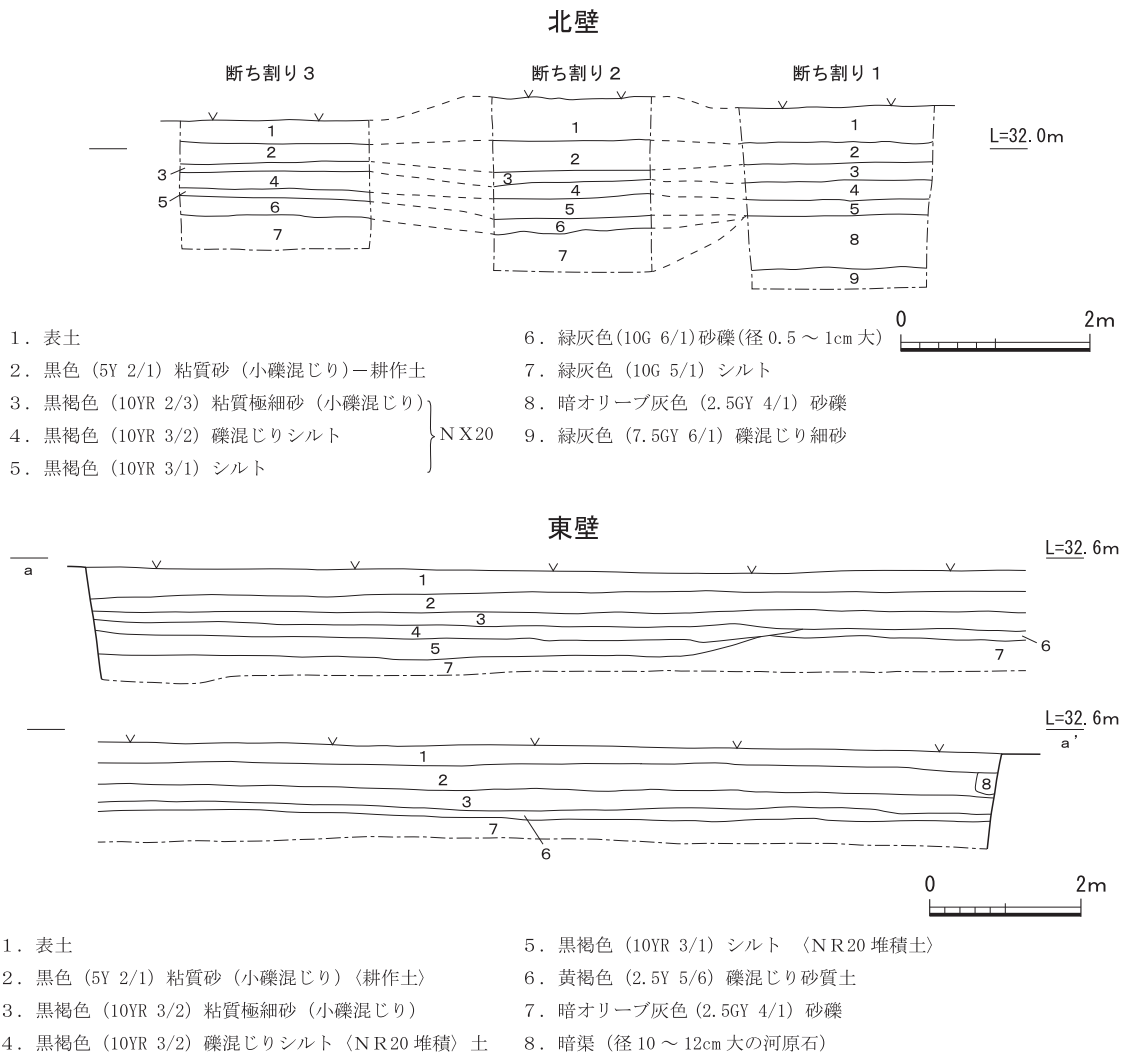
2) 第2 トレンチの調査(第7～10図)

第2 トレンチの遺構面の標高は、水田面から0.6m下がった31.7m付近である。トレンチは東西に長く弧を描く形状を呈する。このトレンチでの検出遺構は、沼状地N X20と水路N X21である(第7図)。N X20は台地の縁辺に沿い、河川跡のような細長い形状を示す。N X20は南岸部を検出したが、北岸側と東西両端部は調査地外となる。東西は約74m、幅は約8mの範囲で調査を行った。N X20の深さは約0.5～0.6mであり、埋土は3層に分かれる。上から順に黒褐色粘質極細砂層(第8図第3層)・黒褐色礫混じりシルト層(同第4層)・黒褐色シルト層(同第5層)である。特に遺物は第1～第3区の第3・4層に多く、土器・土製品が集中する傾向が顕著である。上層の第3層では奈良～平安時代、第4・5層では弥生後期～奈良時代の土器・土製品が出土する傾向がある。出土した遺物では、須恵器の杯や蓋などの供膳具と、漁労具の土錘の出土が多い。また、須恵器では杯・蓋・高杯の7点に墨書が確認された(第13図)。土師器は須恵器に比べ、出土する率が低い。第3層では摩滅した瓦器椀が出土したが、その数は極わずかである。特殊なものでは、須恵器の円面硯(55)・転用硯(35)、碧玉製管玉(116)がある。N X20の底面には、緑灰色もしくは暗オリーブ灰色の砂礫か緑灰色シルトが広がる。同層は無遺物であり、この検出をもってN X20の底面と判断した。

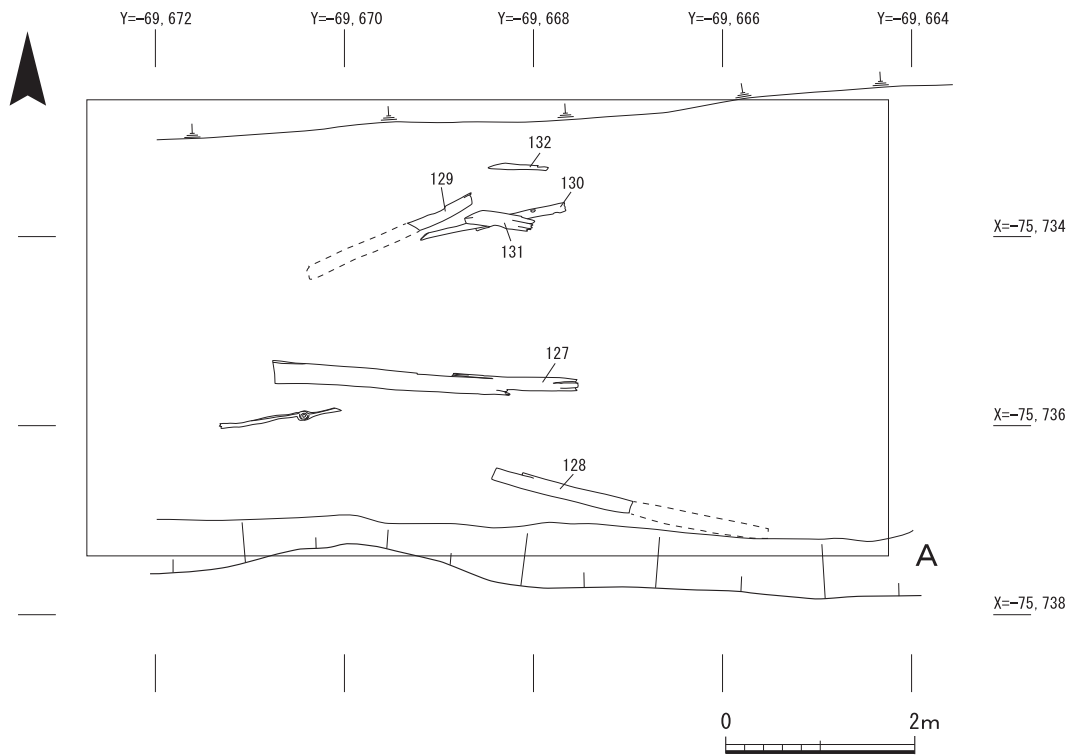
N X21は、N X20の西部第4・5区で検出した流路状を呈する遺構である。N X20の南岸から1～1.5mほど内側に位置し、N X20の南岸ラインと同様に並行しながら蛇行する。幅は0.7m前後、検出全長は約21mを測る。埋土はN X20第3層と同じ黒褐色シルトである。



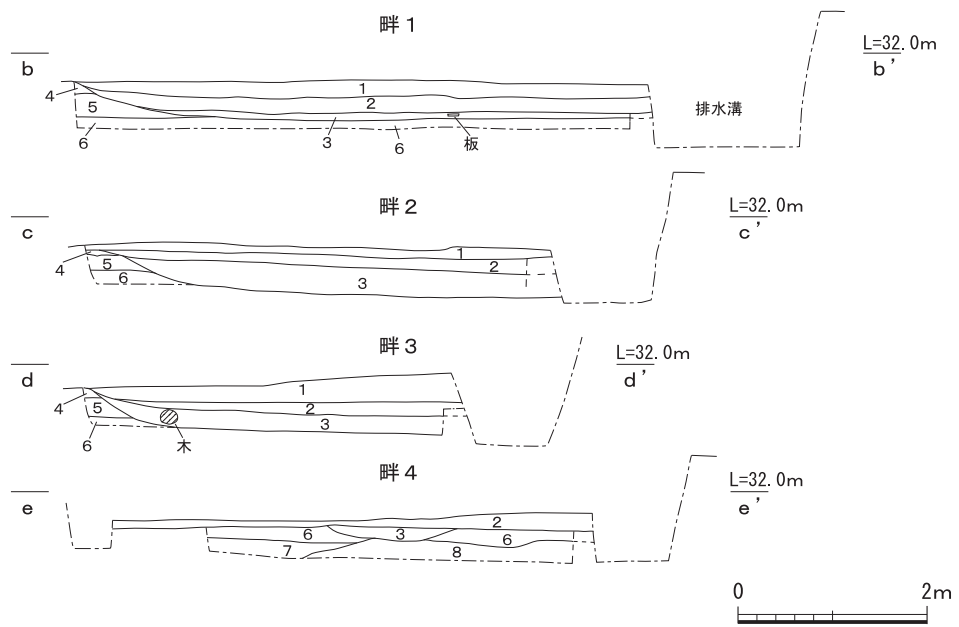
第7図 第2トレンチ遺構平面図



第8図 第2トレンチ北壁柱状土層図・東壁土層図



第9図 沼状地 S X20木製品出土状況図



- | | |
|---------------------------------|---|
| 1. 黒褐色 (10YR 2/2) 粘質極細砂 (小礫混じり) | 5. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 砂礫 |
| 2. 黒褐色 (10YR 3/1) 礫混じりシルト | 6. 緑灰色 (7.5GY 6/1) 礫混じり細砂 |
| 3. 黒褐色 (10YR 3/1) シルト | 7. 暗紫灰色 (5BP 4/1) 粗砂礫 |
| 4. 黄褐色 (2.5Y5/6) 礫混じり砂質土 (無遺物) | 8. 暗褐色 (10YR 3/4) シルトに灰白色 (N 7/1) シルトが混じる (無遺物) |

第10図 沼状地 S X20土層断面図

4. 出土遺物

今回の調査では、土器・土製品・石製品・木製品が出土した。木製品を除く出土遺物は整理コンテナ7箱に達した。

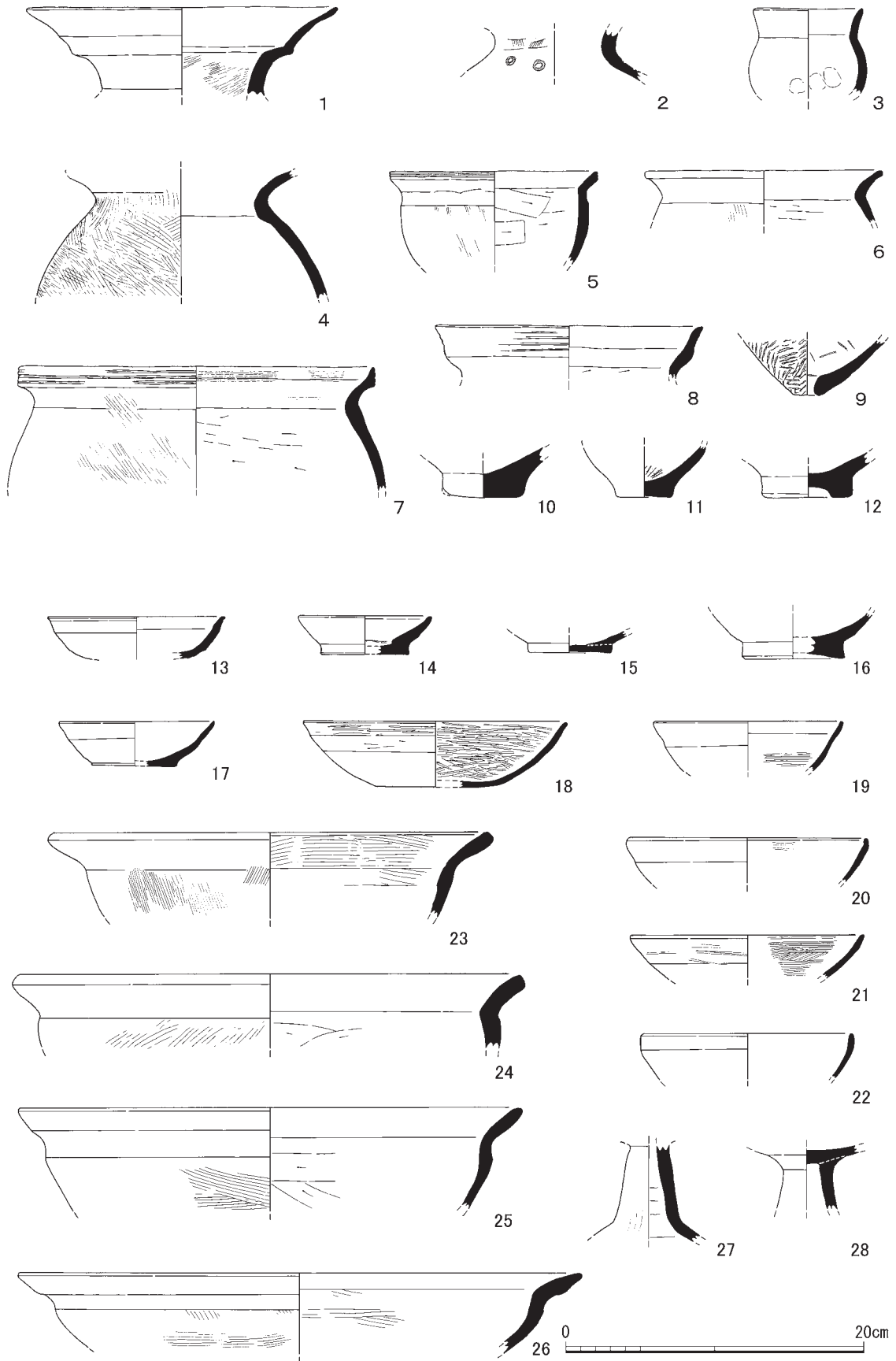
第1トレンチの出土遺物は極めてわずかである。掘立柱建物跡S B01に関連する遺物は、柱穴P16の掘形から出土した須恵器の蓋(第12図39)1点である。木製品では、建物柱穴10基から10点の柱根(第16図117～126)が出土した。遺構面上の遺物包含層では、奈良～平安時代の土師器・須恵器が少量出土した。

第2トレンチではN X20に伴う遺物が大多数を占め、遺物包含層からの出土は比較的少ない。出土遺物は、土器(弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器)、土製品(土錘)、石製品(石鎌・管玉)、木製品(板・杭)などである。

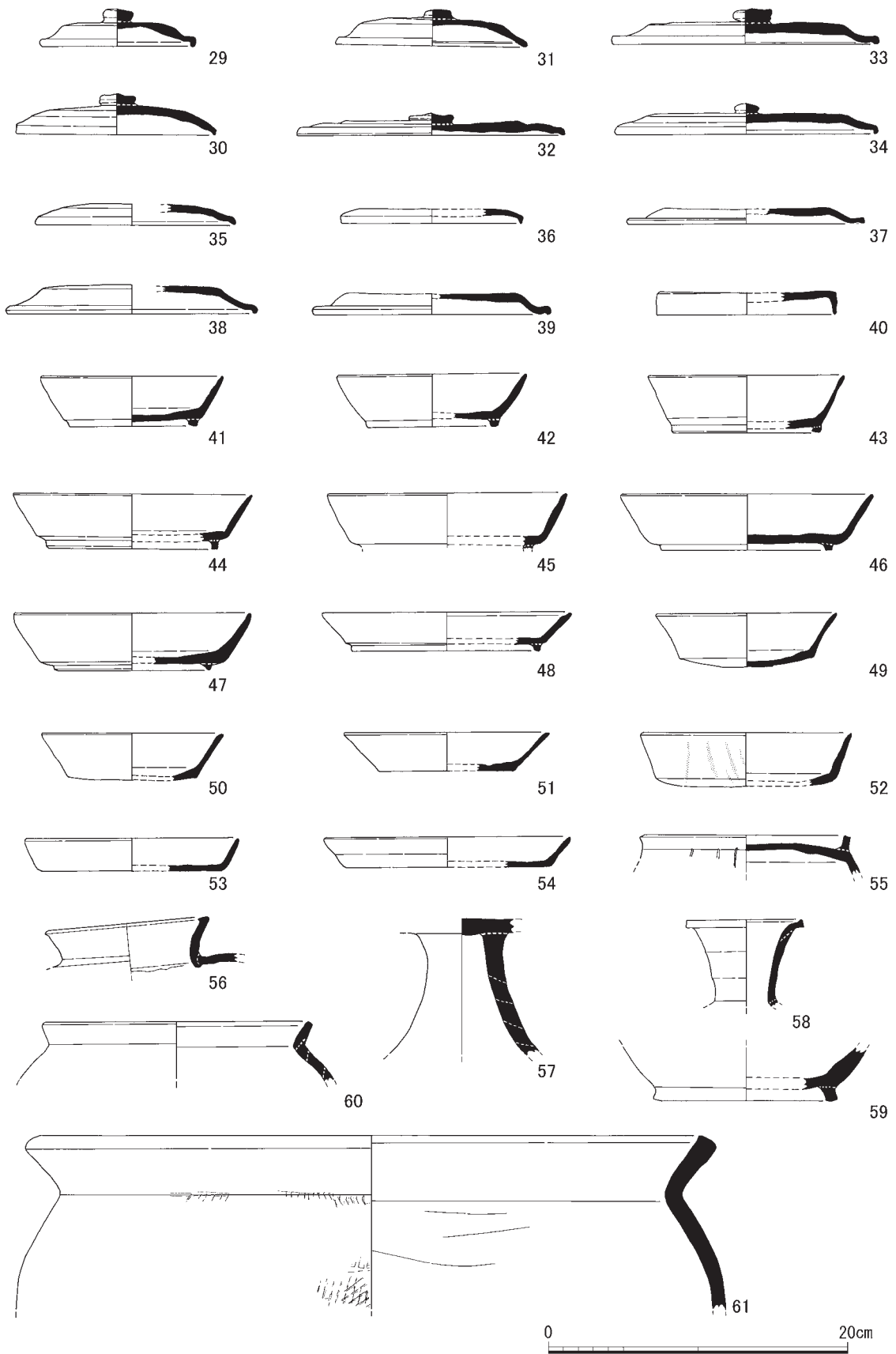
1) 土器(第11～13図)

1～12は弥生時代後期の土器であり、N X20の黒褐色シルト層から出土した。1～4は壺である。1は二重口縁壺の口縁部である。口径10.7cm。口縁は大きく外反し、器表面はヘラミガキする。2は壺の肩部であり、外面に竹管文を施文する。3・4は広口壺である。5は鉢である。口径は13.8cm、口縁端は面を作り、疑凹線文を施す。6～8は甕である。7・8は、二重口縁の端部に面を作り、疑凹線文を施す。口径は7が23.8cm、8が17.8cmである。9は甑である。外面は並行タタキし、尖る底部には整形段階の穿孔(径1.1cm)をあける。10～12は底部である。13・23～28は奈良～平安時代の土師器である。13は杯Aで、口縁の端部は外反させてつまみ出す。15～17は、平安時代に属し、底面に糸切り痕を残す。14は皿Aで口径11.9cmを測る。14～17は平高台の椀で、高台底面は糸切り痕を残す。18の黒色土器椀Aは、口径17.6cmを測る。内面と口縁外面にヘラミガキを施し、内面と口縁端部外面を煤で黒色化する。19～22は瓦器椀で、内面と口縁部外面に暗文を施す。表面は摩滅が進む。鍋(23～25)は内外面ともハケメ調整する。27・28は高杯の脚部である。

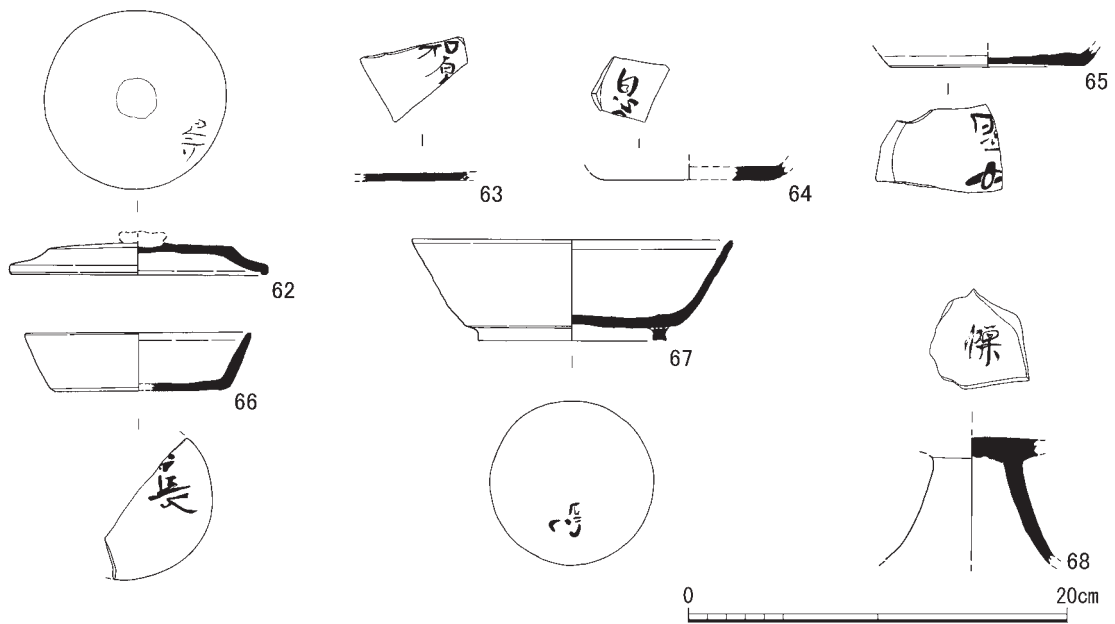
29～61は須恵器である。29～36は杯Bの蓋である。29～31は頂部が丸く笠形を呈し、ボタン状のつまみを付す。29は口径12.9cm、端部を屈曲させる。32～34は頂部が平らで、扁平な宝珠型かボタン型のつまみを付す。口径は18cm前後を測る。35は転用硯で、頂部内面に摺り面、薄い墨痕が残る。口径は15.0cmである。36は口径が15.7cm、頂部が平らで端部が屈曲する。つまみはもたない。39はS B01-P16掘形から出土した蓋である。40は薬壺形の蓋である。平坦な頂部と直角に折れ曲がる口縁がある。口径は12.1cmである。41～47は杯Bである。41～43は底部外縁の端に高台を付す。48は皿Bである。口径16.6cm、器高2.6cmである。49～52は杯Aである。平底で口縁は斜め上に延びる。口径は12.0～14.0cmである。52は口縁外面に火轆痕が残る。53・54は皿Aであり、短い口縁が斜め上に延びる。口径は53が14.1cm、54が16.4cmである。55は円面硯である。脚部に透かし窓はなく、縦方向の線刻が施される。面径は13.3cmである。56は広口の平瓶である。口径は12.0cmである。57は高杯の脚である。58は壺Lの口縁である。59は壺の底部である。60・61は甕である。60の体部外面はタタキ痕をナデ消す。



第11図 出土遺物1(弥生土器・土師器)



第12図 出土遺物 2 (須恵器)



第13図 出土遺物3(墨書土器)

2) 墨書土器(第13図)

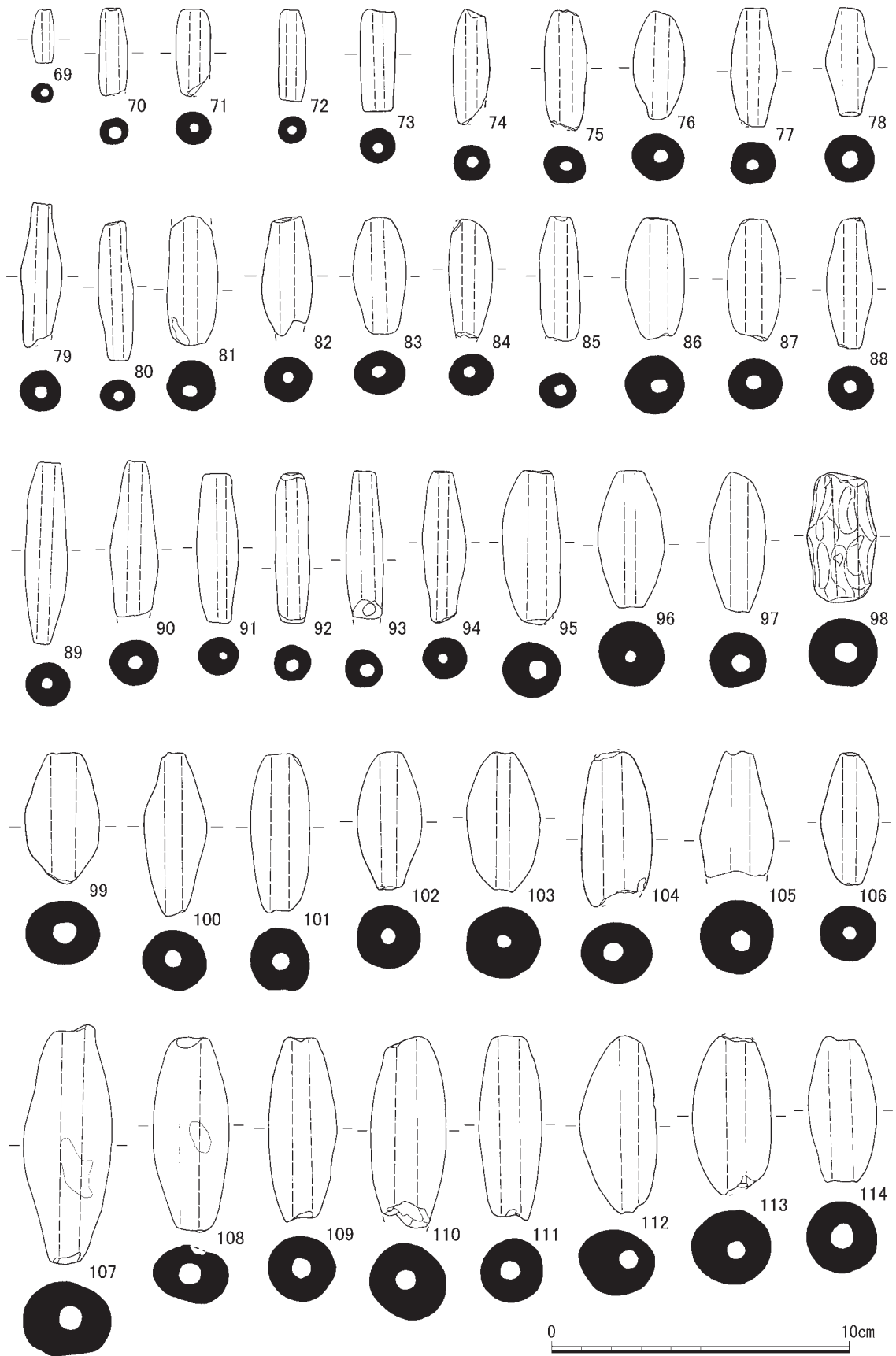
沼状地N X20から墨書土器が7点出土した。全て須恵器である。62は杯B蓋である。頂部の端に1文字の墨書が認められたが、文字は薄く擦れて判読できない。63・64は、杯Aの見込みに墨書がある。63は「和原」か。64は「息□」である。65・66は杯Aの外底面に2文字の墨書が認められる。65は判読できない。66は「□長」である。67は杯Bの輪高台内側に1文字の墨書があるが、判読できない。68は高杯の杯部内面中央に1文字の墨書がある。「傳」の可能性はある。

3) 土製品(第14図)

69～114は漁労具の土錘である。破片を含め総数86点を数え、完形品かそれに近いものが8割強を占める。形状は棒状形と楕円形の2種に分かれる。後者は最大幅が中央にあり、先端部を細く仕上げる。全点体部の中心を縦に通る径0.3～0.5cmの糸通し穴を設ける。土錘は、大きさ・重量から小型・中型・大型に大別される。小型は長さ3.0～4.0cm前後、重さ10g未満、中型は長さ5.0cm前後、重さ10～20g、大型は長さ6.0～8.0cm、重さ20g以上である。なかでも、69は特に小型品で、長さ1.8cm、最大幅0.7cmを測り、重さ0.8gを量り、釣り針の錘とみられる。70～114は漁網錘であり、最大の土錘は107である。長さ8.0cm、最大幅2.9cmを測り、重さ53.7gを量る。

4) 石製品(第15図)

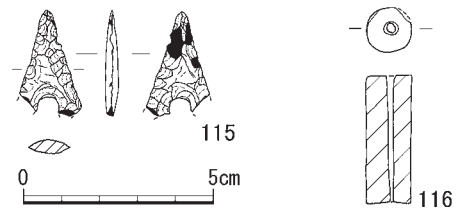
115はサヌカイト製打製石鏃である。第2トレンチ南東部の壁面整形の際に遺物包含層の黒色粘質砂層から出土した。長さ2.8cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測り、重さ1.2gを量る。形状から縄文時代の石鏃と考えられる。116は碧玉製管玉で、N X20第3区黒褐色礫混じりシルト層から出土した。長さ3.4cm、直径1.2cmを測る。



第14図 出土遺物4(土製品)

5) 柱材・木製品(第16・17図)

117～126は、第1トレンチS B01の柱穴に伴う針葉樹を原材料とする柱根である。芯持ち材と芯去り材(辺材)の2種が存在する。芯持ち材は、117(P 8)・120(P 9)・122(P 10)・126(P 11)の4点である。残る118(P 15)・119(P 14)・121(P 7)・123(P 13)・124(P 6)・



第15図 出土遺物5(石製品)

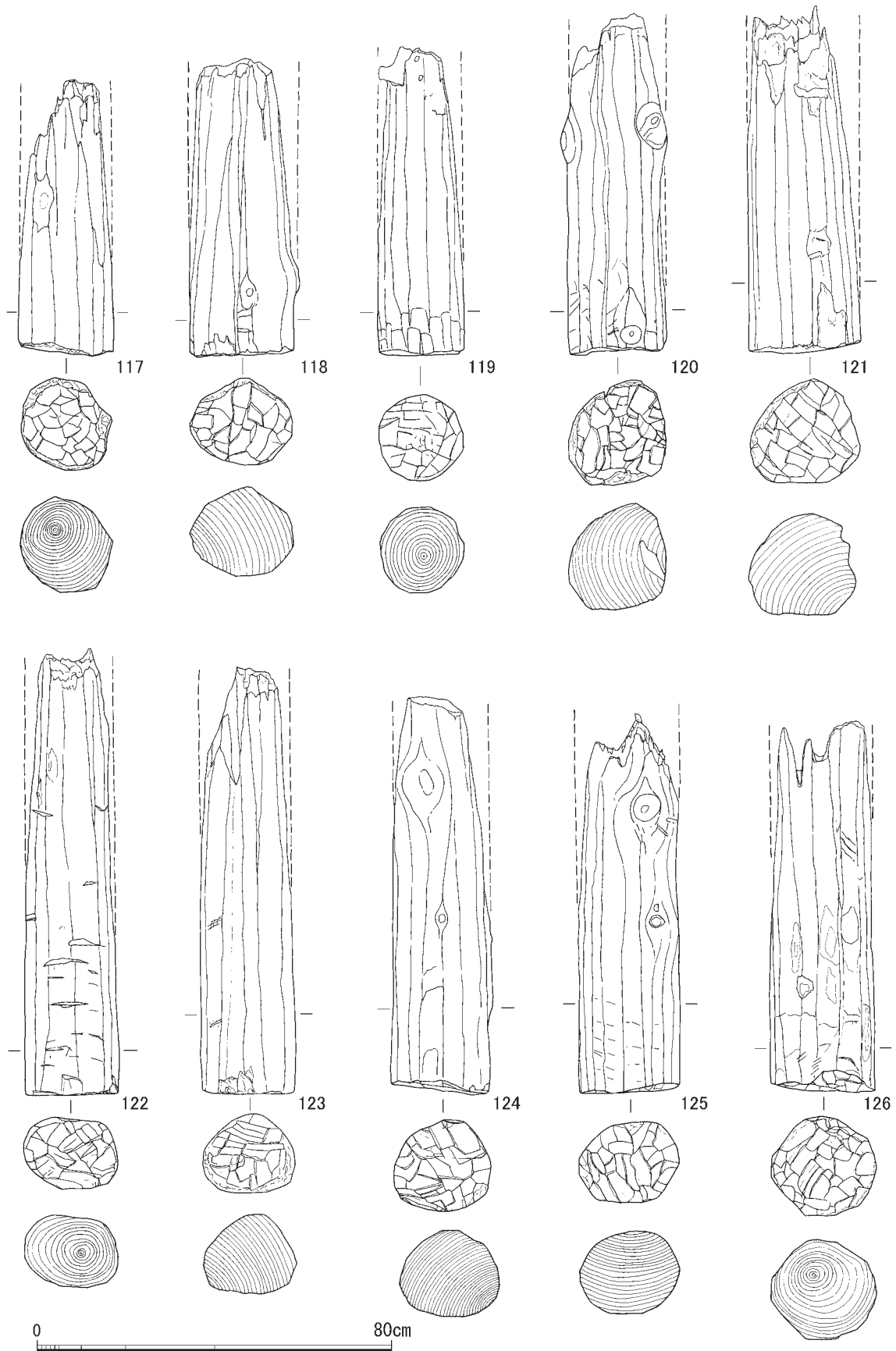
125(P 12)の6点が、芯去り材である。芯去り材は、幹回りの太い木材を楔で4分割に縦割する。10点の柱根はいずれも地中に埋没しているため、表面の調整は粗いままである。柱根部の調整は、10～15の面取りで、手斧による研が行われている。特に122の側面には手斧の打ち込み痕が多数残る。柱根下端面は手斧による調整が著しいが、126には斧による斜め方向の伐採痕が一部に残る。

127～132は、NX20第3区黒褐色シルト層から出土した、針葉樹と判断される板材と部材(132)であり、木取は全て板目材である。127と128は特に縦に長い板材であり、片側の小口面は良好に残るが、片側は腐朽し小口面を残さない。129は残存長3.28m、幅0.21m、厚さ2.5cm、128は残存長3.44m、幅0.14m、厚さ2.8cmを測る。この2点の板材に加工痕は認められない。129は残存長約1.05m、幅約0.1m、厚さ1.7cmを測る。板材の一部であり、片方の小口部は斜めに加工している。また、小口面は緩やかな丸みをもつ。下端の小口から上方に約0.42m離れた側面側に1か所、台形の切込み(長さ約8cm、深さ2cm)が存在する。130は残存長約1.09m、幅約0.11m、厚さ1.4cmを測る。右側面に方形の切込み(長さ約2cm、深さ1cm)が2か所存在する。切込みの間隔は0.55mを測る。131は、片側の小口が斜めに加工された板材で、残存長約0.77m、幅0.15m、厚さ2.4cmを測る。132は、片方の側面が丁寧に面取り加工され、片側小口が杭状に尖る部材である。全長約0.95m、幅0.85m、厚さ3.4cmを測る。加工は、右側面の先端から約0.5mの範囲に及び、全長の約半分を占める。また、先端部0.1mはさらに角度を付け尖らせる。もう一方の小口は方形で面取りする。用途は不明である。

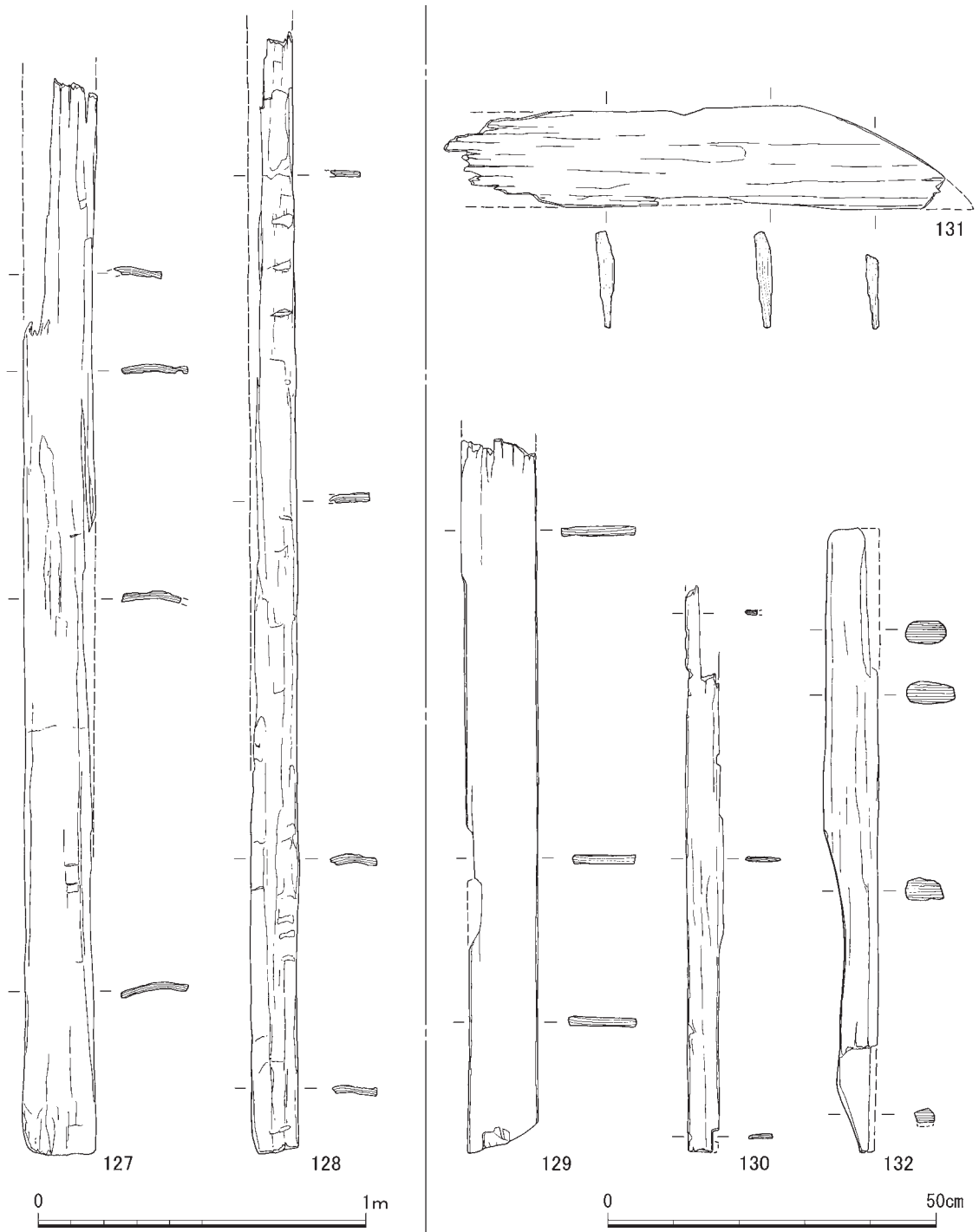
5. まとめ

今回の第7次調査では、縄文時代から中世の遺物が出土し、土器の主な時期は弥生時代後期と奈良時代後期～平安時代前期を中心とする時期である。縄文時代・弥生時代の遺構は未検出であるが、遺跡は北側の台地に存在する可能性が高い。

今回の調査では、奈良時代の大きな調査成果を得た。特に第1トレンチでは、一般集落にはみられない大型建物跡1棟を検出した。掘立柱建物S B01は、部分検出であるが桁行5間以上、梁間2間を測る。第6次調査では、S B01の北側に同軸線上の柱列(柱根)が検出されていた。第6次調査成果と合わせて復元すると、S B01は桁行8間(19.2m)以上、梁間2間(6.2m)の大型建物跡であると判明した。柱穴掘形は方形プランが多数を占め、平面規模は0.6～0.8m、深さは最大で0.85mを測る。出土した柱根は、基部で直径0.2～0.25mを測る。古代における桁行8間以上を測る長い建物は、一般的な住居とは異なり、寺や官衙関連施設と考えられている。今回の調査で



第16図 出土遺物実測図6(柱材)



第17図 出土遺物7(木製品)

は、瓦の出土が皆無であり寺院施設の可能性は低い。この状況から、S B01は何鹿郡に設けられた官衙関連施設の一つと考えられる。出土遺物は、奈良時代を中心とする遺物には、煮炊具が少なく須恵器の供膳具が多数を占めていることや、識字層の存在を示す円面硯・転用硯・墨書土器が出土していることは、官衙関連施設の存在を補強するものである。

S B01-P10の柱根真材部分で放射性炭素年代測定を行った。^(注4) ^{14}C 年代が 1435 ± 20 BP、較正年代が595-653 cal AD (95.45%)で、古墳時代後期～飛鳥時代の6世紀末～7世紀半ばの暦年代を

示した。採集形成年輪資料ではないため、これらは伐採年を示すものではなく、建物はそれ以降の建築となる。S B01は、柱穴及びその周辺から飛鳥期の遺物が出土していないことから、測定試料は、芯材に近い部分と考えられる。

第6次調査では、S B01の東側約12m離れてS B01に並行する溝S D03・10が検出され、区画溝の可能性を示された。この区画溝の東は地形が大きく下がる状況から、この区画溝が官衙関連施設の東限とみられる。S B01が官衙関連主要施設とすれば東脇殿の可能性が高い。そして主要部が「コ」の字状に建物が配置されているのであれば、正殿はS B01の北西側台地上に配置され、正殿の西側にS B01と対をなす西脇殿が配置される可能性が考えられる。第1トレンチ背後の台地は、南に舌状に張り出す状況で由良川の洪水にも影響を受けにくい地形である。第2トレンチで柱穴・溝等の遺構が検出されない状況は、官衙関連施設が台地を中心として存在した可能性が高いことと、河原に近く住みにくい環境にあったことが想定できる。官衙施設の東は、S B01から南で地形は低くなることから、第1トレンチに近い南側に主要施設の南限が位置すると推測できる。官衙関連施設は柵などで囲われていたと考えられるが、今回調査では確認できなかった。

墨書土器7点のうち文字が判明したのは4点である。高杯68の見込み中央に「傳」、杯63は底部外面に「和原」、杯64は「息□」、杯66「□長」の4点である。判読した文字に共通性はなく、文字の意図するところは不明である。碧玉製管玉は、古墳被葬者の副葬品と考えられる。調査地背後の丘陵に瀬戸と瀬戸東の両古墳群が存在することから、周辺に存在していた埋葬施設が壊れ、N X20に混入したのであろう。

第2トレンチの沼状地N X20は、元は台地の縁辺を流れた氾濫流路の可能性が高い。N X20の底面にある緑灰色系砂礫は、洪水時の土石流とみられる。この土石流が流路を作ったが水位が下がり、細長い沼地が形成されて、シルトや多量の土器が堆積したようである。土鍾は由良川本流や小河川・N X20等で川魚などの魚類、カニ・エビなど甲殻類を捕獲したものと考えられる。出土した木製の板や小口が斜め加工された板は、川船の可能性もあるが詳細は不明である。

今回の発掘調査では、当地に存在した官衙関連と考えられる施設の一部を明らかにすることができた。何鹿郡衙は、北野台遺跡から由良川を挟んだ南東方向、約2.5km離れた青野南遺跡内に推定されている。現在の北野台遺跡は位田町に所在し、南側に由良川が流れる。この位置に江戸時代以前に位田の渡しがあり、由良川の渡河地点となっていたことは、時代が異なるが遺跡の性格を語っていると考えられる。

(竹原一彦)

注1 廣富亮太2022「1北野台遺跡第2次調査報告、2北野台遺跡第4次調査概要報告」『京都府綾部市文化財調査報告』第47集 綾部市教育委員会

注2 川崎雄一郎2021「梅ノ木原遺跡第1次・北野台遺跡第1・3次調査」(「府営農業農村整備事業関係遺跡令和2・3年度発掘調査報告」『京都府埋蔵文化財調査報告書』令和3年度 京都府教育委員会
川崎雄一郎2022「北野台遺跡第6次調査」(「府営農業農村整備事業関係遺跡令和4年度発掘調査報告」『京都府埋蔵文化財調査報告書』令和4年度 京都府教育委員会

注3 高野陽子2022「令和3年度における京都府内の埋蔵文化財調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第143号

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注4 株式会社パレオ・ラボ2022「北野台遺跡埋蔵文化財発掘調査に係る放射性炭素年代測定」

参考文献

綾部市史編さん委員会 『綾部市史』 上巻 綾部市役所 1976

綾部市教育委員会 『綾部市遺跡地図改訂版』 綾部市教育委員会 2018

「京都府・市町村共同統合型地図GIS登録マップ-文化財」 京都府ホームページ

付表1 出土土器・土製品観察表

(凡例)

・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示 ・残存率は基本的に口径で表記 ・該当なし：- ・計測不可：/
 ・()：復元(底・口)径・残存高 ・口)口縁部、(頸)頸部、(底)底部・高台、(脚)脚部、(鏝)鏝径、(全)全体

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (口径)	色調	胎土	調整	備考
1	弥生土器	二重口縁壺	2トレ中央	N X 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(10.7)	(6.0)	-	1/12 以下	にぶい黄橙 (10YR6/4)	密 径2mm以下の白・黒・赤茶色砂粒と石英・雲母多く含む	内：ハケのちナデ、ハケメ外：ミガキ	
2	弥生土器	壺頸部	2トレ中央	N X 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	-	(3.5)	頸部径8.2	-	内：にぶい橙 (7.5YR6/4) 外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径2mm以下の白・黒・赤茶・灰色砂粒と石英多く含む	内：ナデ外：ハケメ、竹管文	
3	弥生土器	壺	2トレ	N X 20 第5区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(7.2)	(5.8)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや粗 径0.5～3mm位の白・グレー一色砂粒やや多く含む	内：ナデ、ユビオサエ外：ナデ、ユビオサエ、ハケメ	
4	弥生土器	甕	2トレ	N X 20 第4区黒褐色 (10YR2/3) 粘質極細砂	(15.0)	(8.2)	-	1/12 以下	橙 (7.5YR6/6) ～にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 径5～6mm大の石粒数個と径2mm以下の白・灰・黒・赤茶色の砂粒と石英多く含む	内：剥離、ナデ外：剥離、荒いハケ	
5	弥生土器	甕	2トレ	N X 20 第4区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(13.8)	(6.4)	-	1/12 強	内：にぶい橙 (7.5YR7/3) 外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径2mm以下の白・灰・黒・赤茶色砂粒と石英多く含む	内：ナデ、ヘラケズリ外：ナデ、ハケメのちナデ	口縁部擬凹線あり
6	弥生土器	甕	2トレ東部	黄褐色 (2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	(15.7)	(3.5)	-	1/12	にぶい褐 (7.5YR5/3)	やや粗 径0.5mm前後の白・茶・黒色砂粒含む	内：ナデ、ヘラケズリ外：ナデ、ハケメ	
7	弥生土器	甕	2トレ中央	N X 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(23.8)	(8.2)	-	1/12 以下	内：にぶい黄橙 (10YR7/2) 外：にぶい黄橙 (10YR6/3)	密 径3mm大の白色の石粒3～4個、径2mm以下の白・黒・赤茶・灰色砂粒と石英含む	内：ハケメ、ケズリ外：ハケメ	口縁部三本の擬凹線
8	弥生土器	甕	2トレ	N X 20 第5区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(17.8)	(3.5)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや粗 径2mm以下の白・半透明色砂粒と径1mm以下の灰色砂粒少量含む	内：ヨコナデ、ヘラケズリ外：ヨコナデ	外面口縁部擬凹線
9	弥生土器	甗	2トレ	N X 20 第1区黒褐色 (10YR3/1) シルト	-	(3.7)	1.6	12/12	灰黄褐 (10YR6/2)	やや粗 径1mm前後の白・茶・黒色砂粒多く含む	内：ヘラ調整外：タタキ	甗の小穴(焼成前)
10	弥生土器	底部	2トレ	N X 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	-	(3.4)	5.6	底) 完形	内：黄灰 (2.5Y4/1) 外：黒褐 (2.5Y3/1)	密 径3mm以下の白・灰・黒色砂粒と石英含む	内：ハケ外：マメツ	
11	弥生土器	底部	2トレ中央部	N X 20 第4区黒褐色 (10YR2/3) 粘質極細砂	-	(3.6)	(3.6)	底) 12/12	にぶい橙 (7.5YR7/3) 一部橙 (5YR6/6)	やや密 径1mm以下の灰・白・半透明・赤褐色砂粒含む	ナデ	内面底部放射状に工具痕あり

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (口縁)	色調	胎土	調整	備考
12	弥生土器	底部	2トレ 中央	N X 20 第4区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	(3.0)	6.1	底) 完 形	内: 褐灰 (10YR6/1) 外: 灰白 (10YR8/2)	やや粗 径3mm 以 下の灰白・赤茶・ 黒色砂粒と石英含 む	内: カキメ 外: ナデ	外面黒 斑あり
13	土師器	椀	2トレ	N X 20 第5区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	(11.9)	(2.9)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや粗 径1mm 前 後の白・茶色砂粒 含む	ヨコナデ、ナ デ	
14	土師器	台付皿	2トレ 中央部 東側	N X 20 第3区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(8.4)	2.6	-	2/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	やや密 径0.5mm 前後の白・黒グレ ー色砂粒少量含む	内: ナデ 外: ナデ、糸 切り	
15	土師器	椀	2トレ 東部	N X 20 黒色 (5Y2/1) 粘質極 細砂	-	(1.5)	5.6	底) 12/12	灰白 (10YR8/2)	密 径1mm 以下の 暗灰色砂粒微細量 含む	内: 回転ナデ 外: ナデ、糸 切り痕か?	
16	土師器	椀	2トレ	黄褐色 (2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	-	(3.1)	(6.6)	底) 6/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	やや密 径1mm 以 下の赤褐色砂粒含 む	内: ナデ 外: マメツ、 ヨコナデ、整 止糸切り	
17	土師器	椀	2トレ 東部西 半	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混 じりシルト	(10.3)	3.2	-	1/12 強	灰白 (2.5Y8/2)	密 径7mm 大の 灰色石粒1個、径 6mm 大の浅黄橙 石粒1個、径1mm 以下の灰色砂粒含 む	内: 回転ナデ、 ナデ 外: 回転ナデ、 回転糸切り痕	
18	黒色土器	椀	2トレ 東部	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(17.6)	4.5	-	2.5/12	内: 黒 (2.5Y2/1) 外: にぶ い黄橙 (10YR7/3)	密 径1.5mm 以 下の白・黒・灰色砂 粒と石英・雲母含 む	内: ミガキ 外: ミガキ、 ケズリ、ナデ	
19	瓦器	椀	2トレ 東部南 半	黄褐色 (2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	(12.7)	(3.4)	-	1/12	黒 (N2/0)	やや密	内: ミガキ 外: マメツ、 ミガキ痕跡あ り	
20	瓦器	椀	2トレ	N X 20 第4区黒 褐色 (10YR2/3) 粘質極細砂	(15.8)	(3.1)	-	1/12	黒 (N2/0)	密	内: ミガキ、 マメツ 外: ユビオサ エ、マメツ、 ミガキ痕跡あ り	
21	瓦器	椀	2トレ	N X 20 第2区黒 褐色 (10YR2/3) 粘質極細砂	(15.7)	(3.0)	-	1/12	暗灰 (N3/0)	やや密	内面、外面と もミガキ	
22	瓦器	椀	2トレ	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR2/3) 粘質極細砂	(14.2)	(3.1)	-	1/12 以下	黒 (5Y2/1)	良好	内: 回転ナデ、 マメツ調整不 明 外: 回転ナデ、 ユビオサエ、 未調整	
23	土師器	鍋	2トレ 中央東	N X 20 第3 区東部黒褐色 (10YR3/2) 礫混 じりシルト	(29.2)	(5.8)	-	1/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	やや粗 径0.5mm 前後の白・黒色砂 粒含む	内: ハケメ、 ヨコナデ 外: ナデ、ハ ケメ	
24	土師器	鍋	2トレ 東部	N X 20 第4区黒 褐色 (10YR2/2) 粘質極細砂	(33.6)	(5.0)	-	1/12	黒褐 (10YR3/2)	やや粗 径1mm 前 後の白・茶・黒色 砂粒含む	内: ナデ、ケ ズリ? 外: ナデ、ハ ケメ	
25	土師器	鍋	2トレ 東部	N X 20 第4区黒 褐色 (10YR2/3) 粘質極細砂	(33.0)	(6.9)	-	1/12 以下	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径2mm 以下の 白・黒・赤茶・灰 色砂粒と石英・雲 母多く含む	内: ヘラケズ リ 外: 強いヨコ ナデ、ハケ	
26	土師器	鍋	2トレ	N X 20 第4区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(37.8)	(5.1)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR6/3)	密 径2mm 以下の 白・黒・赤茶・灰 色砂粒と石英・雲 母含む	内: ヨコナデ、 ハケメのちヨ コナデ 外: ヨコナデ、 ハケ	外面煤 附着
27	土師器	高杯	2トレ	N X 20 第2区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	(6.6)	最大 径7.2	-	橙 (5YR6/6)	やや粗 径1mm の 白・茶・黒色砂粒 多く含む	内: ケズリ? ハケメ 外: ヘラミガ キ、マメツ	
28	土師器	高杯	2トレ	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	(4.3)	-	杯部 2/12	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	ナデ	

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (口縁)	色調	胎土	調整	備考
29	須恵器	蓋	2トレ 中央	NX 20 第3区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	10.5	2.5	-	6.5/12	灰白 (N7/0)	密 径1mm以下の 白・黒色の微砂粒 含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 ヘラ切りのち 回転ナデ	転用硯
30	須恵器	蓋	2トレ 東部	NX 20 第2区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	13.4	2.7	-	完形	灰白 (N7/0 ~灰 N6/0)	密 径2mm以下の 白・灰・黒色の砂 粒含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ヘラ切り	外面口 縁部灰 かぶり
31	須恵器	蓋	2トレ 東部	NX 20 第2区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	12.9	2.5	-	完形	灰 (N6/0~ 灰 N5/0)	密 径1mm以下の 白・黒色の微砂粒 含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ヘラ切り	
32	須恵器	蓋	2トレ	NX 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(18.0)	1.5	-	2/12	灰 (N5/5)	やや密 ごく細か い白色砂粒少量含 む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ヘラ切り のちナデ	
33	須恵器	蓋	2トレ	NX 20 第2区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	18.0	2.4	-	5/12	灰白 (N7/0) ~灰 (N5/0)	密 径1mm以下の 白・黒・灰色の砂 粒含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ヘラ切り	外面重 ね焼き 痕
34	須恵器	蓋	2トレ	NX 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(17.4)	2.0	-	1/12 以下	灰白 (N5/0)	やや密 径0.5mm 前後の白砂粒少量 含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 ヘラ切りのち 軽い回転ナデ	
35	須恵器	蓋	2トレ 東部	NX 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(15.0)	(1.4)	-	3/12	灰 (N6/0) ~灰 (N5/0)	密 径1mm以下の 白・赤茶・黒色の 微砂粒含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 ヘラ切りのち 回転ナデ	転用硯
36	須恵器	蓋	1トレ	S B 01 - P 16 埋土	(12.1)	(1.0)	-	1/12 以下	灰白 (7.5Y8/1)	良好	回転ナデ	
37	須恵器	蓋	2トレ 東部	黄褐色 (2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	(15.8)	(1.0)	-	1/12	灰 (N5/5)	やや密 径0.5mm 以下の白色砂粒含 む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ケズリ、 ヘラ切り痕あ り	内面口 縁部墨 痕か?
38	須恵器	蓋	2トレ	NX 20 第3区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(16.8)	(1.9)	-	1/12	灰 (N6/1)	やや密 径0.5mm 前後の白砂粒含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ヘラ切り のち軽いナデ	
39	須恵器	蓋	2トレ 中央西	黄褐色 (2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	(15.7)	(1.4)	-	1/12	灰 (N4/4)	密	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 不調整、ヘラ 切り痕あり	転用硯 か
40	須恵器	蓋 (薬壺)	2トレ 東部	NX 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(12.1)	(1.6)	-	2/12	灰 (N6/0)	密 径1mm以下の 白・黒色の微砂粒 と石英含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ヘラケズ リ	
41	須恵器	杯B	2トレ 東部	NX 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	12.0	3.4	8.6	ほぼ完 形	内:灰 (N6/0) 外:灰白 (N7/0) ~灰 (N5/0)	密 径5mm大の 白色石粒1個と径 1mm以下の白・黒 色微砂粒含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ヘラケズ リ	
42	須恵器	杯B	2トレ	NX 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(12.4)	3.5	-	3/12 弱	内:灰 (5Y6/1) 外:暗灰 (N3/0)	やや密 径0.5mm までの白砂粒少量 含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
43	須恵器	杯B	2トレ 東部	NX 20 第2区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(13.0)	3.9	-	1/12	灰白 (2.5Y7/1)	やや密 径0.5mm 以下の白・黒色砂 粒含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ケズリ	
44	須恵器	杯B	2トレ 東部	NX 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(15.8)	3.7	-	1/12	灰白 (N5/5)	やや粗 径2mm以 下の白色砂粒やや 多く含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
45	須恵器	杯B	2トレ	黄褐色 (2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	(15.8)	(3.7)	-	1/12	灰 (5Y6/1)	やや密 径0.5mm 以下の白・黒色砂 粒少量含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ	
46	須恵器	皿B	2トレ	NX 20 第2区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(16.8)	3.8	-	2/12 底) 7/12	灰 (N6/1)	やや密 ごく細か い白色砂粒少量含 む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 不調整	
47	須恵器	杯B	2トレ	NX 20 第1区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	(15.7)	3.9	-	1/12	灰白 (2.5Y7/1)	やや密 径0.5mm 前後の白・黒砂粒 含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 回転ヘラ切り のちナデ	
48	須恵器	杯B	2トレ 東部	黄褐色 (2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	(16.6)	2.6	-	1.5/12	灰白 (10YR7/1)	密 径1mm大の白 色砂粒少量含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ	口縁部 内面沈 線
49	須恵器	杯A	2トレ	NX 20 第4区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	(12.0)	3.6	-	1/12 以下	灰白 (7.5Y7/1)	密 径0.5mm以下 の白・黒砂粒含む	内:回転ナデ 外:回転ナデ、 ナデ、ヘラ切 りのちナデ	

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (口縁)	色調	胎土	調整	備考
50	須恵器	杯A	2トレ	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(120)	(3.2)	-	2/12	灰白 (N7/0)	密径 0.5mm 前後の白・黒砂粒含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ナデ	
51	須恵器	杯A	2トレ	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(138)	2.6	(9.0)	底) 2/12 強	灰白 (N8/0)	密径 1mm 以下の白・黒色の微砂粒含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ切り	
52	須恵器	杯A	2トレ 中央部 東側	NX 20 第3区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(140)	(3.6)	-	1/12	灰白 (N7/0)	やや密径 0.5mm の黒色砂粒少量含む	回転ナデ	外面火襷あり
53	須恵器	皿A	2トレ	NX 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(141)	2.2	-	1/12	灰 (N6/1)	やや密径 0.5mm 前後の白・黒砂粒含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ切りのちナデ	
54	須恵器	皿A	2トレ	NX 20 第3区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(164)	2.0	-	1/12 以下	灰白 (25Y8/1)	やや密 ごく細かい白色砂粒含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ケズリか?	
55	須恵器	円面硯	2トレ 東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	面径 13.3	(2.6)	-	面部 2/12	灰 (N4/0)	やや密径 1mm までの白・黒砂粒含む	回転ナデ	脚部外面に線刻あり
56	須恵器	平瓶	2トレ 中央	NX 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(120)	(3.1)	-	2/12	灰 (N6/1) 自然釉：褐灰 (10YR4/1)	やや密径 0.5mm 前後の白・黒色砂粒含む	回転ナデ	
57	須恵器	高杯	2トレ 東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	(9.1)	-	-	灰白 (25Y8/1)	やや密径 1mm 前後の白・黒色砂粒含む	内：ケズリ? ナデ 外：回転ナデ	
58	須恵器	壺	2トレ 東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	(7.6)	(5.8)	-	1/12 以下	灰 (N5/0)	やや密径 0.5mm 前後の白・黒色砂粒含む	回転ナデ	内面自然釉付着
59	須恵器	壺	2トレ 中央	NX 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	-	(3.7)	(12.4)	底) 2/12 強	内：灰白 (N7/0) 外：灰 (5/0)	密径 1mm 以下の白・黒色の微砂粒と石英含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ	貼り付け高台
60	須恵器	甕	2トレ 中央	NX 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(17.5)	(3.8)	-	1/12	灰白 (25Y7/1)	やや密径 0.5mm 前後の白・黒色砂粒少量含む	内：回転ナデ	
61	須恵器	甕	2トレ	NX 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(44.0)	(11.7)	-	1/12	灰 (N5/5)	やや密径 1.5mm 前後の白・黒色砂粒やや多く含む	外：タタキ・回転ナデ	
62	須恵器	蓋	2トレ 東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	13.8	(1.8)	-	9.5/12	灰白 (5Y7/1)	密径 0.5mm 以下の白・黒色の微砂粒と石英少し含む	回転ナデ	頂部外面に墨書「□」
63	須恵器	杯	2トレ 東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	-	-	-	灰白 (N7/0)	密径 1mm 以下の白・黒色の微砂粒と石英含む	内：回転ナデ 外：回転ヘラ切り	底部内面に墨書「和原」
64	須恵器	杯A	2トレ	NX 20 第3区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	(1.0)	-	-	灰黄 (25Y7/2)	密径 1mm 以下の白・黒・赤茶色の微砂粒と石英含む	回転ナデ	底部内面に「息□」
65	須恵器	杯	2トレ 北東角	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	(1.0)	(10.2)	底) 1.5/12	灰 (N6/0)	密径 0.5mm 以下の白・黒色の微砂粒少し含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ヘラ切り	底部内面に墨書「□□」
66	須恵器	杯B	2トレ	NX 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(11.8)	3.1	-	4.5/12	内：黄灰 (25Y6/1) 外：灰白 (25Y7/1)	密径 1mm 以下の白・黒色の微砂粒と石英含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ヘラ切り	高台内側に墨書「□長」
67	須恵器	杯B	2トレ 中央東部	NX 20 第3区黒褐色 (10YR3/1) シルト	(16.8)	5.4	(10.0)	口) 2/12 弱底) ほぼ完形)	内：灰白 (N7/0) 外：灰 (6N/0)	密径 2mm の白色砂粒 2~3個・径 1mm 以下の白・黒色の微砂粒と石英含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ヘラ切りのち回転ナデ	高台内側に墨書「□」
68	須恵器	高杯	2トレ 中央	NX 20 第4区黒褐色 (10YR2/3) 粘質極細砂	-	(6.6)	-	-	灰白 (N7/0)	密径 8mm 大の白色石粒 1個と径 2mm 以下の砂粒多く含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ナデ	杯部見込み中央に墨書「傳々」
69	土製品	土錘	2トレ 東端北部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 1.8	最大径 0.7	ほぼ完形	灰白 (10YR8/2)	密径 0.5mm 以下の白・黒・赤茶色の微砂粒含む	ユビナデ	重さ 0.8g
70	土製品	土錘	2トレ 東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 2.9	最大径 0.95	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/2) ~ 褐灰 (10YR5/1)	密径 1mm 以下の赤茶・黒・白色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 2.8g

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (口縁)	色調	胎土	調整	備考
71	土製品	土錘	2トレ 中央東	N X 20 第3区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 2.95	最大 径1.2	一部 欠損	橙 (5YR7/6)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ3.2 g
72	土製品	土錘	2トレ 東端	黄褐色(2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	-	長さ 3.1	最大 径0.9	完形	にぶい橙 (7.5YR6/4)	密 径0.5mm以下の 白・赤茶・灰色 微砂粒含む	ユビナデ	重さ3.0 g
73	土製品	土錘	2トレ 東部西 半	N X 20 第2区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 3.45	最大 径1.15	一部 欠損	にぶい橙 (7.5YR7/4) ～灰白 (10YR8/2)	密 径1mm以下の 茶・黒・白色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ6.5 g
74	土製品	土錘	2トレ 中央	N X 20 第4区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 3.9	最大 径1.2	両端部 3/12 体部完 形	にぶい橙 (7.5YR6/4)	密 径1mm以下の 白・黒・灰色砂粒 多く含む	-	重さ6.1
75	土製品	土錘	2トレ	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 4.1	最大 径1.4	一部 欠損	灰黄 (2.5Y7/2)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ6.8 g
76	土製品	土錘	2トレ 東部	N X 20 第2区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 3.65	最大 径1.7	完形	にぶい黄橙 (10YR7/2)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ8.5 g
77	土製品	土錘	2トレ 東部	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/1) 礫混じりシルト	-	長さ 4.0	最大 径1.55	ほぼ完 形	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ7.8 g
78	土製品	土錘	2トレ	重機掘削後精査	-	長さ 3.65	最大 径1.65	-	赤褐 (2.5YR4/8)	密	-	重さ6.2 g
79	土製品	土錘	2トレ 東部	N X 20 第1区褐 色 (10YR2/1) 礫 混じりシルト	-	長さ 4.9	最大 径1.4	全体 の1/5 程度欠 損	灰白 (7.5YR8/2)	密 径1mm以下の 白・黒・赤茶・灰 色と石英砂粒含む	ユビナデ	重さ8.1 g
80	土製品	土錘	2トレ 中央	N X 20 第3区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 4.7	最大 径1.2	ほぼ完 形	にぶい橙 (2.5YR7/4)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ4.3 g
81	土製品	土錘	2トレ 中央	N X 20 第3区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 4.4	最大 径1.7	一部 欠損	灰白 (10YR8/2)	密 径1mmの白・ 半透明色、それよ り小さい砂粒含む	ユビナデ	重さ10.9 g
82	土製品	土錘	2トレ 東端南 部	黄褐色(2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	-	長さ 4.0	最大 径1.6	1/4欠 損	橙 (7.5YR6/6) ～褐灰 (7.5YR4/1)	密 径1mm以下の 白・赤茶・黒色の 砂粒含む	ユビナデ	重さ9.1 g、黒 斑あり
83	土製品	土錘	2トレ 中央	N X 20 第3区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 3.95	最大 径1.75	ほぼ完 形	にぶい黄橙 (10YR7/2)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ10.2 g
84	土製品	土錘	2トレ	黄褐色(2.5Y5/6) 礫混じり粘質土	-	長さ 4.0	最大 径1.5	一部 欠損	灰黄 (2.5Y7/2)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ7.6 g
85	土製品	土錘	2トレ	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 4.2	最大 径1.3	ほぼ完 形	灰白 (10YR8/2)	密 径2mmの砂粒 2個と径1mm以下 の白・灰・黒・赤 茶色の砂粒含む	ユビナデ	重さ7.0 g、黒 斑あり
86	土製品	土錘	2トレ 中央東	N X 20 第3 区東部黒褐色 (10YR3/2) 礫混 じりシルト	-	長さ 4.1	最大 径2.0	ほぼ完 形	にぶい褐 (7.5YR6/3)	密 径1mm大の 白・茶・半透明色 の砂粒含む	ユビナデ	重さ13.4 g
87	土製品	土錘	2トレ	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 4.15	最大 径1.8	ほぼ完 形	にぶい黄橙 (10YR7/2)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ11.2 g
88	土製品	土錘	2トレ 東部西 半	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 4.4	最大 径1.55	完形	灰黄褐 (10YR6/2)	密 径1mm大、そ れ以下の白・半透 明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ8.2 g
89	土製品	土錘	2トレ 東部	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 6.2	最大 径1.5	完形	にぶい黄橙 (10YR7/2)	密 径4mm大の 白色石粒1個、径 1mm以下の白・灰・ 黒色砂粒含む	ユビナデ	重さ13.5 g
90	土製品	土錘	2トレ	N X 20 第1区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 5.3	最大 径1.6	一部 欠損	灰白 (10YR7/1)	密 径0.5mm以下 の白・黒色微砂粒 含む	ユビナデ	重さ12.5 g
91	土製品	土錘	2トレ 中央部	N X 20 第3区黒 褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 5.05	最大 径1.4	完形	浅黄橙 (10YR8/3)	密 径1mm以下の 白・半透明色の砂 粒含む	ユビナデ	重さ8.7 g
92	土製品	土錘	2トレ 耕作土	黒色 (5Y 2/1) 粘質砂	-	長さ 5.1	最大 径1.2	-	黄灰 (2.5Y4/1)	密 径1mm以下の 白色砂粒含む	-	重さ8.6 g

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (口縁)	色調	胎土	調整	備考
93	土製品	土錘	2トレ	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 5.0	最大径 1.3	一部欠	浅黄橙 (7.5YR8/3) ~ におい橙 (5YR7/4)	密径 1mm 以下の白・赤茶・黒色と雲母の砂粒含む	ユビナデ	重さ 8.9 g
94	土製品	土錘	2トレ中央	NX 20 第3区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 5.1	最大径 1.5	ほぼ完形	灰黄 (2.5Y7/2)	密径 1mm 以下の半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 8.0 g
95	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 5.2	最大径 1.9	ほぼ完形	におい黄橙 (10YR7/2)	密径 1mm 以下の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 15.2 g
96	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 4.7	最大径 2.2	ほぼ完形	灰白 (10YR7/1)	密径 1mm 以下の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 18.1 g
97	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 4.8	最大径 1.95	ほぼ完形	灰黄 (2.5Y6/2)	密径 1mm 以下の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 13.7 g
98	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 4.4	最大径 2.3	ほぼ完形	灰黄 (2.5Y7/2)	密径 1mm 以下の白色の砂粒含む	強いユビナデ	重さ 19.3 g
99	土製品	土錘	2トレ東端南部	黒色 (5Y 2/1) 粘質砂	-	長さ 4.4	最大径 2.5	ほぼ完形	明褐灰 (7.5YR7/1) ~ 橙 (7.5YR6/6)	密径 1.5mm 以下の白・赤茶・黒・灰色砂粒含む	ユビナデ	重さ 23.6 g、黒斑あり
100	土製品	土錘	2トレ	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 5.6	最大径 2.15	ほぼ完形	灰黄 (2.5Y7/2)	密径 1mm 以下の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 17.1 g
101	土製品	土錘	2トレ	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 5.4	最大径 2.1	ほぼ完形	におい黄橙 (10YR7/2)	密径 1mm 以下の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 18.4 g
102	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 4.7	最大径 2.15	ほぼ完形	におい黄橙 (10YR7/2)	密径 1mm 以下の白・半透明色の砂粒少し含む	ユビナデ	重さ 17.1 g
103	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 4.8	最大径 2.5	ほぼ完形	におい黄橙 (10YR7/2)	密径 1.5mm 以下の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 22.4 g
104	土製品	土錘	2トレ	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 5.2	最大径 2.35	ほぼ完形両端欠損	におい黄橙 (10YR7/2)	密径 2mm 大の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 22.5 g
105	土製品	土錘	2トレ東端	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 4.2	最大径 2.5	2/3程度	灰白 (10YR8/2) ~ におい橙 (7.5YR7/4)	密径 3mm 以下の白・灰・赤茶・黒・茶色と石英・雲母砂粒含む	ユビナデ	重さ 24.0 g
106	土製品	土錘	2トレ中央	NX 20 第4区黒褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 14.4	最大径 1.9	完形	灰白 (10YR8/2)	密径 2mm 以下の白・黒・灰色砂粒と石英多く含む	-	重さ 13.7 g
107	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 7.1	最大径 2.95	ほぼ完形	灰黄 (2.5Y6/2)	密径 1mm 弱の白色砂粒含む	ユビナデ	重さ 53.7 g
108	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 6.6	最大径 2.55	ほぼ完形	黄橙 (10YR7/2)	密径 8mm 長さ 9mm の白・半透明色の小石数個含む	ユビナデ	重さ 29.4 g
109	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 6.2	最大径 2.3	ほぼ完形	灰白 (10YR8/2)	密径 1~2mm 大の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 25.3 g
110	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 6.5	最大径 2.6	ほぼ完形 (一部欠損)	におい黄橙 (10YR7/2)	やや粗径 1mm 以下~7mm 大の白・半透明色の小石と砂粒含む	ユビナデ	重さ 39.1 g
111	土製品	土錘	2トレ	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 6.3	最大径 2.2	ほぼ完形	黄灰 (2.5Y5/1)	密径 1mm 以下の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 23.3 g
112	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 6.0	最大径 2.55	ほぼ完形 (一部欠損)	灰白 (2.5Y7/1)	密径 1~4mm の白・半透明色の小石含む	ユビナデ	重さ 26.4 g
113	土製品	土錘	2トレ東部	NX 20 第2区黒褐色 (10YR3/2) 礫混じりシルト	-	長さ 5.4	最大径 2.65	ほぼ完形も両端欠	におい黄橙 (10YR7/2)	密径 1mm 程度の白・半透明色の砂粒含む	ユビナデ	重さ 31.8 g
114	土製品	土錘	2トレ	NX 20 第1区黒褐色 (10YR3/1) シルト	-	長さ 4.9	最大径 2.9	ほぼ完形	灰白 (10YR8/1)	密径 0.5mm 以下の白・黒・赤茶色と石英・雲母微砂粒含む	ユビナデ	重さ 23.6 g

付表2 柱材、木製品観察表

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ・厚さ (cm)	備考
117	柱材	1トレ	S B 01 - P 8	62.6	21.0	21.6	芯持ち材
118	柱材	1トレ	S B 01 - P 15	67.0	24.8	20.2	芯去り材
119	柱材	1トレ	S B 01 - P 14	70.0	19.2	19.4	芯去り材
120	柱材	1トレ	S B 01 - P 9	77.0	24.0	24.0	芯去り材
121	柱材	1トレ	S B 01 - P 7	78.4	29.8	23.0	芯去り材
122	柱材	1トレ	S B 01 - P 10	100.6	21.2	16.4	芯持ち材
123	柱材	1トレ	S B 01 - P 13	96.6	21.0	17.8	芯去り材
124	柱材	1トレ	S B 01 - P 6	89.8	22.0	19.8	芯去り材
125	柱材	1トレ	S B 01 - P 12	85.6	22.8	18.4	芯去り材
126	柱材	1トレ	S B 01 - P 11	84.0	24.0	22.6	芯持ち材
127	板材	2トレ	N X 20 第3区	328.4	21.0	2.5	板目材
128	板材	2トレ	N X 20 第3区	344.0	14.0	2.8	板目材
129	板材	2トレ	N X 20 第3区	10.9	10.4	1.4	板目材
130	板材	2トレ	N X 20 第3区	173.8	10.6	1.7	板目材
131	板材	2トレ	N X 20 第3区	76.8	15.0	2.4	板目材
132	部材	2トレ	N X 20 第3区	95.4	8.4	3.5	板目材

平野古墳群発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、亀岡市千歳町内における中谷川通常砂防(防災安全補正)業務委託・中谷川緊急自然災害防止対策業務委託に伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受け実施した。平野古墳群については、1976年と2017年に龍谷大学考古学研究室によって分布調査が行われていたが、古墳群の実態を知れるような調査が実施されたことはなく、今回が初めての発掘調査となった。

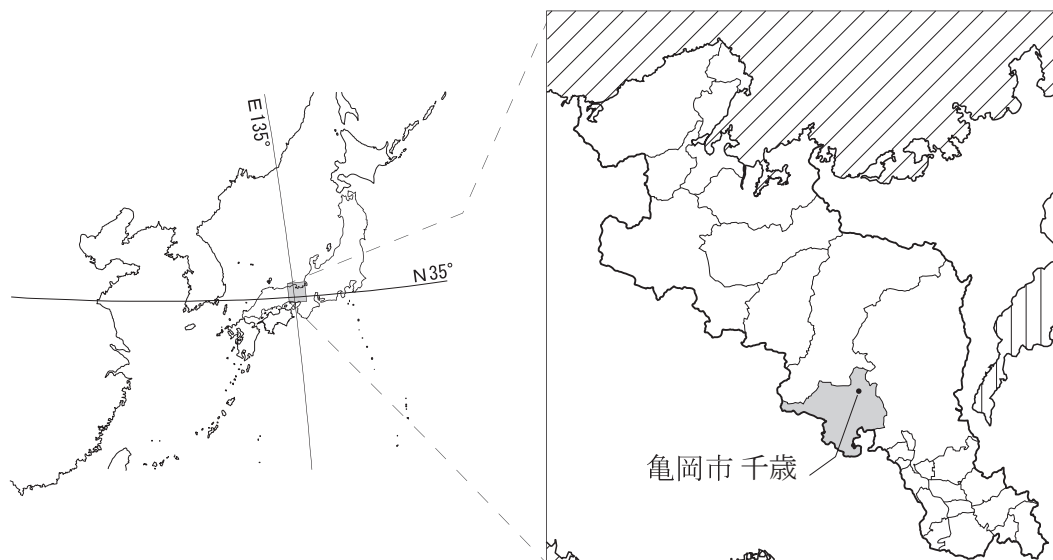
分布調査によると、確認できる古墳は51基であり、その中には横穴式石室の石室石材が露出しているものや開口方向がわかるものもある。また、表採遺物などはないものの、横穴式石室を埋葬施設とする円墳群から構成されることから、古墳時代後期の古墳群として位置づけられている。^(注1) 現地調査にあたっては、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、千歳町自治会をはじめ各関係機関のご指導、ご助言をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額京都府南丹土木事務所が負担した。

本文は現地調査を担当した調査課の中尾真琴が執筆した。

〔調査体制等〕

調査責任者	調査課長	小池 寛
調査担当者	調査課調査第3係長	村田和弘
	同 調査員	中尾真琴



第1図 亀岡市の位置

調 査 場 所 京都府亀岡市千歳町千歳地内
現地調査期間 令和4年11月8日～令和5年1月6日
調 査 面 積 100m²
〔整理作業体制〕
整理作業責任者 調査課長 小池 寛
整理作業担当者 調査課調査第3係長 村田和弘
同 調査員 中尾真琴
整理作業期間 令和4年12月1日～令和5年3月31日

2. 位置と環境

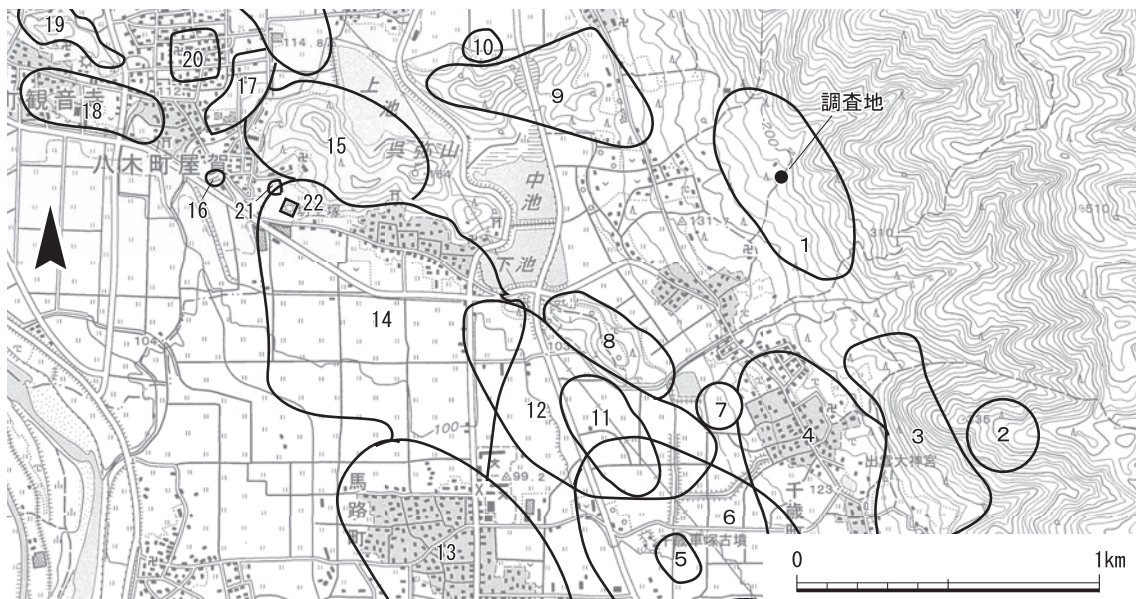
1) 地理的環境

亀岡市は京都府南西部に位置し、南丹市や京都市、大阪府能勢町や豊能町と接する。古くから様々な地域に囲まれ、今も昔も交通の要所となっている。また、この地域は周囲を400～700m級の山々に囲まれており、「亀岡盆地」と呼ばれる。盆地内には亀岡断層や保津断層といった活断層があり、それぞれに断層崖を形成している。特に、亀岡断層の運動の影響で盆地北東部の若丹山地が隆起したとされ、亀岡盆地が断層角盆地に区分されるようになったことは亀岡盆地の一つの特徴であろう。地質的には丹波帯に属している。

平野古墳群の所在する千歳町は、亀岡盆地北東部、若丹山地である三郎ヶ岳と牛松山の麓の亀岡断層付近に広がる集落である。また、調査地周辺には中谷川以外に、一級河川の七谷川や中谷川と同規模の堅谷川などがあり、それぞれ三郎ヶ岳や牛松山との間を通り大堰川へと注ぐ。中谷川は、三郎ヶ岳の中腹あたりを水源とし、そこから千歳町の北側へと抜け三俣川と合流する。調査地は中谷川中流域にあたる。

2) 歴史的環境

調査地を含む川東地区については、三日市遺跡第12・13次調査において見つかった火山灰層から古環境が復元されている。見つかったのは大山東大山火山灰(DH g)と始良T n火山灰(AT)と特定されており、後期旧石器時代にあたる。火山灰層に前後する堆積層の分析から、植生の変化や洪積世における亀岡盆地湖沼の拡がりの様相が解明され、当時の人々の生業を考える上での貴重な資料となっている。縄文時代では、時塚遺跡、三日市遺跡、車塚遺跡で流路などが見つかかり石器や土器が出土している。弥生時代は、前期の遺跡の調査例が少ない一方、中期になると調査例が増える。中期前葉の方形周溝墓が池尻遺跡で営まれ、中葉以降には時塚遺跡で竪穴建物群・方形周溝墓群からなる大規模集落遺跡が展開する。三日市遺跡や車塚遺跡でも、中期後半の弥生土器や石包丁といった遺物が出土している。美濃田古墳群北側の里遺跡でも弥生中期の竪穴建物跡が見つかった。後期では出雲遺跡にて流路や多角形住居を含む竪穴建物などが確認されている。古墳時代になると、前期から後期まで首長墓が造られるようになる。前期古墳としては、出雲式古墳が築造されている。中期中頃には、甲冑などの鉄製武器類が出土した坊主塚古墳や



第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 1.平野古墳群 | 2.御影山城跡 | 3.出雲古墳群 | 4.出雲遺跡 | 5.千歳車塚古墳 | 6.車塚遺跡 |
| 7.出雲館跡 | 8.稲築山古墳群 | 9.美濃田古墳群 | 10.広保古墳群 | 11.時塚古墳群 | 12.時塚遺跡 |
| 13.馬路遺跡 | 14.池尻遺跡 | 15.池尻古墳群 | 16.尾賀遺跡 | 17.北尾賀遺跡 | 18.観音寺遺跡 |
| 19.池内古墳群 | 20.尾賀遺跡 | 21.天神塚古墳 | 22.坊主塚古墳 | | |

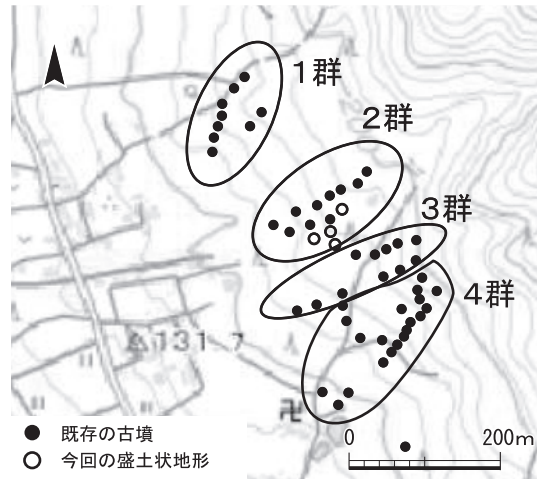
邪視の盾持ち人形埴輪が出土した時塚1号墳などが挙げられる。また、中1号墳では推定幅約6.5mの周濠と葺石をもつ墳丘の一部が見つかっている。さらに、後期に入ると丹波最大の前方後円墳である千歳車塚古墳が築造され、この地域一帯が丹波の地域勢力の中心となる。集落に関しては、里遺跡で堅穴建物が見つかっており、中期末から後期に最盛期を迎えるとされている。韓式系土師器や大阪府陶邑古窯址群産の須恵器、大阪湾南部から搬入された製塩土器などの地域間交流に関わる資料が見つかっている。池上遺跡は中期後半以降に最盛期を迎える集落で、大溝から手持ち勾玉が見つかっている。後期では、美濃田古墳群、出雲古墳群、池尻古墳群などの古墳群が展開し、池尻遺跡や時塚遺跡、出雲遺跡などの集落遺跡が広がる。美濃田古墳群や出雲古墳群などはその近くに同時期の集落が広がるが、平野古墳群の周辺には集落遺跡は知られておらず、その東側は空白地である。古代以降では、池上遺跡の廂付大型掘立柱建物群や時塚遺跡の官衙級大型建物が見つかっている。三日市遺跡・車塚遺跡の調査では、古代～中世までの瓦生産に関する遺構が検出され、調査地一帯での窯業の一端が明らかとなった。また、御影山の麓にある出雲神社は平安時代の延喜式内社であり古代から中世まで丹波国一宮として崇敬を集めていた神社である。現在の集落の東側は若丹山地で、山を超えて愛宕山へ参詣するための愛宕燈籠が建てられている。今でも組で当番を決めて燈籠に火を灯す習慣が根付いている。

3. 調査の経緯・方法

中谷川砂防事業の工事範囲に平野古墳群が含まれており、施工範囲に古墳の墳丘の可能性のある盛り土状地形が観察できた。盛り土状地形は対象地内の北東隅に1か所と、そこから南西方向に100mほど下った地点に3か所ある。このことをふまえ、南丹土木事務所、京都府教育委員会、

当センターで協議を行った結果、発掘調査を実施することとなった。

今回は、それぞれの盛り土状地形に近い地点の一部を調査することとなった。調査は、人力により表土掘削や精査作業を行った。それと同時に、基準点設置を行い、1/100や1/20の平・断面図などの図面作成や、トレンチの全景撮影などの記録作業も並行して行った。



第3図 平野古墳群分布図(1/10,000)
(国土地理院標準地図から作成)

4. 平野古墳群の概要

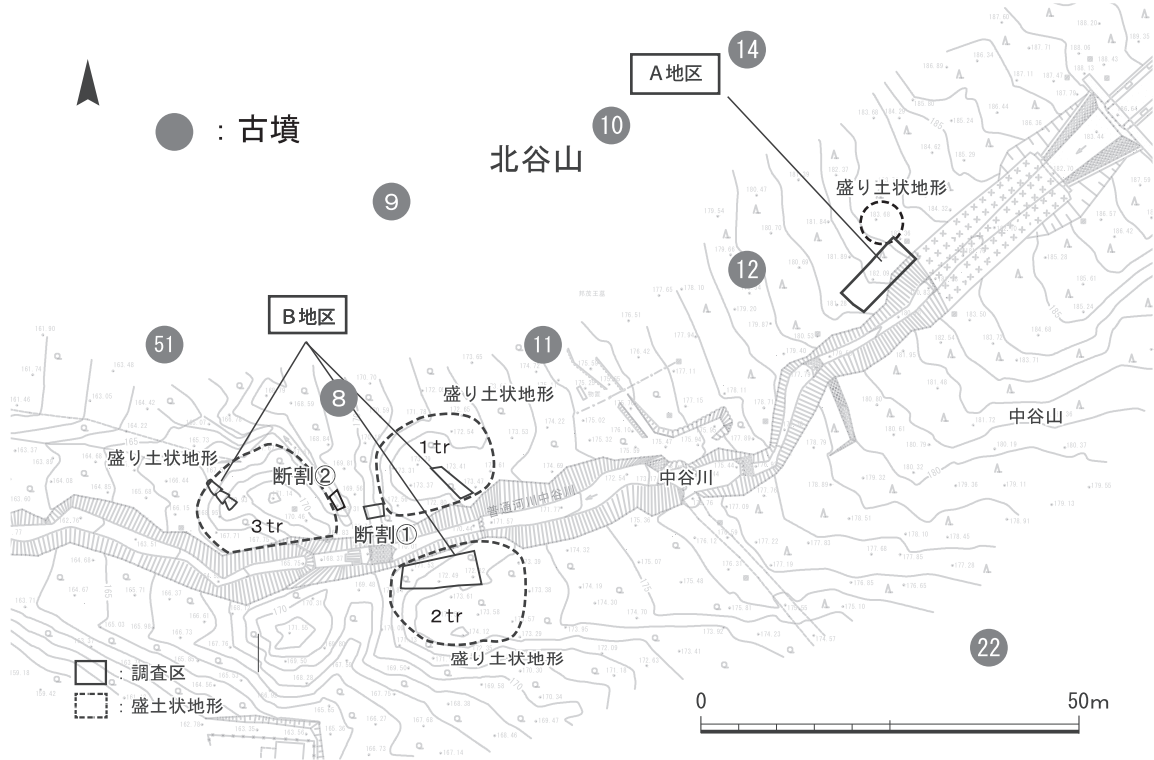
平野古墳群は三郎ヶ岳の中腹に位置しており、51基からなる古墳群である(第3図)。市史ではグループとされているが、本報告では北から1群、2群、3群、4群と呼称する。今回の使用する群は、市史を基にしたものであり、築造順や石室の開口方向などは一切考慮していない。1群は最も北に位置し、9基の古墳からなる。2群は中谷川の中流域に位置し、10基の古墳から形成され、うち15号墳は開口しており、石室規模から古墳群の中でも初期のものと考えられている。3・4群は東光寺北東の丘陵に位置し、北側を3群(11基)、南側を4群(20基)として、区分することが出来そうである。発掘調査例がないため古墳群の全容は不明であるが、支群の立地は、築造された時期や被葬者の違いによるものと考えられる。2群では古墳群形成の初期段階を推定される15号墳が、最奥部に位置していることから、奥から手前に古墳が構築された可能性が高い。現在確認できる古墳では、石材が露出するものが散見され、状況から横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳で構成される群集墳であることがわかる。

5. 調査概要

今回の調査区は千歳町の中谷川中流域にあたり、平野古墳群2群の範囲にあたる。調査を実施した盛り土状地形は京都府遺跡地図に掲載されていないが、協議の結果、古墳の可能性があると考えられ、調査を実施することとなった。調査地はA地区とB地区に分かれる(第4図)。周囲にある10・12・14号墳では石材の抜き取り痕が残る。また、9・11号墳では墳丘盛り土が確認できる。

1) A地区(第5図)

A地区は調査対象範囲の北東隅に位置しており、古墳の可能性が高い盛り土状地形が1地点確認されていた。調査区は、盛り土状地形の裾部にわずかにかかる程度である。調査面積は40㎡で、中谷川に沿うような方向でトレンチを設定した。調査の結果、遺物が多く見つかったのは盛り土状地形の近くで、6世紀後半と推定できる須恵器や10世紀の土師器などが出土した。トレンチ北西部では、近年のものと考えられる堰堤を検出している。また、トレンチ全体としては東隅から南西方向にかけて川の削平を受けて形成された自然地形を確認した。さらに堰堤の北西側には10



第4図 調査区配置図

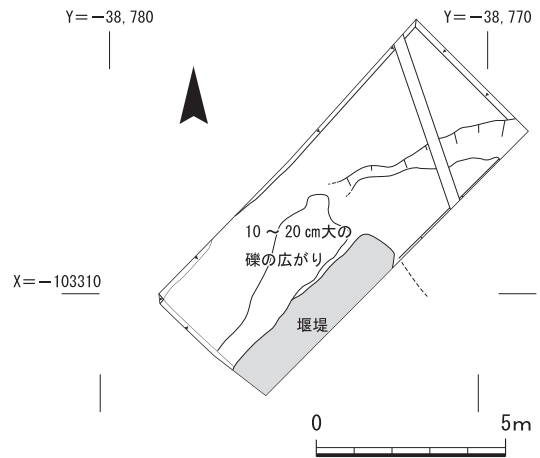
～20cm大の礫が広がる。堰堤はそれらが含まれる層を切り込んでいたため、堰堤設置前の堆積であり川の流れによって運ばれてきたものと考えられる。現在の中谷川の流路と比較すると非常に蛇行した形をしている。

(1) トレンチ北東部

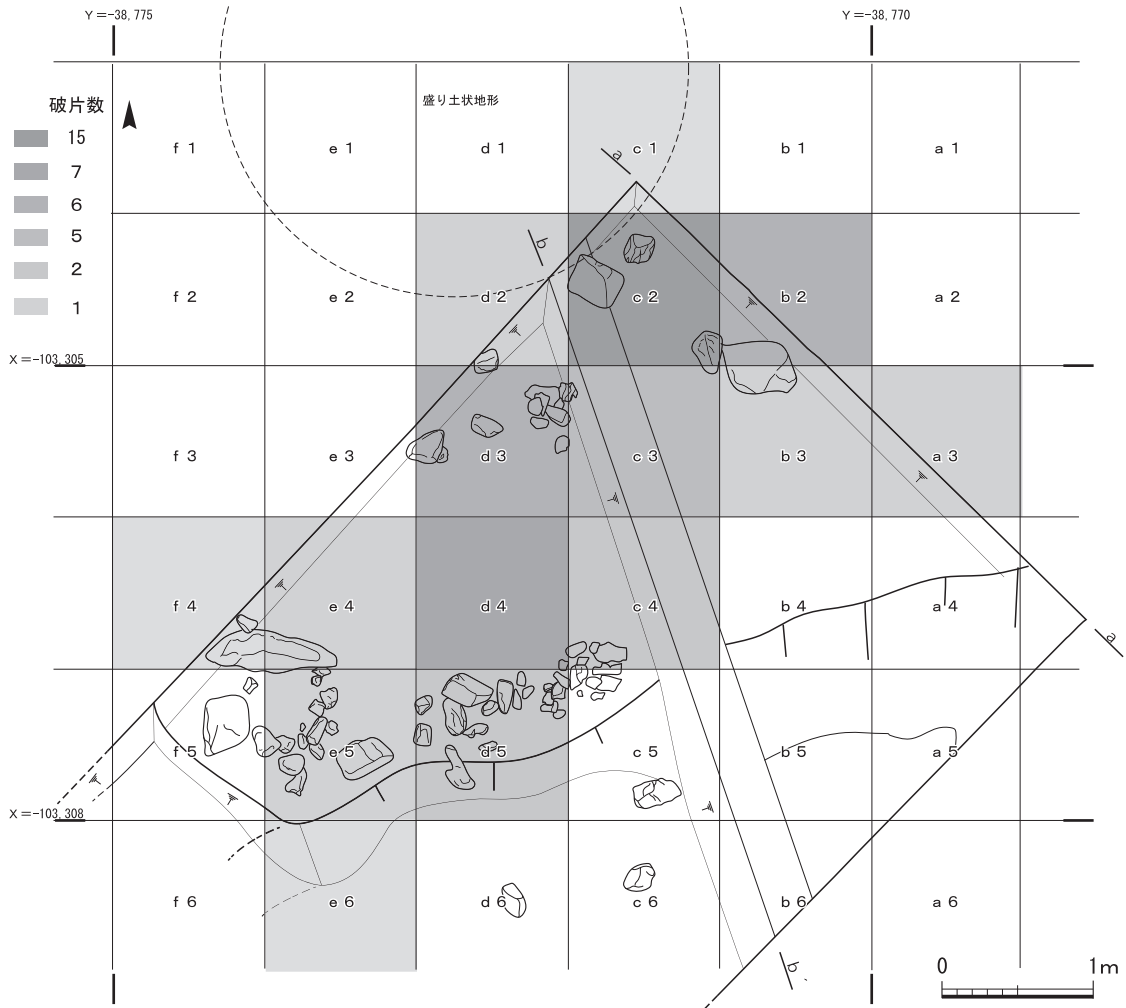
トレンチ北東部では、須恵器などの遺物がまわって出土したため1mグリッドを区画し出土範囲と密度を示した(第6図)。トーンが貼られている区画が遺物の出土地点であり、濃度が濃いもの

ほどより多く出土した区画となっている。盛り土状地形に近いほうから濃度が薄まっている様子がわかるが、削平を受けているためb4・c5・d6あたりから河川側では出土はなかった。d5・e6で遺物を確認しているが、d5では削平を受けていない面での出土である。また、e6は作業中に出土したものの混入である。密度の割合から、総じて盛り土状地形付近での出土率が高いことが見て取れる。c2が最も出土数が多く、その中では10世紀の遺物もある。次いで、d3・d4と密度の高い地点は南へと移る。e3は切り株により掘削できなかったため遺物が出土しなかったと考えられる。

遺物は断面図(第7図) a-a'では7・11・12層、断面図(第7図) b-b'では6・8層から出土している。10世紀頃の遺物は7層上面からの出土である。a-a' 7・11・12層の下層には、



第5図 A地区トレンチ平面図



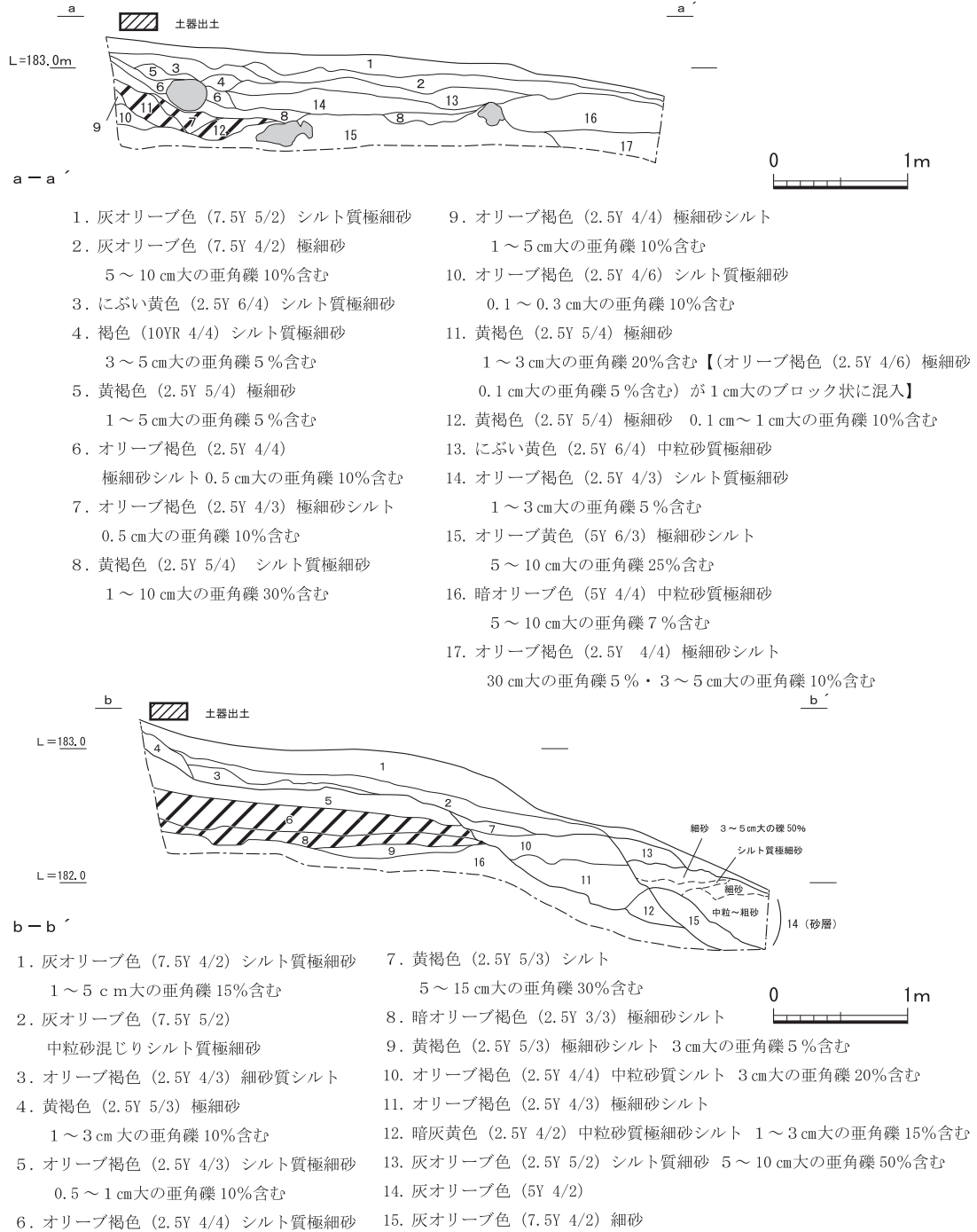
第6図 A地区トレンチ北東部遺物等出土状況

西から東に傾斜する9・10層がみられる。7・11・12層からは古墳の副葬品と考えられる須恵器が出土していることから、9・10層は古墳の墳丘盛り土の可能性はある。b-b'では、墳丘盛り土と考えられる土層は確認できなかった。b-b'からは川の流れによる削平が2回行われていることがわかった。1回目の削平により6・8層が削られている。

出土遺物やa-a'の土層(9・10層)から、盛り土状地形は古墳の可能性が高いと考えられる。

(2) 堰堤

トレンチ中央部から西側にかけての範囲では、L字状の石積みを検出した。一辺30cmほどの方形状の石が面をそろえて並べられており、幅約1m、高さ約45cmを検出した。トレンチ東側の川底に堰堤の石材が見えていたため、堰堤の西側にあたと判断した。遺物等が混入することはない明確な時期は不明であるが、千歳町の歴史をまとめた『ふるさと千歳』^(注2)に堰堤構築についての記述があり、府市の援助のもとに設けられたと書かれている。1955(昭和30)年に亀岡市が誕生しているため、少なくともそれ以降に堰堤が造られたと考えられる。このような堰堤は、水流調節や土砂災害防止などのため設けられたと思われる。



第7図 A地区土層断面図

2) B地区

A地区から南西に下ったところが調査地点であり、古墳の可能性のある盛り土状地形が3地点確認されていた。調査面積は60㎡で、それぞれの盛り土状地形にトレンチを設定した。調査した結果、遺物・遺構は確認できなかった。1・3トレンチと断ち割り①・②では礫層の堆積が確認できた。礫層の堆積は、中谷川の川底を浚渫した際に盛られたものと考えられる。また、2トレンチでは礫層と砂の自然堆積を確認した。浚渫されているため現在の川底はトレンチ北端から2m程低い。浚渫前の川底は現在よりも高く、流路も南側に蛇行していたと考えられる。

6. 出土遺物

A地区からの出土遺物はコンテナ1箱分である(第8図)。須恵器と少量の土師器がある。

(1) 須恵器

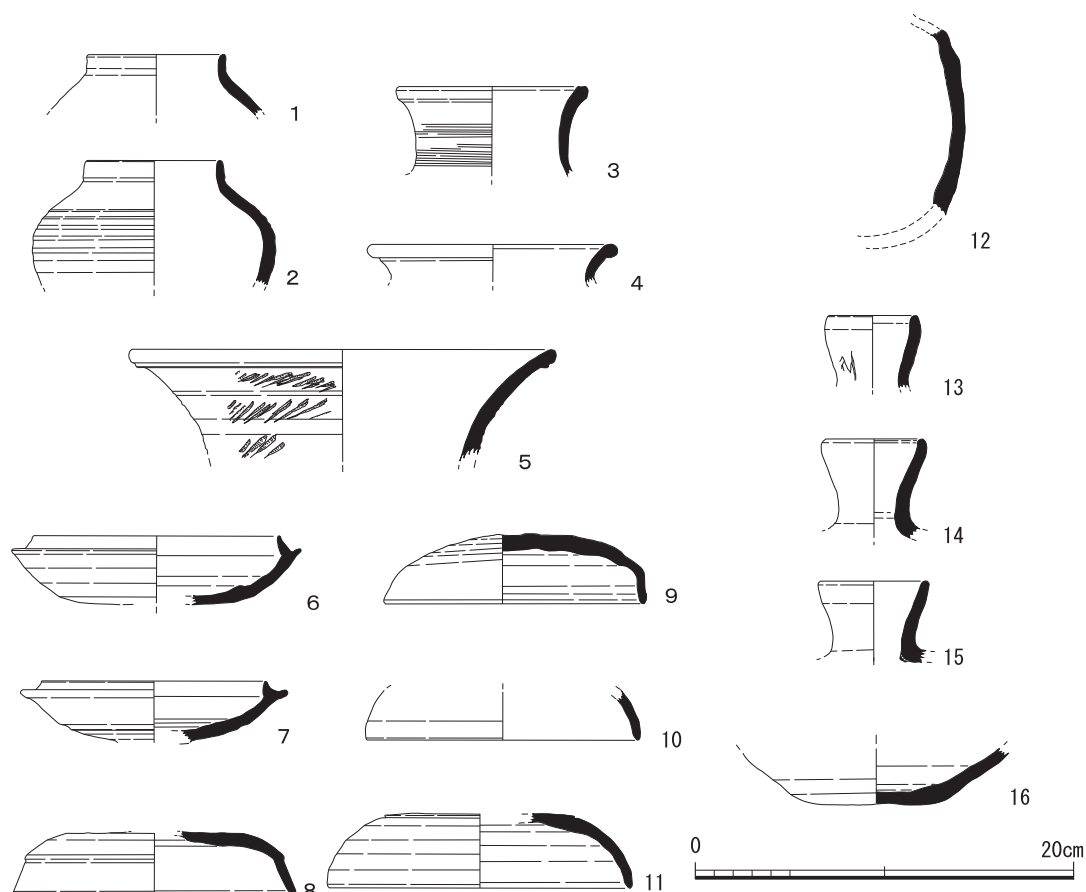
1、2は短頸壺である。1の立ち上がりはやや短く、肩が外に広がっている。2は立ち上がりと体部とのくびれ部分に強く回転ナデを残す。両者とも体部には自然釉が認められ、自然釉の付き方から2は蓋をかぶせて焼いたと考えられる。3は壺の口縁部である。口縁端部上面に面をもつ。内面には一定方向のナデが施されている。4は甕の口縁部および頸部である。口縁に丸みがあり、口縁部上部からは自然釉が付着する。5は広口壺の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部には三段にわたって列点文が施されている。6、7は杯身である。どちらも立ち上がりは短い6のほうがやや内傾する。また、受け部は6がきつく立ち上がり、7は水平に近い角度となっている。7は底部からの立ち上がりが浅く、外面に回転ナデを強く残す。どちらもヘラ切りである。なお、7は高杯の杯部の可能性もある。8～11は杯蓋である。8は底部でヘラケズリを行い底部内面はナデで仕上げている。9は口縁部から天井部に向かう立ち上がり部分に強い回転ナデを残す。焼歪みで少々形が歪である。また、内面はロクロで成形した後、底部はナデを行っている。天井部はヘラ切りである。11は天井部外面に強いナデの痕を残し、ヘラ切りを行う。ヘラ切り後は未調整である。6～11は田辺編年TK43～TK209併行期に相当すると考える。12は提瓶の体部と考えられ、直径約15cmと小振りである。体部にはカキ目が施されているが、さほど密ではなく1cmほどの間隔をもたせている。13～15は提瓶もしくは平瓶の口縁部である。13は頸部にヘラ描き沈線がわずかに残り、全体に自然釉がかかる。14は口縁端部内面にやや強く回転ナデがかけられており、口縁端部が内傾する。15は全体的に厚みがありずっしりとしている。また、14、15には頸部と体部の接合痕がみられる。15には頸部と体部の境目をナデでつないでいる痕跡がある。

(2) 土師器

16は甕もしくは壺の底部で、土師器ではあるが作り方は須恵器の技法を用いている。焼成温度が低く、やや軟質である。外面全体に煤が付着している。10世紀頃のものである。

7. まとめ

今回は、中谷川中流域において古墳の可能性のある盛り土状地形を調査した。その結果、A地区の盛り土状地形は、出土したTK43～TK209併行期の時期の須恵器から6世紀後半の古墳になる可能性が高い。また、それらの須恵器に混じって10世紀頃の土師器も出土している。土師器は古代に石室が利用された時に置かれたもので、後世の石材抜き取りなどによって須恵器とともに掻きだされていると考えられる。したがって、この盛り土状地形が古墳であるとする、6世紀後半に築造→古代に石室の再利用→後世で石材抜き取りなどが行われるといったおおまかな流れが想定できる。今回の発掘調査で、平野古墳群が古墳時代後期後半の古墳群であると位置付ける資料を得ることができたのではないだろうか。



第8図 出土遺物

また、A地区の堰堤やB地区からは近年に行われた中谷川の水害対策の様子を知ることができた。堰堤の構築や浚渫が行われる前の中谷川は今よりさらに蛇行し、深さも浅かったことがわかる。この地域では、水の確保や大雨の際の水害対策など昔から治水に関して苦勞してきたようであり、そうした人々の知恵や工夫の一端を明らかにすることができたといえる。(中尾真琴)

注1 亀岡市史編さん委員会(2000)『新修 亀岡市史—資料編第一巻—』亀岡市

注2 千歳町誌編纂委員会(1987)『ふるさと千歳』亀岡市千歳自治会

参考文献

井本伸広ほか1989『京都西北部地域の地質』地質調査所

黒坪一樹2019「出雲遺跡第17次・中古墳群第2次・三日市遺跡第12次」『京都府遺跡調査報告集』第178冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

黒坪一樹・高野陽子・武本典子2016「出雲遺跡第15・16・18次」『京都府遺跡調査報告集』第166冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

小池寛・松尾史子2004「里遺跡3・5・6次」『京都府遺跡調査報告集第112冊』(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

亀岡市史編纂委員会1995『新修 亀岡市史—本文編第一巻—』亀岡市

東京国立博物館1994『須恵器集成I(近畿編)』東京国立博物館

中村 浩ほか1996『須恵器集成図録』雄山閣出版

原口正三1979「須恵器」『日本の原始美術4』講談社

八木透(2004)「愛宕をめぐる民俗信仰」『アジア宗教文化情報研究所報01号』アジア宗教文化情報研究所報

龍谷大学学友学術文化局考古学研究会(2022)『亀岡盆地における群集墳Ⅱ－法貴峠古墳群・法貴古墳群・

宮条古墳群・宮条南古墳群』龍谷大学学友学術文化局考古学研究会

龍谷大学考古学研究会(2017)『保津山東1号墳の測量・平野古墳群の分布調査』龍谷大学考古学研究会

付表 出土土器観察表

(凡例)

・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示
 ・残存率は基本的に口径で表記
 ・該当なし：－
 ・計測不可：/
 ・()：復元(底・口)径・残存高
 ・(口)口縁部、(頸)頸部、(底)底部・高台、(脚)脚部、(鏝)鏝径、(全)全体

番号	種類	器種	法 量 (cm)			残存率	色 調	胎 土	備 考
			口径	器高	底・天井部径				
1	須恵器	短頸壺	(7.2)	(3.2)	－	口縁部 1/12	灰白 (2.5Y7/1)	密 径1mm以下白色砂粒含む	
2	須恵器	短頸壺	(7.0)	(6.6)	－	口縁部 6/12	灰白 (5Y6/1)	密 径1mm以下白色砂粒含む	重ね焼き痕
3	須恵器	壺	(9.8)	(4.7)	－	口縁部 1/12	灰白 (N4/0)	密 径1mm以下白色砂粒及び2mm大の白色砂粒含む	
4	須恵器	甕	(12.7)	(2.0)	－	口縁部 2/12	灰白 (5Y6/1)	密 径1mm以下白色砂粒及び	
5	須恵器	壺	(22.2)	(5.9)	－	口縁部 1/12	灰白 (N6/0)	密 径2mm前後の白色砂粒含む	列点文
6	須恵器	杯身	(13.0)	(3.55)	(8.0)	口縁部 1/12 弱	灰白 (5Y6/1)	密 径1mm程度の白色砂粒含む	
7	須恵器	杯身	(11.8)	(3.2)	(8.8)	3/12 弱	灰白 (N7/0)～灰 (N6/1)	密 径1mm弱白色砂粒含む	高杯杯部の可能性もあり
8	須恵器	杯蓋	(13.4)	(2.9)	(13.7)	口縁部 1/12 強	灰 (5Y5/1)	やや粗 径1mm程度の黒色砂粒含む	
9	須恵器	杯蓋	(13.7)	(3.7)	(11.4)	口縁部 1/12 強	黄灰 (2.5Y6/1)	密 径1mm以下白色砂粒含む	焼歪み
10	須恵器	杯蓋	(14.4)	(2.6)	－	口縁部 1/12 強	灰白 (5Y7/1)	密 径1mm以下白色砂粒含む	
11	須恵器	杯蓋	(16.0)	(3.95)	(10.0)	口縁部 2/12	灰白 (N7/0)	密 径2mm以下の白色砂粒含む	
12	須恵器	埴瓶	－	(14.4)	－	体部 3/12 強	灰白 (2.5Y7/1)	密 径1mm程度の白色砂粒含む	体部のみ
13	須恵器	埴瓶	(4.6)	(3.85)	－	口縁部 4/12	灰白 (7.5Y4/1)	密 径2mm程度の白色砂粒含む	ヘラ描き
14	須恵器	埴部	(5.1)	(5.25)	－	口縁部 3/12	灰白 (N6/0)	密 径1mm以下白色砂粒含む	
15	須恵器	埴部	(5.6)	(4.3)	－	口縁部 2/12	灰白 (7.5Y4/1)	密 径1mm前後の白色砂粒含む	体部と貼り付け痕あり
16	土師器	甕/壺	－	(3.0)	4.6	底部完存	灰白 (10YR 8/2)	やや軟	外面に煤付着

小樋尻遺跡第13次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、一般府道山城総合運動公園線(城陽橋)橋りょう新設改良事業に伴い、京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施したものである。一般府道山城総合運動公園線(城陽橋)橋りょう新設改良事業は、4車線化整備による渋滞の緩和、安全で円滑な走行に寄与、新名神高速道路城陽JCT・ICへのアクセス向上を図ることを目的として、新名神高速道路、国道24号や市道東部丘陵線と一体となって整備する延長約0.7kmの事業である。

調査区は、国道24号の新池交差点の南西側にあたり、国土交通省の国道24号寺田拡幅事業に係る小樋尻遺跡第12次調査の調査区(小樋尻遺跡B12区)南側に接している。このため、発掘調査は小樋尻遺跡第12次調査の調査区(小樋尻遺跡B12区)と同時に実施した。また、排土置き場を確保する必要が生じたため、調査区を西半と東半に分割して実施した。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、城陽市教育委員会のほか、各関係機関、地元の方々にご指導・ご協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、京都府山城北土木事務所が全額負担した。

本文は、現地調査を担当した調査課副主査小泉裕司が執筆した。

〔調査体制等〕

調査責任者 調査課長 小池 寛

調査担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉

同 主査 小泉裕司

調査場所 京都府城陽市富野小樋尻

現地調査期間 令和3年9月6日～令和4年3月2日

調査面積 1,400㎡

〔整理作業体制〕

整理作業責任者 調査課長 小池 寛

整理作業担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉

同 副主査 小泉裕司

整理作業期間 令和4年11月1日～令和5年3月31日

2. 遺跡の環境

1) 地理的環境

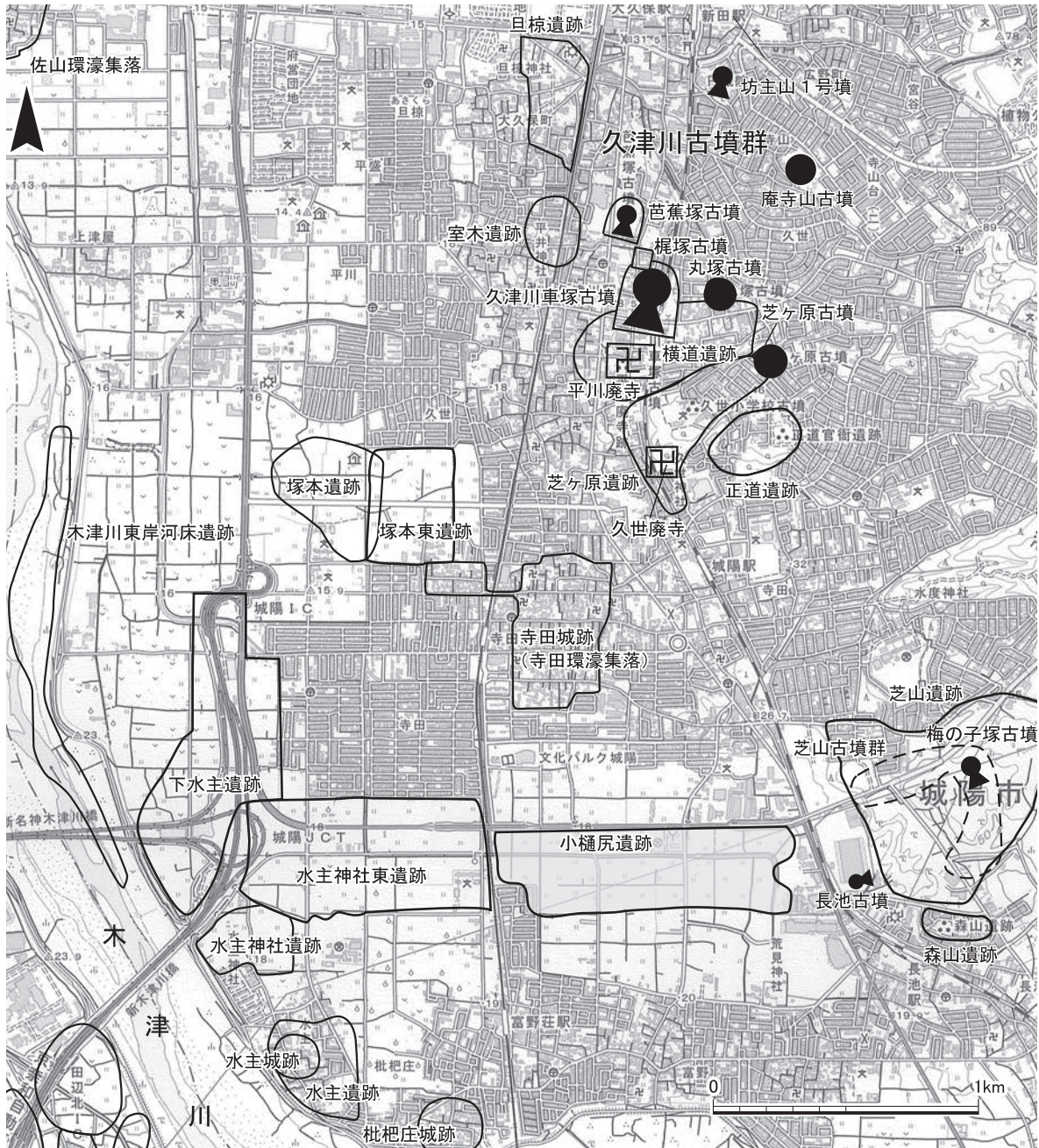
小樋尻遺跡が所在する城陽市は、近畿地方のほぼ中央部の内陸に位置する。市域は南北5.4km、東西9kmで東西にやや長く、東部の山地・丘陵と西部の平野に大きく二分される。市域の東部を南北にのびる山地は、鷲峰山(682m)山塊に連なるもので、市域最高地点は片原山(433m)である。山麓には、宇治丘陵と呼ばれる大阪層群からなる洪積丘陵が東から西へのびている。宇治丘陵からは、北から大谷川、長谷川、青谷川が西へ流下し、扇状地を形成している。市域西部には木津川が形成した沖積平野が、河川に平行して南北に広がっている^(注1)。

2) 歴史的環境

市域では、主に縄文時代から奈良時代の遺跡が知られるが、市域北部の大谷川扇状地周辺に集中する傾向がある。

市域における最も古い人々の営みの痕跡としては、大谷川扇状地南側の丘陵上に所在する芝ヶ原遺跡で約2万年前の舟底形石器とナイフ形石器が出土している。縄文時代には、小樋尻遺跡東側の丘陵上に所在する森山遺跡で後期後半の集落が営まれている。弥生時代には、森山遺跡や小樋尻遺跡西側の平野部に所在する下水主遺跡で後期の集落が営まれている。古墳時代初めには、大谷川扇状地南側の丘陵上に芝ヶ原古墳が築造される。これを契機として、大谷川扇状地とそれを望む丘陵上を中心に古墳時代前期～後期にかけて有力首長墳が連綿と築かれ、久津川古墳群が形成される。古墳時代前期には、西山古墳群、尼塚古墳群、上大谷8・15号墳、尼塚方墳などが築造される。古墳時代中期には、南山城地域最大の前方後円墳である久津川車塚古墳(全長272m)や芭蕉塚古墳(全長161m)が築造され、古墳時代中期に南山城地域を治める大首長がこの地に存在したことを示している。この他に丸塚古墳・梶塚古墳・芝ヶ原9～10号墳などが築造される。古墳時代後期には、芝ヶ原1～7号墳や上大谷1～5号墳などが築造される。また市域南部の青谷地域では、久津川古墳群ではほとんどみられない横穴式石室を埋葬施設とする冑山古墳群、黒土1号墳、茶臼塚古墳などが築造される。奈良時代には、大谷川扇状地に平川廃寺、その南側丘陵端に久世廃寺、南側丘陵上に久世郡衙と推定される正道官衙遺跡が造営される。この他、大谷川扇状地周辺に所在する正道遺跡、芝ヶ原遺跡、古宮遺跡、横道遺跡、室木遺跡などでは古墳時代末から飛鳥時代に集落が造営され始め、奈良時代まで存続する。奈良時代には、大谷川扇状地周辺が南山城地域における政治・文化の中心のひとつであったことを示している。

平野部では、塚本遺跡、塚本東遺跡、水主遺跡、水主神社遺跡、水主神社東遺跡、下水主遺跡、小樋尻遺跡などの存在が知られているが、遺跡範囲の大半が市街化調整区域となっており耕作地として利用されているため詳細は明確ではなかった。近年、市道や市施設の建設、新名神高速道路建設、国道24号寺田拡幅事業などに伴う発掘調査が継続的に実施され、徐々に遺跡の実態が明らかになりつつある。小樋尻遺跡の北西約1.8kmに位置する塚本東遺跡では、古墳時代前期の集落が確認されている。小樋尻遺跡西側に隣接する水主神社東遺跡では、縄文時代後期～晩期の流路と流路内に設置された木組み遺構、木道、杭列などが検出されている。この他に、古墳時代前



第1図 周辺遺跡分布図

期の溝や中世の鳥畑が確認されている。下水主遺跡では、縄文時代晩期の自然流路、弥生時代中期後半～後期初めの土坑、弥生時代後期後半の竪穴建物や土坑、古墳時代の流路、飛鳥時代や平安時代の掘立柱建物が検出されている。弥生時代中期～後期、飛鳥時代、平安時代に木津川沿いの微高地に集落が展開していたことが明らかとなっている。この他に、中世の鳥畑が確認されている。

小樋尻遺跡の東側丘陵上には、縄文時代から中世の複合遺跡である芝山遺跡が所在し、飛鳥～奈良時代の大規模な集落が確認されている。同じ丘陵上には、古墳時代前期の前方後円墳2基からなる梅の子塚古墳群や、4世紀末～6世紀末に築造された10～20mの方墳や円墳からなる芝山

古墳群が所在する。また、芝山遺跡の南側丘陵には縄文時代後期と古墳時代前期の集落跡である森山遺跡が所在し、古墳時代前期の方形周溝状遺構は有力首長の居館と推定されている。

小樋尻遺跡は、平成8年3月に城陽市教育委員会が実施した分布調査で確認され、平成29年の新名神高速道路建設に伴う試掘調査によりさらに西側への広がりが確認された。遺跡範囲は、東西約1,100m、南北約320mである。平成12・13年には今池川改修工事に伴う試掘・発掘調査、平成28年には関西電力株式会社の送電用鉄塔の移設に伴う発掘調査、平成29年には城陽市消防本部庁舎移設新築に伴う発掘調査が城陽市教育委員会により実施された。また平成29年からは、新名神高速道路建設と国道24号拡幅に伴う発掘調査が公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターにより実施されている。

これらの発掘調査では、縄文時代後期～晩期の自然流路、縄文時代晩期の竪穴建物や土器棺、古墳時代前期の集落や自然流路に設けられた導水施設、古墳時代後期の集落、古墳時代後期～奈良時代の大規模な溝、奈良時代の集落、古墳時代前期・古墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代の小規模な溝群、中世の島畑群や井戸・掘立柱建物が確認されている。^(注2)

3. 調査概要

1) 基本層序

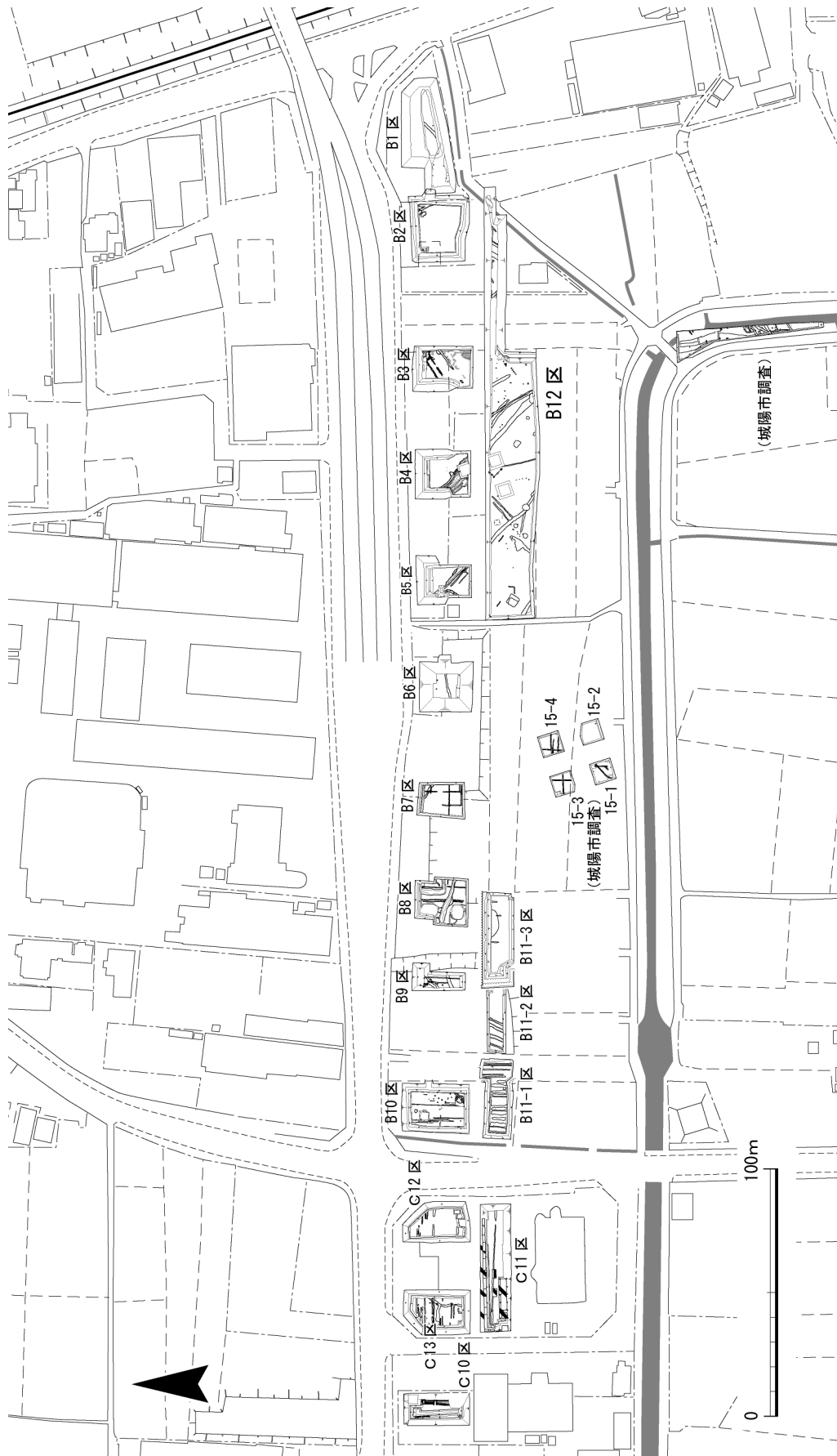
基本層序は、新名神高速建設工事に伴う改良土(第1層)、現代耕作土(第2層)、灰色系砂質土層(第3層)、灰色系シルト層(第5・6・7・8層)、青灰色シルト層(第13層)、青灰色系粘質土層(第14・15・16層)、青灰色砂質土層(第17層)である。

灰色系シルト層(第7・8層)は遺物包含層、青灰色シルト層(第13層)上面が遺構検出面である。また、灰色系シルト層(第5・6層)の上面は不規則に波打つ波状を呈しており、特に第6層が著しい。地震による液状化と考えられる。なお、青灰色砂質土層(第17層)の下層は旧木津川の堆積層である明褐色系砂層となる。

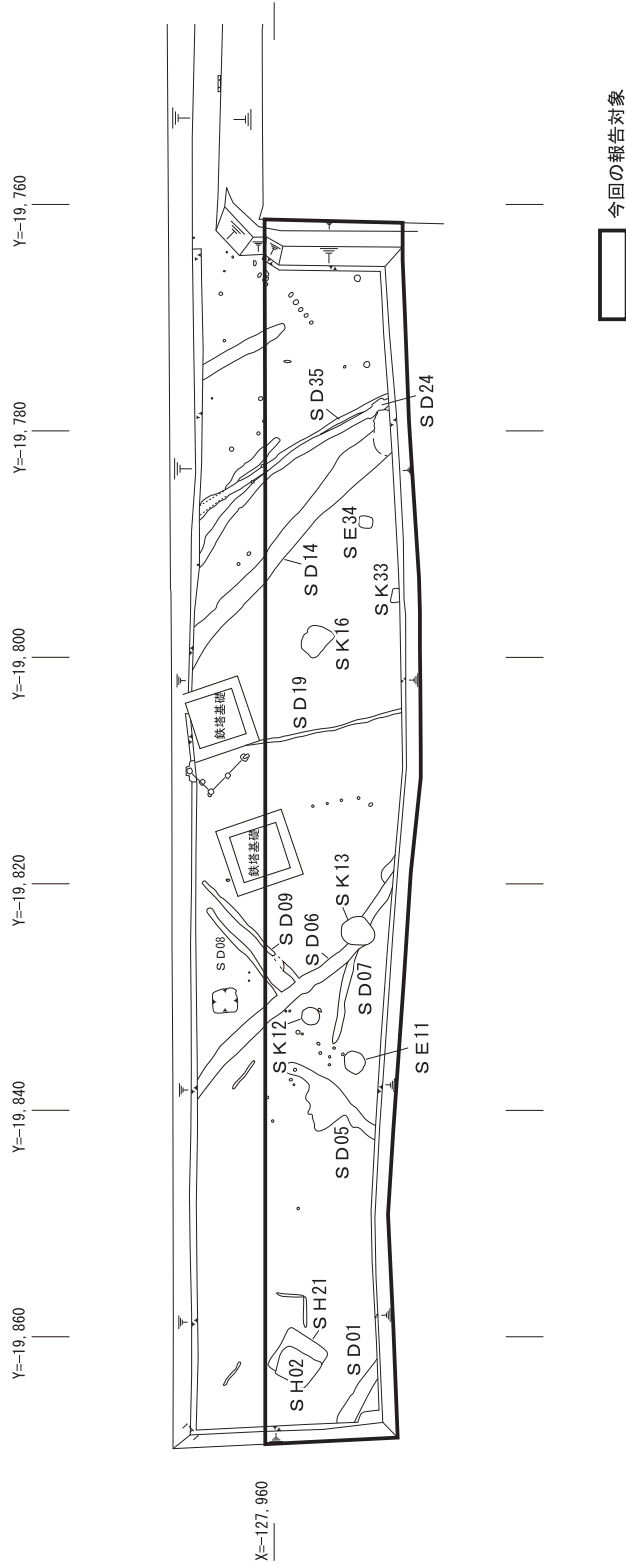
2) 検出遺構

検出した主な遺構は、弥生時代後期後半～末の井戸1基(S E11)、古墳時代前期の土坑2基(S K13・16)と溝4条(S D06・07・08・09)、古墳時代後期の竪穴建物2基(S H02・21)と溝1条(S D01)、飛鳥時代の溝3条(S D05・24・35)、飛鳥時代～奈良時代の溝1条(S D14)である。この他に、時期が明確でない井戸1基(S E34)、土坑2基(S K12・33)、溝1条(S D19)がある。遺構の検出標高は、16.0～16.1mである。

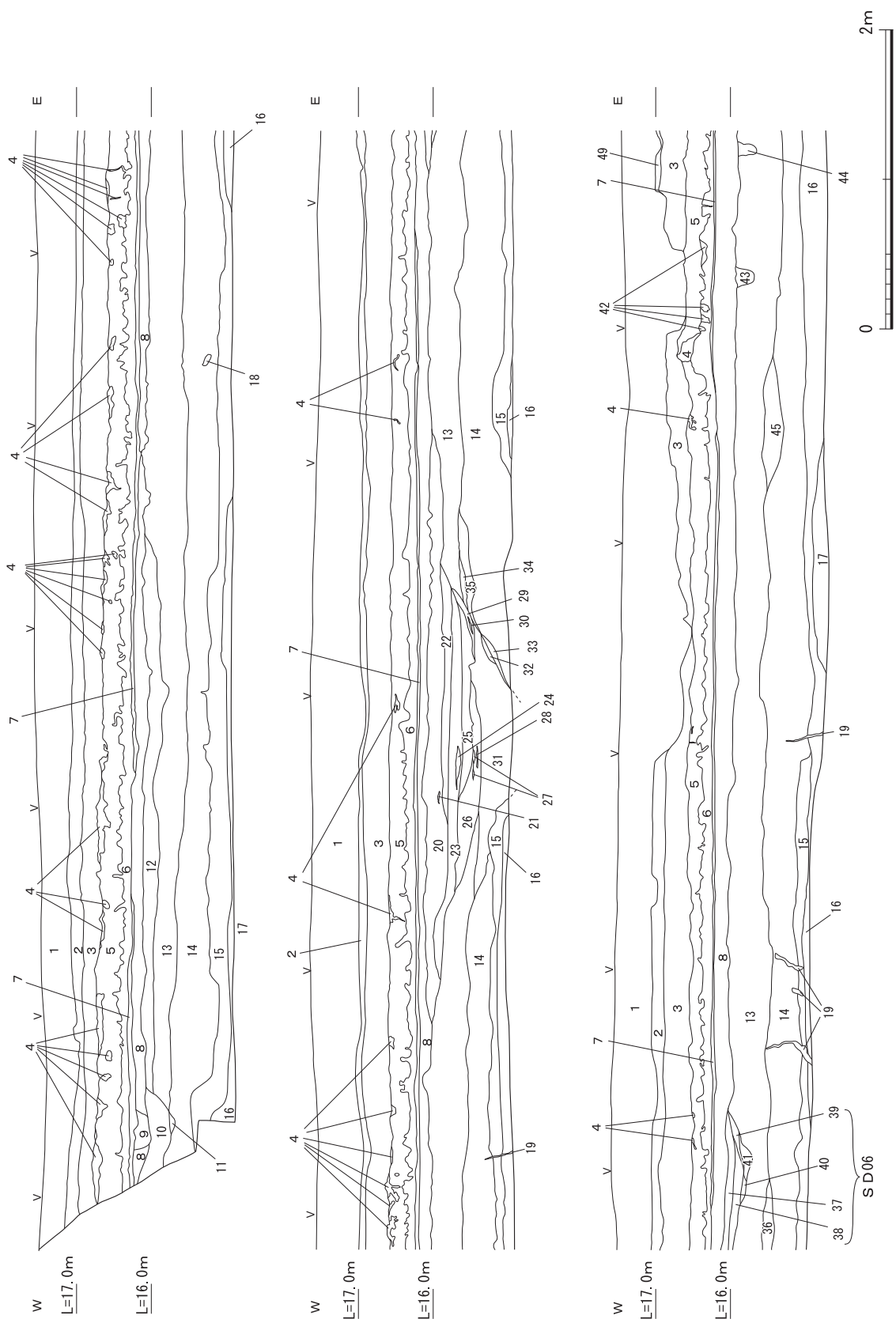
S E11は、調査区中央の西寄りの南壁近くで検出した円形の井戸である。遺構面での長径は約2m、短径は約1.7m、底面での長径は約1.2m、短径は約1m、深さは約1.2mである。底面は、旧木津川の堆積層である砂層まで達している。底面では完形の甕1点を含む土師器の破片(第9図17～21)がややまとまって出土した。出土した土師器は完形かほぼ完形に復元できる状態であったことから、井戸としての使用終了時に行われた儀礼に伴い投げ入れられたものと考えられる。最下層の土器検出面から40cm程堆積する埋土には土器は含まれず、堆積状況から徐々に自然埋



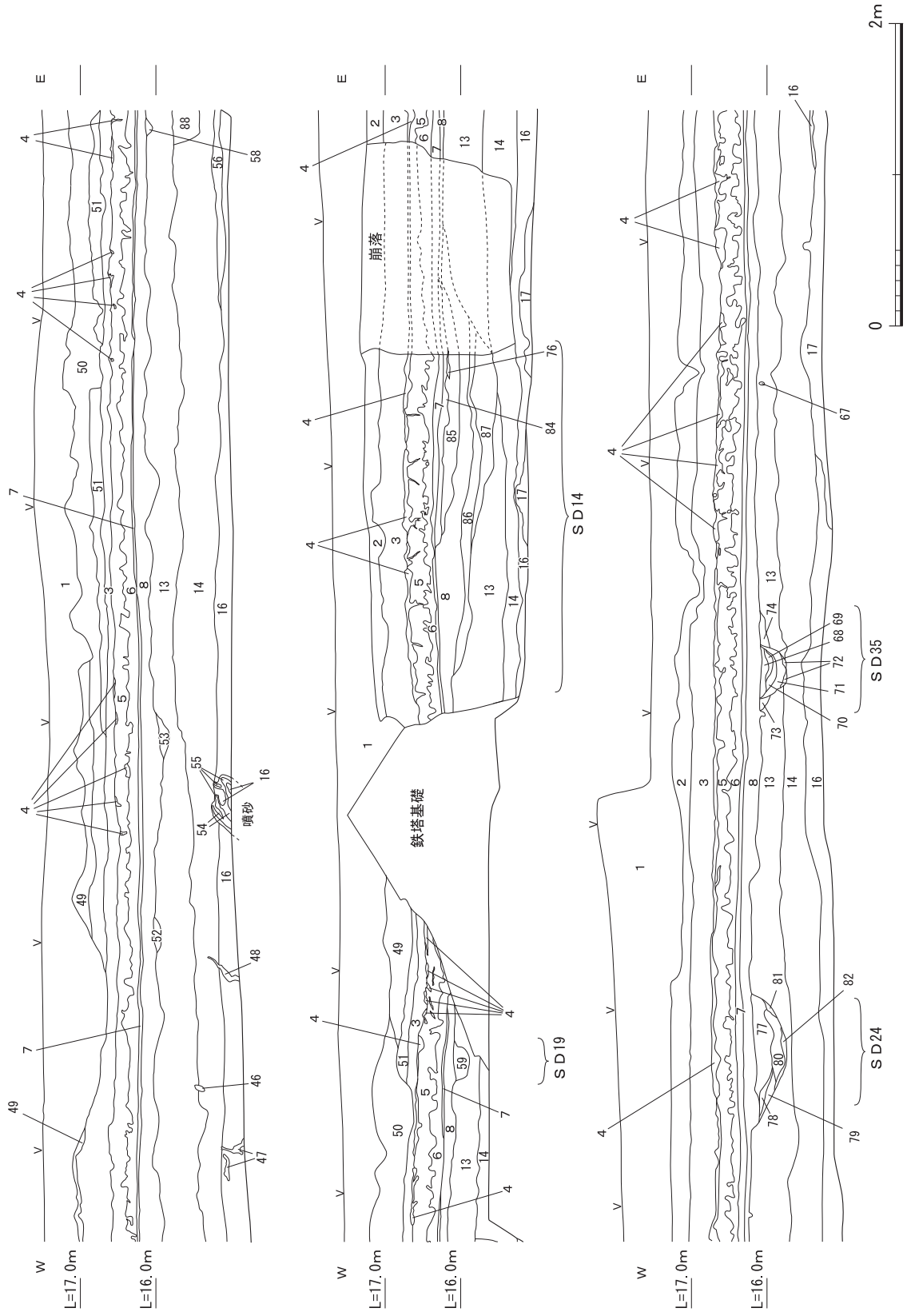
第2図 周辺調査区配置図



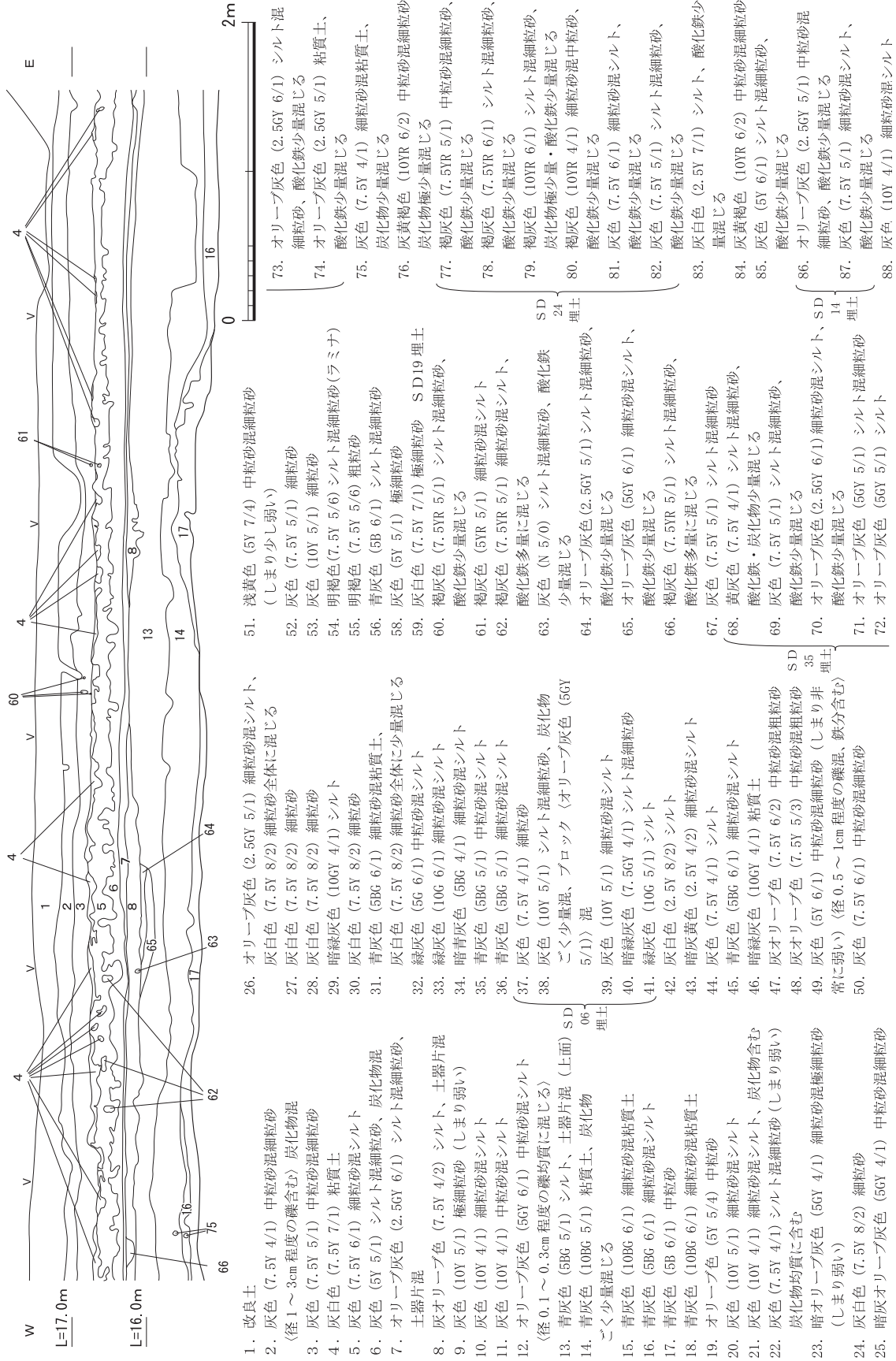
第3図 遺構配置図



第4図 北壁土層断面図1



第5図 北壁土層断面図2



第6図 北壁土層断面図3

没していったようである。遺構検出面から深さ約0.6mまでの埋土からは、土師器の破片(第9図1~16)や炭化物がややまとまって出土した。これらのことから、半分くらいの深さまで自然埋没した後に、廃棄土坑として再利用されたと考えられる。出土した土師器や炭化物の放射性炭素年代測定(付編)から、井戸として使用が終了したのは弥生時代後期後半~末、廃棄土坑として再利用されたのが古墳時代初めと考えられる。

S K13は、調査区中央の南壁近くで検出した円形土坑で、長径は約3.5m、短径は約2.8m、深さは約0.7mである。S K13の北西側と南東側にはS D06が接続するように掘削されている。S K13とS D06の埋土にはほとんど違いがなく、一連の遺構と考えられ、溝の途中に設けられた水溜のような施設の可能性がある。埋土からは、土師器の破片(第9図22~26)や炭化物がややまとまって出土した。最終的には廃棄土坑として利用されたと考えられる。出土した土師器や炭化物の放射性炭素年代測定(付編)から古墳時代初めのものと考えられる。

S K16は、調査区中央の東寄りで検出した不定形土坑で、長軸は約3m、短軸は約2m、深さは約20cmである。埋土からは、土師器の破片や炭化物が少量出土した。出土した土師器の破片から、古墳時代前期の廃棄土坑ではないかと考えられる。

S D06は、調査区中央で検出した北西から南東に延びる溝である。幅は0.9~1.2m、深さは20~40cm、検出長は国道24号調査区分も含めて約25mである。調査区南壁寄りでS K13の中央を貫くように掘削されている。埋土からは、土師器の破片が若干出土した。

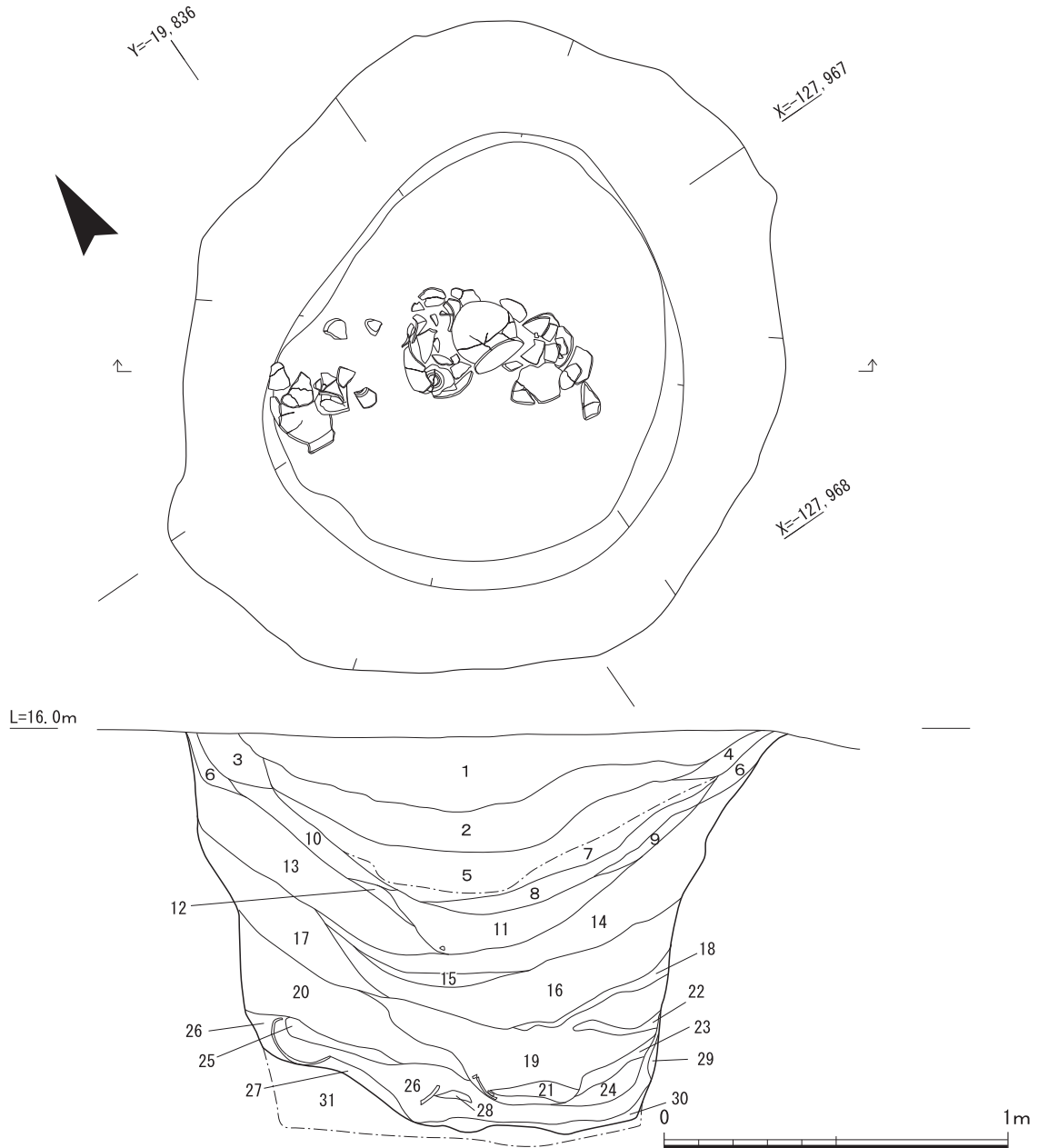
S D07は、調査区中央の南壁寄りで検出した東西の溝である。東端はS D06と合流し、西端は調査区内で終息する。幅は約0.5m、深さは約30cm、検出長は約9mである。埋土からは、土師器の破片が若干出土した。

S D08は、調査区中央の北壁寄りで検出した北東から南西に延びる溝である。東端は国道24号調査区内で終息し、西端はS D06と直行して合流する。幅は約0.6m、深さは約10cm、検出長は国道24号調査区分も含めて約10mである。埋土からは、土師器の破片が若干出土した。

S D09は、S D08の南側に並行して延びる溝で、S D08とS D09間の幅は1~1.5mである。東端は国道24号調査区内で終息し、西端はS D06と直行して合流する。幅は30~50cm、深さは約10cm、検出長はS D06から約1mの所で一旦途切れるが国道24号調査区分も含めて約12mである。埋土からは、土師器の破片(第10図27)が若干出土した。

S D06とこれに合流するS D07・08・09は、一連の溝群と考えられる。明確に時期を示す出土遺物はS D09から出土した土師器甕片(第10図27)のみであるが、S D06とS K13は一連の遺構とみられることから、これらの溝群はS K13と同じ古墳時代初めの遺構と考えられる。

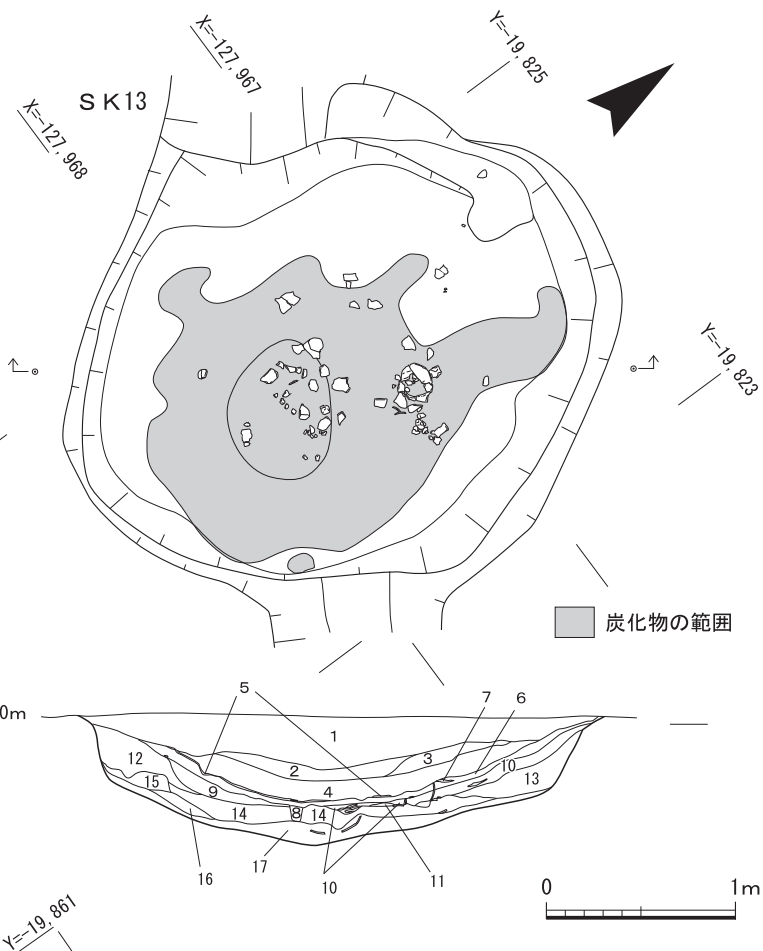
S H02・21は、調査区西端で検出した重複する竪穴建物である。S H02は、建物方位をN29°Eにとり、南北は約3.5m、東西は約2.8m、深さは約10cmである。竈や柱穴は、検出されなかった。床面には炭化物の堆積が広範囲にみられ、炭化物の上面や埋土から土師器の破片(第10図29・30)がややまとまって出土した。S H21は、建物方位をN33°Eにとり、一辺は約4m、深さは約10cmである。竈や柱穴は、検出されなかった。床面にはS H02と同様に炭化物の堆積が所々に



- | | | |
|--|--|--|
| 1. 灰色 (7.5YR 5/1) 細粒砂 土器片混、炭化物含む | 14. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト、炭化物均質に混じる、ブロック (緑灰色 (5G 5/1)) 含む | 21. 緑灰色 (5G 5/1) 粘質土 |
| 2. 灰色 (10Y 5/1) 粗粒砂混シルト 土器片含む | 15. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト、炭化物ごく少量混 | 22. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 粘質土 |
| 3. 灰色 (10Y 4/1) シルト | 16. オリーブ灰色 (5GY 5/1) シルト、炭化物均質に含む | 23. 緑灰色 (5G 5/1) 粘質土、炭化物少量混 |
| 4. 灰色 (10Y 5/1) 中粒砂混シルト、炭化物含む | 17. 緑灰色 (7.5GY 5/1) 中粒砂混シルト 径0.3~0.5cm程度の礫含む、炭化物均質に混じる | 24. 暗緑灰色 (10GY 5/1) 細粒砂混シルト、炭化物均質に含む |
| 5. 灰色 (10Y 5/1) 粘質土、土器片含む、炭化物含む | 18. 緑灰色 (10GY 6/1) 粘質土 | 25. 暗緑灰色 (10GY 5/1) 粘質土 |
| 6. 青灰色 (5BG 5/1) シルト混細粒砂 | 19. 緑灰色 (7.5GY 5/1) シルト (しまりやや強い) 炭化物やや多く均質に混じる、土器片多く含む | 26. 緑灰色 (5G 5/1) 粘質土、炭化物やや均質に混、土器片多く含む |
| 7. オリーブ黒色 (10Y 3/1) シルト混細粒砂、炭化物非常に多く含む | 20. 緑灰色 (7.5GY 5/1) 細粒砂混シルト 径0.2cm程度の礫少量混、炭化物均質に少量混、ブロック (緑灰色 (5G 5/1)) 含む | 27. 緑灰色 (10G 5/1) 細粒砂混シルト、径0.5~2cm程度の礫少量炭化物混 |
| 8. 灰色 (10Y 4/1) 細粒砂混シルト、炭化物含む、土器片含む | | 28. 緑灰色 (5G 5/1) 粘質土 |
| 9. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト | | 29. 緑灰色 (10G 5/1) シルト混細粒砂、径0.5~1cm程度の礫少量混 |
| 10. 灰色 (5Y 4/1) 粗粒砂混細粒砂 | | 30. オリーブ灰色 (5GY 5/1) シルト混細粒砂 |
| 11. 暗緑灰色 (10GY 4/1) 粘質土 | | 31. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極粗粒砂混粗粒砂 |
| 12. 灰色 (5Y 4/1) 粘質土 | | |
| 13. 暗緑灰色 (10GY 4/1) 細粒砂混シルト、 | | |

第7図 井戸SE11実測図

1. 灰色 (10Y 4/1) 細粒砂 土器片少量混、炭化物ごく少量混
2. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 細粒砂混シルト、炭化物ごく少量混、土器片少量混
3. 灰色 (10Y 5/1) シルト、炭化物ごく少量混
4. 灰色 (10Y 4/1) シルト、炭化物含む
5. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 細粒砂、土器片少量混
6. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト、炭化物多量に含む、土器片混
7. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 細粒砂
8. オリーブ黒色 (10Y 3/1) 中粒砂混細粒砂、径0.5cm程度のブロック(灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)) 混
9. 灰色 (10Y 4/1) 細粒砂混シルト、炭化物少量混
10. 灰色 (10Y 4/1) 細粒砂混シルト、土器混、炭化物少量混
11. 灰色 (7.5Y 6/1) シルト混細粒砂
12. 灰色 (10Y 4/1) シルト混細粒砂、炭化物ごく少量混
13. 灰色 (5Y 5/1) 細粒砂混シルト、炭化物ごく少量混
14. 灰色 (10Y 4/1) 細粒砂混シルト、炭化物含む、土器片混
15. 灰色 (10Y 4/1) シルト
16. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 粘質土
17. 黒色 (2.5GY 2/1) 細粒砂、炭化物多く含む、土器片含む、径2cm程度のブロック(暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1)) 少量混



第8図 土坑S K13・竪穴建物S H02・21実測図

みられ、炭化物の上面や埋土から土師器(第10図31~34)や須恵器の破片が出土した。S H02はS H21の北西辺と南西辺に沿うように重複しており、S H21の規模をやや縮小して建て直されたと考えられる。出土した土師器から、古墳時代後期のものと考えられる。

S D01は、調査区南西端で検出した北西から南東に延びる溝で、幅は1.2~1.5m、深さは約30cm、検出長は約7mである。埋土からは土師器の破片(第10図35)が出土した。北東側に隣接するS H02・21の建物方位と溝の延びる方位がほぼ一致することから、両者は関連する遺構と考えられる。このことや出土した土師器から古墳時代後期の溝と考えられる。

S D05は、S E11やS D06の西側で検出した北東から南西に延びる溝で、北東端は調査区内で終息する。深さは約30cm、検出長は約10mである。溝としての幅は約1.1mであるが、溝の西辺の一部は不定形の土坑状に広がっている。埋土からは須恵器や土師器の破片(第10図36~38)が出土した。出土した須恵器杯G蓋(第10図36)片から飛鳥時代の溝と考えられる。

S D24は、調査区東半で検出した北西から南東に延びる溝で、緩やかに西側に湾曲し、幅は0.5~0.7m、深さは約10cm、検出長は国道24号調査区分も含めて約22mである。東側に隣接するS D35を部分的に切って掘削されている。埋土から須恵器や土師器の破片(第10図39~42)が出土した。出土した須恵器杯G蓋片(第10図39~42)から飛鳥時代の溝と考えられる。

S D35は、西側に隣接するS D24で部分的に切られる北西から南東に延びる溝で、幅は45~65cm、深さは約20cm、検出長は国道24号調査区分も含めて約19.6mである。埋土からは土師器の破片が若干出土したのみで、時期を示すようなものはなかった。S D35は部分的にS D24に切られることからS D24より古く、S D35を掘り直したものがS D24の可能性がある。

S D14は調査区東半で検出した北西から南東に延びる溝で、東側にはS D24とS D35が隣接して並行に走っている。幅は1.6~2.4m、深さは30~50cm、検出長は国道24号調査区分も含めて約26mで、調査区内で検出した溝の中で最も規模の大きな溝である。埋土からは、須恵器(第10図43~59)や土師器(第10図60)、小骨片が出土した。主なものは、須恵器杯Hや杯H蓋(第10図43~46)、須恵器甕(第10図47)、底部外面に墨書のある須恵器杯B(第10図50)、完形の須恵器杯A(第10図52)、須恵器甕(第10図58)などがある。出土した須恵器から、古墳時代末~飛鳥時代初めごろに掘削され、奈良時代中頃まで機能した溝と考えられる。

S E34は、調査区東半の南壁寄りで検出した隅丸形状の遺構で、遺構面で南北は約1.3m、東西は約1.1m、底面で南北は約0.8m、東西は約0.6m、深さは約0.7mである。底面がS E11と同様に旧木津川の堆積層である砂層まで達していることから、井戸と判断した。埋土には炭化物がみられたが、出土遺物はなく、時期はわからない。

S K12は、調査区中央西寄りのS D05とS D06の間で検出した円形土坑で、直径は約1.5m、深さは約40cmである。土師器小片が出土したが、時期はわからない。

S K33は、調査区東半の南壁沿いで検出した方形形状の土坑で、南辺は調査区外となる。東西は約1.3m、南北の検出長は約1.1m、深さは約0.5mである。底面には焼土の堆積が所々にみられた。埋土からは土師器の小片が出土したが、時期はわからない。

S D19は、調査区中央で検出したやや西に振る南北溝で、北端は国道24号調査区内の関西電力株式会社旧送電用鉄塔基礎で削平される。幅は約30cm、深さは約10cm、検出長は国道24号調査区分も含めて約14mである。出土遺物はなく、時期はわからない。

4. 出土遺物

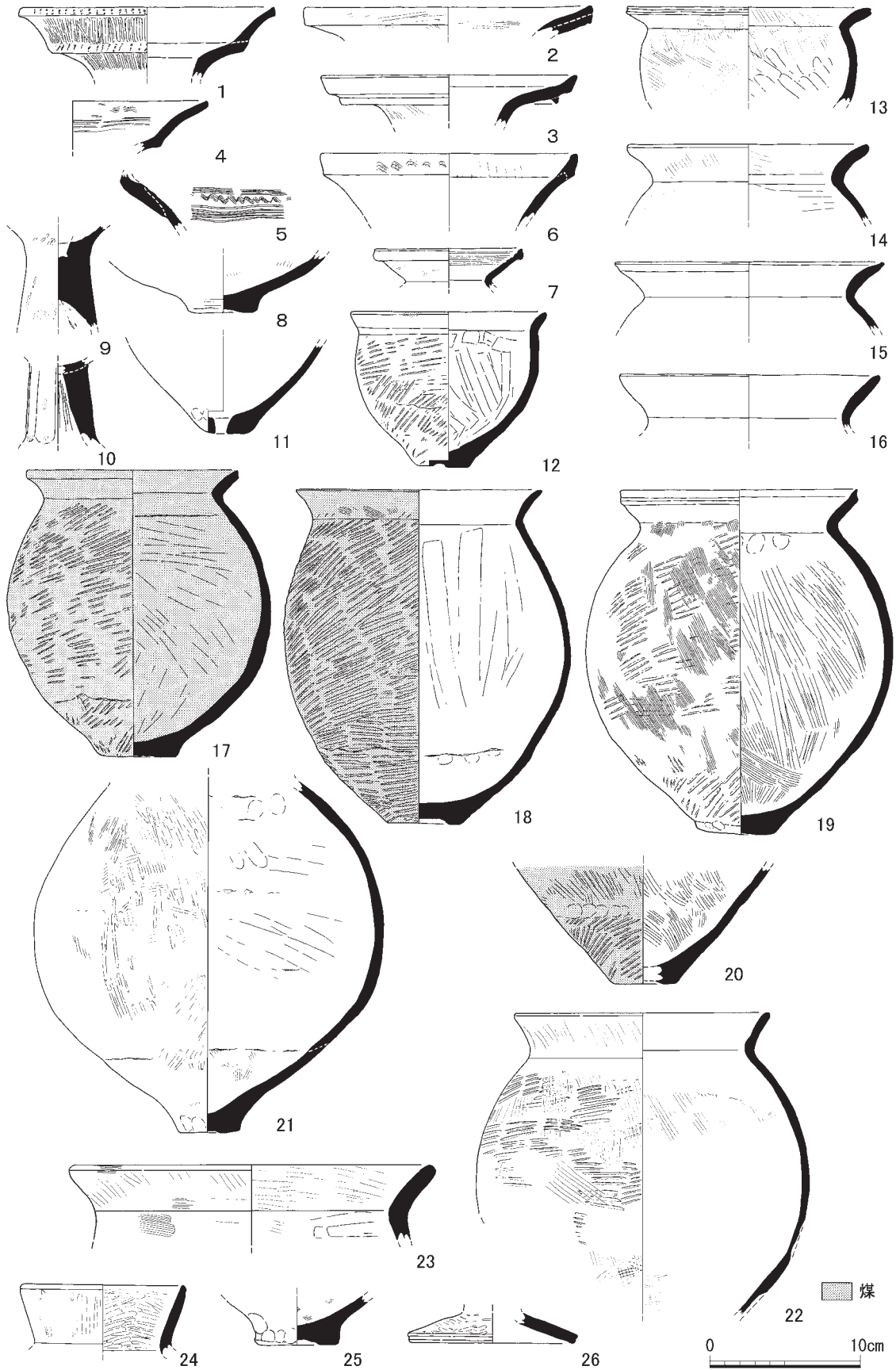
主な出土遺物は、土師器、須恵器、石鏃である。

1～4は刺突文や櫛描き波状文で加飾された二重口縁壺口縁部片である。5は櫛描き波状文で加飾された体部片で、4と色調や焼成が類似することから4の体部片の可能性がある。6は外面に櫛描き波状文で加飾された壺口縁部片である。7は内面に4～5本の沈線が施された小型壺口縁部片である。8は土師器壺の底部、9・10は土師器高坏の脚部片である。11は土師器甑で、底部に内面直径約1.2cm、外面直径約7mmの窮孔がある。12・13は土師器鉢で、13は下半部を欠損する。14～16は土師器甕の口頸部片である。17～19はほぼ完形の弥生第V様式系の土師器甕である。20は土師器甕の体部下半から底部である。21は口頸部を欠損するが、弥生第V様式系の土師器壺である。22は底部を欠損するが、弥生第V様式系の土師器甕である。23は土師器甕の口縁部片、25は土師器壺の底部である。24は土師器直口壺の口縁部片と思われる。26は器形不明の土師器脚端部片である。27は弥生第V様式系の土師器甕の口縁部から体部である。28はS D09の検出時に出土した陶邑編年MT15併行期と考えられる須恵器杯身片で、周辺からの流れ込みと考えられる。29はほぼ完形の土師器小型甕で、30は土師器甕の底部である。31は土師器椀、32は内面にミガキがある土師器杯身片、33は土師器鉢の口縁部片、34は土師器甕の口頸部片である。35は土師器長胴甕の口頸部片ではないかと思われる。36は須恵器杯G蓋である。37は器形不明の底部に接続する台部片である。38は土師器甕の口縁端部片である。39～42は須恵器杯G蓋の口縁部片である。43・44は須恵器杯H蓋片、45・46は須恵器杯H片、47は須恵器甕体部片で、外面に櫛描列点文がある。48は須恵器杯B蓋の扁平な宝珠つまみ付きの天井部片、49は須恵器杯B蓋の口縁端部片である。50・51は須恵器杯Bで、50の底部外面には「十」字状の墨書がある。52～54は須恵器杯Aで、52はほぼ完形である。55は須恵器小型壺の口縁部片、56は須恵器壺の肩部片、57は須恵器平瓶の頸部片、59は須恵器把手付きの体部片である。58は須恵器甕の口縁部から体部片である。60は内面にミガキがある土師器皿の口縁部片である。61はS H02の埋土から出土した石鏃で、周辺からの流れ込みと考えられる。^(注3)長さは2.4cm、最大幅は1.6cm、厚さは0.35cmである。

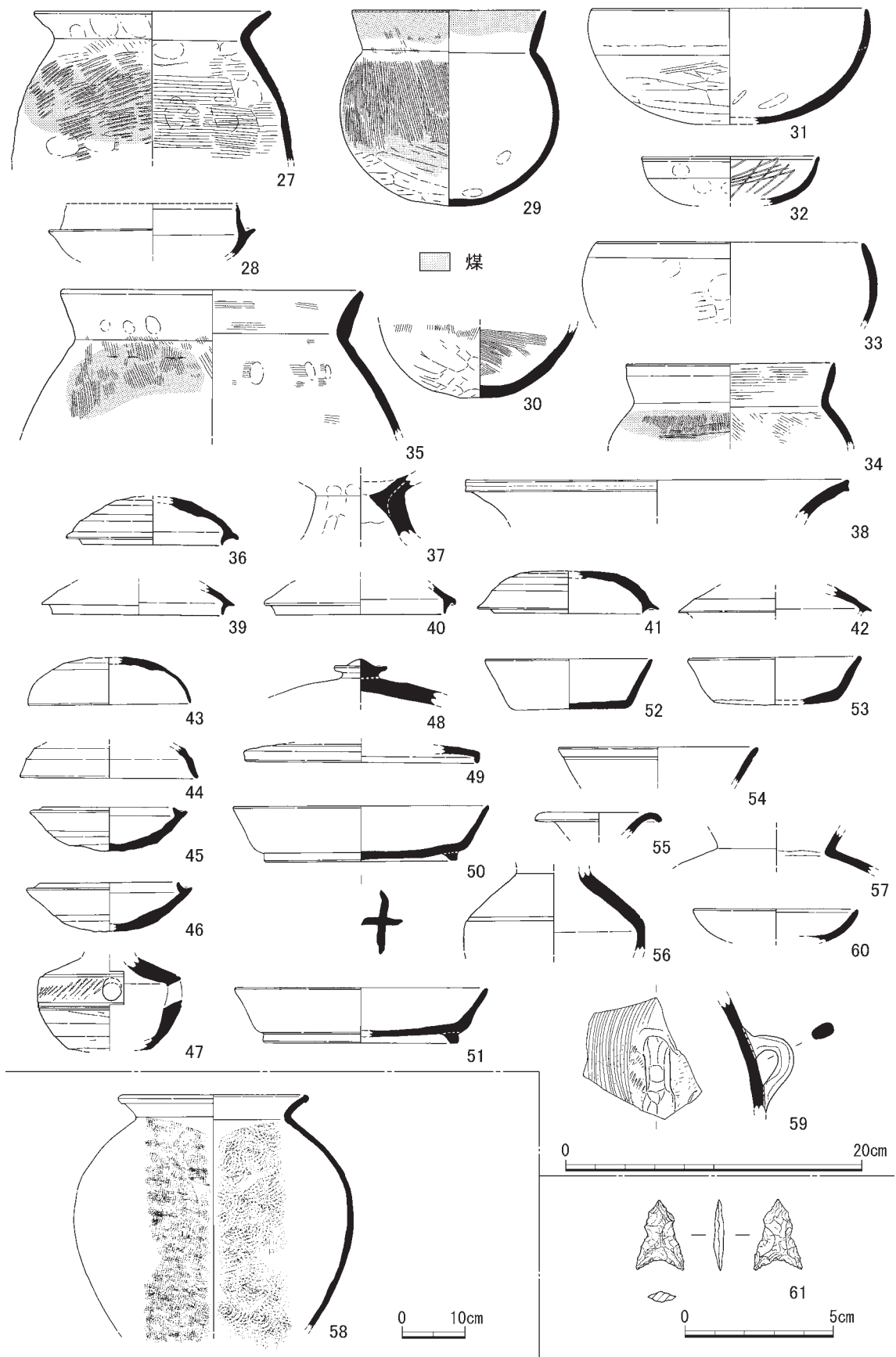
5. 調査の成果

調査区周辺の土地利用は、弥生時代後期後半～末に始まり、古墳時代初めまで継続するが、その後一旦中断する。古墳時代後期から再び始まり、奈良時代まで継続して土地利用が行われていたことが明らかとなった。

弥生時代後期後半～末については、井戸1基(S E11)が検出されたのみで、土地利用の実態はよくわからないが、集落或いは耕作地として利用され始めたかと推察される。



第9図 出土遺物 1



第10図 出土遺物 2

古墳時代初めの溝群は、やや規模の大きな溝(S D06)に複数の小規模な溝(S D07・08・09)が接続して掘削されていた。また、水溜の可能性のある土坑(S K13)が溝(S D06)に接続するように掘削されていた。溝群からの出土遺物もわずかであったことから、溝群や土坑は耕作に伴うものと考えられ、古墳時代初めには耕作地として利用されていたことがうかがわれる。

古墳時代後期には、調査区西端周辺に集落(S H01・21)が営まれる。調査区西端は、調査区内でわずかに高く微高地状となっており、この地形を利用して集落が営まれたと考えられる。

古墳時代末～飛鳥時代には溝(S D05・14・24・35)が掘削されるが、S D14以外は規模が小さく、出土遺物もわずかであったことから耕作のための溝と考えられる。S D14は検出した溝群で最も規模が大きいことから、基幹水路として掘削された可能性がある。一方、S D14からは奈良時代の須恵器や土師器が多く出土している。国道24号調査区ではS D14から西へ約10mの所で、S D14の伸びる方向と建物方位がほぼ一致する奈良時代の掘立柱建物1棟が検出されている。これらのことから、奈良時代には集落内の排水路として利用されていたと考えられる。古墳時代末～飛鳥時代に耕作地として利用され、奈良時代には集落化したと考えられる。

奈良時代以後の遺構は検出されなかった。小樋尻遺跡ではこれまでの調査で多数の島畑が検出されているが、今回の調査区内では島畑は検出されなかった。奈良時代以後は、島畑の造営は行われず、水田としての土地利用が行われていたと考えられる。

調査区の西端、中央、東端で行った重機による断割で、井戸S E11・34で検出した旧木津川の砂の堆積層が調査区の全体に広がっていることを確認した。さらに、この砂層を1m程掘削すると湧水がみられた。調査時期が冬場の渇水期であったことを考慮すると、砂層上面まで掘削されている井戸S E11・34でも十分湧水を確保できていたと推察される。調査区周辺では、1m程の掘削で生活用水や灌漑用水が比較的容易に得られていたと考えられる。

調査区から南西に約300mの地点で実施された城陽市教育委員会による市消防本部庁舎新築に伴う発掘調査では、微高地上に営まれた縄文時代晩期、弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代の集落が確認されている。

今回の調査区は、弥生時代末～古墳時代初めには市消防本部庁舎調査地の集落に伴う耕作地であった可能性が高い。古墳時代後期や奈良時代には、市消防本部庁舎調査地周辺から調査区周辺の微高地上に集落が散在し、居住域として土地利用が行われていたことが明らかとなった。

古墳時代後期～奈良時代には、大谷川扇状地とその周辺丘陵上や、芝山遺跡が所在する丘陵上に集落が継続して営まれており、市域北半部の平野部から丘陵上が広く居住域として土地利用されていたことが明らかとなった。このような広範囲の集落化は、古墳時代後期ごろから人々の流入が始まり、人口が増加したことを示しており、これに伴い耕作地も拡大したと考えられる。人口増加や耕作地の拡大による経済的基盤の拡充は、奈良時代における久世郡衙の設置(正道官衙遺跡)や久世廃寺・平川廃寺の造営の契機となったと考えられる。

今回の調査は、市域の平野部における土地利用の実態を知る上で、貴重な成果となった。

注1 城陽市史編さん委員会編『城陽市史』第1巻(城陽市役所 2002)

注2 歴史的環境の執筆にあたって下記の文献を参照した。

城陽市史編さん委員会編『城陽市史』第1巻(城陽市役所 2002)

城陽市教育委員会2000『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第38集

城陽市教育委員会2003『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第43集

城陽市教育委員会2012『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第64集

城陽市教育委員会2016『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第71集

城陽市教育委員会2017『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第74集

城陽市教育委員会2018『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第76集

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2015「一般国道24号線金尾交差点改良事業関係遺跡 下水主遺跡第2・3次、水主神社東遺跡第3・4次」『京都府遺跡調査報告集』第163冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2017「3.一般国道24号線城陽IC関連寺田地区改良事業関係遺跡 下水主遺跡第6・8次」『京都府遺跡調査報告集』第170冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2018「新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第1・4・6次」『京都府遺跡調査報告書』第173冊

注3 出土遺物の執筆にあたって下記の文献を参照した。

古代の土器研究会1992『古代の土器1 都城の土器集成』

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

付編 小樋尻遺跡における放射性炭素年代測定報告

株式会社古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌さらには土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの測定が可能である(中村,2003)。なお、過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、小樋尻遺跡の発掘調査で出土した遺構の年代に関する情報を得る目的で、放射性炭素年代測定を実施した。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.の協力を得た。

2. 試料と方法

試料は、B12区SK11の7層と最下層、SK13の4層と14層から採取された炭化物計4点である。放射性炭素年代は、以下の手順で実施した。

- 1)メス・ピンセットを使い、試料の付着物を取り除く
- 2)蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄

付表1 測定試料及び処理

試料番号	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定
No.1	B12区 SK11 7層	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	B12区 SK11 最下層	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	B12区 SK13 4層	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.4	B12区 SK13 14層	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。AAA処理における酸処理では塩酸 (HCl) を、アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用いる。

4) 超純水で中性になるまで希釈し、定温乾燥機内で80℃で乾燥

上記前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、エタノールを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。試料の詳細と方法を付表1にまとめた。

3. 結果

加速器質量分析法 (AMS : Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (¹⁴C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。付表2にこれらの結果を示した。

1) δ (デルタ)¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C/¹²C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素 (¹⁴C) 年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差 (±) は1 σ (シグマ) (68.2% 確率) である。¹⁴C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (¹⁴C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プロ

付表2 測定結果

試料 番号	測定No (Beta-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用 年代 (年 BP)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No.1	618865	-27.55	1790 \pm 30	1750 \pm 30	273-349 cal AD (55.5%) 247-264 cal AD (12.7%)	240-384 cal AD (94.6%) 398-401 cal AD (0.8%)
No.2	618866	-31.54	1970 \pm 30	1860 \pm 30	155-193 cal AD (33.5%) 198-225 cal AD (24.0%) 130-142 cal AD (10.7%)	118-244 cal AD (94.4%) 86-93 cal AD (1.0%)
No.3	618867	-28.71	1860 \pm 30	1800 \pm 30	288-322 cal AD (34.8%) 222-254 cal AD (33.4%)	275-347 cal AD (48.1%) 202-264 cal AD (45.3%) 166-188 cal AD (2.0%)
No.4	618868	-27.31	1830 \pm 30	1790 \pm 30	286-325 cal AD (45.2%) 235-255 cal AD (23.0%)	271-351 cal AD (57.6%) 206-266 cal AD (37.8%)

BP : Before Physics (Present), AD : 紀元

グラムはBetaCal 4.20である。

暦年代(較正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1 σ (68.2%確率)と2 σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

小樋尻遺跡の発掘調査で出土した遺構の年代を検討する目的で、加速器分析法により放射性炭素年代測定を行った。その結果、B12区のSK11の7層で出土した炭化物は、補正 ^{14}C 年代が1750 \pm 30年BP、2 σ の暦年代は確率の高い順に240~384 cal AD(94.6%)、398~401 cal AD(0.8%)同じく最下層で出土した炭化物は、補正 ^{14}C 年代が1860 \pm 30年BP、2 σ の暦年代は118~244 cal AD(94.4%)、86~93 cal AD(1.0%)、B12区のSK13の4層で出土した炭化物は、補正 ^{14}C 年代が1800 \pm 30年BP、2 σ の暦年代は275~347 cal AD(48.1%)、202~264 cal AD(45.3%)、166~188 cal AD(2.0%)、同じく14層で出土した炭化物は、補正 ^{14}C 年代が1790 \pm 30年BP、2 σ の暦年代は271~351 cal AD(57.6%)、206~266 cal AD(37.8%)であった。

参考文献

- 中村俊夫2003「放射性炭素年代測定法と暦年代較正」『環境考古学マニュアル』同成社, pp.301-322.
 Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), pp337-360.
 Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), pp725-757.
 Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363.

付表3 出土遺物観察表

〈凡例〉・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示 ・残存率は基本的に口径で表記 ・該当なし：－ ・計測不可：/
 ・（ ）；復元(底・口)径・残存高 ・口)口縁部、(頸)頸部、(底)底部・高台、(脚)脚部、(鏝)鏝径、(全)全体

番号	種類	器種	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色 調	調 整	胎 土	備 考
1	土師器	二重口 緑壺	SE11 (上層)	(16.7)	(4.7)	-	2/12	外:にぶい黄橙 色(10YR7/4) 内:灰白色 (10YR7/1)	外:ミガキ 内:磨減	密(φ1~2mm大の白色・半透 明・黒色砂粒・雲母含む)	外面に二重の 刺突文あり
2	土師器	二重口 緑壺	SE11 (上層)	(19.0)	(1.9)	-	2/12	灰白色 (10YR8/2)	外:ハケ 内:ナデ	密(φ1~3mm大の白色・半透 明・赤褐色・黒色・透明砂粒含む)	口縁端部内面 に櫛描き波状 文
3	土師器	二重口 緑壺	SE11 (上層)	(16.9)	(3.3)	-	1/12	灰白色 (10YR8/2)	外:ナデ・ハケ、 内:ナデ	密(φ1~3mm大の白色・半透 明・褐色・灰色砂粒含む)	口縁端部内面 に櫛描き波状 文
4	土師器	二重口 緑壺	SE11 (上層)	(約 19)	(3.4)	-	2/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	外:ミガキ 内:ナデ	密(φ1~3mm大の白色・透明・ 半透明・黒色・褐色砂粒含む)	内面に櫛描き 波状文と凹線
5	土師器	壺	SE11 (上層)	-	(3.7)	-	-	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	内:ナデ	密(φ1~2mm大の白色・透明・ 半透明・黒色砂粒含む)	外面に櫛描き 波状文と凹線
6	土師器	壺	SE11 (上層)	(16.8)	(4.9)	-	1/12	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1~3mm大の白色・半透 明・黒褐色砂粒含む)	外面に櫛描き 波状文
7	土師器	小型壺	SE11 (上層)	(9.6)	(2.65)	-	2/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ2~3mm大の白色・半透 明・褐色砂粒含む)	
8	土師器	壺	SE11 (上層)	-	(3.8)	4.6	-	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	外:ナデ、内:ナ デ・一部ハケ	密(φ1~5mm大の白色・半透 明・灰色・褐色砂粒含む)	底部のみ
9	土師器	高杯	SE11 (上層)	-	(6.4)	-	-	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	外:ミガキ	密(φ1~3mm大の白色・半透 明砂粒含む)	脚部のみ
10	土師器	高杯	SE11 (上層)	-	(5.3)	-	-	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	外:ハケ	粗(φ3mm以下の白色・灰色・ 赤色・褐色砂粒含む)	脚部のみ
11	土師器	甌	SE11 (上層)	-	(6.5)	2.5	-	外:にぶい黄橙 色(10YR6/3) 内:灰黄褐色 (10YR5/2)	外:磨減 内:磨減	密(φ1~3mm大の白色・透明・ 半透明・灰色・淡赤色砂粒含む)	
12	土師器	鉢	SE11 (上層)	12.8	10.4	-	6/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	外:タタキ 内:ナデ	密(φ1~5mm大の白色・半透 明・褐色・黒色砂粒含む)	外:口縁部煤 付着
13	土師器	鉢	SE11 (上層)	(16.0)	(6.3)	-	6/12	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	外:ハケ、内:ハ ケ・ユビナデ	やや粗(φ3~5mm大の白色・ 暗灰色・赤褐色・半透明砂粒含む)	体部下半欠損
14	土師器	甕	SE11 (上層)	(15.8)	(5.0)	-	1/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	外:ナデ・ハケ、 内:ハケ	粗(φ2mm以下の白色・褐色・ 茶色・石英砂粒含む)	
15	土師器	甕	SE11 (上層)	(17.8)	(4.9)	-	1/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	外:ナデ 内:ナデ	やや粗(φ2mm以下の白色・灰 色・褐色・半透明砂粒含む)	
16	土師器	甕	SE11 (上層)	(17.2)	(3.7)	-	1/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	外:ナデ 内:ナデ	やや粗(φ1~4mm以下の白色・ 灰色・褐色・半透明砂粒含む)	
17	土師器	甕	SE11 (下層)	13.8	19.1	-	12/12	外:褐灰色 (10YR6/1) 内:にぶい黄橙 色(10YR7/3)	外:タタキ後ナ デ 内:ナデ	密(φ1~10mm大の白色・半 透明砂粒含む)	内外面煤付着
18	土師器	甕	SE11 (下層)	16.1	22.3	-	10/12	外:にぶい橙 色(7.5YR7/4) 内:灰白色 (10YR8/2)	外:タタキ 内:ナデ	密(φ1~5mm大の白色・半透 明・石英・褐色砂粒含む)	外:煤付着 内:焦付き痕
19	土師器	甕	SE11 (下層)	15.6	23.0	-	10/12	外:にぶい橙 色(7.5YR7/4) 内:浅黄褐色 (7.5YR8/3)	外:タタキ後ハ ケ 内:ハケ	密(φ1~3mm大の白色・半透 明・灰色・赤色・黒色砂粒含む)	外:煤付着 内:焦付き痕
20	土師器	甕	SE11 (下層)	-	(7.8)	(4.0)	-	外:にぶい橙 色(5YR7/4) 内:灰黄褐色 (10YR6/2)	外:タタキ 内:ハケ	密(φ1~2mm大の白色・褐色・ 半透明砂粒・雲母含む)	底部のみ
21	土師器	壺	SE11 (下層)	-	(23.55)	4.1	-	浅黄色 (2.5Y7/3)	外:ミガキ 内:ナデ	密(φ1~4mm大の白色・半透 明・赤褐色・黒色砂粒含む)	口頸部欠損
22	土師器	甕	SK13	(16.6)	(13.4)	-	4/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	外:タタキ後一 部 ハケ 内:ハケ	やや粗(φ2~3mm大の白色・ 褐色・灰色・半透明砂粒含む)	底部欠損
23	土師器	甕	SK13	(23.6)	(5.5)	-	2/12	黒色(N2/0)	外:ハケ後ナ デ・ ハケ、内:ナ デ・ ナデ	やや粗(φ2~3mm大の白色・ 褐色・半透明砂粒含む)	
24	土師器	壺	SK13	(10.6)	(4.6)	-	2/12	灰黄色 (2.5Y7/2)	外:ミガキ 内:ミガキ	密(φ1~3mm大の白色・半透 明・灰色・赤色砂粒含む)	
25	土師器	壺	SK13	-	(3.35)	5.7	-	外:にぶい黄橙 色(10YR7/2) 内:灰黄褐色 (10YR6/2)	外:ナデ 内:ハケ	密(φ1~2mm大の白色・黒色・ 淡赤色・褐色・半透明砂粒含む)	底部のみ
26	土師器	-	SK13	-	(2.0)	(10.6)	4/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	外:ケズリ後ミ ガ キ 内:ナデ	やや粗(φ1~4mm大の白色・ 暗灰色・褐色・半透明砂粒含む)	脚部のみ

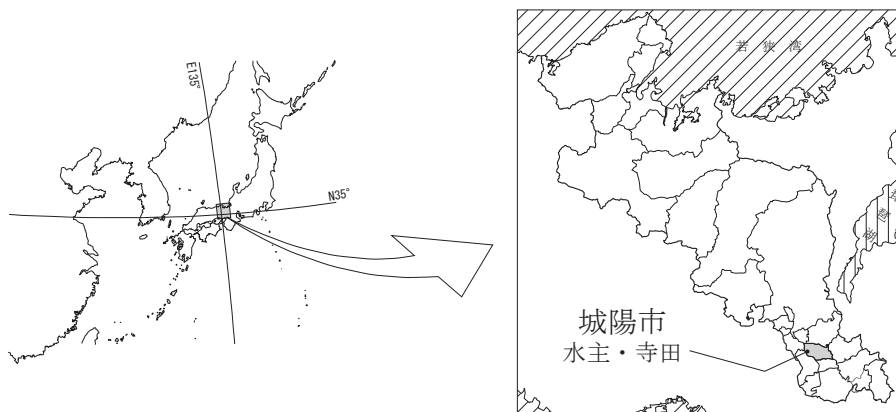
番号	種類	器種	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色 調	調 整	胎 土	備 考
27	土師器	甕	SD09	(15.6)	(10.2)	-	2/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	外:タタキ 内:ハケ	粗(φ3mm以下・5~7mm大 の白色・灰色・褐色・茶色・半 透明砂粒含む)	
28	須恵器	杯身	SD09	(14.0)	(3.6)	-	1/12	灰色(N5/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm以下の白色砂粒含む)	
29	土師器	小型甕	SH02	13.0	13.25	-	10/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	外:ナデ・ハケ・ ケズリ、内:摩滅	密(φ1mm大の白色・褐色砂粒 含む)	
30	土師器	甕	SH02	-	(4.7)	-	-	外:にぶい黄橙 色(10YR7/2)	外:ハケ・ケズリ、 内:ハケ	密(φ1~4mm大の白色・半透 明・黒色砂粒含む)	底部のみ
31	土師器	椀	SH21	(19.6)	7.8	-	2/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	外:ナデ・ケズリ、 内:ナデ	密(φ1~3mm大の白色・半透 明・黒色砂粒含む)	内外面に煤付 着
32	土師器	杯身	SH21	(11.8)	(3.3)	-	2/12	灰黄色 (2.5Y7/2)	外:ナデ 内:ミガキ	密	
33	土師器	鉢	SH21	(17.8)	(5.55)	-	1/12	橙色 (7.5YR6/6)	外:ナデ・ケズリ 内:ナデ	密(φ1.5mm以下の白色・灰色・ 茶色砂粒含む)	
34	土師器	甕	SH21	(13.9)	(5.4)	-	2/12	外:灰褐色 (7.5YR5/2) 内:にぶい黄橙 色(10YR7/3)	外:ナデ・ハケ 内:ハケ	やや粗(φ2mm以下の白色・黒 色・茶色砂粒含む)	
35	土師器	甕	SD01	(20.0)	(9.85)	-	4/12	外:にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内:褐灰色 (7.5YR5/1)	外:ナデ・ハケ 内:ナデ・ハケ	密(φ1~2mm大の白色・半透明・ 灰色・褐色・透明・赤色砂粒含む)	外面煤付着
36	須恵器	杯G蓋	SD05	(9.4)	(3.2)	-	1/12	灰白色(N7/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm大の白色・黒色砂粒 含む)	
37	土師器	-	SD05	-	(4.1)	-	-	にぶい橙色 (2.5YR6/4)	外:ナデ	粗(φ2mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒含む)	
38	土師器	甕	SD05	(25.7)	(2.75)	-	1/12	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	外:ナデ 内:ナデ	粗(φ2mm以下の白色・褐色・ 茶色砂粒含む)	
39	須恵器	杯G蓋	SD24	(11.4)	(2.1)	-	1/12	灰色(N6/1)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm以下の白色砂粒含む)	
40	須恵器	杯G蓋	SD24	(11.3)	(2.1)	-	1/12	灰白色(N7/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm以下の白色・灰色砂 粒含む)	
41	須恵器	杯G蓋	SD24	(10.0)	(2.8)	-	2/12	灰色(N5/0)	外:ナデ 内:ナデ	やや粗(φ1~2mm大の白色・ 黒色砂粒含む)	
42	須恵器	杯G蓋	SD24	(13.0)	(2.3)	-	1/12	灰色(N6/1)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm以下の白色砂粒含む)	
43	須恵器	杯H蓋	SD14	(10.8)	(3.15)	-	3/12	外:灰色(N6/0) 内:灰色(N7/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm大の白色砂粒含む)	
44	須恵器	杯H蓋	SD14	(11.8)	(2.2)	-	1/12	灰色(N6/0)	外:ナデ 内:ナデ	密	
45	須恵器	杯H	SD14	8.7	3.0	-	5/12	灰白色 (10Y7/1)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1~2mm大の白色砂粒含 む)	
46	須恵器	杯H	SD14	(9.3)	3.3	-	4/12	灰白色(N7/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm以下の白色・灰色砂 粒含む)	
47	須恵器	甕	SD14	-	(6.2)	-	-	灰白色(N7/0)	外:ケズリ 内:ナデ	密	体部片
48	須恵器	杯B蓋	SD14	-	(3.1)	-	-	灰色(N6/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm以下の白色砂粒含む)	つまみ付きの 天井部破片
49	須恵器	杯B蓋	SD14	(15.6)	(1.2)	-	1/12	青灰色 (5PB6/1)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ2mm以下の白色砂粒含む)	
50	須恵器	杯B	SD14	(17.0)	3.75	-	1/12	灰白色(N7/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ4mm大の白色・黒色砂粒 含む)	底部外面に墨 書あり
51	須恵器	杯B	SD14	(17.0)	3.8	-	2/12	灰色(N6/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ2~5mm大の白色・暗灰 色砂粒含む)	
52	須恵器	杯A	SD14	11.2	3.45	-	9/12	灰白色(N8/0)	外:ナデ・ケズリ、 内:ナデ	密(φ1~2mm大の白色・灰色 砂粒含む)	
53	須恵器	杯A	SD14	(11.6)	3.25	-	3/12	灰白色(N7/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm大の白色・灰色砂粒 含む)	
54	須恵器	杯A	SD14	(13.4)	(2.5)	-	2/12	灰白色 (7.5Y7/1)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1~2mm大の白色・灰色 砂粒含む)	
55	須恵器	小型壺	SD14	(7.0)	(1.5)	-	2/12	灰色(N5/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm以下の白色砂粒含む)	口縁端部片
56	須恵器	壺	SD14	-	(5.5)	-	-	灰白色(N7/0)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ1mm大の白色・黒色砂粒 含む)	肩部片
57	須恵器	平瓶	SD14	-	(3.0)	-	-	青灰色 (5PB5/1)	外:ナデ 内:ナデ	密(φ3mm以下の白色砂粒含む)	頸部片
58	須恵器	甕	SD14	(24.8)	(31.9)	-	1/12	灰色(N6/0)	外:タタキ後カキ 目後ナデ、内:タ タキ	密(φ3mm以下の白色砂粒含む)	口縁部から体 部片
59	須恵器	-	SD14	-	-	-	-	青灰色 (5PB5/1)	外:タタキ後カキ 目、内:ナデ	密(φ2mm以下の白色砂粒含む)	把手付きの体 部片
60	土師器	皿	SD14	(11.0)	(2.2)	-	1/12	橙色(5YR6/6)	外:ナデ 内:ナデ・ミガキ	密(極細かい白色砂粒・雲母含む)	

新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第10～12次発掘調査報告

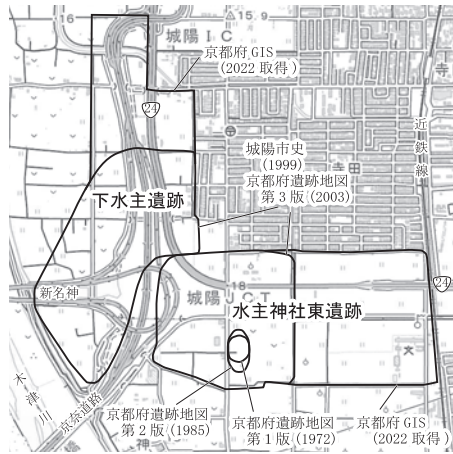
1. はじめに

新名神高速道路は名古屋市を起点とし、終点の神戸市までを結ぶ全長約174kmの高速自動車国道で、京都府内では宇治田原町・城陽市・京田辺市・八幡市を通過する。昭和62年に法定予定路線に位置付けられ、府内関係では平成3年に亀山－城陽間、平成9年には城陽－八幡間のそれぞれ整備計画が決定している。京都府埋蔵文化財調査研究センター(以下「当センター」とする)では、西日本高速道路株式会社からの依頼を受けて、新名神高速道路整備事業および関連の整備事業の発掘調査を平成20年度から継続して実施している。当初は木津川左岸の八幡市・京田辺市域において事業着手し、美濃山廃寺、美濃山廃寺下層遺跡、御毛通古墳群、荒坂遺跡、女谷・荒坂横穴群、松井横穴群、向山遺跡、向谷遺跡、西村遺跡、門田遺跡で発掘調査を実施し、調査報告書を刊行済みである。その後、調査は木津川右岸の城陽市域に主軸を移し、下水主遺跡、水主神社東遺跡、小樋尻遺跡、芝山遺跡、芝山古墳群の発掘調査と調査報告書の刊行を順次行っているところである。この間、宇治田原町域での保安塚、長井野塚、岨田遺跡、砂川古墳、奥城土遺跡、禪定寺城跡での発掘調査と調査報告書の刊行も行っている。

今回報告する下水主遺跡は、城陽市に位置している。市の中心市街地は、古くから京都と奈良を結ぶ奈良街道や、これに平行する旧国道24号(現府道69号)周辺などの宇治丘陵沿いの場所にある。当遺跡はそこから約2.5km西に離れた木津川右岸に位置し、かつては水田や畑が広がるのどかな風景であった。しかし旧国道の渋滞解消を目的として、昭和48年に国道24号大久保バイパスが当遺跡付近に開通して以来、国道沿いに商業店舗の出店が進んだ。同時期に住宅域が東から拡大して来たことで、現在ではバイパス道路を挟んで農地と住宅地が混在する景観となっている。昭和63年には京奈和自動車道(京奈道路)終点の城陽ICが整備され、平成29年には新名神高速道路の城陽－八幡京田辺間が先行開通したことで、当遺跡周辺は府内道路網の要衝となりつつある。



第1図 城陽市の位置



第2図 遺跡把握の変遷

下水主遺跡の認識は比較的新しく、京都府が初めて刊行した遺跡地図第1版(1972年)や第2版(1985年)には登録されていない。^(注1) 行政的に認識されるのは上記の整備計画決定以降であり、^(注2) 1990年代後半以降は散布地として登録されている。^(注3) 発掘調査は平成24年度の第1次調査以来、第9次まで実施されているが、これらもすべて新名神高速道路整備事業と関連整備事業に伴うものである。発掘調査が進展する過程で遺跡範囲の広がり^(注4)が判明しつつあり、現在公開されている京都府GISでは南北約1.2km、東西約0.6kmの範囲が遺跡に指定されている。本書で報告

する下水主遺跡第10～12次調査は新名神高速道路整備事業(大津～城陽)に伴う発掘調査で、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて令和元年度～令和3度にかけて実施した。現地調査にあたっては京都府教育委員会、城陽市教育委員会からご指導・ご協力を頂いた。

なお調査にかかる経費は西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が全額負担した。本文は現地調査を担当した調査課の加藤雅士が執筆した。

〔調査体制等〕

調査責任者	調査課長	小池寛
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉(第12次調査)
	調査課調査第2係長	高野陽子(第10次調査)
	同 調査第1係長	村田和弘(第11次調査)
	同 総括主査(副主査)	石井清司(第10・11次調査)
	同 主任	加藤雅士(第10～12次調査)
調査場所	京都府城陽市水主大將軍・倉貝、寺田金尾	
現地調査期間	令和2年1月30日～令和2年2月27日(第10次調査)	
	令和2年5月28日～令和2年12月17日(第11次調査)	
	令和3年4月26日～令和3年9月21日(第12次調査)	
調査面積	712㎡(第10次調査)、1,050㎡(第11次調査)、650㎡(第12次調査)	

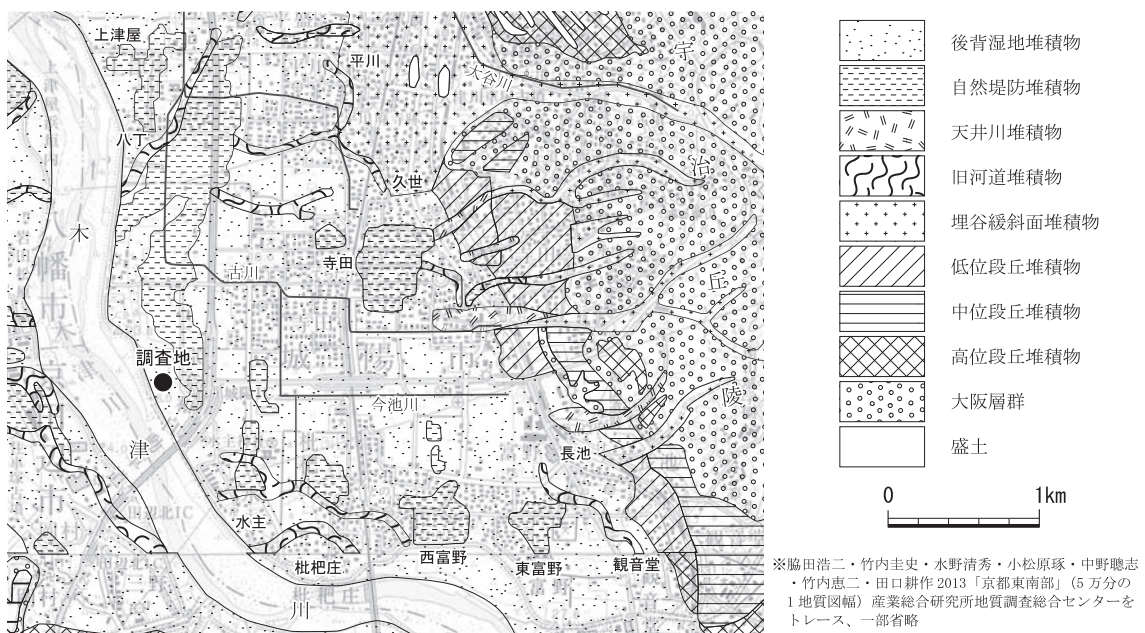
〔整理作業体制〕

整理作業責任者	調査課長	小池寛
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉
	同 主任	加藤雅士
整理作業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日	

2. 遺跡の環境

1) 地理的環境

城陽市の東半部には宇治丘陵が広がっており、西端部には木津川が北流して八幡市・京田辺市との境界になっている。木津川は城陽市富野付近において西に屈曲するが、この屈曲部以南では天井川化した支流が東西方向から木津川に合流するのに対し、屈曲部以北では支流も北流しており、南山城地域の地理的分岐点のひとつとなっている。^(注5) 宇治丘陵と木津川の間には沖積平野が広がっており丘陵側から順に、段丘と扇状地、氾濫原、自然堤防が展開している。寺田の東側にある低位段丘面から大谷川の扇状地にかけては、古くから古墳・寺院などが作られており、現在でも中心市街地となっている。平野部は基本的に北に傾斜している。陸地測量部による明治41(1908)年測図の2万分1地形図では、東富野に標高17.5m、八丁に標高15mの等高線がそれぞれある。水平距離4.16kmで比高が2.5m(0.6%)となっており、非常に緩い傾斜である。この特徴は歴史的な用水体系にも影響を及ぼしているようであり、人工的に流路が付けられた古川や今池川はいずれも宇治丘陵を水源とする。近世絵図で確認できる木津川からの用水は、今池川に南から合流するものに限られており、川から用水を得る桂川流域とは大きく異なっている(「山城国桂川用水差図案」『東寺百合文書』)。沖積平野には現地表面の地質分類で「自然堤防」とされる微高地があり、^(注7) この上に寺田、水主、枇杷庄、富野といった古くからの集落が展開している。国道24号大久保バイパス以西にある今回の調査地付近にも、南北方向に大規模な「自然堤防」が広がっているが、これは木津川破堤時の堆積地形(破堤ローブ)であることが明らかになっている。^(注8) 木津川左岸の魚田遺跡で検出された破堤ローブは近世以降の比較的新しいものであると確認されている。^(注9) 調査地周辺の破堤ローブには古くからの集落が存在しておらず、魚田遺跡と同じく比較的新しく形成されたものと考えられる。よって木津川と破堤ローブの間に挟まれる今回の調査地付近は、本来の自然堤防であった可能性がある。



第3図 周辺地質分布図

2) 周辺遺跡

旧石器時代 旧石器時代の遺物は、芝ヶ原遺跡でナイフ形石器と舟底形石器が出土している。

縄文時代 縄文時代の遺構は横道遺跡で前期後半の深鉢を納めた土坑が検出されている。森山遺跡では後期中葉の竪穴建物や配石遺構が検出され国史跡となっている。これらは扇状地や丘陵上の遺跡であるが、近年では沖積平野での報告例が増えており、現在整理中である水主神社東遺跡第12次調査では縄文時代後期末～晩期初頭の木組遺構が検出されている。また小樋尻遺跡で晩期後半の竪穴建物が検出されているほか、下水主遺跡第6次調査でも晩期後半の自然流路が検出されている。

弥生時代 森山遺跡で中期後半の甕棺と後期後半の竪穴建物が検出されている。また下水主遺跡でも後期後半の竪穴建物が検出されているほか、自然流路を護岸・再掘削等しながら利用していた状況が調査されている。塚本東遺跡では大量の庄内式土器が出土しており集落の存在が想定されている。

古墳時代 集落は前期の竪穴建物が芝山遺跡、小樋尻遺跡で見ついている。中期では室木遺跡で竪穴建物や土坑が検出されているほか、滑石性白玉が大量に出土したことで玉造りが想定されている。後期では芝ヶ原遺跡、正道遺跡、芝山遺跡、室木遺跡、小樋尻遺跡で竪穴建物が検出されている。なかでも芝ヶ原遺跡では6世紀後半以降の竪穴建物が100棟以上検出され、7世紀にかけて掘立柱建物へと転換する様子が確認されている。古墳そのものは、芝ヶ原古墳で古墳時代最初期の前方後方墳が調査され国史跡となっており、出土品は重要文化財になっている。久津川古墳群は府内最大の古墳群で国史跡となっている。前期～後期の古墳群が約150基あり、中期に最盛期を迎える。久津川車塚、丸塚古墳、芭蕉塚古墳、久世小学校古墳(芝ヶ原9号墳)も国史跡となっており、なかでも中期前半の久津川車塚は山城地域最大の前方後円墳で長持形石棺・銅鏡は国の重要文化財となっている。

律令期 7世紀に創建された久世廃寺は中心施設である塔・金堂・講堂の基壇が良好に残存していることが確認されている。正道官衙遺跡では7～8世紀間の3期にわたる官衙遺構が検出され、久世郡の郡衙跡に比定されている。平川廃寺は8世紀中頃の創建で中心施設である塔・金堂の基壇が検出されている。また回廊・築地なども検出され広い寺域が確認されている。これら3遺跡は国史跡となっている。芝山遺跡では飛鳥時代の竪穴建物や官衙風建物等の奈良時代の掘立柱建物が多数検出されている。沖積平野にある小樋尻遺跡でも奈良時代の掘立柱建物跡が検出されている。

中近世 水主城は『大乘院寺社雑記事』に「御厨子城」の名前がみえる中世城郭で、応仁・文明の乱で畠山義就型に攻め落とされている。近傍には枇杷庄城跡、外野城跡があり木津川の渡河点としての重要性が伺われる。寺田環濠集落の形成は同時期頃と考えられており、近世には人口2000人の大村落となっている^(註10)。新名神関連の発掘調査で下水主遺跡や水主神社東遺跡、小樋尻遺跡での発掘調査が進み、鳥畑が多数検出されている。これまでの報告では、鳥畑の構築は12～13世紀から始まると評価されている。

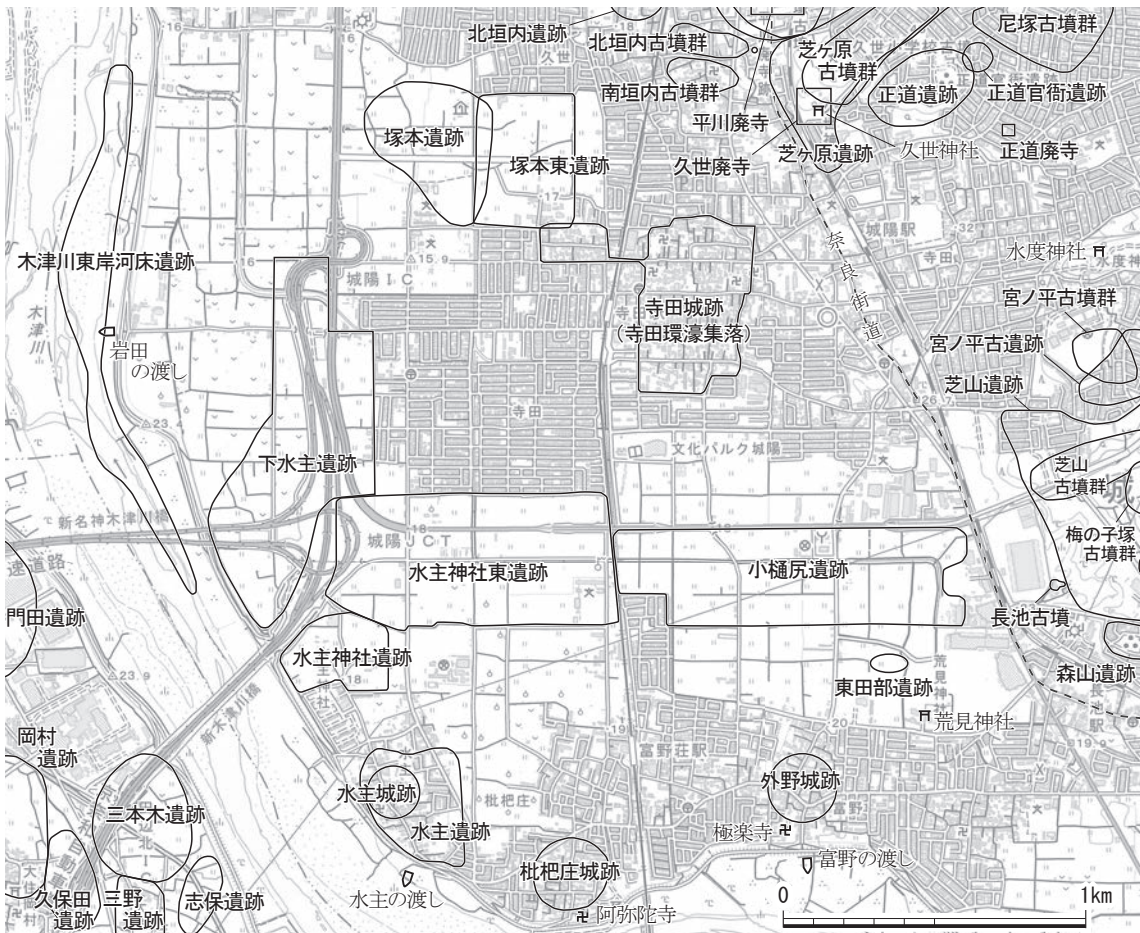
3) 歴史的環境

文献資料 遺跡が所在する水主、寺田についての記事では、『日本書紀』天智天皇7(669)年2月23日条の「水主皇女」がある。これを産んだのは「栗隈首徳萬女」で「水主」の地名と栗隈氏に繋がりが想定され、『新撰姓氏録』では「水主直」がみえ、やはり在地の氏族の存在が伺える。

条理と交通 「天平十五年弘福寺田数町」で久世郡の条理地名が見える。8世紀には条理地割が施行されていたとみられ、中世の島畑もこれに規制される形で作られていることが明らかになっている。古代の北陸道や東山道が丘陵側を通過していたと想定される一方、木津川の水運でも渡し場が各所にあり、近世では上津屋、岩田、水主、富野の各渡しが知られている。

領地と行政 『和名類聚抄』に久世郡の郷名に「水主」が見える。水主郷は鎌倉時代初期に加茂別雷神社領となり、近世には幕府領となる。寺田は室町時代に元興寺領や相国寺領となり、近世には幕府領と仙洞御領に分けられている。その後、水主村と寺田村は明治22(1889)年の町村制により合併して寺田村となる。戦後は昭和26(1951)年に城陽町、昭和47年に城陽市へと移行する。

文化財 久世神社の本殿は室町中期の建立と考えられており、水度神社の本殿も文安5(1448)年の棟札を有する。『延喜式』にみえる荒見神社は慶長9(1604)年に再建された本殿である。また仏像では、快慶が関わった鎌倉時代作の極楽寺阿弥陀如来立像、9世紀の制作と考えられている阿弥陀寺薬師如来立像がある。これらは全て国指定重要文化財である。



第4図 周辺遺跡と歴史的環境

3. 調査の報告の方法

1) 既往の調査

本書報告の下水主遺跡の発掘調査は第10～12次である。平成24年度に実施した第1次調査以来、年度・調査原因・調査地区のまとまり別に調査次数が管理されている。このうち第5・7次調査は、京都府教育委員会による遺跡範囲確認を主目的とした小規模な調査である。第2・3次調査は西日本高速道路株式会社が費用負担者となったインターチェンジ整備に伴う国道24号金尾交差点改良事業である。その他は新名神高速道路整備事業である。第5・7次を除いて、当センターが発掘調査を実施している。当センターの発掘調査ではアルファベットと数字の組み合わせで地区名を管理している。報告書については全て刊行済みであり、平成24年度実施の第1次調査は『京都府遺跡調査報告集』第167冊(以下『第〇〇冊』とする)において報告している。続く第2・3次調査は『第163冊』、平成25年度の第4次調査は『第167冊』と『第168冊』、平成26年度の第6次調査は『第173冊』、平成27年度の第8次調査は『第170冊』、同第9次調査は『第174冊』で報告しており、これまで当センターで刊行した報告書は合計6冊となる。

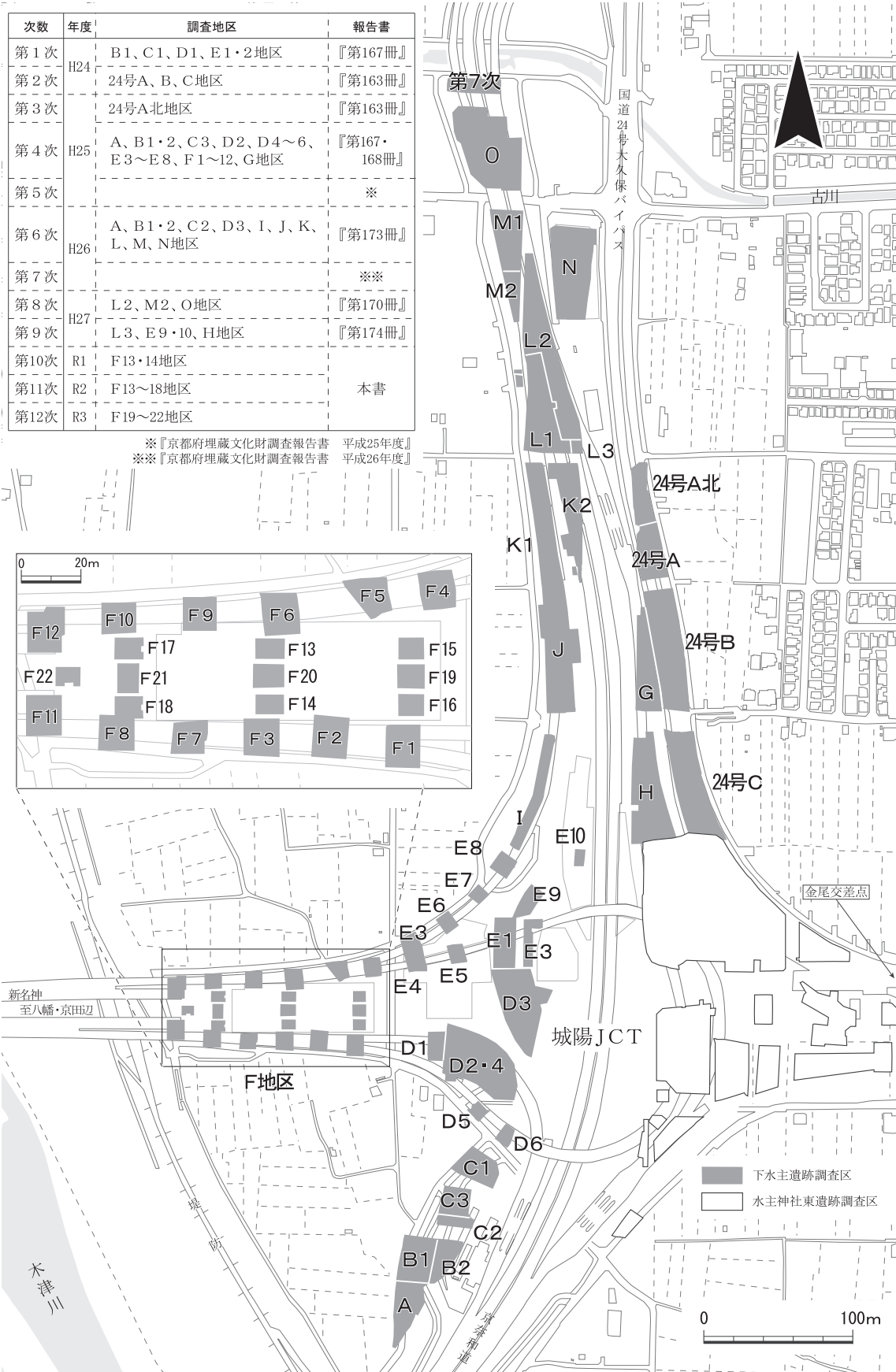
2) 調査場所

今回の調査対象地は城陽 I C / J C T 西側の木津川右岸堤防に接した場所にある。平成25年度に当センターが実施した第4次調査において、F地区としてジャンクション道路部分(F1～F12区)の発掘調査を実施している。第4次調査終了後、東西約195m、南北約95mの範囲が高速道路用地として、周辺の地盤よりも約3m高く盛土で嵩上げされていて、中央部には深さ約2mの調整池が設けられている。今次発掘調査時点では、京田辺八幡 I C / J C T から延びてくる新名神の本線道路は調査対象地の西端部上空で途切れており、調査対象地の北・南辺には高架のジャンクション道路が整備されている。今回の発掘調査地は、大津方面へと続く新名神本線の橋脚部分にあたる。当初計画では東西3か所に並ぶ橋脚予定地において、南北1本ずつの橋脚建設が計画されていた。これは4車線の本線道路を前提としたものであったが、発掘調査事業実施中の令和2年3月に国土交通省から6車線化の事業許可が下ったため、橋脚の設計変更と追加の発掘調査が必要となった。このため最終的に調整池内で2か所、盛土上面で2か所の計4か所の橋脚予定地が計画され、合計10か所(F13～F22区)の調査区で発掘調査を実施した。

3) 調査工程

調査工程は京都府教育委員会との協議の結果、以下の通りになった。調査対象地は厚く盛土がなされているため、地盤から遺構面までは約2.4～5mもの深さになる。これを露天掘りすると安全確保と排土整備に多大な労力を費やすことになる。この問題を解消するため、高速道路本体工事側で鋼矢板の打設、矢板内の土砂除去、腹起こし・切り梁設置等の土留め工事を行った後、土留め施設内で当センター側が発掘調査を行うことになった。

第4次調査の発掘成果から、F地区では標高14m前後の基盤層上に弥生時代～平安時代の遺構が残されていることが判明している。新名神関係の一連の調査では鳥畑が現代まで連続として作られる状況が判明しているが、調査事例の蓄積を受けて面的調査の対象は最初期の鳥畑のみとし、



第5図 下水主遺跡調査区配置図

それ以降の島畑は断面観察とする方針が京都府教育委員会から示されている。このため、本体工事側が行う矢板内の土砂除去にあたっては、盛土に加えて旧表土層下の堆積土も同時に掘削し、基盤層の直上まで実施することになった。実際に基盤層が想定される深度まで掘削が及ぶと当センター職員が立ち会うか、もしくは周辺の調査履歴を参考に掘削深度の指定を行った。調査区引受け後、土留め施設内に昇降階段を設置し、調査区を設定した。人力による作業の結果、追加掘削が必要と判明した場合には小型重機を搬入して掘削を行った。各調査区での調査終盤には小型重機を用いて基盤層を深掘りして、下層遺構の有無を確認した。作業終了後、発掘調査で発生した排土に関しては埋戻し作業を行い、順次本体工事側に調査地を引き渡した。調査区内での図化・写真撮影の記録は担当調査員が実施し、最終的な平面図も調査員が写真測量で作成した。空中写真撮影については、供用中のジャンクション道路に挟まれた場所にあるため、実施できなかった。

年度別調査区設置状況 令和元年度末に調査対象地東半部の4か所で鋼矢板による土留めが設置された。これを受けてF13・14区の2か所において調査を開始した(第10次調査)。令和2年度は年度当初から継続してF13・14区の調査を行い、調査が終盤に差し掛かった段階で順次F15・16区の調査に着手した。この間F17・18区の土留め工事が行われ、F13～16区の調査終了後にF17・18区の調査に着手し終了した(第11次調査)。令和3年度は6車線化に対応するための調査でF19区、F20区、F21区の順に着手し、順次終了した。この間、F22区で土留め工事が行われ、F21区の終了後にF22区に着手し終了した(第12次調査)。

4)基本層序

先述のような調査工程のため、盛土下の旧表土から遺構面である基盤層までを連続的に土層観察する機会は得られなかった。観察が及んだ範囲では、基盤層上の堆積土はほとんどがシルトであり基本的には洪水に由来するものである。連続的なラミナが認められないことから、耕作などで人為的に動かされているものと判断される。

基盤層 基本的な遺構面となるのは、標高14.0m付近で検出した氾濫原堆積物層である。にぶい黄橙色を呈するシルトで、1.2～1.4m程度の層厚がある。調査区によってはやや粘質で、葦などの痕跡と考えられる径0.5cm程度の黄橙色が斑状に混じる特徴がある。今回の発掘調査により、弥生時代前期後半～弥生時代後期後葉の間で上方付加的に形成された層であると判明している。新名神関係の一連の発掘調査では、この層上で弥生時代～平安時代の遺構が検出されており、最初期の島畑は同層を掘り込んで作られることが判明している。第4次調査での層序説明では「標高13.8～14.2m付近で弥生時代から古代にかけての遺構面」と説明されている。過年度の報告書では表現の揺らぎがあるが、本書では上記の層のみを指して“基盤層”と呼称する。

基盤層下 基盤層より下位は灰～灰白色の粘質なシルトである。湖沼性の堆積層と考えられ、調査区によってはこの層を切り込む流路が存在している。各調査区において最終段階で実施する重機での断割はこの確認作業である。第4次調査の層序説明では「標高13.0m付近で地山と判断される緑灰色ないし暗緑灰色、もしくは灰色を呈するシルトないし粘土の層位」とある。

5)遺構記号

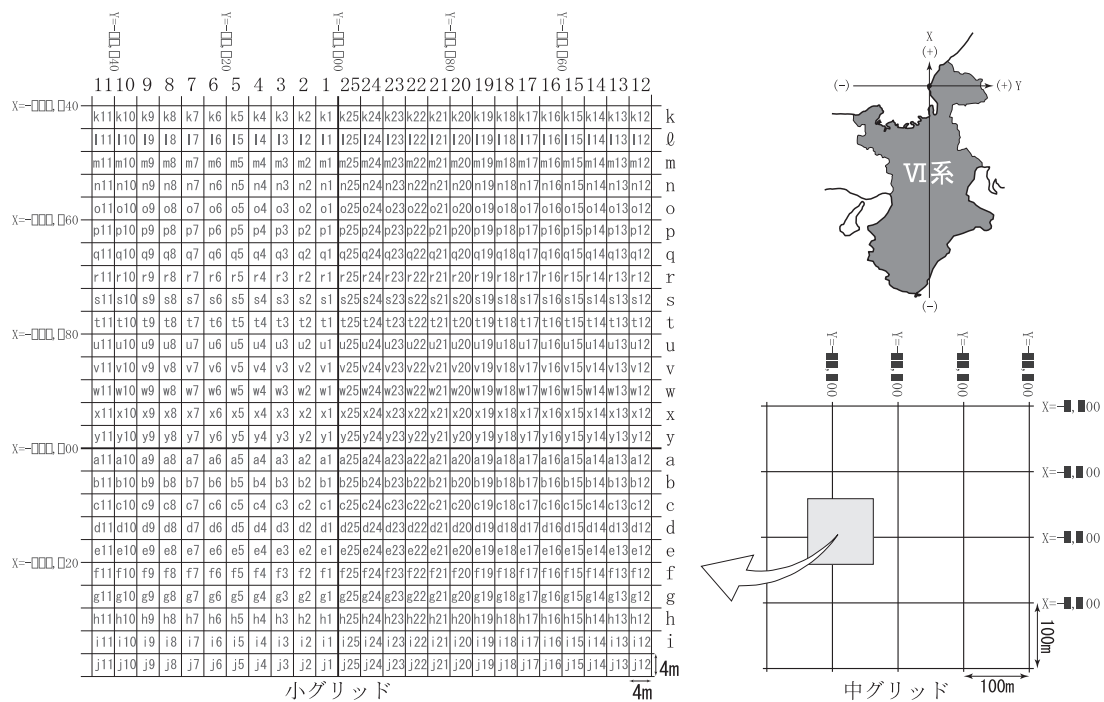
『発掘調査のてびき』^(注12) に準じて遺構種別を示す記号と番号の組み合わせにより表記した。

溝状遺構 鳥畑間の低位部を指す記号については以下の経緯がある。新名神に関連する下水主遺跡の最初の報告である『第163冊』では、鳥畑間の低位部で水田耕作が行われたとの理解から、^(注14) 水田を意味する遺構記号「SN」が付されている。だが、次に刊行された『第167冊』では水田と証明するための水口などが未検出であるため確実には水田とは言えないとする理由で「溝状遺構SD」^(注15) を使用しており、続く報告でも同様の方針が採られている。後述するが、この考えは明らかな誤りである。しかし再び遺構記号を変更することは混乱を招く可能性もあるため、引き続き鳥畑の低位部に対しては「溝状遺構SD」を使用する。

鳥畑番号 既刊の下水主遺跡、水主神社東遺跡の発掘報告書では、検出した鳥畑については通しの番号を付している。これは平面的に検出したものに限らず、断面のみで検出したものも同様である。時期が異なる鳥畑が上下に重なって存在する場合でも、これに付される鳥畑番号は一つである。これは城陽JCT/I Cの北東部にある国道24号金尾交差点以西でこれまで適用してきた原則であり、本書もこれに従う。今後報告する金尾交差点以東の水主神社東遺跡、小樋尻遺跡については、別の通し番号を付す予定である。

6)小グリッドの設定

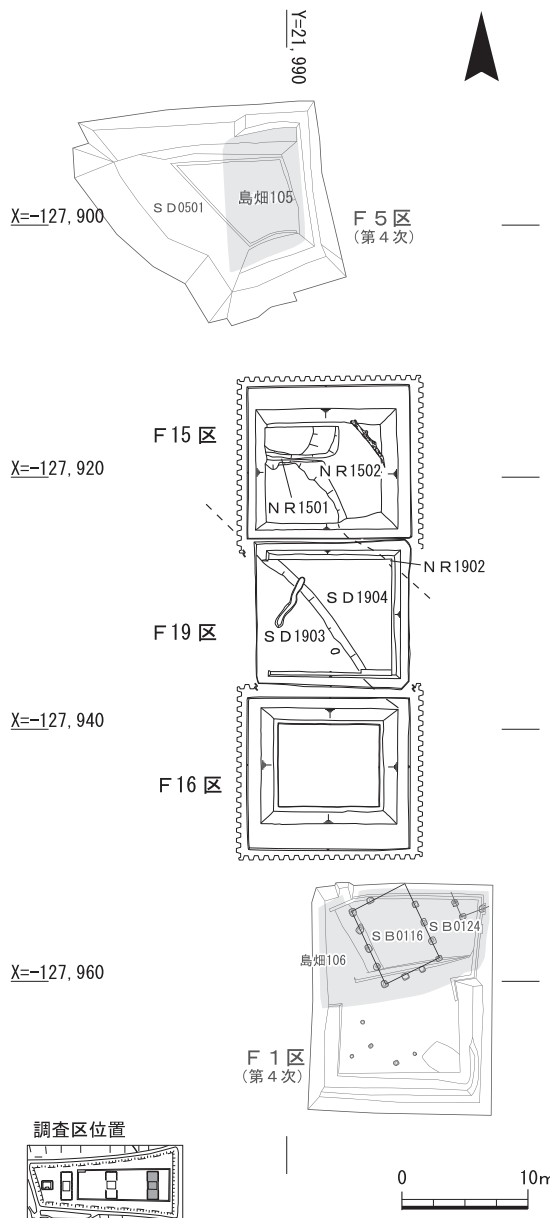
遺物の取り上げに対応するため平面直角座標系を利用した4m角の小グリッドを設定した本報告では遺構平面図の横に調子落として表記した。



第6図 小グリッドの設定原理

4. F15・19・16区の調査

既往の調査 平成25年度に実施した第4次調査では当橋脚予定地のすぐ南側でF1区の発掘調査を実施している。また、北東側とすぐ北側でもF4区とF5区の調査を実施している。F1・4・5区調査時の地表面の標高は15.6～16.1m付近である。F1区では調査区の北半で中世後半から近世にかけての「島畑106」を検出している。また島畑の南では東西方向の溝状遺構SD0139を検出している。島畑上面の標高は15.4m付近で、島畑の下位では標高14.4m付近で第10層を検出しており、その上面で古代の掘立柱建物SB0124を検出している。第10層は今回の基盤層に該当すると考えられる。F4区の調査では、周辺の成果から中世後半から近世と想定する、「島畑104」を上面の標高14.7～14.9m付近で検出している。F5区では断面観察で第5層(標高15.3m付近)を上面とする「島畑105」を検出している。また島畑の下位にある第14層直上(標高13.6m付近)で突帯文土器が1点出土している。



第7図 F15・19・16区配置図

調査過程 当橋脚予定地は、調査対象地内の最も東に位置し、第4次調査後に整備された調整池内の東端部にあたる。調整池内の地盤高は標高16.5m付近である。調整池内の水は東端部から地下を通過して城陽IC/JCT内へと流れる仕組みになっているため、当橋脚予定地が最も水を集めやすい場所となる。発掘調査中も雨水対策にかなりの労力を割く必要が生じた。遺構面である基盤層までは2.5mの深さがある。

令和2年度の第11次調査着手前に本体工事側でF15・16区に土留め工事一式と鋼矢板内の盛土・表土掘削が行われた。その後、当センターが調査地を引き受けて発掘調査を実施・終了した。発掘調査で発生した排土については当センター側で埋戻した後、本体工事側により腹起し・切り梁の撤去と盛土・表土の埋戻しが行われた。

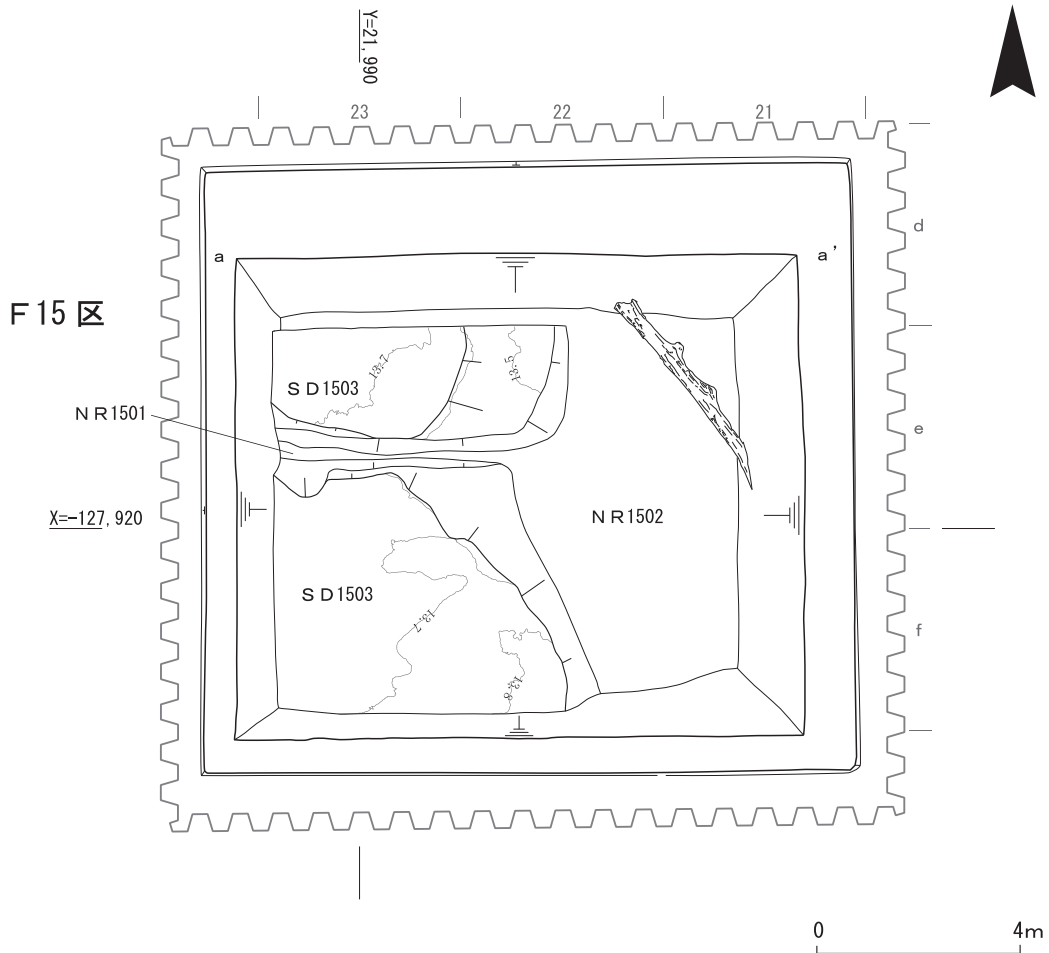
令和3年度の第12次調査着手前には本体工事側によりF15区南面とF16区北面の鋼矢板が引き抜かれ、F19区の盛土・表土掘削が行われた。F19区の南・北面は埋戻し土との比高が大きいため、法面と犬走が設けられた。その後、当センターで調査地を引き受け、調査を実施・終了した。発掘調査で発生した排土は当センター側で埋戻し、本体工事側に調査区を引き渡した。

1) F 15 区の調査

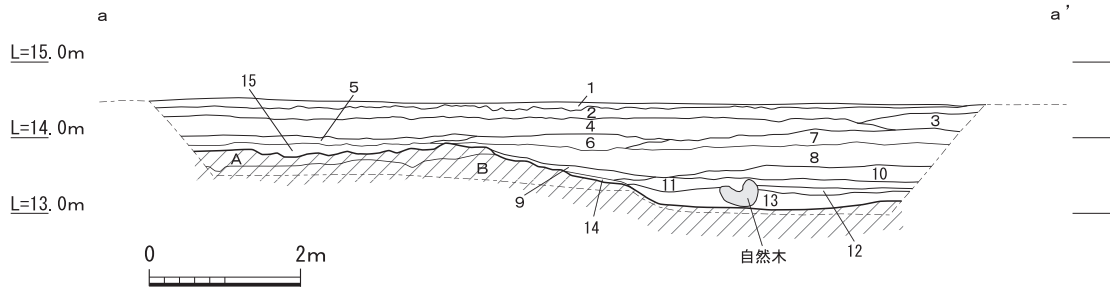
(1) 調査状況

当橋脚予定地北部の調査地である。本体工事側による盛土・表土の掘削作業に立ち会うことができなかったため、基盤層の想定深度よりも高い標高約14.5mまで掘削が実施された状況で調査地の引き渡しを受けた。当センター側で昇降設備を設置後、土留め内に南北9.2m・東西11.3mの調査区を設定して調査を開始した。人力掘削により調査区の各辺で断割りを実施して壁面を観察したところ、さらなる掘削が必要であると判明したため小型重機を搬入して追加の掘削を行った。引き渡しを受けた深度から0.6m程度掘削した、標高13.8～13.9mの高さで、調査区の西半部において基盤層を検出した。基盤層より上位の堆積は洪水由来によるシルト層であるが、連続したラミナや砂層が確認できないことから人の手が加わっているものと判断される。小型重機での掘削時、基盤層が東側へ向かって落ち込むため、島畑と判断して引き続き重機を使用して調査区東半部の掘削を進めたが、0.15m程度の深さを掘削した状況で平面・断面を精査したところ弥生時代の流路と判断したため、人力による調査へと移行した。

基盤層を検出した高さで平面精査を実施した結果、落込み・流路を検出した。なお調査区の西半部で検出した基盤層は、後に報告する F 19 区から北へ続く S D 1904 の底部に相当するものであ



第 8 図 F 15 区遺構平面図



- | | |
|--|--|
| <p>1. 灰白色 (10YR8/1) 均質な中粒砂 いわゆる砂層 下層との境界が凸凹しており荷重痕と考えられる</p> <p>2. 褐灰色 (10YR5/1) シルト混じり極細粒砂 砂味が強い</p> <p>3. にぶい黄橙色 (10YR7/3) シルト</p> <p>4. 褐灰色 (10YR5/1) シルト混じり極細粒砂 砂味が強い 部分的に細粒砂のラミナが見られる。洪水等による堆積</p> <p>5. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト混じり極細粒砂 やや砂味が強い</p> <p>6. 灰色 (5Y5/1) シルト混じり極細粒砂 やや砂味が強い</p> <p>7. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂</p> <p>8. 黄灰色 (2.5Y5/1) 極細粒砂 砂味が強い いわゆる砂層 (NR1502)</p> <p>9. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂 (NR1502)</p> | <p>10. 灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂混じり極細粒砂 砂味が強い (NR1502)</p> <p>11. 灰灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 砂味がやや強い 径0.5~1cm大の炭化物が少量混じる 洪水等による堆積 (NR1502)</p> <p>12. 褐灰色 (10Y6/1) シルト 色調が暗く有機化する (NR1502)</p> <p>13. 黒褐色 (10YR3/1) シルト やや砂味が強い 径0.5~1cm大の炭化物が層の全体に多く混じる 色調が暗く有機化する (NR1502)</p> <p>14. 褐灰色 (7.5YR6/1) シルト (NR1502)</p> <p>15. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト</p> <p>A. 灰白色 (10YR7/1) シルト (基盤層)</p> <p>B. 明褐灰色 (7.5YR7/1) シルト (基盤層)</p> |
|--|--|

第9図 F15区北壁土層断面図

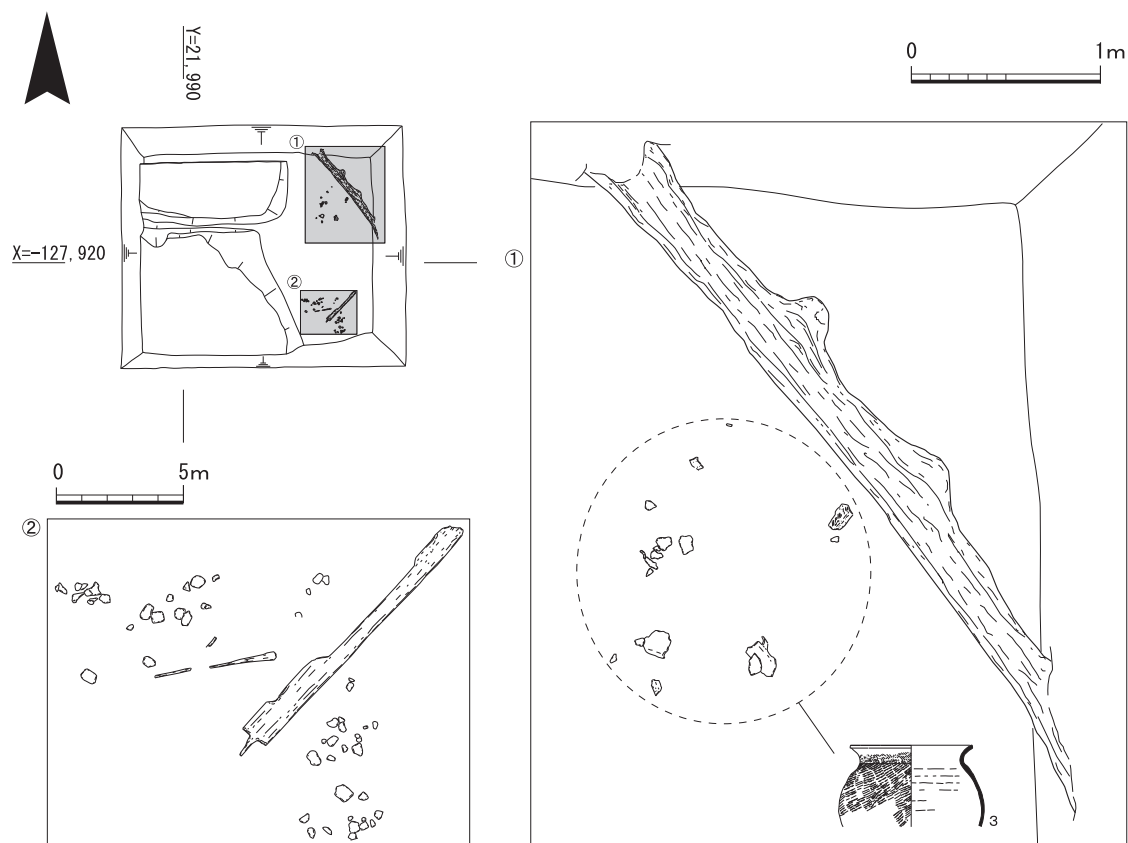
るため、基盤層が存在する本来の標高は本調査区では不明である。

出土遺物の概要 本調査区から出土した土器の総量は、整理箱2箱分である。流路から出土したものを含めて、全てが弥生時代後期中葉後半～古墳時代初頭の範囲で捉えられる土器である。例外として壁面清掃中に瓦器片が1点出土している。

(2) 検出遺構

流路NR1501 基盤層上で検出した、古墳時代初頭の東西方向の流路である。検出長は4.8mで西は調査区外へ延びる。幅は0.75mで、深さは0.32mである。底面の標高は東へ低くなっている。平面形は東側へ向かって「ハ」の字に広がり、調査区の中央部でNR1502と交わる。埋土は上下2層である。平面精査時にNR1501とNR1502の新旧関係を検証したが、どちらの埋土も同じ特徴であり切り合い関係は認められなかった。遺物は外面にタタキを有する甕片が10数点出土している。出土した甕の底部がNR1502出土のものと同一体と判断されることから(第52図3)、同時期に埋没した流路であると考えられる。

流路NR1502 基盤層上で検出した南北方向の流路で、古墳時代初頭の氾濫流路である。南西肩のみを検出し、南北方向は調査区外へ延びる。F19区では南側の続きを一部検出しており、東へ振れている状況を確認している。F15区内での検出幅は6.0m、深さは0.96mで、底面の標高を調査区北壁と南壁と比較すると北壁の方が0.08m低い。流路の底面はほぼ平らで、西側へ向かってなだらかに立ち上がる。埋土はいずれも水性の自然堆積であるが、粗砂等の水が勢いよく流れたような痕跡は認められなかった。また最下層である第13層は炭化物が大量に混じる有機化した泥質の層である。このような特徴から木津川の増水時に形成された氾濫流路であると判断される。遺構掘削は人工層位状に複数回に分けて実施したが、北壁土層断面の第12層上面に相当する



第10図 F15区NR1502遺物出土状況

高さで古墳時代初頭の土器と調査区南端部の自然木が面的に出土した。

自然木は流路の南半部にあり、厚さは5cm程度である。樹種同定の結果ムクノキであると判明した。調査区北東隅にある丸太状の自然木は、流路南半部の自然木を検出した段階で姿を現していた。しかし丸太状自然木の底は、流路底面の基盤層上に接しており、層としては第13層に属すると判断される。検出時には上半部が腐朽しており、半割状となっていた。樹種同定を実施したところコナラ属アカガシ亜属と判明した。弥生土器は南北の2群に分かれて出土しており、南の一群のものは摩滅がやや進んでいた。

落込みSD1503 調査区西半部にある落込みである。本調査区では遺構の肩を検出していないが、F19区で検出した11世紀半ば以降の落込みSD1904へ繋がることから、本調査区外の西側に肩が存在すると想定される。F19区の調査後に認識可能となった遺構である。北壁断面の第6・7・15層が埋土であると考えられ、NR1502を完全に覆っている。SD1503から遺物の出土はないが、F19区のSD1904では瓦器が出土している。

(3) 下層確認調査

調査の最終盤に重機を使用して調査区西辺で断割調査を実施した。基盤層の検出高から約2mの深さである標高11.9m付近まで掘削したところ、標高12.2m付近で湖沼性堆積である青灰色の粘質シルト層を確認した。基盤層の厚さは約1.6mである。遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。

2) F19区の調査

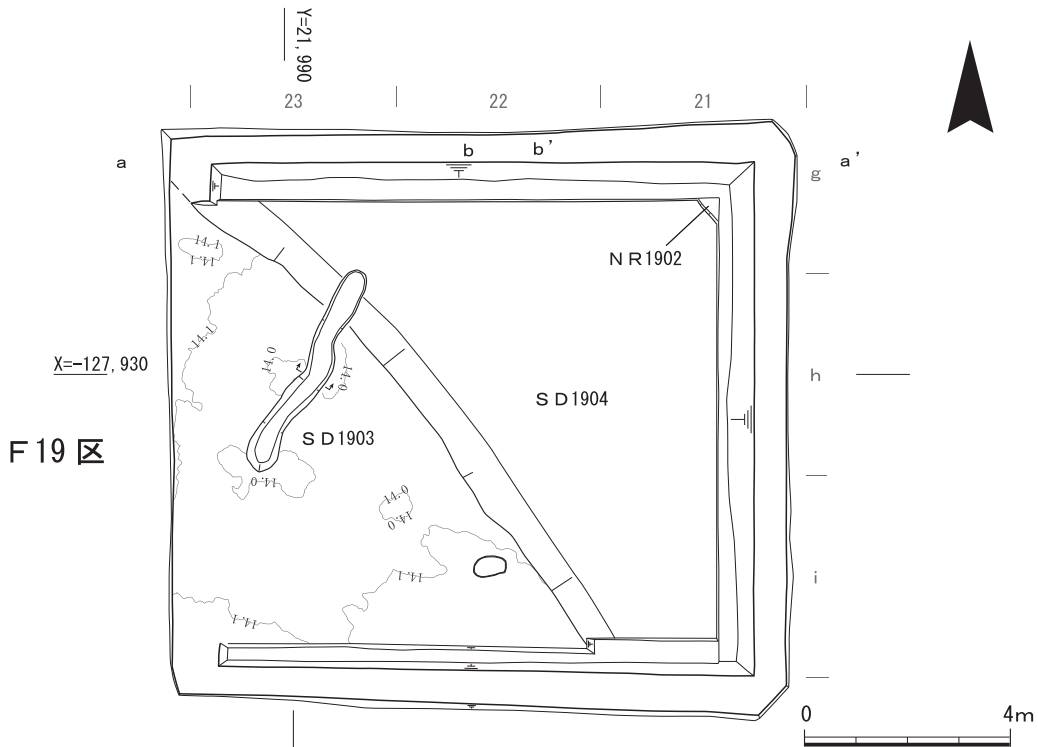
(1)調査状況

当橋脚予定地の中央部の調査地である。本体工事側による盛土・表土の除去は、標高14.5m付近まで実施するように依頼したが、作業中に雨天が続いたため調査地内は泥濘状態となり、重機が沈み込む状況での作業となっていた。このような理由から、当センターが調査地の引き渡しを受けて排水溝の掘削と泥濘の除去を実施したところ、調査区西部では標高が14.1～14.2mとなっており、基盤層が露出していた。本来の基盤層の上面は、これより高い標高にあるものと考えられる。その後、南北9.3m・東西10.7mの調査区を設定し、同じ高さで精査を実施した。遺構検出の結果、溝・落込み・流路を検出した。

出土遺物の概要 当調査区から出土した遺物の総量は整理箱1箱分である。いずれも小破片の土器ばかりであり弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられるタタキ調整の土器・土師器・須恵器甕・瓦器・布目瓦片がある。

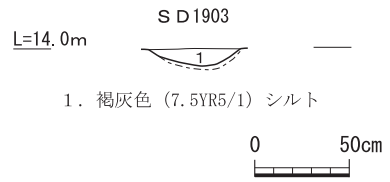
(2)検出遺構

落込みSD1904 調査区中央部の基盤層上で検出した、11世紀半ば以降の斜行する南北方向の落込みである。北西と南は調査区外へ延びている。西肩のみを検出し、検出幅は調査区北辺で測って10.95mである。底面は平坦で、西側へ向かってなだらかに立ち上がる。深さは少なくとも0.75mあり、埋土は北壁の観察によれば、第1・2層は色調が暗く耕作土の一部の可能性があり、土手状を呈する第3層についても色調がやや暗く、これに対応する土手状の盛上りが東壁でも認められる。SD1904の西肩とほぼ平行な北で西へ振る方位の畦畔である可能性がある。遺物は埋



第11図 F19区遺構平面図

土中から土師器・須恵器が少量出土しているのに加え、瓦器の細片も含まれており、S D1904は瓦器出現以降の時期である。N R1902・N R1502と方位が似るが、時期が明瞭に異なっている。S D1904は基盤層を掘り込んでいることから島畑間の低位部である可能性があるものの、斜方位であるなど島畑と断定する根拠には乏しい。



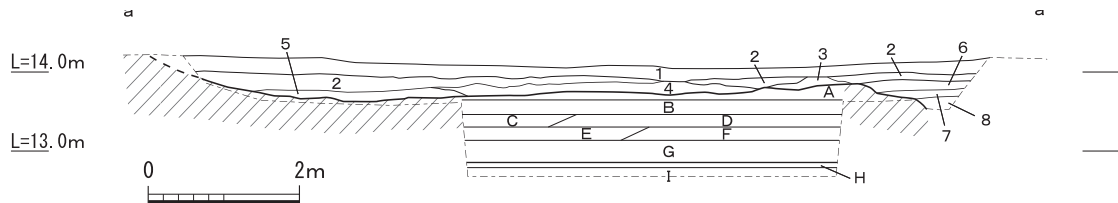
第12図 S D1903土層断面図

流路N R1902 調査区の北東隅において、S D1904の底面である基盤層上で検出した古墳時代初頭の流路で、氾濫流路である。F15区で検出したN R1502に繋がる同一遺構である。調査区隅で検出したため、排水溝内を含めた極めて狭い範囲でしか確認できなかった。遺構掘削についても検出面から0.6m程度の深度までしか実施できなかったため、最下層の有機化層や流路底面を確認できていない。遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の範囲で捉えられる、外面にタタキを有する甕の細片がごく少量出土している。

南北溝S D1903 調査区西部の基盤層上で検出した斜行する南北方向の溝である。北端部は、11世紀半ば以降の落込みみであるS D1904を切っている。溝の長さは4.29m、幅0.49m、深さ0.1mである。埋土は単純な1層で、遺物は土器片がごく少量出土している。そのうちの1点は弥生時代後期～古墳時代初頭の鉢類とみられる。

(3)下層確認調査

調査の最終盤に重機を使用して調査区北辺で断割調査を実施した。掘削は基盤層の検出高から約1.5mの深さである標高12.7m付近まで実施したところ、標高12.9mで湖沼性の堆積と考えられる褐灰色の粘質なシルト層を検出した。基盤層は少なくとも1.5mの厚さを確認した。断割調査において遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。



- | | |
|--|---|
| 1. 褐灰色 (10YR5/1) シルト やや砂味が強い (SD1904) | B. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト 灰白色 (2.5Y7/1) が30%混じる<基盤層> |
| 2. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト やや粘質 (SD1904) | C. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト<基盤層> |
| 3. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト 色調がやや暗く遺物をごく少量含む | D. 灰白色 (5Y7/1) シルト 明黄褐色 (10YR6/6) が径0.5cm大の斑状に7%混じる<基盤層> |
| 4. 灰色 (5Y6/1) シルト 粘質 地山に似るが部分的にブロックを含む (SD1904) | E. 明褐色 (7.5YR7/1) シルト 明黄褐色 (10YR6/6) が径0.5cm大の斑状に3%混じる<基盤層> |
| 5. 青灰色 (5BG6/1) 均質なシルト 粘質 還元雰囲気呈する (SD1904) | F. 浅黄橙色 (10YR8/3) シルト<基盤層> |
| 6. 灰色 (5Y5/1) シルト (NR1902) | G. 灰白色 (10YR7/1) シルト 明黄褐色 (10YR6/6) が径0.5cm大の斑状に5%混じる<基盤層> |
| 7. 褐灰色 (10YR6/1) シルト (NR1902) | H. 褐灰色 (10YR6/1) シルト |
| 8. 褐灰色 (10YR5/1) シルト しまりが弱い (NR1902) | I. 褐灰色 (10YR5/1) シルト |
| A. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト 粘質 植物痕跡と考えられる径0.5～1cm大の明黄褐色 (10YR6/6) が斑状に50%混じる<基盤層> | |

第13図 F19区北壁土層断面図

3) F16区の調査

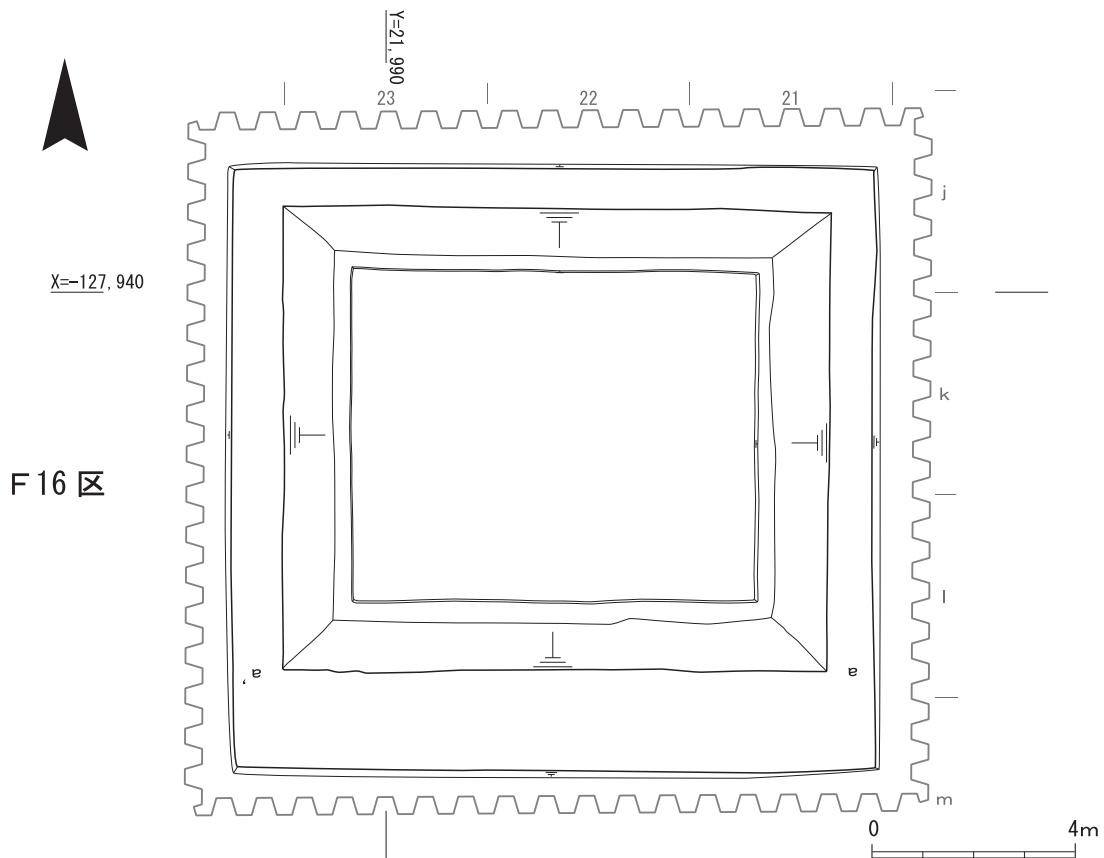
(1) 調査状況

当橋脚予定地南部の調査地である。本体工事側による盛土・表土掘削は、標高14.5m付近まで実施するように依頼した。当センター側で調査地を引き受け後は土留め内に昇降階段を設置し、南北9.2m、東西10.8mの調査区を設定して調査を開始した。

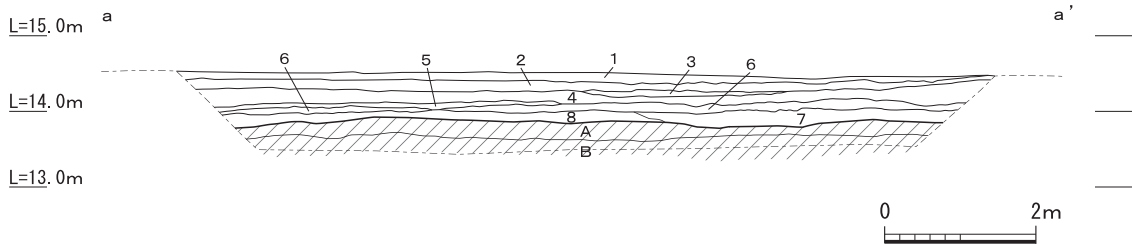
調査区の各辺において人力による断割を実施して壁面を観察したところ、さらなる掘削が必要であることが判明したため、小型重機を搬入して追加の掘削を実施した。0.9m程度掘削したところで基盤層を検出した。標高13.9m付近である。

南壁での土層観察によると基盤層上の堆積土はいずれも洪水によるものである。なかでも第1層は砂(中粒砂)だけの層で、木片などを少量含みながらラミナを形成している。洪水の強い流れで運ばれた砂がそのまま残されているものと判断される。第2～4層はシルトであり、ごく一部分でラミナが認められるのみであることから、洪水由来の土に人為が加わっていると考えられる。第6層はやや暗い色調を呈しており、弱く有機化しているものとみられる。鳥畑低位部の水田など耕作に関わる層の可能性はある。

基盤層の上面で遺構検出を実施したが、顕著な遺構は検出されなかった。念のため、人力で基盤層を厚さ0.2m程度掘削を行ない、基盤層を1層分除去した高さ(B層上面)で精査を実施したが、やはり遺構は検出されなかった。



第14図 F16区遺構平面図



- | | |
|---|---|
| <p>1. 淡黄色 (2.5Y8/4) 均質な中粒砂 いわゆる砂層 ラミナが見られる</p> <p>2. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト混じり細粒砂 砂味が強い</p> <p>3. 黄灰色 (2.5Y6/1) 中粒砂混じり細粒砂 砂味が強い</p> <p>4. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト 砂味が強い</p> <p>5. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト</p> <p>6. にぶい黄橙色 (10YR7/3) シルト 色調がやや暗く人為層か</p> | <p>7. 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト</p> <p>8. 灰黄色 (2.5Y6/2)</p> <p>A. 灰白色 (10YR7/1) シルト 径0.5cm大の植物痕跡と考えられる鉄分斑が20%混じる<基盤層></p> <p>B. 明褐色 (7.5YR7/1) シルト 粘質 径0.5cm大の植物痕跡と考えられる鉄分斑が50%混じる<基盤層></p> |
|---|---|

第15図 F16区南壁土層断面図

出土遺物の概要 F16区から出土した遺物は整理箱1/6箱に満たない量である。重機掘削中に須恵器甕の破片が出土しているほか、南壁土層断面の第7・8層に相当する部分を掘削中に弥生土器片が出土している。

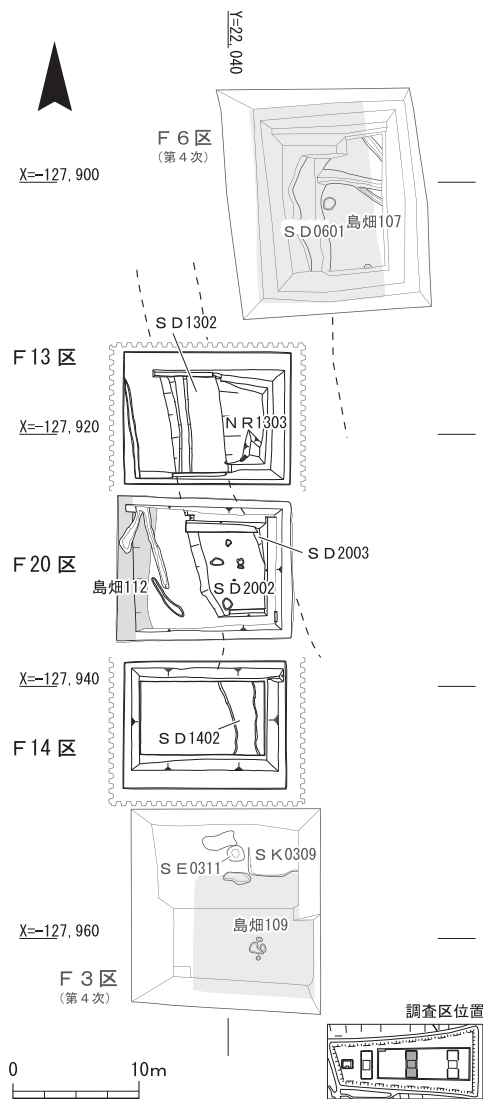
(2) 下層確認調査

調査の最終盤に小型重機を使用して調査区の東辺部で断割調査を実施した。断割は基盤層の検出高から1.4m程度の深さまで実施したところ、標高12.7m付近で湖沼性の堆積層である、灰白色の粘質なシルトを検出した。断割調査で遺構は検出されなかった。また遺物も出土しなかった。

5. F13・20・14区の調査

既往の調査 平成25年度に実施した第4次調査では、当橋脚予定地のすぐ南側でF3区、北側でF6区の調査を実施している。F3区では3面の遺構面が調査されている。調査時の地表面は標高15.9mで、上層では標高15.2m付近で検出した第5層を上面とする「島畑109」を検出したとされる。中層は標高14.8m付近の第8層を遺構面としており、12世紀後半頃の井戸SE0308や土坑・溝が検出されている。下層は標高14.0m付近で検出した第11層上で11世紀前半頃の井戸SE0311や弥生時代後期前半～中葉の土坑SK0309が検出されている。F3区では弥生時代を中心に多くの遺物が出土しており、総量は整理箱11箱分である。

F6区の調査時の地表面高は15.7mで、標高14.8mにある第12・15層を上面とする「島畑107」を検出したとされている。この下位には標高13.7m付近で第26層があり、この上面で弥生時代の溝SD0601や平安時代の土坑・溝を検出している。SD0601は東肩部のみを検出し、深さが1mとされている。東肩に「木材」が並ぶように検出したことから、護岸が行われていると評価されている。



第16図 F13・20・14区配置図

1) F13区の調査

(1) 調査状況

当橋脚予定地北部の調査地である。当センター職員の立会の下、本体工事側の盛土・表土掘削作業を実施したところ、土留め内西半部の標高14.0m付近の高さで基盤層を検出したため掘削停止を指示した。当センター側で調査地を引き受け、調査区北辺に昇降階段を設置した後、南北8.7m・東西12.8mの調査区を設定して調査を開始した。

基盤層上で遺構検出を実施した結果、溝・流路を検出した。また基盤層下でも流路を検出した。基盤層は氾濫原堆積物で構成されているが、調査区南壁の第16層採取試料を年代測定したところ弥生時代前期～中期である396-353calBC (57.92%)の年代が得られた。また同試料からは水田層の可能性を指摘できる量のプラント・オパールが検出されている。

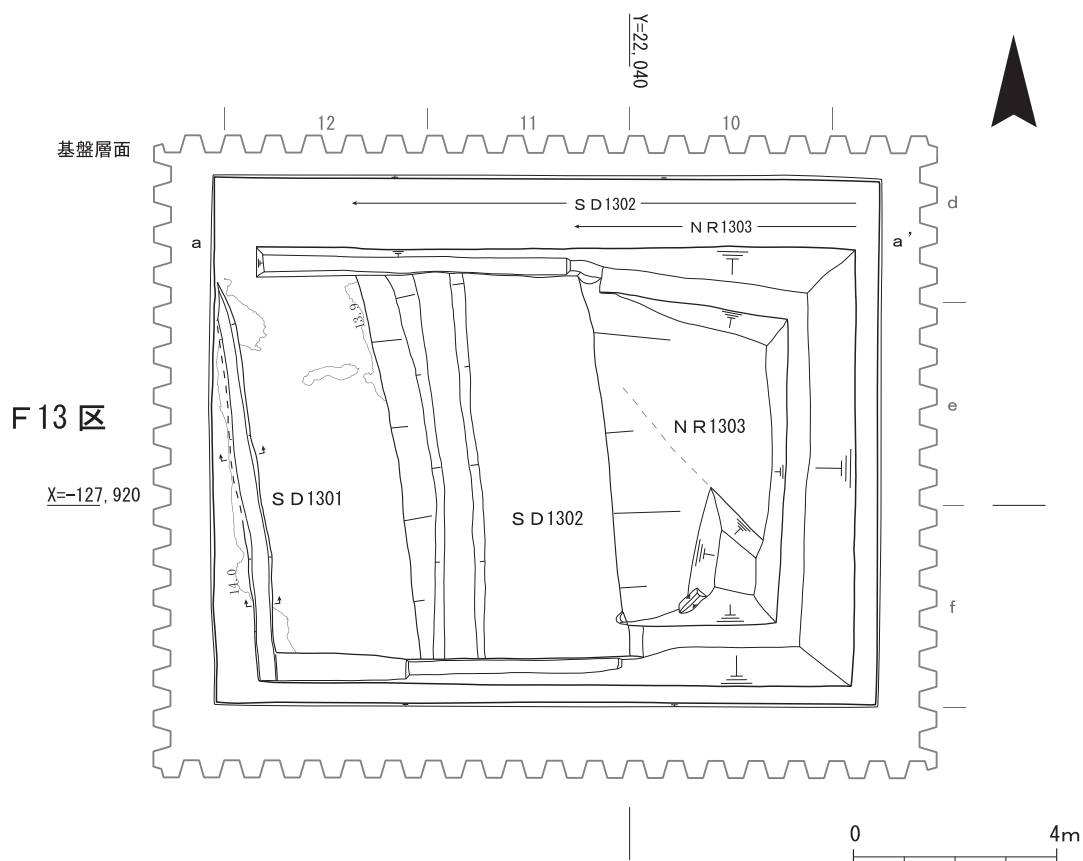
出土遺物の概要 本調査区から土器の総量は15箱である。土師器・須恵器が破片の状態出土

調査過程 当橋脚予定地は今回の調査対象地の中央部に位置しており、第4次調査終了後に整備された調整池の中央部にあたる。調整池底面である地盤高は16.6m付近であり、遺構面である基盤層までは約2.4mの深さがある。

令和元年度末にF13区、14区の順で鋼矢板打設、腹起し・切り梁の設置、盛土・表土の掘削が本地工事側で実施された。本体工事側の作業が終了した調査地から順に、第10次調査として当センターが調査に着手した。1か月半程度調査を行った段階で年度終了となり、調査を中断した。

令和2年度の第11次においては、年度当初から継続となるF13・14区の調査を実施・終了した。発掘調査で発生した排土を当センターが埋戻した後、本体工事側により腹起し・切り梁の撤去、盛土・表土の埋戻しが行われた。

令和3年度の第12次調査着手前には本体工事側によってF13区南面とF14区北面の鋼矢板の除去、F20区の盛土・表土掘削と法面の整形が行われた。その後、当センターで調査地を引き受け発掘調査を実施した。調査終了後、排土を埋め戻して本体工事側に調査区を引き渡した。



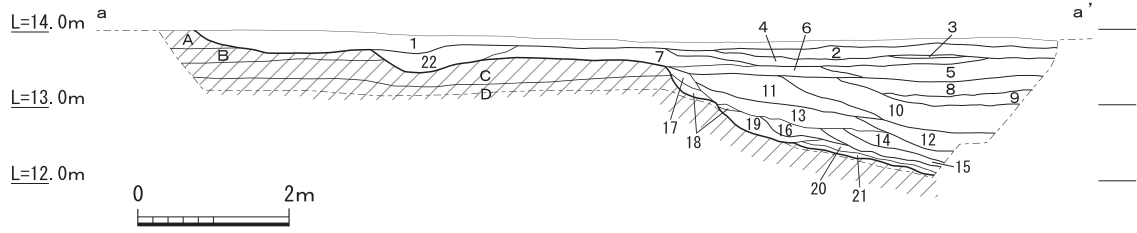
第17図 F13区遺構平面図(基盤層面)

しているが、ほとんどはS D 1302出土である。またN R 1303・N R 1304からは加工木・自然木や草本・種実等の有機遺物が出土している。これらについては現地でサンプルを採集した。

(2) 検出遺構(基盤層面)

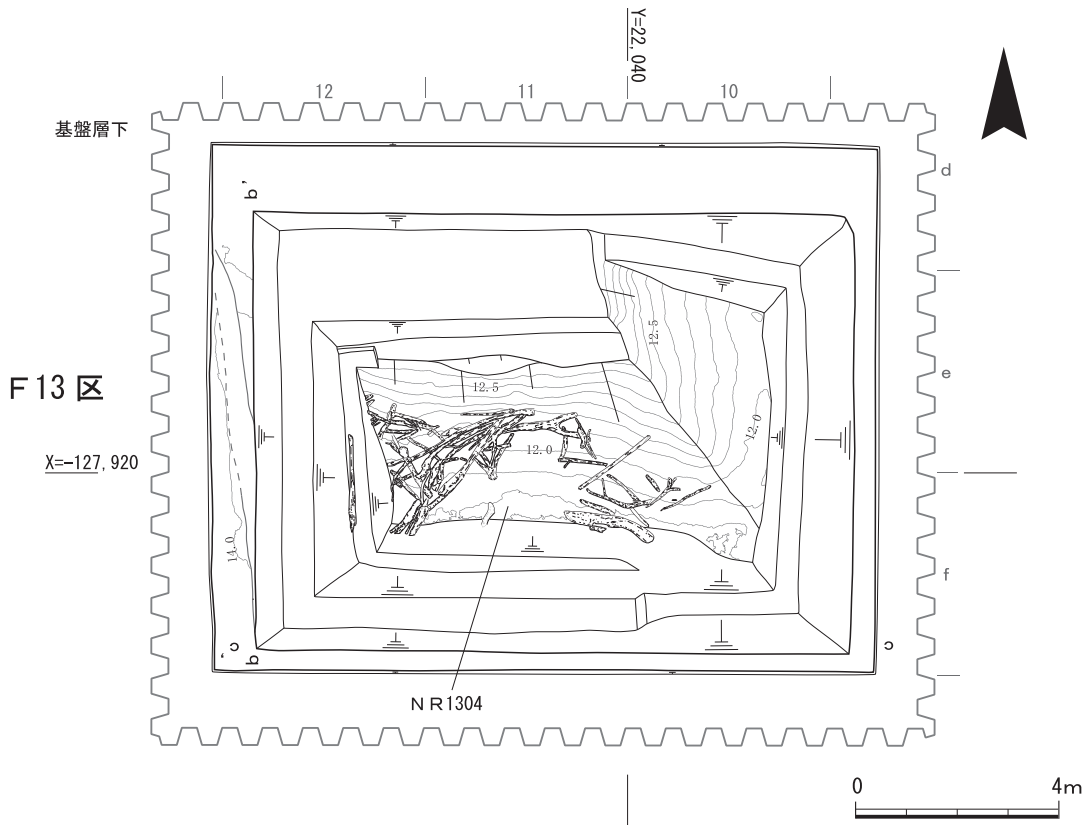
溝S D 1301 調査区西端部の基盤層上で検出した、正方位に対してやや斜行する飛鳥時代の南北方向の溝である。検出長は7.88mで南北は調査区外へ延びている。幅は3.2mで、深さは0.09mである。埋土は粘質なシルトで、流水の痕跡は認められない。遺物は整理箱半分程度の量の土師器・須恵器の小片が出土している。時期が分かる遺物として、飛鳥Ⅰ～Ⅲの範囲で捉えられる土師器杯CⅠ片がある。

溝S D 1302 調査区の東半部の基盤層上で検出した、南北方向の溝である。飛鳥時代の遺構で、出土遺物は飛鳥Ⅰの古い様相を示している。幅が広くやや斜行しており、方位の振れはS D 1301と同じである。西肩のみを検出し、南北は調査区外へ延びている。検出幅は調査区北辺で測って9.9mである。深さは0.36mで底面は平坦であるが、S D 1302内の西端部が幅0.9m、深さ0.2mの南北溝状に深くなっている。この部分は北壁土層断面図の第22層、南壁土層断面図では第8層に対応する。S D 1302の埋土には、西半部を中心にして遺物が多量に含まれていた。また南・北壁面の土層観察では、暗緑灰色の極細粒砂がブロック状に混じる様子が確認されている。これらの特徴から人為的に埋められたものと判断される。S D 1302の東半部では、下位にある流路N R 1303をバックしている。N R 1303の影響を受けて窪地状になっている部分を土地利用に際して



- | | | |
|---|--|---|
| 1. 青灰色 (10BG5/1) シルト混じり極細粒砂 暗緑灰色 (5G3/1) が径2cm大の斑状に混じる (SD1302) | 11. 緑灰色 (10G6/1) 極細粒砂 暗灰色 (N3/0) 極細粒砂が多く混じる (NR1303) | 21. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂 木片が多く混じる (NR1303) |
| 2. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 (SD1302) | 12. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 (NR1303) | 22. 暗緑灰色 (5G4/1) シルト (SD1302) |
| 3. 緑灰色 (5/1) 極細粒砂 (SD1302) | 13. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 (NR1303) | A. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 (基盤層) |
| 4. 緑灰色 (10G6/1) 極細粒砂 径1cm大の暗緑灰色 (5G3/1) 極細粒砂が多く混じる (SD1302) | 14. 暗緑灰色 (5G4/1) 細粒砂 (NR1303) | B. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂 (基盤層) |
| 5. 青灰色 (5B5/1) 極細粒砂 灰オリーブ色 (5Y5/3) 極細粒砂が斑状に混じる | 15. 暗緑灰色 (10G4/1) 極細粒砂 (NR1303) | C. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂 浅黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂が斑状に混じる (基盤層) |
| 6. 青灰色 (5BG5/1) 極細粒砂 | 16. 暗青灰色 (5B4/1) 細粒砂 (NR1303) | D. 灰白色 (5Y7/2) 細粒砂 浅黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂が斑状に混じる (基盤層) |
| 7. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂 (SD1302) | 17. 暗青灰色 (5PB4/1) 極細粒砂 (NR1303) | |
| 8. 青灰色 (10BG7/1) 極細粒砂 (NR1303) | 18. 暗青灰色 (5PB4/1) 極細粒と青灰色 (5BG6/1) シルトが混じる (NR1303) | |
| 9. 暗灰色 (5BG4/1) シルト 明緑灰色 (10G7/1) シルトが斑状に混じる | 19. 緑灰色 (5G6/1) 細粒砂と暗青灰色 (5PB4/1) 細粒砂が混じる (NR1303) | |
| 10. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂 暗灰色 (N3/0) 極細粒砂が斑状に少量混じる (NR1303) | 20. 灰色 (N4/0) 細粒砂 木片が少量混じる | |

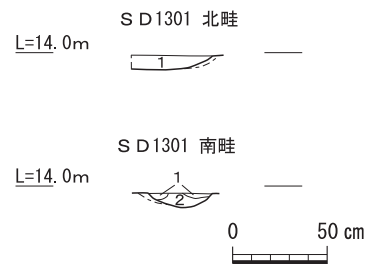
第18図 F13区北壁土層断面図



第19図 F13区遺構平面図(基盤層下)

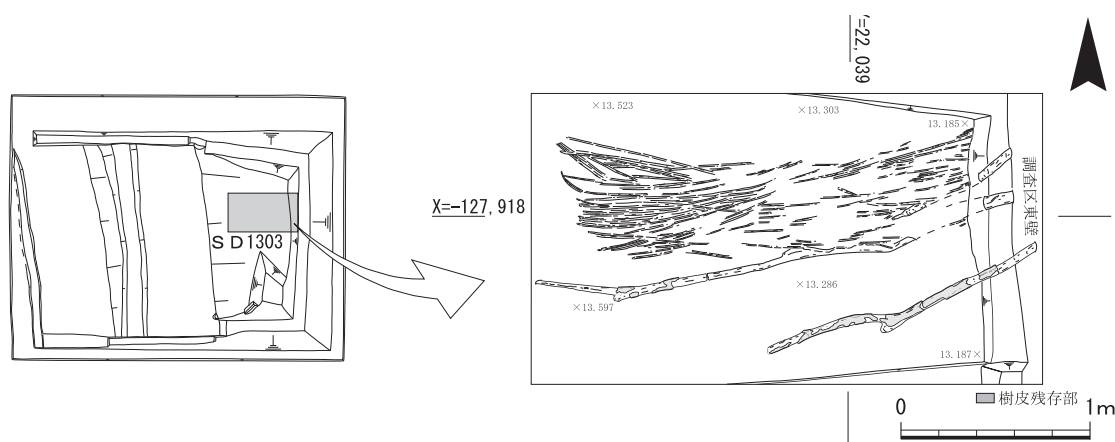
整地したものと考えられる。遺物の量は整理箱13箱分あり、ほとんどが古墳時代～飛鳥時代の土師器・須恵器である。完形品はなく、破片化したものばかりである。土師器の煮炊具が多くあり、羽口や発泡した土器も少量含まれている点からもとは集落で使用されていた遺物群と考えられる。

流路NR1303 S D1302の底面にあたる基盤層上で検出した古墳時代の南北方向の流路であり、氾濫流路と考えられる。西肩のみを検出し、南北は調査区外へ延びて第4次調査のS D0601へと繋がる。検出幅は調査区北辺で測って5.4m。調査

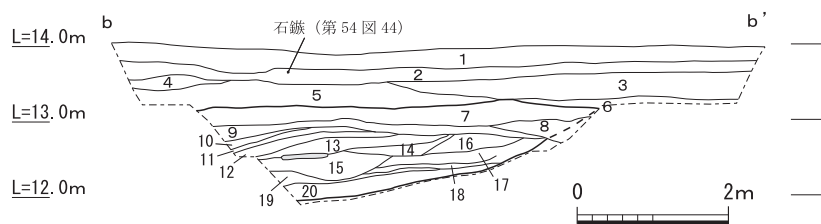


1. 褐色 (7.5YR4/3) シルト 粘質
径0.5～1cm大の炭化物が多く混じり土器が混じる

第20図 S D1301土層断面図



第21図 F13区NR1303敷粗朶検出状況(2面目)



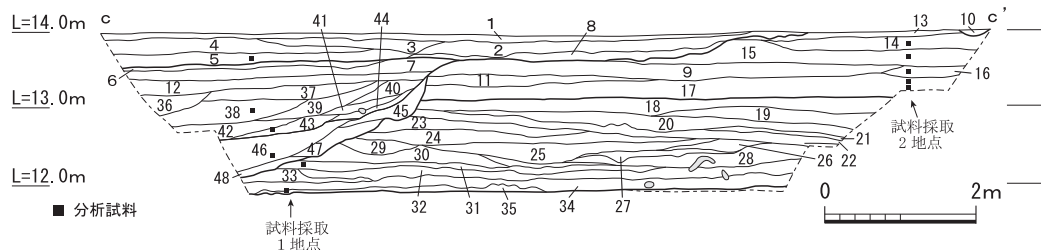
1. 緑灰色 (5G6/1) 極細粒砂 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 極細粒砂が斑状に混じる
2. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 極細粒砂が斑状に混じる
3. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 極細粒砂 にぶい黄橙色 (10YR6/4) が斑状に混じる
4. 青灰色 (10B6/1) 細粒砂 灰白色 (7.5Y7/2) 粗粒砂がブロック状に混じる
植物痕跡の可能性のある径1cm大の炭化物が少量混じる
5. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 極細粒砂 にぶい黄橙色 (10YR6/4) が斑状に混じる
6. 明青灰色 (5BG7/1) 細粒砂 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 極細粒砂が斑状に混じる
7. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂のブロックを含む
8. 明青灰色 (10BG7/1) 極細粒砂
9. 青灰色 (5B6/1) 極細粒砂
10. 青灰色 (10BG5/1) 極細粒砂 灰白色 (5Y7/2) がブロック状に混じる
11. 青灰色 (5B6/1) 細粒砂 紫灰色 (5BP5/1) 極細粒砂が斑状に混じる径1cm大の炭化物が少量混じる
12. 灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂と明緑灰色 (10GY7/1) 粗粒砂 ラミナを呈する
13. 緑灰色 (10G6/1) 細粒砂 紫灰色 (5RP5/1) 細粒砂が斑状に多く混じる
14. 青灰色 (5B5/1) 細粒砂 紫灰色 (5RP5/1) 細粒砂が斑状に混じる
15. 暗青灰色 (5PB4/1) 細粒砂 浅黄色 (2.5Y7/3) 粗粒砂が混じる
16. 青灰色 (10BG6/1) 細粒砂 灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂が混じる
17. 青灰色 (5B7/1) 粗粒砂と紫灰色 (5P5/1) 極細粒砂・灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂がラミナをなす
18. 灰白色 (10Y7/1) 粗粒砂 木片・葉が混じる
19. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粗粒砂と黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂がラミナを呈する木片・種実が混じる
20. 灰色 (7.5Y4/1) 極細粒砂 木片・種実が混じる

NR1304: 第7～20層、
基盤層: 第1～4層、
基盤層ないし漸移層: 第5層

第22図 F13区西壁断ち割り土層断面図

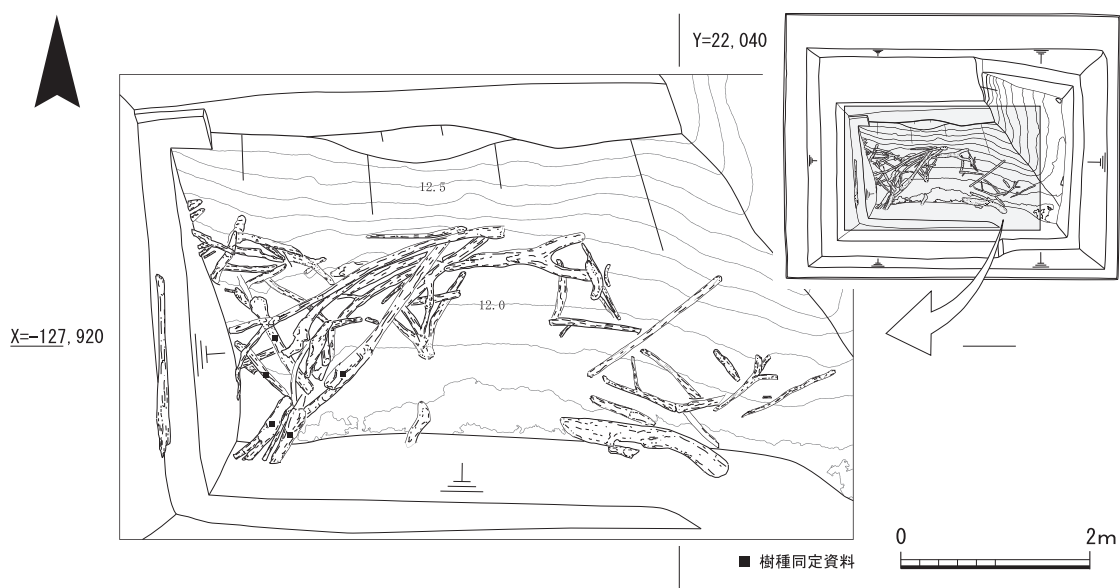
区内での深さは1.92mであるが調査区外の東側へ向かってさらに深くなる。遺物は土師器・須恵器が少量出土しており、南壁の第36層からは古墳時代と捉えられる薄い土師器片が出土している。最上層にあたる南壁第7層に相当する部分からは古墳時代後期であるMT15の須恵器が出土している。一方、最下層に近い南壁第46層で採取した試料を年代測定したところ、古墳時代前期～中期に該当する330-409calAD (76.28%)の年代が得られた。埋土掘削中、NR1303の南半部で護岸材と考えられる木材が出土した。出土層位は南壁断面の第41・44層中と第47層中である。第47層中の護岸材は長さ0.5～1.5m・直径0.15m程度の加工木・自然木4点が流路と長軸を合わせる形で出土した。加工木は角材状で、端部は燃えさし状に炭化している。

NR1303の中央部では、南壁第41・44層に対応する高さで流路に直交する方向をとる敷粗朶と自然木を検出した。敷粗朶は分析で草本と確認されもので、厚さ5mm程度のものが、長さ(東西)2.2m・幅(南北)0.6mで面的に広がっていた。敷粗朶の検出は、高さが5cm程度異なる上下2面を確認した。南壁の土層観察と掘削状況を整理すると、流路を利用するためにまず第45・47・48



- | | | |
|--|--|---|
| 1. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂 | 16. 青灰色 (10BG6/1) 細粒砂 灰白色 (7.5Y7/2) 粗粒砂が少量混じる 径1cm 大の炭化物が少量混じる | 32. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粗粒砂と黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂がラミナをなす木片・種実が混じる |
| 2. 青灰色 (10BG5/1) 極細粒砂 暗緑灰色 (5G3/1) 極細粒砂が径2cm大の斑状に混じる 土器須恵器多く混じる | 17. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 極細粒砂 | 33. 黄灰色 (2.5Y6/1) 粗粒砂層の大半が木片・種実からなる |
| 3. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 | 18. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂混じる | 34. 灰色 (2.5Y4/1) 極細粒砂 木片・種実を含む |
| 4. 青灰色 (10BG6/1) 極細粒砂 暗緑灰色 (5G3/1) 極細粒砂が径2cm大の斑状に混じる | 19. 青灰色 (5B6/1) 極細粒砂 | 35. 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂 緑灰色 (5G6/1) シルトのブロックを含む |
| 5. 緑灰色 (10G6/1) 極細粒砂 暗緑灰色 (5Y5/3) 細粒砂が径1cm大の斑状に多く混じる 土器が多く混じる | 20. 青灰色 (10BG5/1) 極細粒砂 灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂混じる | 36. 青灰色 (5BG5/1) 極細粒砂 |
| 6. 暗青灰色 (5BG4/1) 極細粒砂 灰オリーブ色 (5Y5/3) が径1cm大の斑状に少量混じる 土器が少量混じる (NR1303) | 21. 青灰色 (5B6/1) 細粒砂 紫灰色 (5PR5/1) 極細粒砂が混じる径1cm大の炭化物が混じる | 37. 灰白色 (5Y4/1) シルト 灰色 (5Y5/1) 極細粒砂を多く含む |
| 7. 緑灰色 (5G5/1) 極細粒砂 土器が少量混じる (NR1303) | 22. 灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂 明緑灰色 (5Y7/2) 粗粒砂がラミナを呈する | 38. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 極細粒砂 |
| 8. 暗緑灰色 (10GY4/1) 極細粒砂 土器細片が少量混じる | 23. 青灰色 (5BG6/1) 細粒砂 | 39. 暗青灰色 (5B4/1) 極細粒砂 |
| 9. 緑灰色 (7.5GY6/1) 極細粒砂 灰オリーブ色 (5Y5/3) が斑状に多く混じる | 24. 緑灰色 (10G6/1) 細粒砂 紫灰色 (5RP5/1) 細粒砂が斑状に多く混じる | 40. 灰色 (N6/1) 細粒砂 |
| 10. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細粒砂 土師器片が混じる | 25. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂 径1cm大の炭化物が多く混じる | 41. 灰色 (N4/1) 極細粒砂 |
| 11. 緑灰色 (5G6/1) シルト 灰オリーブ色 (5Y5/3) が斑状に多く混じる | 26. 暗青灰色 (5PB4/1) 細粒砂 浅黄色 (2.5Y7/3) 粗粒砂が混じる 木片が混じる | 42. 褐色 (7.5YR4/1) 極細粒砂 |
| 12. 青灰色 (5BG6/1) シルト 土器が少量混じる | 27. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細粒砂 灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂がラミナを呈する | 43. 灰色 (5Y5/1) 極細粒砂と灰褐色 (7.5Y5/2) 極細粒砂混じる |
| 13. 青灰色 (5BG5/1) 極細粒砂 | 28. 暗青灰色 (5PB4/1) 細粒砂 浅黄色 (2.5Y7/3) が混じる | 44. 灰色 (N5/1) 細粒砂 灰白色 (N7/1) 細粒砂が混じる |
| 14. 緑灰色 (5G6/1) 極細粒砂 にぶい黄橙色 (10YR6/4) が斑状に混じる | 29. 浅黄色 (2.5Y7/3) 粗粒砂と黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂が互層をなす | 45. 明青灰色 (5B7/1) と青灰色 (5PB5/1) が混じる極細粒砂 |
| 15. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂 にぶい黄橙色 (10YR6/4) が斑状に混じる | 30. 灰白色 (7.5Y8/1) 粗粒砂と浅黄色 (2.5Y7/4) 粗粒砂が互層をなす | 46. 灰色 (5Y4/1) 極細粒砂 |
| | 31. 黒褐色 (7.5Y3/2) 極細粒砂 木片が多く混じる | 47. オリーブ灰色 (7.5GY6/1) 極細粒砂 |
| | | 48. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 極細粒砂 |
- SD1301: 第10層
SD1302: 第1～5・8層
NR1303: 6・7・12・36～48
NR1304: 第18～35層
基盤層: 第13～16層
基盤層ないし漸移層: 第17層

第23図 F13区南壁断ち割り土層断面図



第24図 F13区NR1304自然木出土状況

層で護岸が行われる。第46層が堆積した後、再び第41・44層の護岸が敷粗朶を伴って行われたと考えられる。NR1303と同一遺構である、第4次調査F6区SD0601東肩でも「木材」が出土しており、護岸と評価されている。古墳時代前期～中期の流路が、人の手が加えられながら利用され続け、古墳時代後期に最終的に埋没したと判断される。

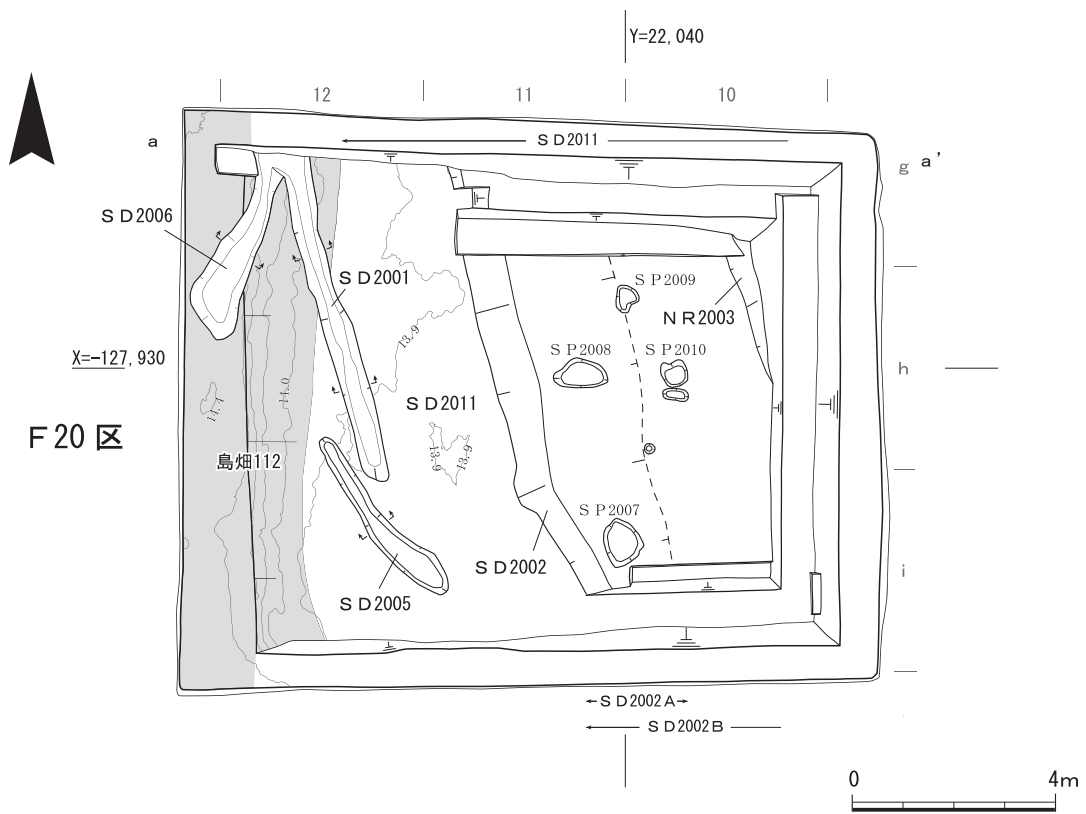
流路NR1304 基盤層下で検出した東西方向の流路で、氾濫流路である。年代測定から縄文時代晩期後葉のものと考えられる。NR1303完掘後、NR1303の西側面で土色変化を検出した。小型重機で基盤層を除去したところ、標高12.7m付近で東西方向の流路を平面的にも検出した。遺物は出土していないが、調査区南壁の第34・35層で採取した年代測定試料からは647-547calBC (55.68%)の年代を得ている。NR1304の底面からは長さ0.1m～3.0m・直径0.05～0.25mの自然木が多数出土した。木津川の氾濫により周辺の樹木が流出したものとみられ、流路と主軸方向をほぼ合わせている。流出木は、根の側が下になり引きずられる形で流れるが、今回の自然木では葉先や根の方向は分からなかった。出土した自然木中から5点で樹種同定を行ったところ落葉広葉樹3点、広葉樹1点、常緑広葉樹1点の結果が得られた。

2) F20区の調査

(1) 調査状況

当橋脚予定地中央の調査地である。本体工事側による盛土・表土の掘削の掘削に立ち会ったところ、標高14.3m付近において調査区西端部で基盤層を検出したため、掘削停止を指示した。その後、南北9.9m・東西13.1mの調査区を設定し、小型重機を用いて調査区の東へ向けて下る基盤層の露出作業を実施した。遺構検出の結果、鳥畑・溝状遺構・流路を検出した。

出土遺物の概要 本調査区から出土した遺物の総量は整理箱10箱分である。このうちSD2002出土遺物が7箱を占める。弥生土器はほぼ見当たらず、古墳時代～飛鳥時代の土師器・須恵器が主体をしめる。このほか瓦器片が出土している。



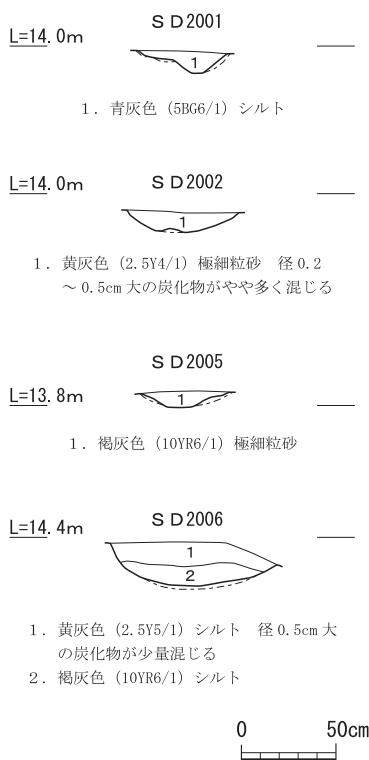
第25図 F 20区遺構平面図

(2) 検出遺構

島畑112 調査区西端部で検出した南北方向の島畑である。基盤層を削り出すように作られる、最初期の島畑である。島畑頂部の標高は14.3mで、低位部から西に向かってなだらかに高くなる。島畑頂部と低位部の比高は0.4mである。島畑頂部で小溝等は検出されなかった。

溝状遺構 S D 2011 島畑低位部である。調査区西端部の島畑112から連なり、東の調査区外まで延びる。北壁断面で第2・3層が埋土にあたる。底面は平坦で、小溝等は検出されなかった。

溝 S D 2001・2006 調査区西部の基盤層上で検出した斜行する溝である。S D 2001は検出長6.9m、幅0.5m、深さ0.34m。S D 2006は検出長3.8m、幅0.9m、深さ0.3mである。どちらも北側は調査区外へ延びる。埋土の特徴が似ており平面検出時に前後関係は分からなかった。調査区北壁での土層観察では、S D 2001(北壁第5層)がS D 2006(北壁第6・7層)を切っている。S D 2001は溝状遺構 S D 2011の埋土である北壁第2層に切られ



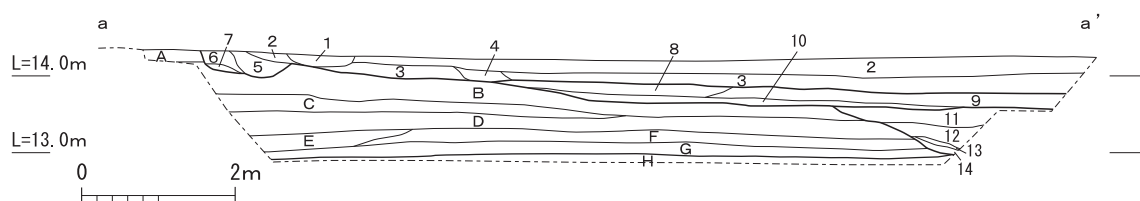
第26図 F 20区 S D 2001・2002・2005・2006土層断面図

るため、これらは鳥畑以前の溝と判断できる。遺物は飛鳥時代とみられる土師器が出土している。

溝 S D 2005 溝状遺構 S D 2011の底面である基盤層上で検出した。検出長3.9m、幅0.48m、深さ0.08mである。鳥畑との前後関係は不明であるが、S D 2001・2006と同じく斜行する溝であることから鳥畑以前のものと推測される。遺物は古墳時代～飛鳥時代の須恵器杯H片、土師器甕片が出土している。

溝 S D 2002 溝状遺構2011の底面である基盤層上で検出した、南北方向で幅広の溝である。F 13区の S D 1302と同一遺構であり、飛鳥時代のものである。底面は平坦で、S P 2007～2010を検出したが半裁してみると深さ0.04m程度の皿状の断面で、地形の凹凸であると判断した。西へ向かってなだらかに立ち上がり、東側は調査区外へ延びる。深さは0.18mである。S D 2002の遺構掘削時、西端部において幅2.5mの南北溝状に埋土が異なる部分を確認した。調査区北壁断面の第8層にあたり、この部分についてはS D 2002Aとして、残りはS D 2002Bとして掘削した。S D 2002A・Bともに埋土から土師器・須恵器が多く出土している。

流路 N R 2003 調査区北東隅において検出した南北方向の流路である。S D 2002の底面である基盤層上で検出した。F 13区の流路 N R 1303と同一遺構で、氾濫流路である。調査区隅で検出したため、検出面から0.1m程度の深さまでしか掘削できなかった。重機による断ち割り調査時、検出面から0.6mの深さである標高12.96mまで東側になり、調査区外へ延びる状況を調査区北壁で確認している。遺物は出土していない。



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰色 (5Y4/1) 細粒砂 〈重機削時の浮いた土〉 2. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂混じりシルト 〈SD2011〉 3. 灰色 (5Y5/1) シルト 〈SD2011〉 4. 青灰色 (5B5/1) シルト 色調が暗く有機化する 5. 青灰色シルト (5BG6/1) シルト 第7層に比して やや砂味が強し〈SD2001〉 6. 明青灰色 (5BG7/1) シルト 灰色 (5Y5/1) シルトが径1cm大の斑状に10%混じる〈SD2006〉 7. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト 粘質〈SD2006〉 8. 灰色 (5Y5/1) シルト 径0.5～1cm大の炭化物が多く混じる 土器片が非常に多く混じる〈SD2002A〉 9. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト 明黄褐色 (10YR7/6) が径0.5cm大の斑状に20%混じる 土器片が多く混じる 〈SD2002B〉 10. 明青灰色 (5BG7/1) シルト やや粘質 明黄褐色 (10YR7/6) が径0.5cm大の斑状に7%混じる〈SD2002B〉 11. 灰色 (5Y6/1) シルト〈NR2003〉 | <ol style="list-style-type: none"> 13. 褐灰色 (10YR4/1) シルト 12層と14層が混じった層 〈NR2003〉 14. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) シルト 粘質 〈NR2003〉 A. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト 〈基盤層〉 B. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト やや粘質 明黄褐色 (2.5Y7/6) が径0.5cm大の斑状に20%混じる 〈基盤層〉 C. 灰白色 (7Y7/2) シルト やや粘質 明黄褐色 (2.5Y7/6) が径1cm大の斑状に10%混じる 〈基盤層〉 D. 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト やや粘質 明黄褐色 (2.5Y7/6) が径1cm大の斑状に20%混じる 〈基盤層〉 E. 灰白色 (5Y8/1) シルト やや粘質 明黄褐色 (2.5Y7/6) が径0.5～1cm大の斑状に40%混じる 〈基盤層〉 F. 灰白色 (5Y8/1) シルト やや粘質 明黄褐色 (2.5Y7/6) が径0.5～1cm大の斑状に20%混じる 〈基盤層〉 G. 明緑灰色 (7.5GY7/1) シルト 〈基盤層〉 H. 緑灰色 (10G6/1) シルト 粘質 還元雰囲気呈する いわゆる粘土層 〈湖沼性堆積〉 |
|--|---|

第27図 F 20区北壁断ち割り土層断面図

(3) 下層確認調査

調査の最終盤に、重機を使用して調査区北壁で断ち割りを実施した。掘削は標高12.8mまで行った。基盤層である洪水性堆積層(A～G層)は、標高12.9～13.0mの高さまで存在し、これより下位(H層)は湖沼性堆積層である。基盤層の厚さは、島畑頂部から測ると1.4mとなる。なおこの断割り調査時に遺構・遺物は検出されなかった。

3) F14区の調査

(1) 調査状況

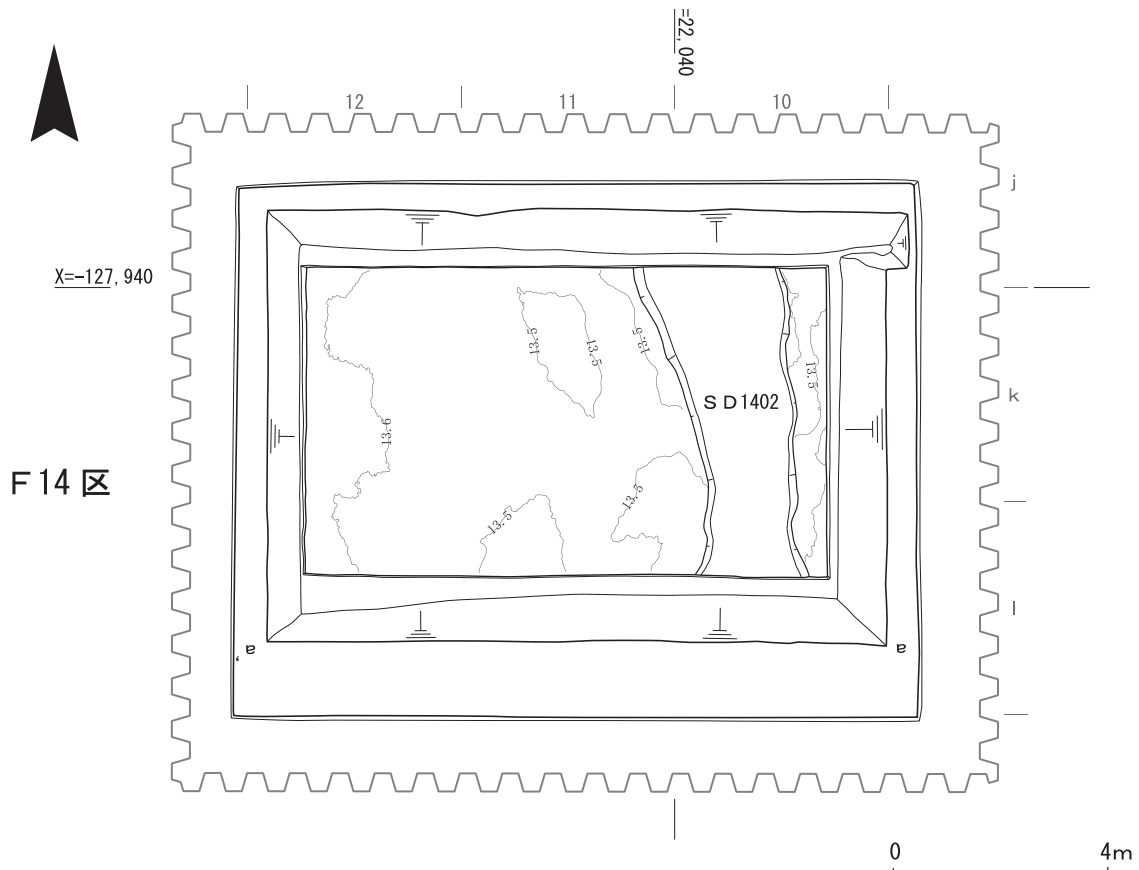
当橋脚予定地南部の調査地である。本体工事側の盛土・表土掘削時に当センター職員が立ち会ったところ、調査区西端部において標高14.4m付近の高さで第8層を検出した。第8層は浅黄橙色のシルトで、土の締まりも強かったため基盤層と判断して掘削停止を指示した。これは後に誤認と判明する。調査地引き受け後、土留め内の南辺に昇降階段を設置し、南北8.3m・東西11.3mの調査区を設定した。人力で調査区各辺で断割を実施して断面観察したところ、実際の基盤層が0.8m程度下の存在することが判明したため、小型重機を搬入して追加の掘削を実施した。基盤層の検出高は標高13.6m付近である。

北壁での土層観察では、堆積層はいずれもシルトで洪水に由来するものである。しかし連続的なラミナや砂層が認められないことから、洪水堆積層が人為的に動かされたものと判断した。第2層からは灰釉陶器(第55図85)が出土している。基盤層上の第13・14層は色調が暗く、弱く有機化する層である。他の調査区において、島畑頂部の基盤層は標高14.0m以上で検出されているが、これと比べると当調査区での基盤層の検出高は低い。よって当調査区全体が島畑間の低位部に該当する可能性がある。その場合は第13・14層は水田層と考えられる。基盤層面で遺構検出した結果、溝を検出した。

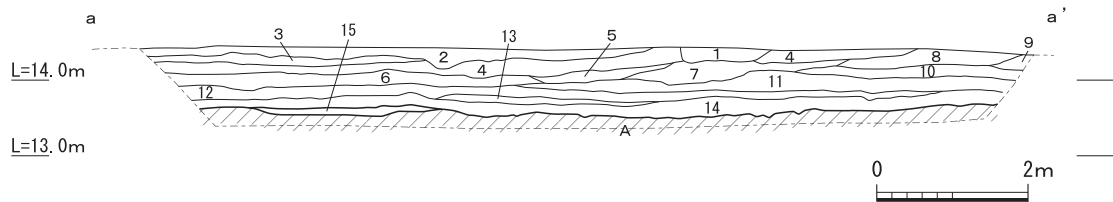
出土遺物の概要 本調査区から出土した土器の総量は、整理箱5箱分である。土師器・須恵器が中心で、飛鳥時代を中心としているが奈良時代の須恵器も認められる。堆積層の掘削中、北壁の第1～5・6～10層に相当する層から、瓦器・布目を持つ瓦片が出土している。また第11・12層に相当する部分を掘削中に瓦器片が出土した。第13～15層を掘削時や基盤層面での精査中には、残存状況の良い弥生時代中期の土器が複数出土している。

(2) 検出遺構

溝 S D 1402 F13区 S D 1302、F20区の S D 2002 と同一遺構である。S D 1302 の北壁第22層・南壁第8層、F20区の S D 2002A に対応する幅の狭い部分のみを検出しているため、溝の幅が広い部分はF14区とF20区の間で途絶えているものと想定される。東西両肩の立ち上がりは非常になだらかで、深さは0.08～0.15mと浅い。遺物は土師器・須恵器片が出土しており、時期が分かるものでは飛鳥Ⅰ・Ⅱ頃の須恵器杯H片が出土している。



第28図 F14区遺構平面図



- | | |
|---|--|
| 1. 浅黄色 (2.5Y7/2) シルト | 10. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト 粘質 |
| 2. 灰黄褐色 (10YR6/2) 極細粒砂混じり中粒砂 いわゆる砂層 | 11. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト 粘質 |
| 3. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 粘質 やや砂味が強い | 12. 灰色 (2.5Y6/1) シルト |
| 4. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 粘質 | 13. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 強い粘質 色調が暗く有機化する
植物痕跡と考えられるが径0.5～1cm大の斑が少量混じる |
| 5. 灰色 (5Y5/1) シルト 粘質 | 14. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 強い粘質 色調が暗く有機化する |
| 6. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト 粘質 植物痕跡と考えられる浅
黄褐色 (10YR8/4) が径0.5cm大の斑状に40%混じる | 15. 褐灰色 (7.5YR6/1) シルト 粘質 (SD1402) |
| 7. 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト | A. 灰白色 (10YR8/1) シルト 粘質 植物痕跡と考えられるにぶ
い黄褐色 (10YR6/4) シルトが径0.5cmの斑状に40%混じる
(基盤層) |
| 8. 浅黄橙色 (10YR8/3) シルト 色調が明るい | |
| 9. 灰白色 (2.5Y6/2) シルト 粘質 | |

第29図 F14区南壁土層断面図

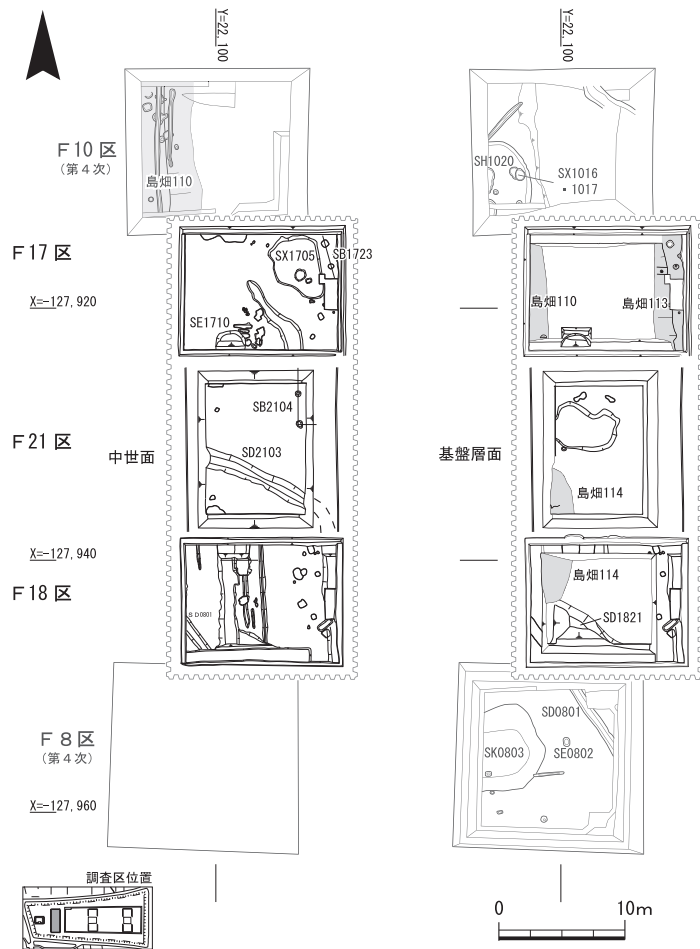
6. F17・21・18区の調査

既往の調査 平成25年度の第4次調査では、当橋脚予定地のすぐ南でF8区、北でF10区の調査を実施している。F8区の調査時の地表面は標高15.6m付近である。標高14.2m付近で検出した第15層上面が弥生時代から古代にかけての遺構面であり、古墳時代後期の溝SD0801、弥生時代の土坑SK0803、時期不明の井戸SE0802などを検出している。F10区の調査時の地表面は標高15.6m付近である。標高14.5mで検出した第10層を検出し、これを上面とする「中世の島畑」とされる「島畑110」が報告されている。島畑の下位で検出した第16・17層上面(標高14.2m)が弥生時代後期の遺構面とされ、竪穴建物SH1020や土器溜まりSX1016・1017、溝などが検出されている。

調査過程 調査対象地西部の橋脚予定地で、調整池のすぐ西側に位置する。地盤高は18.6m付近である。調整池からは一段高くなった場所であり、調整池底面との比高は約2mある。遺構検出面である基盤層までは約4.6mの深さがある。令和2年度の第11次調査中にF17・18区の鋼矢板打設、腹起し・切り梁の設置、盛土・表土の掘削が本体工事側により行われた。その後、当センターで調査を実施・終了し、発掘調査で発生した排土については当センター側で埋め戻した。

令和3年度の第12次調査着手前には、F17区とF18区を連結させる形の土留め工事とF21区部分の盛土・表土の掘削が本体工事側で行われた。当センターで発掘調査を実施・終了後、発掘調査で発生した排土を埋め戻して調査区を引き渡した。第4次調査のF8・10区の調査では、

ともに標高14.2m付近が遺構面の上面となっている。これを受けて今回の調査でも同じ高さで遺構検出を実施した。しかし今回の調査成果によると、標高14.2m付近は基盤層を掘り込んだ島畑の頂部にあたり、第4次調査時にはこの点を認識できていなかったようである。結果的に今回の調査では、①中世面となる島畑頂部の基盤層面と低位部堆積土上、②堆積土を除去した基盤層上の2面で調査することになった。



第30図 F17・21・18区配置図

1) F17区の調査

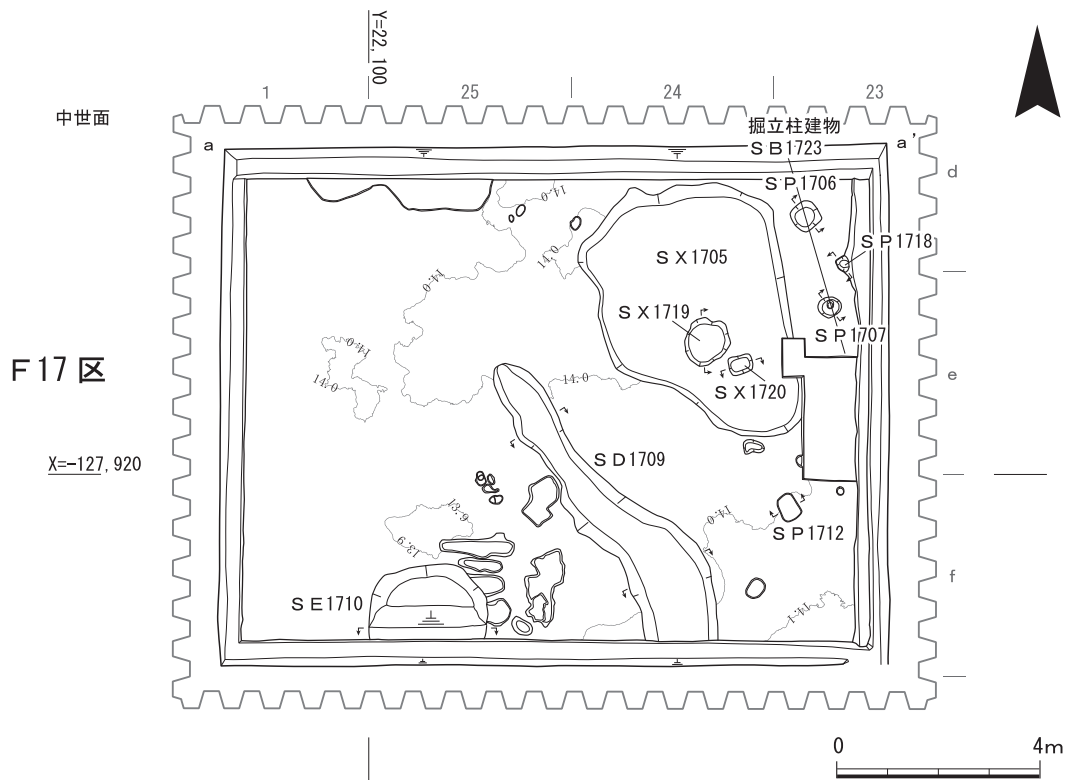
(1)調査状況

当橋脚予定地北部の調査地である。本体工事側により盛土・表土の掘削が行われたが、当センターの指定よりやや深い標高14.1mまで掘削が行われた。当センター側で調査地を引き受け後、東辺に昇降階段を設置し南北10.3m・東西13.2mの調査区を設定した。昇降階段があるため、調査区は凹形となっている。調査区の北・南辺において基盤層まで断割りを実施したところ、島畑低位部の堆積層から弥生土器・須恵器・土師器・瓦器が出土した。第1回目の遺構検出は、島畑低位部の堆積土である北壁土層断面の第5層に相当する標高で実施したが、SX1705以東については基盤層が露出していた。結果、掘立柱建物・井戸・落込み・溝を検出した。中世面での調査が終了後、小型重機を搬入して低位部埋土の掘削を行い、基盤層面で精査を実施した。基盤層面で精査したところ島畑・島畑間の低位部である溝状遺構を検出した。

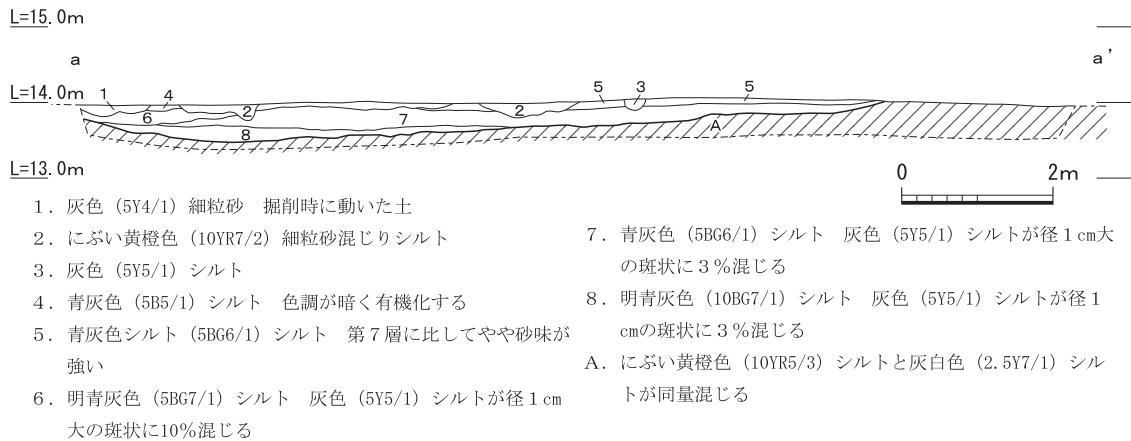
出土遺物の概要 本調査区から出土した土器の総量は整理箱7箱分である。ほとんどが弥生土器で、その他に土師器・須恵器・瓦器、布瓦が出土している。

(2)検出遺構(中世面)

掘立柱建物SB1723 SP1706とSP1707で構成される。柱間は5尺(1.8m)である。調査区外へ延びているため全容が不明であり、柵の可能性もある。方位は北で16度西へ振れる。SP1706は整った正方形の堀形をもち、深さは0.2mである。SP1707は円形の堀形で、深さは0.22mである。どちらの柱穴も島畑113の頂部にあたる基盤層上で確認した。埋土からは弥生土器と1器



第31図 F17区遺構平面図(中世面)



第32図 F17区北壁土層断面図

の細片が出土している。F17・18区の中世面の堆積土上で検出した柱穴は、底面が基盤層面まで及んでいない。よって本調査区のS B1723も中世面に属するものと判断した。

井戸 S E1710 円形の掘形をもつ井戸で、12世紀後半のものである。井戸枠等はないが、側面がほぼ垂直に立ち上がり、1.5mの深さを持つことから井戸と判断した。北半部のみを検出し、掘形は東西2.4mを測る。調査区の壁際に位置し掘削深度が胸の高さに達したため、安全面から途中で掘削を停止している。埋土は第1・2層に瓦器を中心にして比較的多くの土器を含んでおり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

落込み S X1705 中世面で検出した不整形の落込みである。埋土からは多量の弥生土器が出土したほか、古墳時代と考えられる土師器甕片も出土した。弥生土器は器形の分かる大型破片も多く含まれているが、鳥畑低位部の瓦器を含む堆積層上での検出であるため、確実に鳥畑造営後の遺構である。遺物は再堆積と判断される。

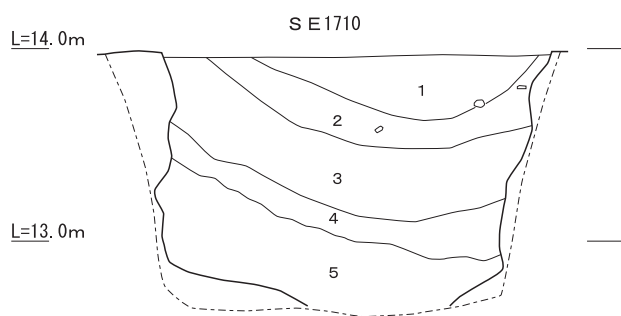
S X1705の底面からはS X1790とS X1720を検出した。いずれも円形の掘形を持ち、深さは0.1m程度である。遺物は出土しなかった。S X1719は埋土に炭が非常に多く混じっていた。

溝 S D1709 調査区の南部で検出した、南北方向の不定形な溝である。検出長は6.6mで、南は調査区外へ延びている。幅は0.8~1.58m、深さは0.1~0.12mである。埋土からは弥生土器・土師器甕片が出土している。

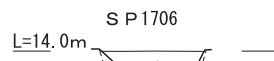
柱穴 S P1712 調査区南東部の基盤層上で検出したピットである。建物の復原できないが、0.45m×0.38mの整った方形の掘形を持っており、建物の柱穴であると考えられる。土層断面では抜き取り状の痕跡(第1・2層)が認められる。遺物は、柱穴掘形にあたる第3層から弥生土器の細片が出土している。

(3) 検出遺構(基盤層面)

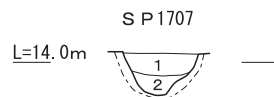
鳥畑110 調査区の西端部で検出した南北方向の鳥畑で、基盤層を掘り込んで作られる最初期の鳥畑である。第4次調査F10区で報告された「鳥畑110」とは層位的には対応しない。人工ケバで表現されたF10区西半部の第17層の高まりが、本鳥畑に対応すると考えられる。鳥畑の東側面を検出したのみで、鳥畑上面は調査区西外にあるものと見られる。鳥畑低位部との比高0.5m



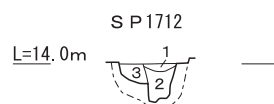
1. 暗灰黄色 (2.5YR5/2) シルト 粘質 径0.2～5cm大の炭化物が少量混じる 土器がやや多く混じる 有機化する
2. 灰黄色 (10Y6/2) シルト 粘質 径0.2～1cm大の炭化物が少量混じる 土器がやや多く混じる 有機化する
3. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト 灰白色 (2.5Y8/1) シルトがブロック状に30%混じる
4. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト 灰白色 (2.5Y8/1) シルトがブロック状に40%混じる
5. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト 粘質 灰黄褐色 (10YR6/2) シルトが20%混じる 有機化する



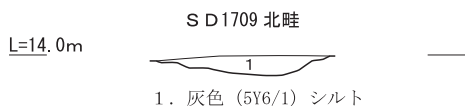
1. 褐灰色 (10YR6/1) シルト



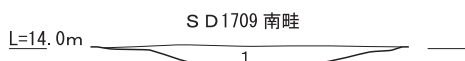
1. 褐灰色 (10YR6/1) シルト
2. にぶい黄褐色 (10YR7/3) シルト



1. 褐灰色 (10YR5/1) シルト 径0.5cm大の炭化物が多く混じる
2. 灰白色 (10YR7/1) シルト
3. 褐灰色 (10YR6/1) シルト



1. 灰色 (5Y6/1) シルト



1. 黄灰色 (2.5YR6/1) シルト



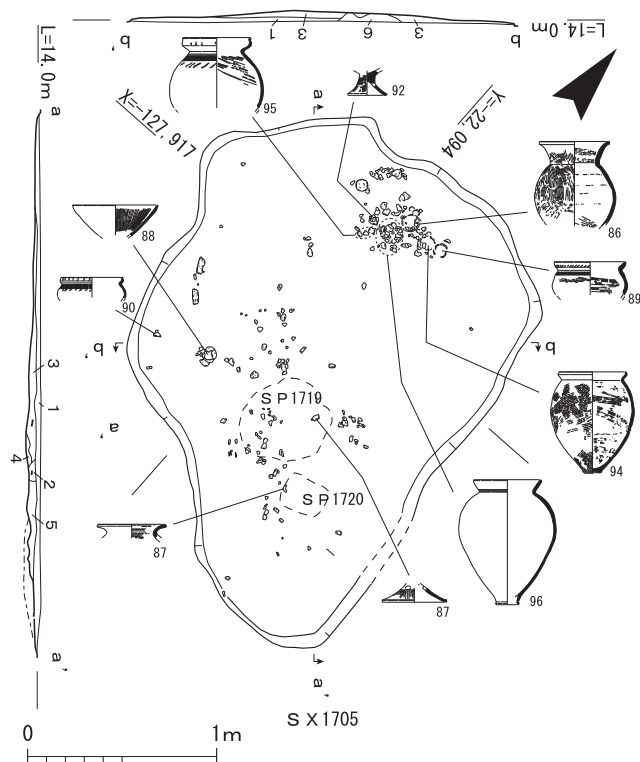
1. 褐灰色 (10YR6/2) シルト



1. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 径0.5cm大の炭化物が多量に混じる
2. 黒褐色 (10YR3/1) シルト 炭化物が非常に多く混じる

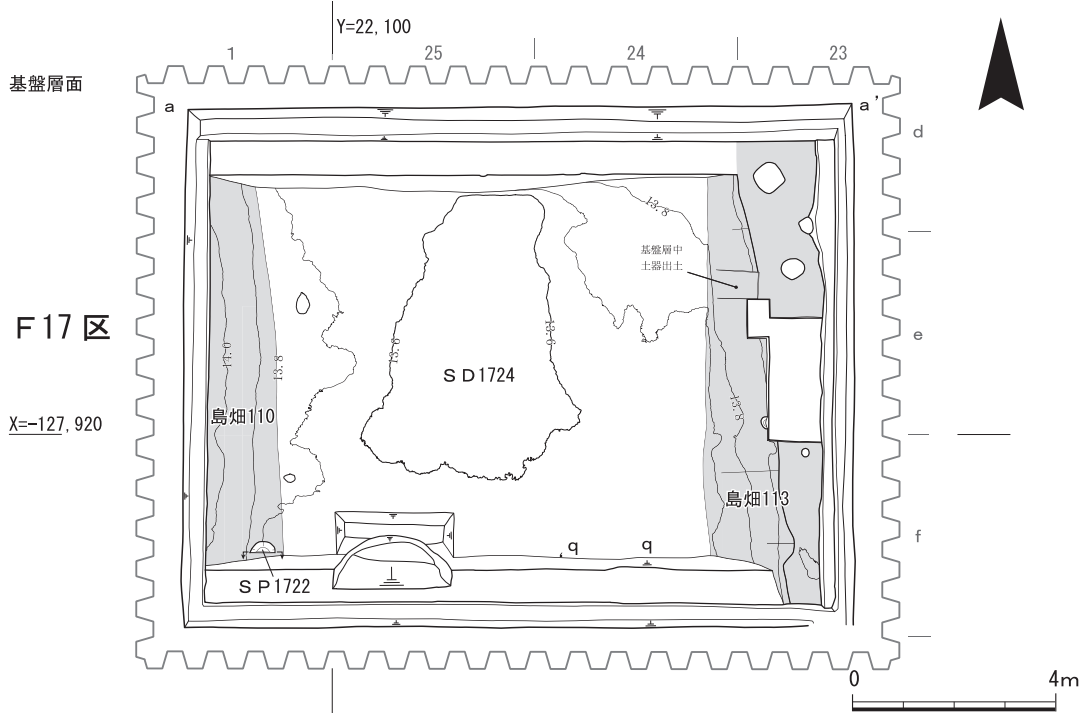


1. 褐灰色 (10YR6/1) シルト

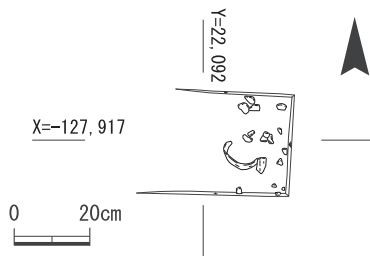


1. 淡黄色 (2.5Y8/6) シルト 径0.2～0.5cm大の炭化物が少量混じる
2. 褐灰色 (10YR6/1) シルト
3. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 径0.5cm大の炭化物が多く混じる
4. 灰色 (5Y6/1) シルト 粘質
5. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 灰色 (2.5Y7/1) シルトがブロック状に20%混じる
6. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 径0.2cm大の炭化物が多く混じる

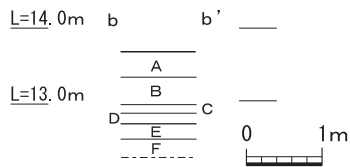
第33図 F17区中世面検出遺構土層断面図



第34図 F17区遺構平面図(基盤層面)



第35図 基盤層中遺物出土状況



- A. にぶい黄橙色 (10YR6/3) シルト 粘質
にぶい黄褐色 (10YR5/3) が径0.2cm大の斑状に50%混じる
- B. にぶい黄橙色 (10YR7/2) シルト 粘質
A層に比べて砂味が強い にぶい黄褐色 (10YR5/3) が径0.5cm大の斑状に40%混じる
- C. にぶい黄橙色 (10YR7/2) シルト 粘質
にぶい黄褐色 (10YR5/3) が径0.2cm大で10%混じる 植物痕跡と考えられる径0.5cm大の鉄分班が10%混じる
- D. にぶい黄褐色 (10YR7/2) シルト C-Eの漸移層
- E. 灰白色 (10YR7/1) シルト 粘質 径0.5cm大の鉄分班が2%混じる 径0.1cm大の炭化物が少量混じる
- F. 灰白色 (10YR7/1) シルト 粘質 径0.5cm大の鉄分班が50%混じる

第36図 F17区南壁断ち割り土層断面

である。

鳥畑113 調査区の東端部で検出した南北方向の鳥畑で、基盤層を掘り込んで作られる最初期の鳥畑である。鳥畑上面の標高は14.1mであるが、本体工事側の掘削で若干削平されているものとみられる。鳥畑西側面の北半部において、基盤層中に土器が含まれているのを検出したため、平面的に0.1m掘り下げたところ弥生時代後期の土器が出土した(第55図109・110)。

溝状遺構 S D 1724 鳥畑110と鳥畑113間の低位部である。底面はほぼ平坦で、小溝等は検出されなかった。

小土坑 S P 1722 鳥畑110の東側面にあたる、調査区南西隅部の基盤層上で検出した直径0.44mの円形の土坑である。深さは0.13mで、遺物の出土はない。

(4) 下層確認調査

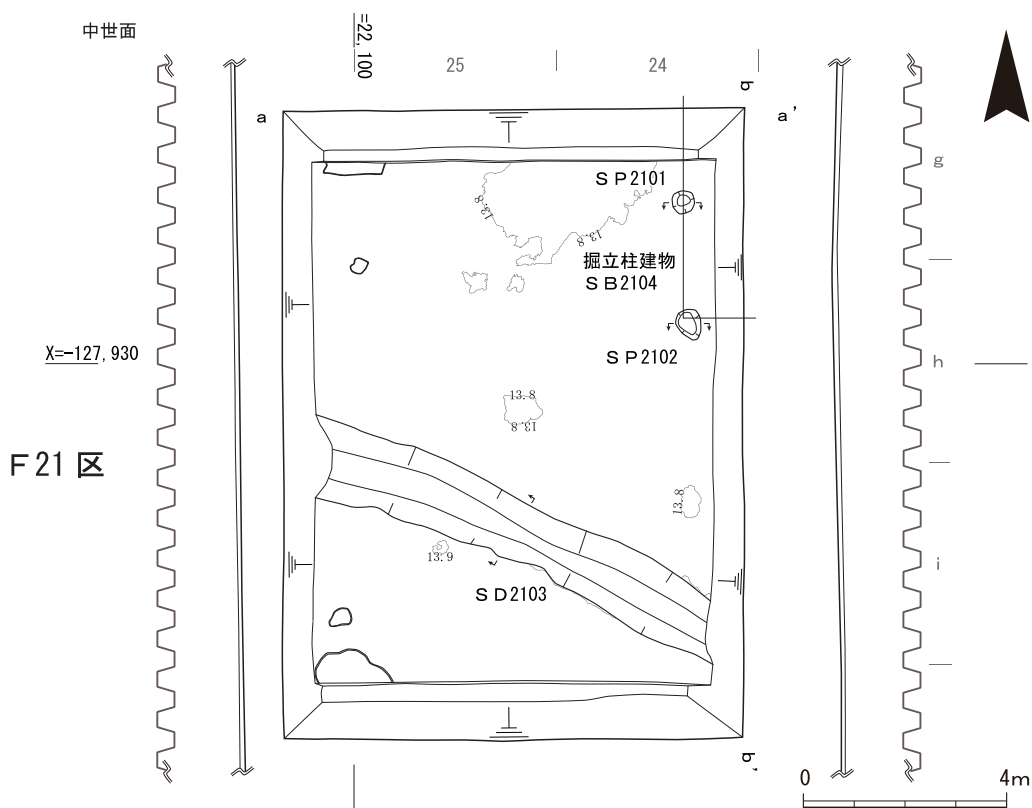
調査の最終盤に小型重機を用いて調査区南壁の東半部において、標高12.2mまで断割調査を実施した。基盤層(A～C層)は標高12.9mの深さまで確認できた。基盤層の厚さは約1.2mである。湖沼性の堆積層(E・F層)は標高12.7m以下で確認できた。基盤層と湖沼性堆積の間(D層)は漸移層である。基盤層の下では遺構・遺物は確認されなかった。

2) F21区の調査

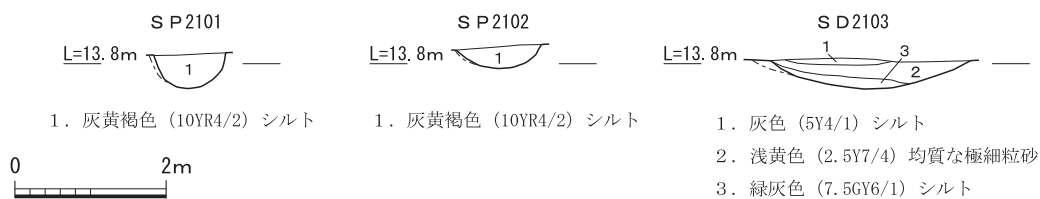
(1) 調査状況

当橋脚予定地中央の調査区である。本体工事側で標高14.5m付近までの盛土・表土の掘削が行われた状況で調査地を引き受けた。土留め内に昇降階段を設置後、南北12.5m・東西9.2mの調査区を設定した。その後、小型重機を搬入してF17・18区の中世面と同じ標高14.2m付近まで掘削して精査を行った。この標高は本調査区の北・東壁土層断面では第2層上面に相当しており、第2層からは瓦器細片が出土している。しかし小型重機での掘削終了後、雨天が続いたため調査区内が水没し泥濘状態となった。そのため最終的には第4・5層中である標高14.0m弱で中世面の遺構を検出することになり、F17・F18区の中世面で検出された遺構の広がりや確認できない結果となった。中世面での調査が終了後、再び小型重機を搬入して基盤層まで掘削を行い、基盤層面で精査を実施した。遺構検出の結果、中世面では掘立柱建物・溝を検出した。基盤層面では島畑・島畑低位部の溝状遺構を検出した。

出土遺物の概要 本調査区から出土した遺物の総量は整理箱1箱分である。弥生土器が主体を



第37図 F21区遺構平面図(中世面)



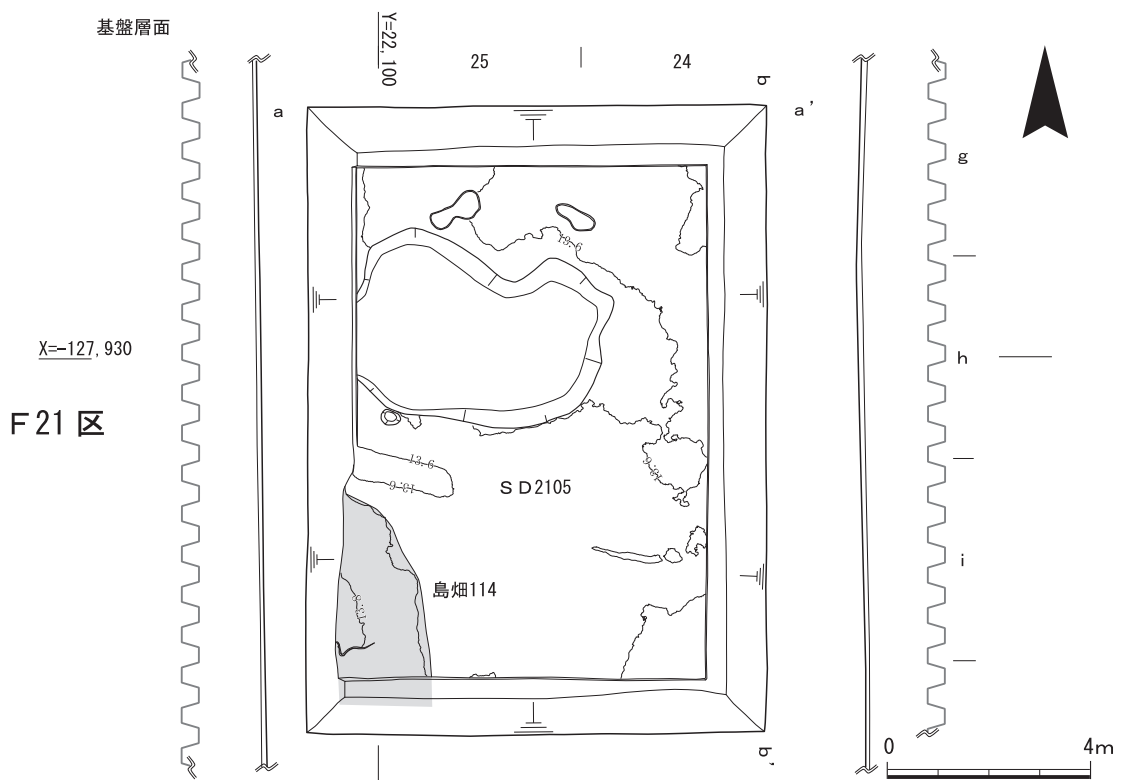
第38図 F21区S P2101・2102・2103土層断面図

占め、他には古墳時代～古代の須恵器・瓦器・布目瓦片が出土している。

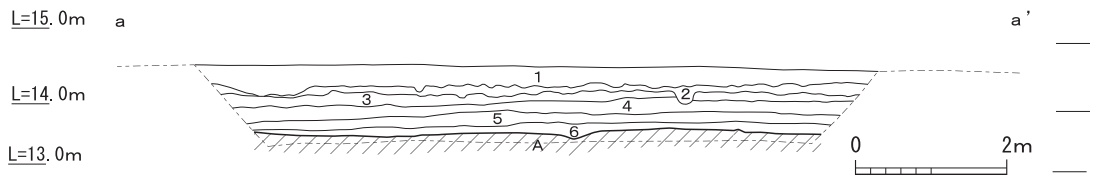
(2) 検出遺構(中世面)

掘立柱建物 S B 2104 S P 2101と S P 2102で構成されている。どちらも円形の堀形を持ち、深さは0.12mと0.2mであるが、検出面が低くなった経緯があり、本来はより深い柱穴であると考えられる。柱間は8尺(2.4m)で、方位は正方位をとる。柵である可能性もある。S P 2101からは弥生土器・古代と考えられる土師器杯類の細片が出土している。S P 2102からは弥生土器・土師器の細片が出土している。

溝 S D 2103 幅0.95mの溝で、F 18区 S D 1809につながる可能性がある。埋土にはラミナ等の流水の痕跡は認められない。遺物は弥生土器が少量出土している。



第39図 F 21区遺構平面図(基盤層面)



1. にぶい橙色 (7.5YR7/3) 極細粒砂 砂味が強い 所々でラミナ構造が認められるが部分的であり連続していない 洪水による堆積が人為的に攪乱か
 2. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト シルト やや粘質 色調が暗く有機化する 水田耕作土か
 3. 明褐灰色 (5YR7/1) シルト 第2層の影響を受けて色調がやや暗い
 4. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径5cm大の斑状に10%混じる
 5. 灰色 (5Y6/1) シルト にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径0.5cm大の斑状に15%混じる
 6. 灰色 (2.5Y6/1) シルト 第5層に比してやや粘性がある にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径0.5cm大の斑状に7%混じる
- A. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 粘質 にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径0.5～1cm大の斑状に40%混ざり層全体としては茶褐色を呈する(基盤層)

第40図 F 21区北壁土層断面図

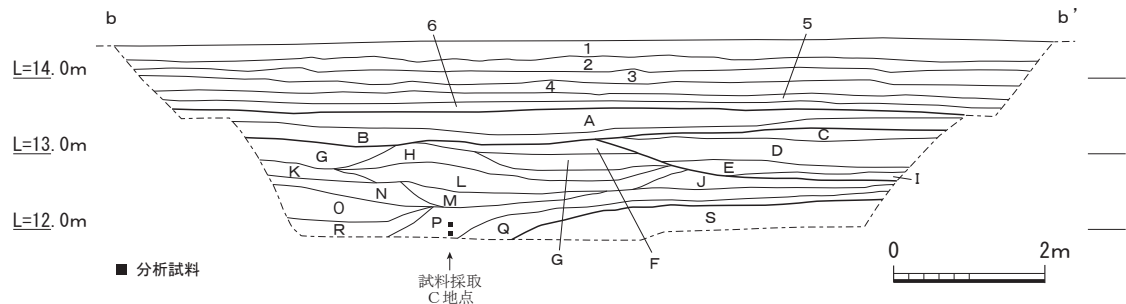
(3) 検出遺構(基盤層面)

鳥畑114 調査区の南西隅で検出した、基盤層を掘り込む最初期の鳥畑である。鳥畑の東側面を確認したのみで、上面は調査区外にある。F18区でも続きが検出されているが、南北方向に長く伸びないため、東西方向の鳥畑に復原される。

溝状遺構 S D2105 鳥畑間の低位部である。底面で小溝等は検出されなかったが、調査区北半部の S D2105底面において大小の円形の落込みを検出した。半裁して断面観察等を行った結果、自然の凹凸と判断した。

(4) 下層確認調査

基盤層下の状況を確認するため、調査最終盤に調査区東半部の断割調査を実施した。断割最深部の標高は11.9mである。調査区東壁土層断面の観察では、標高13.1mで湖沼性の堆積層(H層)を検出した。湖沼性の堆積層中には厚さ20cmの有機物層があり、調査区北側へ向かって落ち込んで氾濫流路となっている。掘削時に確認した平面の状況では、東西方向で、西で南へ振れる方位をもっていた。落込み部では有機層の厚さが70cm以上あることを確認したが、安全面から標高11.9mの高さで掘削を停止している。有機物層には自然木や種実が多量に含まれており、ラミナ構造が見られた。氾濫流路埋土であるP層から分析試料を採集しており、年代では829-



- | | |
|---|---|
| <p>1. にぶい橙色 (7.5YR7/3) 極細粒砂 砂味が強い 所々でラミナ構造が認められるが連続しない 洪水による堆積が人為的に攪乱か</p> <p>2. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト シルト やや粘質 色調が暗く有機化する 水田耕作土か</p> <p>3. 明褐灰色 (5YR7/1) シルト 第2層の影響を受けて色調がやや暗い</p> <p>4. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径5cm大の斑状に10%混じる</p> <p>5. 灰色 (5Y6/1) シルト にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径0.5cm大の斑状に15%混じる</p> <p>6. 灰色 (2.5Y6/1) シルト 第5層に比してやや粘性がある にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径0.5cm大の斑状に7%混じる</p> <p>A. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 粘質 にぶい黄橙色 (10YR7/4) が径0.5～1cm大の斑状に40%混じり層全体は茶褐色を呈する(基盤層)</p> <p>B. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト (基盤層)</p> <p>C. 浅黄橙色 (10YR8/3) シルト 黄橙色 (10YR8/6) が径0.3cmの斑状に20%混じる</p> <p>D. 浅黄橙色 (7.5YR8/3) シルト 黄橙色 (10YR8/6) が径0.3cmの斑状に20%混じる</p> <p>E. 黄色 (2.5Y8/6) 極細粒砂</p> | <p>F. 灰黄色 (2.5Y7/2) 均質な極細粒砂～シルト いわゆる微砂層</p> <p>G. 灰白色 (2.5Y7/1) 均質な極細粒砂 いわゆる微砂層</p> <p>H. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 極細粒砂～シルト (湖沼性)</p> <p>I. 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂 E-J層が混じる層</p> <p>J. 灰白色 (5Y7/1) 均質なシルト 粘質 (有機物混)</p> <p>K. 灰色 (5Y6/1) 均質なシルト 均質 (湖沼性)</p> <p>L. 灰色 (5Y6/1) 細粒砂混じりシルト いわゆる砂層 有機物が40%混じる (有機物層)</p> <p>M. 灰白色 (2.5Y8/1) 細粒砂 いわゆる砂層 ラミナを呈し有機物が40%混じる (有機物層)</p> <p>N. 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂混じりシルト (有機物層)</p> <p>O. 灰白色 (10YR8/1) 中粒砂混じり細粒砂 いわゆる砂層 ラミナを呈し有機物が10%混じる (有機物混砂層)</p> <p>P. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト 径30cm程度の木材、枝・葉・種子等有機物が多量に混じる (有機物層)</p> <p>Q. 灰白色 (5Y8/1) 均質なシルト 粘質 S層にP層が40%混 (有機物層)</p> <p>R. 灰白色 (2.5Y8/1) 細粒砂 いわゆる砂層 ラミナを呈し有機物が混じる (有機物層)</p> <p>S. 灰色 (7.5GY8/1) 均質なシルト 粘質 還元雰囲気を呈する(湖沼性)</p> |
|---|---|

第41図 F21区東壁断ち割り土層断面

792calBC (95.45%)の数値が得られている。縄文時代晩期中葉～後葉にあてはまる。自然木の樹種同定ではコナラ属アカガシ亜属、ツバキ属が確認されているが、花粉分析ではコナラ属アカガシ亜属の検出数が突出しているため周辺にはカシ類の林が広がる環境が想定される。なお下層確認調査では人為による遺構・遺物は検出されなかった。

3) F18区の調査

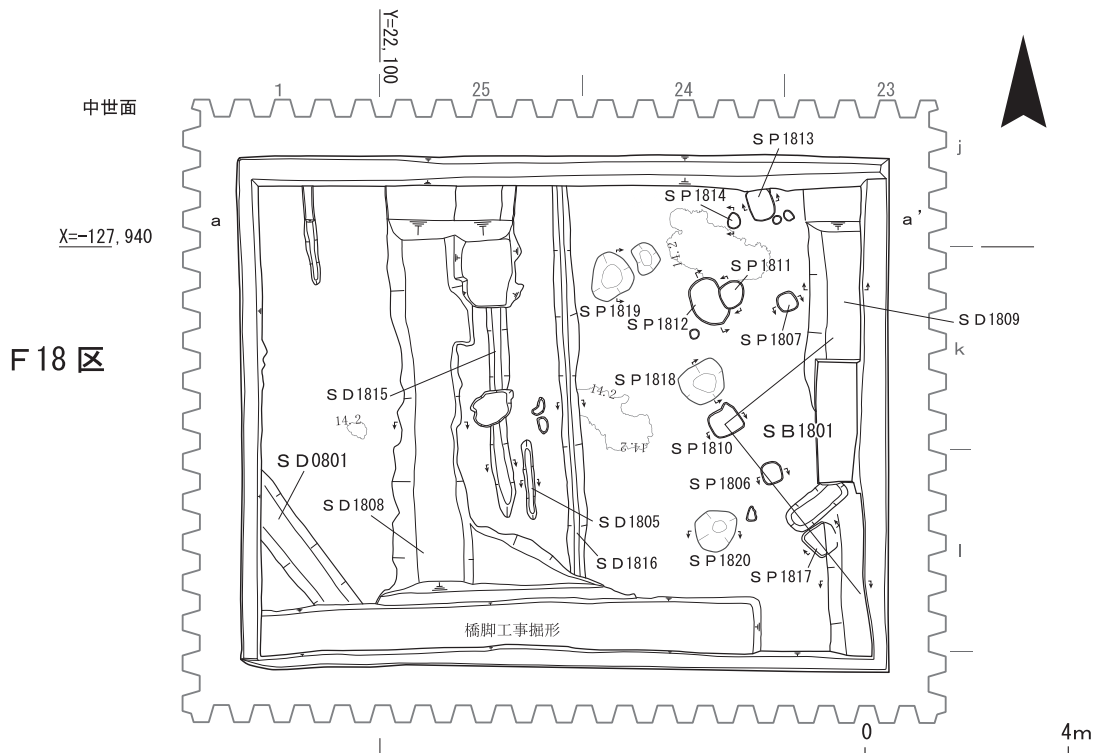
(1) 調査状況

当橋脚予定地南部の調査区である。本体工事側で標高14.25m付近まで盛土・表土の掘削が行われた状況で調査地を引き受けた。土留め内の東辺部に昇降階段を設置後、南北10.2m・東西12.8mの調査区を設定した。調査区の形は昇降設備の影響で凹形となっている。第1回目の遺構検出は、北壁土層断面の第8層中にあたる標高14.2m付近で実施したところ、掘立柱建物・溝・ピットを検出した。SP1818～SP1820については平面を15cm程度鋤取った段階で検出した。調査区の北西隅では、第1回目の遺構検出時に基盤層が露出していた。遺構を記録後、南北8.0m・東西9.0mの範囲を設定し、小型重機で基盤層までの掘削を実施した。基盤層面で遺構検出を実施したところ、島畑・溝状遺構・流路を検出した。

出土遺物の概要 本調査区から出土した遺物の総量は9箱である。弥生土器が主体を占め、その他に古墳時代～飛鳥時代の土師器・須恵器、瓦器、布目瓦が出土している。中世面で検出した溝からは瓦器片が出土している。

(2) 検出遺構(中世面)

掘立柱建物SB1801 SP1806・1810・1817で構成される掘立柱建物跡である。いずれの柱



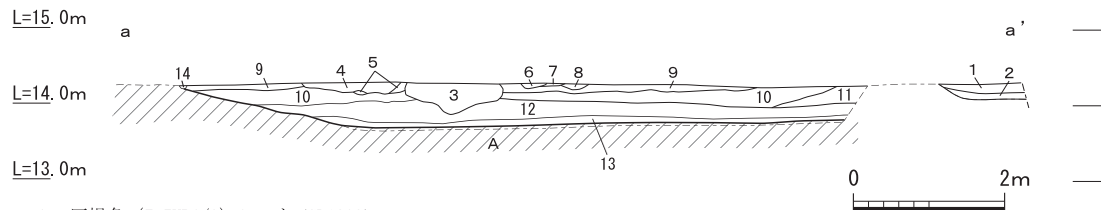
第42図 F18区遺構平面図(中世面)

穴も整った隅丸方形の堀形で、柱間は5尺(1.5m)で等間である。方位は北で37°西へ振れる。遺物はSP1810に瓦器の細片が含まれている。

溝SD0801 調査区南西隅で検出した斜行する溝である。第4次調査F18区検出の溝と繋がるものである。検出高はF8区とほぼ同じ標高14m付近である。第4時調査では古墳時代後期の溝と報告されていた。今回の調査では遺物の出土はないが、検出面から中世とすべきであろう。

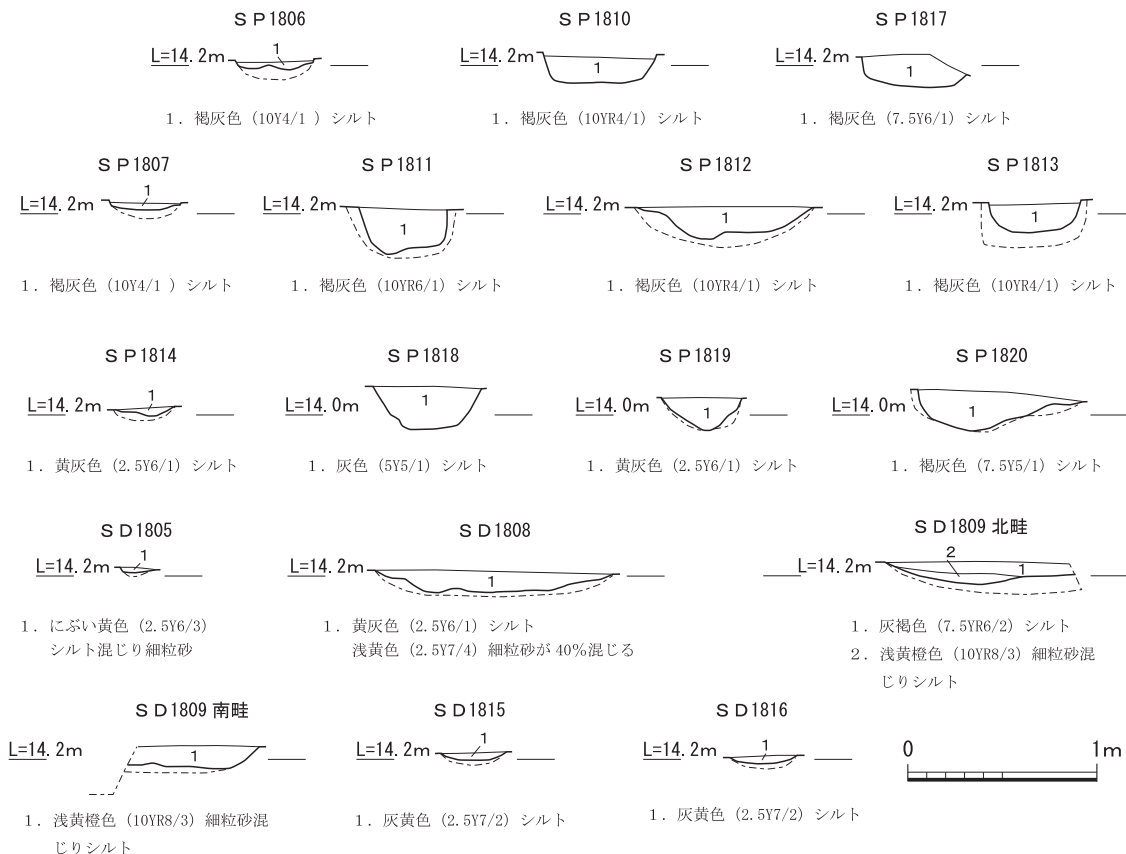
(3) 検出遺構(基盤層面)

島畑114 調査区北西隅で検出した、基盤層を掘り込む最初期の島畑である。東斜面を検出し



- 1. 灰褐色 (7.5YR6/2) シルト <SD1809>
- 2. 浅黄橙色 (10YR8/3) 細粒砂混じりシルト
- 3. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト混じり中粒砂 部分的にラミナが見られる
- 4. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂
- 5. 褐灰色 (10YR6/2) シルト
- 6. 浅黄色 (2.5Y8/3) 細粒砂
- 7. 明褐色 (7.5YR7/1) シルト
- 8. 灰白色 (10YR7/1) 細粒砂混じりシルト
- 9. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト やや粘質
- 10. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂混じりシルト黄灰色
- (2.5Y6/1) シルトが7%混じる 植物痕跡と考えられる径5mm大の鉄分斑が多く混じる
- 11. 明褐色 (7.5YR7/1) シルト
- 12. 灰白色 (10YR7/1) シルト混じり極細粒砂 砂味が強い黄灰色 (2.5Y6/1) シルトが5%混じる 径0.5cm大の鉄分斑が多く混じる
- 13. 灰白色 (10YR7/1) 極細粒砂 砂味が強い
- 14. 褐灰色 (10YR6/1)
- A. 灰白色 (10YR8/1) シルト 砂味がやや強い 黄橙色 (10YR8/8) シルトが径0.5cm大の斑状に50%混じる<基盤層>

第43図 F18区北壁土層断面図



第44図 F18区中世面検出遺構土層断面図

たのみであり、島畑の上面は調査区外に延びる。F21区から続くものであるが、南北方向に長く延びないため、東西方向の島畑と考えられる。

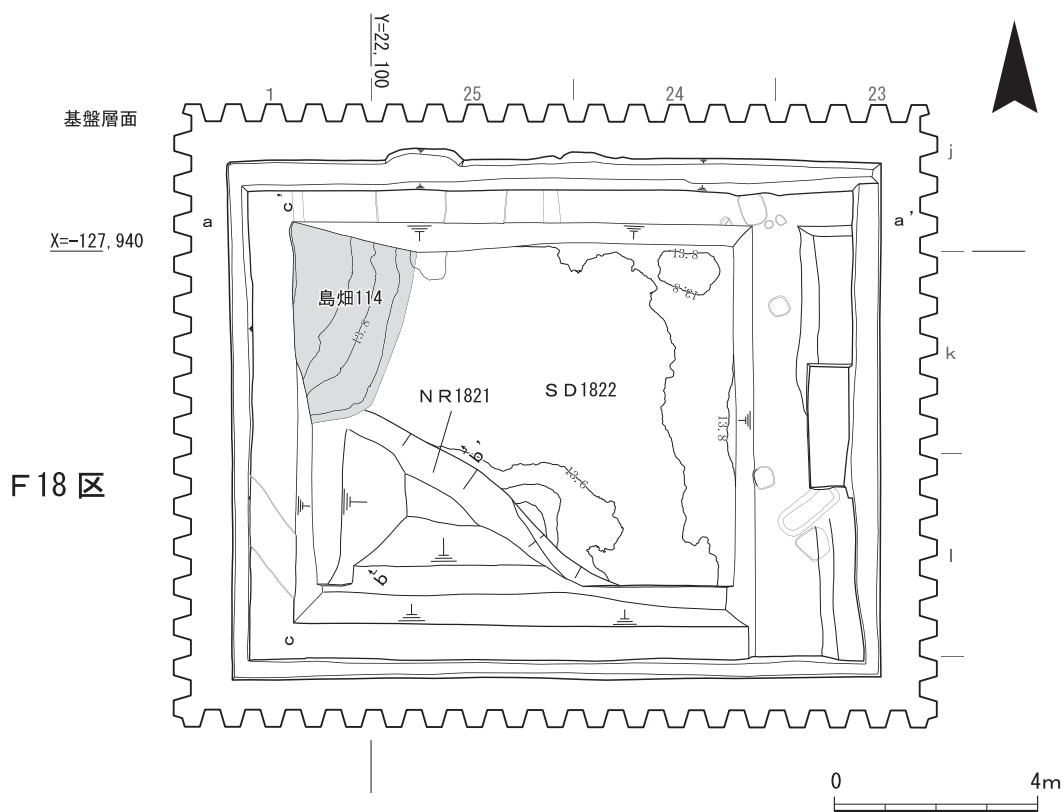
溝状遺構 S D 1822 島畑間の低位部である。底面は平坦で、小溝等は検出されなかった。

流路 N R 1821 調査区南西隅において検出した弥生時代中期の流路である。溝状遺構 S D 1822の底面にあたる基盤層上で検出した。遺物は弥生時代中期～後期の土器が少量出土している。N R 1821埋土にあたる、西壁断割断面第7層から採集した試料を分析したところ45calBC-62calAD(95.45%)の年代を得た。

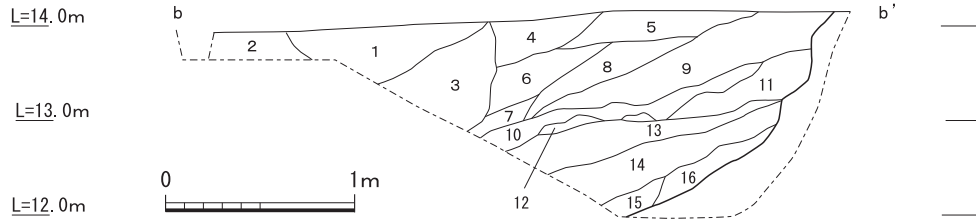
(4) 下層確認調査

調査の最終盤に基盤層下の状況を確認するため断割調査を実施した。断割最深部の標高は12.05mである。調査区西壁では、基盤層である第17層(第56図124・125)・第18層(第56図126・127)、基盤層と下位層との漸移層である第20層(第56図128・129)に弥生時代後期の土器が包含されていた。標高12.6m付近で湖沼性の堆積層(第33層)を検出した。この層の上に木片等を含む有機物層(第31・32層)がある。有機物層の広がりも確認しており、植物の葉や種実を多量に含む状況を確認した。氾濫流路であると考えられる。F20区で検出した氾濫流路とほぼ同じ検出高であるが、年代測定の結果が異なっている。

調査区西壁断割断面を対象に理化学分析を実施した。基盤層である第18層から採集した試料は45calBC-77calAD(95.19%)の年代が得られた。第27層では43calBC-66calAD(95.45%)の年代であった。有機化層である第32層では199-93calBC(81.54%)の年代が得られた。第32層よりも上位層

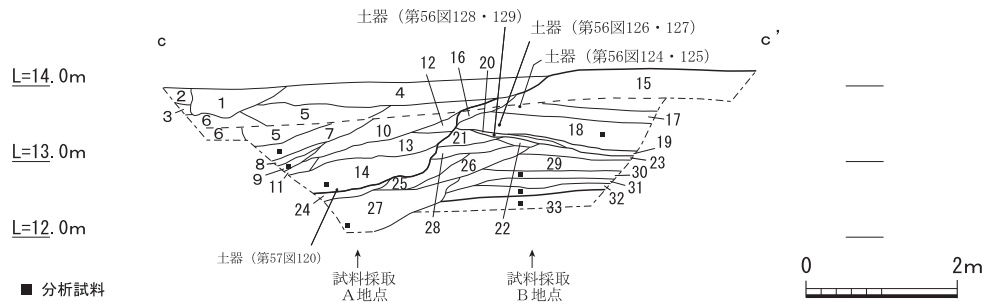


第45図 F18区遺構平面図(基盤層面)



- | | |
|--|---|
| 1. 灰色 (5Y6/1) 均質なシルト 砂味が強い いわゆる砂層 | ナが見られる 砂味が強い |
| 2. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 径0.5cm大の炭化物が少量混じる | 10. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト 有機化した下位層の土が混じる |
| 3. 褐灰色 (10YR5/1) シルト 径0.5～2cm大の炭化物が多く混じる | 11. 灰白色 (10YR8/1) シルト |
| 4. 灰色 (5Y6/1) シルト 径0.5cm大の炭化物がごく少量混じる | 12. 灰白色 (10YR7/1) 粗粒砂～中粒砂混じり細粒砂 いわゆる砂層 |
| 5. 灰色 (7.5YR6/1) シルト | 13. 灰黄褐色 (10YR6/2) 細粒砂混じりシルト 木屑が多く混じり、有機物がラミナ構造を呈する |
| 6. 褐灰色 (10YR6/1) シルト | 14. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂 木屑が多く混じる |
| 7. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 径0.5cm大の炭化物がごく少量混じる | 15. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂混じりシルト 木屑が少量混じる |
| 8. 灰白色 (10YR7/1) 極細粒砂混じりシルト | 16. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト混じり細粒砂 |
| 9. 灰色 (7.5YR6/1) 極細粒砂混じりシルト 部分的にラミ | |

第46図 F18区流路N R 1821畦土層断面図



- | | |
|--|--|
| 1. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト <SD0801> | 18. 灰白色 (2.5Y8/3) シルト 植物痕跡と考えられる径0.5cm大の黄斑が多く混じる (基盤層) |
| 2. 灰白色 (10YR7/1) シルト | 19. 灰白色 (10YR7/1) シルト |
| 3. 明褐灰色 (7.5YR7/1) シルト | 20. 灰色 (5Y6/1) 極細粒砂 砂味が強い |
| 4. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂 砂味が強い | 21. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト やや粘質 弱いラミナ構造が見られる |
| 5. 黄灰色 (2.5Y6/1) 均質な極細粒砂 雲母が多く混じる いわゆる微砂層 | 22. 灰色 (5Y6/1) 細粒砂混じりシルト |
| 6. 灰白色 (5Y7/1) シルト 粘質 | 23. 黄灰色 (2.6Y6/1) シルト 弱いラミナ構造が見られる |
| 7. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 径0.2～0.5cm大の炭化物が多く混じる 有機化してやや暗い色調を呈する | 24. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂混じりシルト 有機化して暗い色調を呈する 木片と径0.2cm大の炭化物が少量混じる。 |
| 8. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト やや粘質 径0.2cm大の炭化物が少量混じる | 25. 褐灰色 (7.5YR6/1) シルト 有機化してやや暗い色調を呈する |
| 9. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト 有機化して暗い色調を呈する | 26. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト やや粘質 |
| 10. 灰白色 (5Y7/1) シルト 粘質 | 27. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト いわゆる微砂層 層の全体にラミナ構造が見られる 木片・種実等の有機物が非常に多く混じる |
| 11. 褐灰色 (7.5YR6/1) シルト 木片等が少量混じる。有機化してやや暗い色調を呈する | 28. 灰白色 (2.5Y7/1) |
| 12. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト | 29. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト やや粘質 |
| 13. 灰白色 (5Y7/1) 極細粒砂混じりシルト 木片等が少量混じり、弱いラミナを呈する。 | 30. 灰白色 (10YR7/1) シルト やや粘質 |
| 14. 灰黄褐色 (10YR6/1) 細粒砂混じりシルト 木片や径0.5cm大の炭化物が非常に多く混じる 有機物と砂がラミナの互層をなす。層の下端は7cmの厚さで炭化物が多くみられる。 | 31. 灰白色 (10YR7/1) シルト |
| 15. 淡黄色 (2.5Y8/3) シルト (基盤層) | 32. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト 有機化し暗い色調を呈する 木片等の有機物が多く混じる |
| 16. 灰白色 (5Y8/2) シルト | 33. 灰白色 (10YR7/1) シルト 粘質 (湖沼性堆積) |
| 17. 灰白色 (2.5Y8/2) シルト 弱いラミナ構造が見られる (基盤層) | |

第47図 F18区西壁断ち割り土層断面図

については近い数値を示している。現地での観察によると、西壁断割断面の下半部南半において溝状に見える第21・24～27層と、北半の第23・29～31層については同時異相で形成されたものとみられ、この上位に第15・17・18層の堆積とN R 1821の侵食・堆積があるが、これらは短い時間内に生じたのであろう。

7. F22区の調査

既往の調査 調査対象地の西端部に位置する調査区で、木津川右岸堤防裾までは約10mの距離にある。平成25年度の第4次調査では、当橋脚予定地のすぐ南でF11区、北でF12区の発掘調査を実施している。F11区調査時の地表面の標高は15.6mである。弥生時代から中世にかけての遺構は、地表下の標高14.3m付近で検出した第8層上面にあり、11世紀前半の井戸S E 1110や弥生時代後期後葉～末の土坑S K 1109・落込みS X 1115が検出されている。

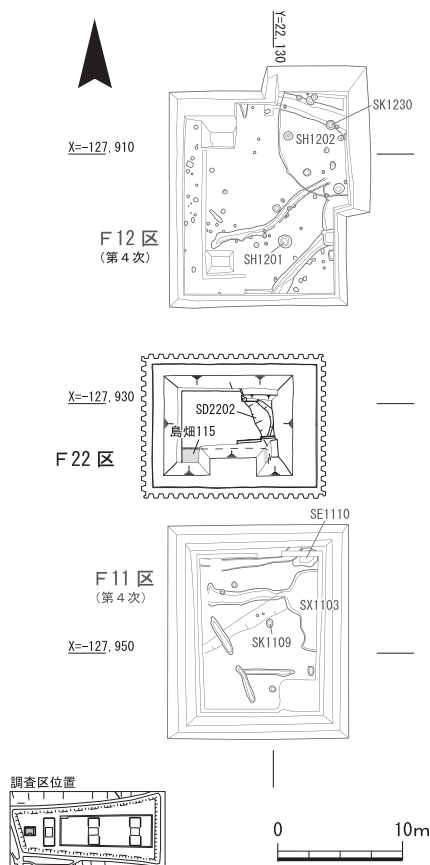
F12区は調査時の地表面の標高は15.5mである。標高14.4m付近にある第9・10層上面で弥生時代から平安時代にかけての遺構を検出しており、11世紀末～12世紀初めの井戸S E 1201や10世紀後半の土坑S K 1230、弥生時代後期中葉後半の竪穴建物S H 1202が検出されている。

調査過程 第4次調査終了後に整備された盛土の上面～西法面の部分に位置している。地盤高は18.6mで、遺構面である基盤層までは5mの深さがある。令和3年の第12次調査中に本体工事

側によって鋼矢板の打設、腹起し・切り梁の設置、盛土・表土の掘削が行われた。その後、当センターで発掘調査を実施・終了し、発掘調査で発生した排土を埋め戻して調査区を本体工事側に引き渡した。なお本調査区は木津川に近い位置にあるため、地下水の影響で土留め底面が押し上げられる現象である“盤ぶくれ”が予想された。土留めの崩落等を生じさせる現象であるため、掘削深度が標高12.73mまでに制限された。よって、遺構掘削も同標高までに留めるとともに、調査終了時の重機による断割りも実施しなかった。

(1)調査状況

本体工事側の盛土・表土掘削は、北にあるF12区、南にあるF11区を参考に14.5mまでの掘削を依頼した。調査地引き受け後、土留め内の南辺中央に昇降階段を設置し南北8.1m・東西10.4mの調査区を設定した。昇降階段の影響で調査区は凹形となっている。調査区の各辺で人力による断割りを実施したところ、さらなる掘削が必要であると判明したため小型重機を搬入して追加の掘削を実施したところ、調査区南西隅では標高13.8m、その他



第48図 F22区配置図

の場所では標高13.6～13.7m付近で基盤層を検出した。基盤層上の堆積層は全て洪水に由来する層である。西壁第1・2層からは瓦器碗片が出土している。西壁では、第5層と第7層との層理面が非常に凸凹している状況が確認できた。荷重痕跡とみられるが、この場合、第7層は水分を多く含んでいる環境であり水田層が想定される。また小型重機での掘削前に、調査区北辺で堆積層を人力で断ち割った際、飛鳥・奈良時代甕類の破片がやや多く出土している。基盤層上で遺構検出を実施した結果、島畑・島畑低位部である溝状遺構・流路を検出した。

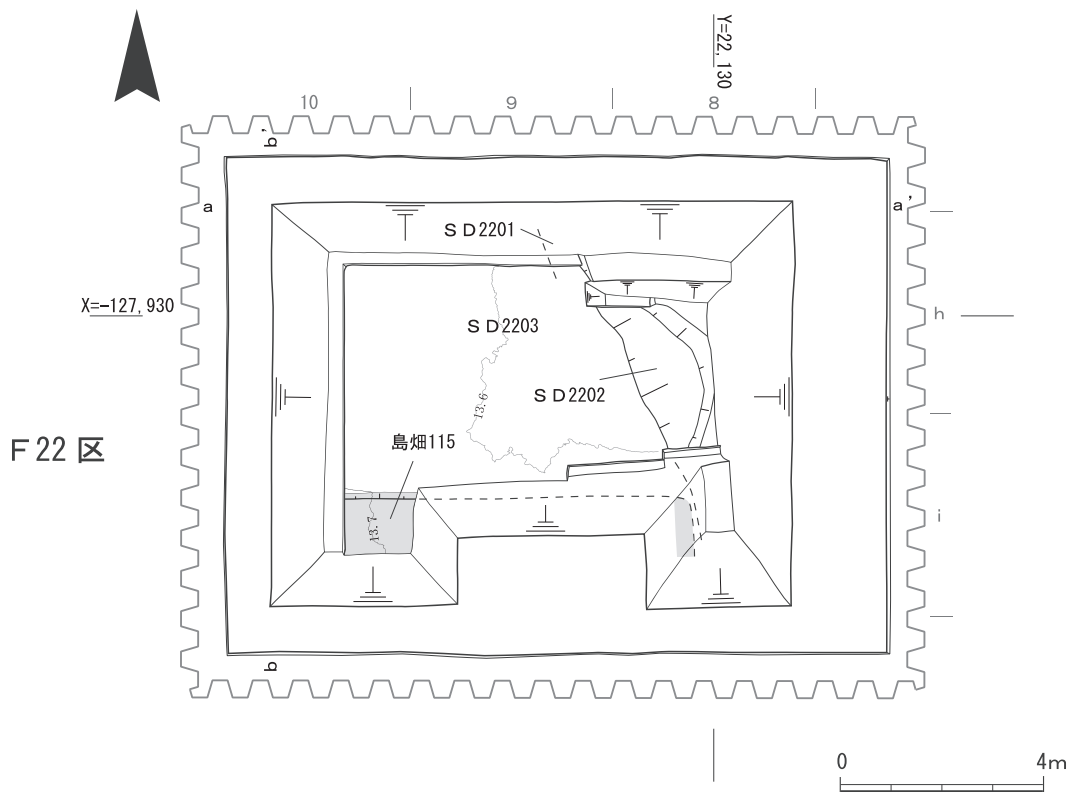
出土遺物の概要 本調査区から整理箱2箱分である。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・土師皿・磁器が出土している。

(2)検出遺構

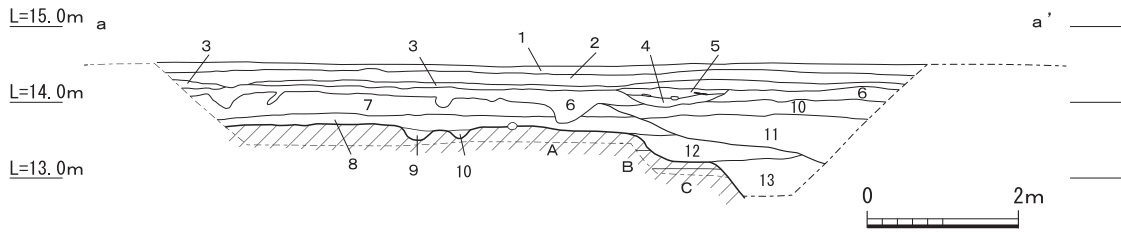
島畑115 調査区の南西隅で検出した島畑である。基盤層を掘り込んで作られる最初期の島畑で、東西方向のものと考えられる。大半が昇降階段設置場所の下に該当するが、調査区東壁では島畑が観察できないことから、調査区内に島畑の北東隅が存在するものと考えられる。

溝状遺構 S D 2203 島畑間の低位部である。底面の標高は13.6～13.7m付近で平坦である。底面で小溝等は検出されなかったが、北壁土層断面の観察では小溝の可能性のある連続的な小さい落込み(第9・10層)が認められた。

流路 N R 2201 調査区北壁および平面で一部を検出した。S D 0202上に重複する南北方向の流路で、平安時代中期～後期のものである。埋土からは弥生土器も出土しているが、島畑の低位部である溝状遺構 S D 2203の埋土である第7・8層を上から切り込んでいる。また西壁断面では

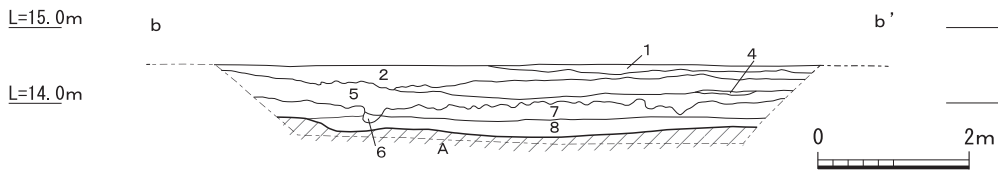


第49図 F 22区遺構平面図



- | | |
|--|---|
| 1. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂混じり極細粒砂 砂味が強い | 9. 灰白色 (10YR7/1) |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂混じり極細粒砂 砂味が強い
浅黄橙色 (10YR8/3) がブロック状に7%混じる | 10. 褐灰色 (10YR4/1) シルト<SD2201> |
| 3. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂混じりシルト やや砂味が強い
浅黄橙色 (10YR8/3) がブロック状に7%混じる | 11. 褐灰色 (7.5YR5/1) 均質なシルト いわゆる微砂
締りが非常に弱い<SD2201> |
| 4. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト 土器を多く含む | 12. 灰白色 (10YR7/1) 均質なシルト<SD2202> |
| 5. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト | 13. 黄灰色 (2.5Y5/1) 均質なシルト 径0.2cm大の炭化物を少量含む
色調が暗く有機化する<SD2202> |
| 6. 褐灰色 (10YR8/1) シルト | A. 浅黄橙色 (10YR8/3) 均質なシルト<基盤層> |
| 7. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 砂味がやや強く還元雰囲気
を呈する淡黄色 (2.5Y8/3) がブロック状に3%混じる | B. 灰白色 (10YR7/1) 均質で粘質なシルト<基盤層> |
| 8. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 砂味がやや強い | C. 褐灰色 (10YR6/1) 均質なシルト<基盤層> |

第50図 F22区北壁土層断面図



- | | |
|---|--|
| 1. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂混じり極細粒砂 砂味が強い | 5. 褐灰色 (10YR4/1) シルト 色調が暗く有機化する |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂混じり極細粒砂 砂味が強い
浅黄橙色 (10YR8/3) がブロック状に7%混じる | 6. 褐灰色 (10YR8/1) シルト |
| 3. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂混じりシルト やや砂味が強い
浅黄橙色 (10YR8/3) がブロック状に7%混じる | 7. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 砂味がやや強く還元雰囲気
を呈する淡黄色 (2.5Y8/3) がブロック状に3%混じる |
| 4. 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト 炭化物が層状に多量に含まれる | 8. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 砂味がやや強い |
| | A. 浅黄橙色 (10YR8/3) 均質なシルト<基盤層> |

第51図 F22区西壁土層断面図

第7層が島畑115を覆っていることから、確実に島畑115より後出の遺構である。

N R2201の埋土である北壁第11層は、いわゆる微砂層であり流水の痕跡を示している。この層からは、平安時代中期～後期の幅で捉えられる土師器皿片(第57図147)が出土している。

流路N R2202 島畑低位部S D2203の底面である基盤層上で検出した。氾濫流路と考えられる。底面は2段底状を呈しており、深く落ち込む部分の埋土である北壁第13層は炭化物を含む有機化した層であった。有機化層は厚さ50cm以上ありさらに下方へ続く状況を確認したが、安全上掘削深度が制限されているため、標高12.75mで掘削を停止した。埋土からは弥生土器片が少量出土している。

8. 出土遺物

遺物記述の方針 遺物の報告にあたっては、既往の報告で見られる“〇〇時代前半の土器”や“〇〇世紀～〇〇世紀の土器”のような表現は極力排し、根拠を明示した上で具体的な型式名や編年的位置で記述するように努めた。その上で暦年代を示す場合には、当該編年に付与されている年代を示した。遺物整理中、飛鳥時代の鏝甕・甑・移動式カマドの破片の存在に気が付いた。その希少性に鑑みて全点提示する方針をとった。

1) F 15区出土遺物(第52図 1～4)

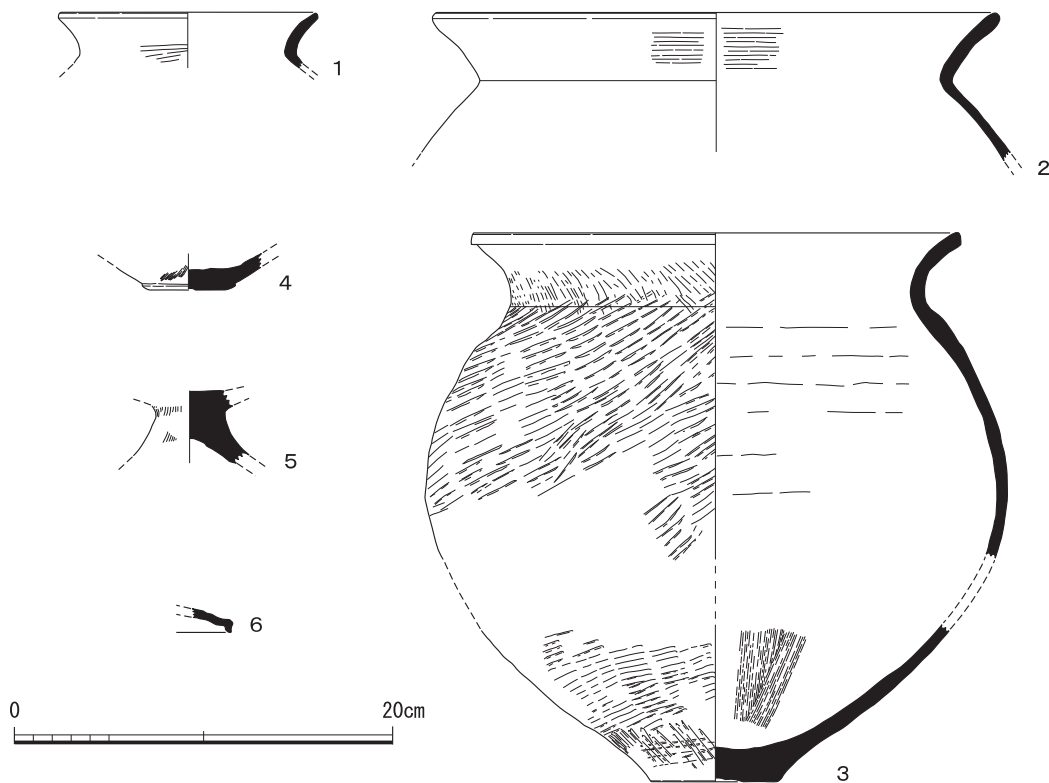
流路NR1501(1・3底部) 1はNR1501埋土の上層から出土した甕の口縁部である。口頸部の屈曲部は内面に鋭い陵をつくる。体部外面は、ハケないしタタキの痕跡がわずかに残る。

流路NR1502(2～4) いずれも弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのもの

である。2は器面が摩滅しているが、口縁部の内外面に幅広の横ハケが確認できる。3の上半部はNR1502出土で、底部はNR1501出土である。接合はしないが同一個体と判断される。頸部～底部外面を左上りのタタキ調整する第5様式系の甕であるが、胴部が球胴化している点から古墳時代初頭である佐山Ⅱ式頃のもの^(注18)と考えられる。4は外側面をミガキ調整しており壺と考えられる。

2) F 19区出土遺物(第52図 5・6)

落込みSD1904(5) 高杯は低脚のものと考えられ、佐山Ⅱ式(古墳時代初頭)以降のもので



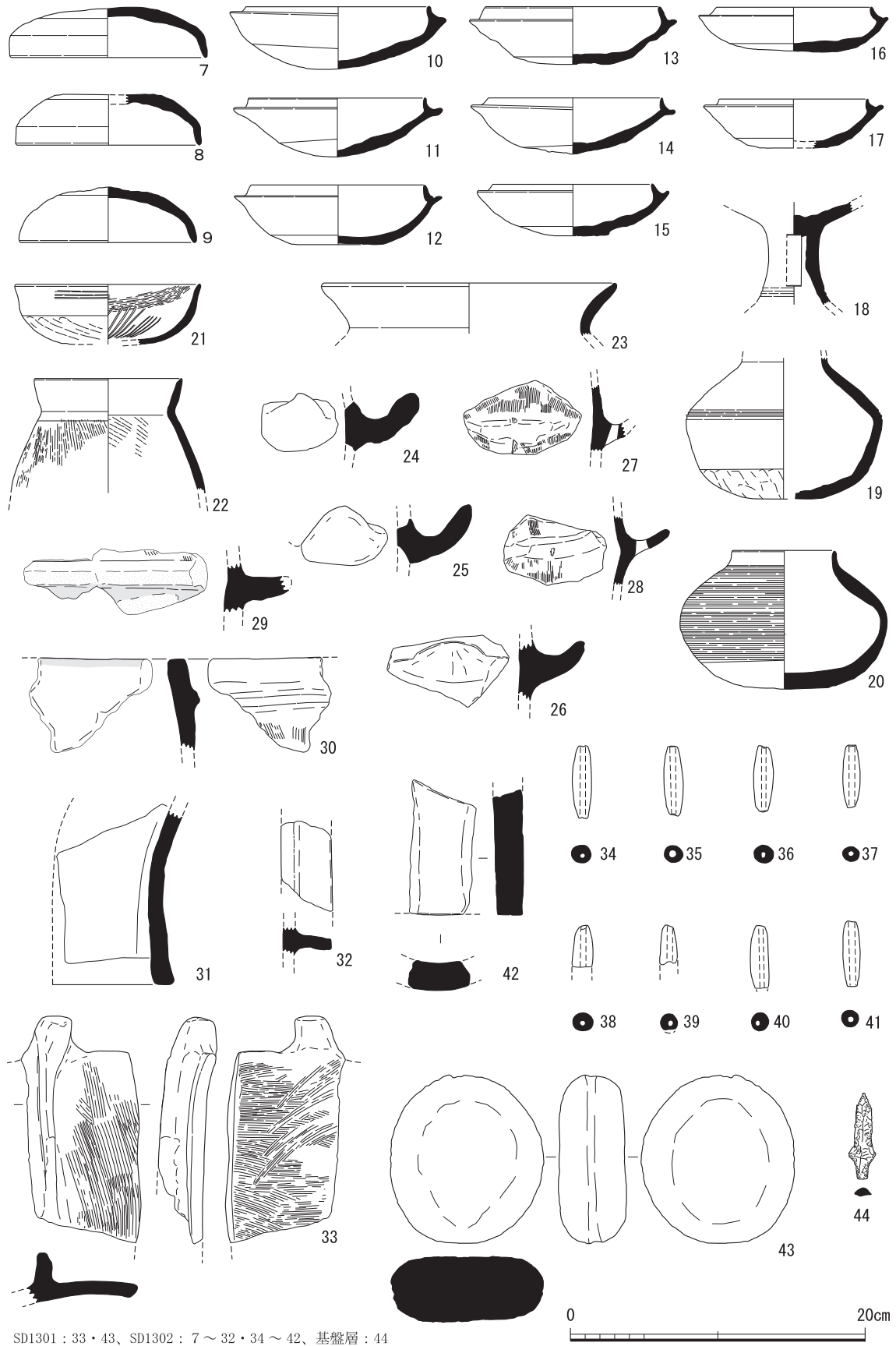
F 15区：1～4

NR1501：1・3底部、NR1502：2・3口縁・4

F 19区：5・6

SD1904：5

第52図 F 15・F 19区出土遺物



SD1301 : 33・43、SD1302 : 7～32・34～42、基盤層 : 44

第53図 F13区出土遺物

あろう。外面に縦方向のハケメがある。

遺構外(6) 須恵器杯Bの蓋である。基盤層面まで重機掘削後、平面の浮いた土を除去する作業中に採集した。返りが無いもので、一定の器高を持つ笠形に復元できる点から、飛鳥Ⅳ～平城Ⅱの範囲で捉えられる。

3) F16区出土遺物

出土量が極めて少なく、図化できるような個体も出土していない。

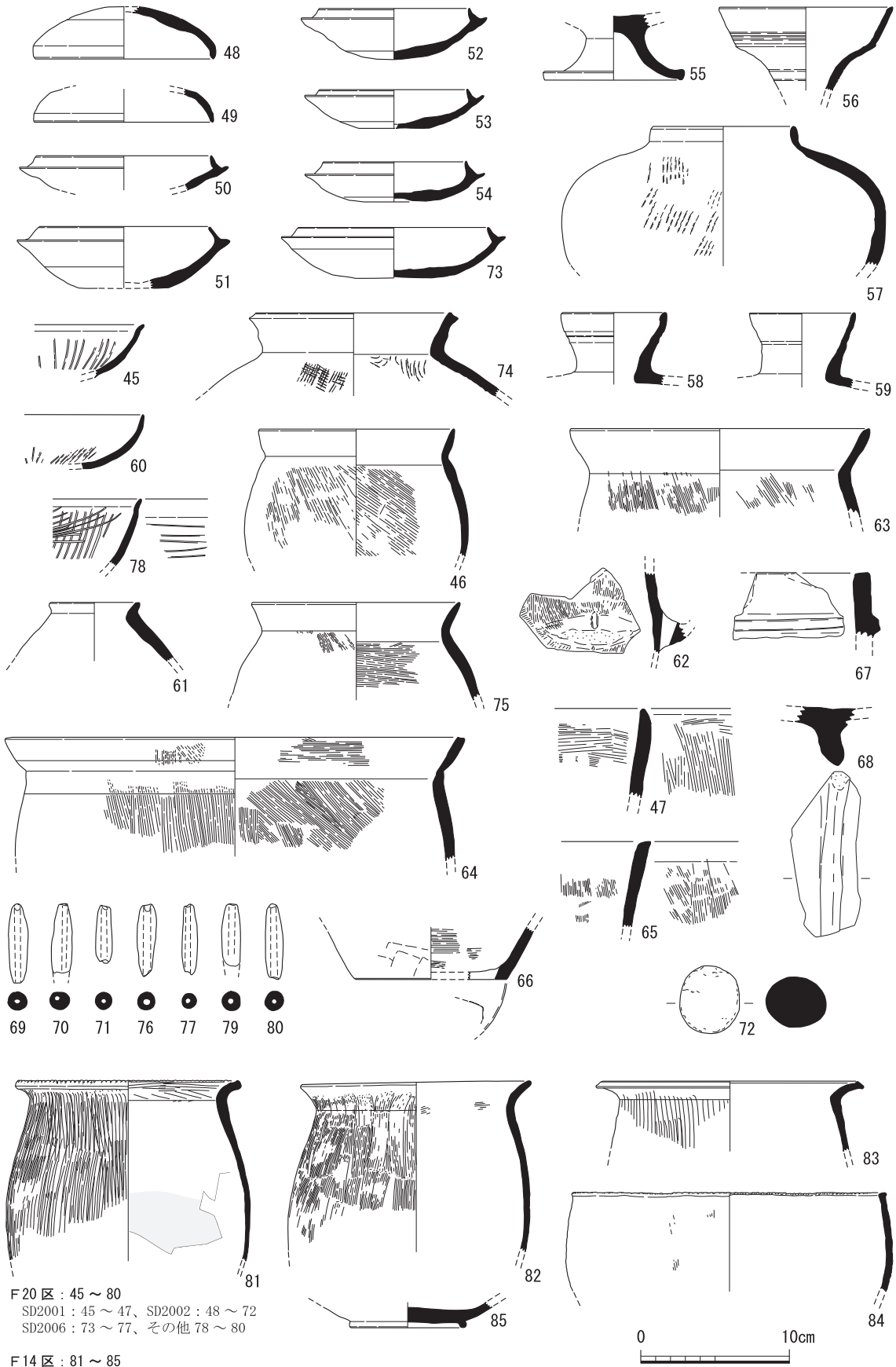
4) F13区出土遺物(第53図7～43)

溝SD1301(33・43) どちらも溝SD1301の南半部から出土した。33は土師質の移動式カマドである。正面向かって左側の焚口部分の破片で、上端部は生きている。側面の鱗状のものは、通例は焚口の上を巡って庇となるが、本例は上端部が円柱状の突起となっている。カマドの上に載せる煮炊具を受けるものと考えられる。五徳付移動式カマドとも呼称されるものである。43は花崗岩製の磨石とみられるものである。明瞭な使用痕跡は認められないが、側面全周が0.5～0.7cm幅でわずかにくぼんでいる。

溝SD1302(7～32・34～42) 7・8・30は北壁断面図の第1層、南壁断面図では第1層に相当する層からの出土である。9～13・16～24・26・27・31・32・34～39は北壁第7層、南壁第2層相当からの出土である。15・25・28・29・40は南壁第7層相当からの出土である。14は調査区東壁、41は南壁、42は北壁際をそれぞれ断ち割った際の出土である。8は北壁および南壁第1層相当と北壁第7層・南壁第2層相当出土のものが接合しており、遺構内の層位に遺物の年代差はない。

7～20は須恵器である。杯H蓋の頂部外面調整はロクロケズリを施すもの(7・8)とやや口径が小さくヘラキリ未調整のもの(9)がある。同じく身もロクロケズリを施すもの(10～13・15・16)とヘラキリ未調整のもの(14・17)がある。非掲載資料を含めた全体では、ロクロケズリを施すものが主体を占め、広範囲を削るもの(10・11)やケズリが非常に丁寧なもの(16)も見受けられる。無蓋高杯(18)は脚部に二段二方の透かしをもつ。短頸壺(19)は底部外面を不定方向に削っている。20はロクロケズリで、焼成時に蓋を被せている。

21～41は土師質のものである。杯CⅡ(21)の内面は右上がりにナデ切った後、放射一段暗文を施す。底部外面はケズリ調整で口縁部に粗いミガキがある。口径指数は33程度である。24～28は甕Bの把手である。24は牛角状を呈するもの。25は体部との接合に関わる円柱状の突起が剥離面に認められるものである。27・28はヘラ状工具を用いて把手の付け根を下方から刺突するもので、新名神に伴う芝山遺跡の調査でも出土していることから当地域で通有のものと考えられる。29は罎甕である。器壁が厚く、外面の罎より下には薄くススが付着する。30～32は移動式カマドである。可能性があるものを含め、全てを抽出した。30は掛口の部分で、横走する低い突帯を張り付けている。上端面および内面上端が黒色を呈している。黒斑とみられ、焼成時は天地逆だったのであろう。31は基底部の破片である。歪みのため正確な計測は出来ないが底径は30cm以上あり、幅5.5cm以上の庇が貼り付けられる。底面が黒色を呈しており、やはり黒斑と思われる。32は庇



F 20 区 : 45 ~ 80
 SD2001 : 45 ~ 47, SD2002 : 48 ~ 72
 SD2006 : 73 ~ 77, その他 78 ~ 80

F 14 区 : 81 ~ 85

第54図 F 20・F 14区出土遺物

部分の破片である。34～41は土錐である。42は凹面に布目圧痕を有する瓦片である。

S D1302出土遺物の年代については須恵器杯Hを見ると底部外面を丁寧削っているものが主体を占めており、その中に口径10cm程度で底部外面が未調整の須恵器杯Hが含まれている。土師器では杯Cが含まれており飛鳥Iの範疇で考えられるが、須恵器杯Gが見当たらないことから飛鳥Iの中でも古い段階と考えられる。性格については移動式カマドや煮炊具、土錐があることから集落で使用されていたものと考えられ、自然堤防上に竪穴建物などが存在していたと想定される。

基盤層(44) 基盤層である西壁第2層(第23図)から抜き取ったもので、サヌカイト製の有茎鉢である。弥生時代のものであろう。

5) F20区出土遺物(第54図45～80)

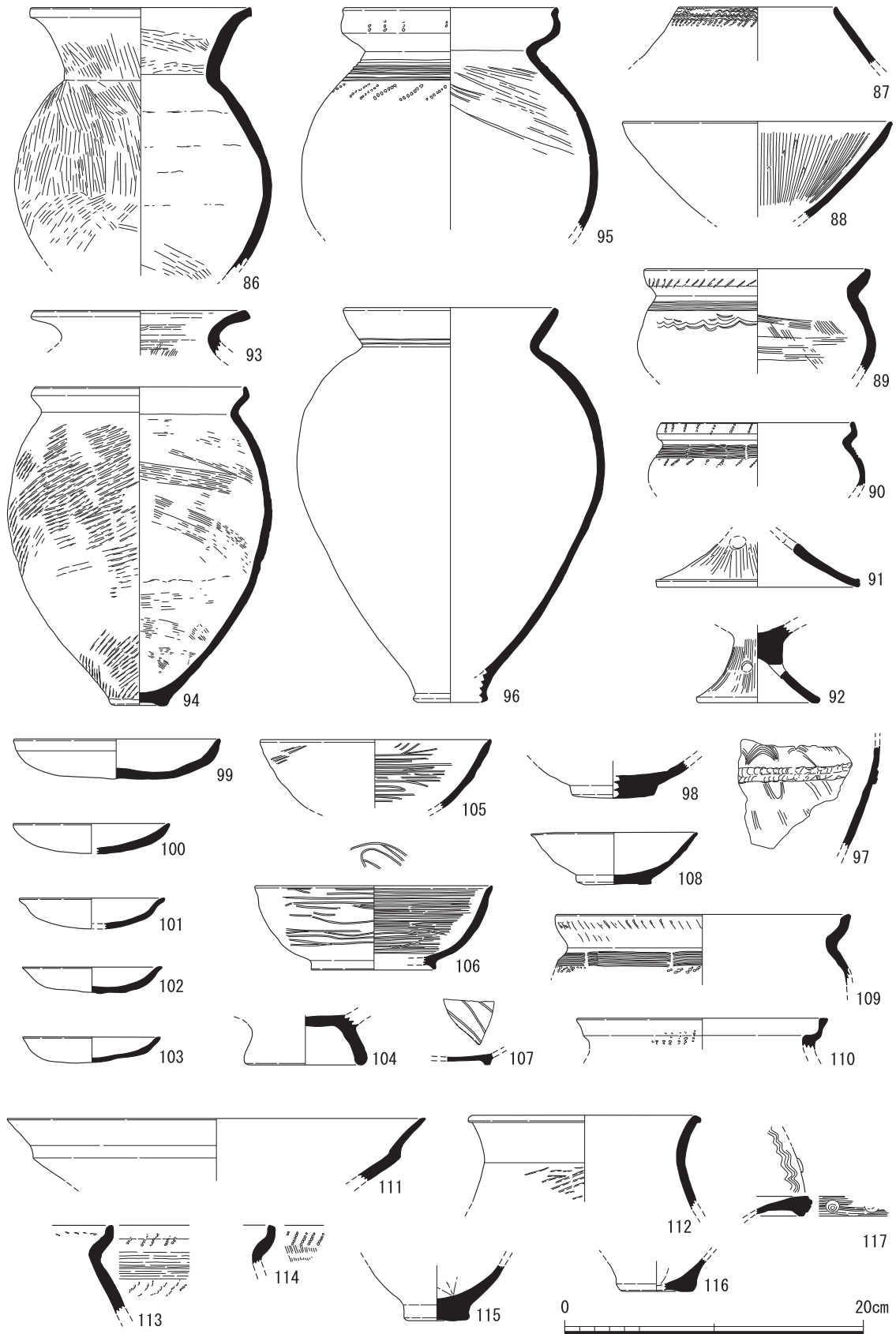
溝S D2001(45～47) いずれも土師器である。45はS D2001を3等分した北の部分から、47は中央部から出土したものである。46は南畦から出土した。45は20cm弱に復元される口径に比べて器高が低く、高杯と思われる。内面に放射状暗文を有する。46は土師器甕である。47は外反しないやや肥厚する口縁部の破片で、甑と判断した。

溝S D2002(48～72) S D2002は掘削中にS D2002AとS D2002Bに掘り分けたが、出土遺物に年代差はない。また両者から出土したものが接合する例があることから、一括して記述する。48～59は須恵器である。杯H(48～54)の特徴は同一遺構であるF13区S D1302とは基本的に同じで、身の底部をロクロケズリするものが主体であるが、S D1302よりやや様相の新しい径が10cm以下のもの(53・54)があるほか、低脚高杯(55)も含まれている。S D1302と併せて考えると、飛鳥Iの小墾田宮溝(古宮遺跡)・川原寺段階にあてはまるであろう。^(注19)短頸壺(57)は叩きの後にロクロ調整したもので、体部外面にはわずかに平行のタタキ目が残る。内面には当て具跡を残しておらず、灰の付着状況から蓋を被せた状態での焼成である。58・59は口縁部付け根の内面において、体部の閉塞痕跡が認められることから、平瓶と分かるものである。

60～68は土師器である。60は内外面が摩滅しているが、内面に暗文を有するようであり、杯Cと考えられる。甕B(62)はS D1302出土品と同じく、把手の付け根をヘラ状工具で上方から刺突する。63の口径は小さいが、胴が張らないことから長胴甕判断した。一方、口径の大きい64は口縁部内面のみを横方向に調整して外反させる。65は甑と判断したもので、47とは異なり端部に面を有する。66は底部に孔を有する甑で、体部内面のハケメは非常に細かい。移動式カマド(67)は掛口の破片で、F13区出土の30と同一個体の可能性がある。68は移動式カマドの側面に付く庇の部分である。土錐は長さ5cm程度のもの(69・70)と4cm程度のもの(71)の2サイズがある。石製投弾(72)は砂岩製で、全面を敲打により球形に加工している。

溝S D2006(73～77) 73・76・77はS D2006の南半部からのもので、74は北半部、75は中央畦からの出土である。須恵器杯H(74)・同甕(74)・土師器甕(75)に加えて、土錐(76・77)が出土している。

遺構外(78～80) 78・79は北壁際を断ち割った際に出土したもので、80は重機掘削終了後に浮い



F17区：86～110

SX1705：86～97、SD1709：98、SX1710：99～108、基盤層：109・110

F21区：111～117

SD2103：111～116、その他：117

第55図 F17・F21区出土遺物

た土を除去して平面を均す作業中に出土したものである。78は土師器杯C Iである。内面には放射状暗文に加えて横位の不整形な暗文が施されることから、飛鳥I頃のものであろう。79・80は土錐である。

6) F14区出土遺物(第54図81～85)

遺構外(81～85) 弥生土器(81～84)は、基盤層上まで重機掘削した際に出土したものである。甕(81)は口縁上端部を刻み、内面は口縁部のみをハケメ調整する大和型である。口縁部内面の体部外面にスス、内面にコゲないシヨゴレが付着する。口径に比べて胴径が大きく、市田齊当坊遺跡の分類ではAc3とされるものである^(注20)。82は胴径の方が大きく、口縁端部を刻まないAa3とされるものである。内面は摩滅しているがわずかにハケメが確認できる。83は外反する口縁を有するが、頸部内面の屈曲部には明瞭に陵を有している。縦方向に幅広のハケメ調整がされ、Ba1とされるものにあてはまる。これらは市田3期～5期に相当する。城Ⅲ-1様式～Ⅳ-1様式に該当する時期であり^(注21)、弥生時代中期の中葉から後葉にあたる。焼成は硬質である。

灰釉陶器(85)は標高14.4m付近で第1回目の精査を行った際に、北壁第2層に相当する層から出土したものである。

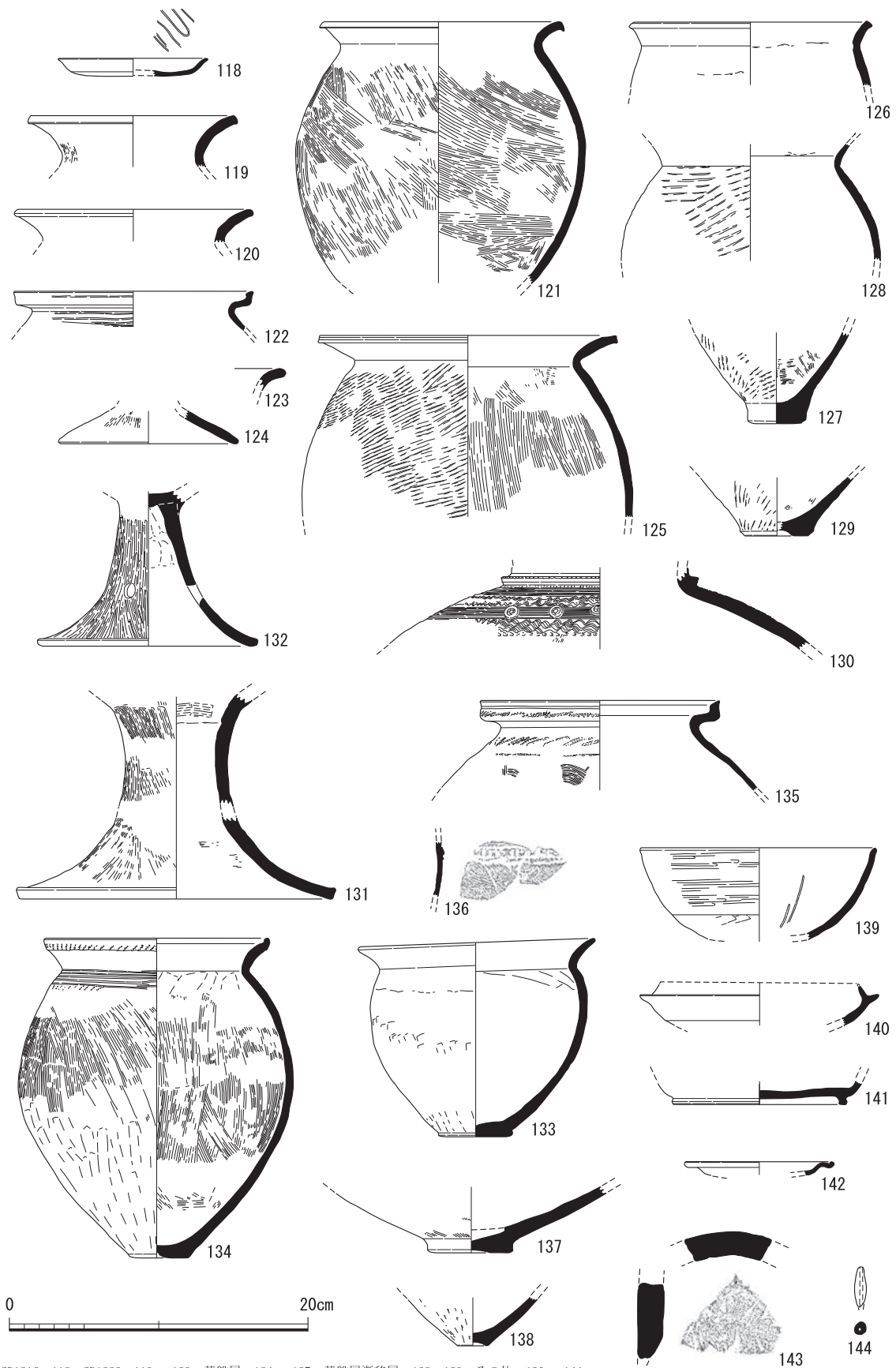
7) F17区出土遺物(第55図86～110)

落込みSX1705(86～97) 86は外面をハケメ調整する無文の壺である。94は外面にタタキを有する第5様式系甕である。甕BⅡとされるもので、弥生時代後期後葉を中心としつつも佐山Ⅰ～Ⅱ式(弥生時代中期後半～古墳時代初頭)に認められるものである^(注22)。95は受口状口縁の甕で、体部の櫛歯状沈線は7条である。口縁部の列点文の間隔が広く、近江地域の編年ではⅡ期(弥生時代後期後半～庄内式)頃のものであろう^(注23)。96は倒卵形の体部であるが、摩滅のため調整は不明である。97は受口状口縁甕の体部の破片で突帯を有する。

溝SD1709(98) 98は器種不明の弥生土器底部である。

井戸SE1710(99～108) 土師皿(99)は口径13.8cmのもので口縁部外面のナデは1段である。口径10cm程度のもの(100～103)も口縁部をヨコナデ調整しており、101・102はヨコナデにより口縁部が外反する。ナデが1段化している点から6A段階頃のものと考えられる。実年代では12世紀後半が与えられている。瓦器碗の105口縁部が厚く、端部内側が沈線状になる楠葉型である。106の口縁端部内側段状になる大和型で、高台はやや高い断面三角形である。見込部は連結輪状暗文である。底部片の107は断面台形の高台で、ジグザク状暗文を持つ。これらは大和型第Ⅱ段階にあてはまり^(注25)、実年代は12世紀前半を中心とする時期である。白磁(108)の高台は削り出しで露体している。内面には段を有する。皿Ⅱ1a類に該当すると考えられ^(注26)、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

基盤層中(109・110) 鳥畑113西側面の基盤層中から出土した弥生土器で、どちらも受口状口縁である。鉢(109)は体部の上半部が張るもので、甕(110)は口縁の立上がり直立している。近江地域の変遷観では、どちらも弥生時代後期である近江V様式のものであり、109は後期中葉～後葉である近江V-3様式以降のものであろう^(注27)。



SD1816 : 118、SD1822 : 119 ~ 123、基盤層 : 124 ~ 127、基盤層漸移層 : 128・129、その他 : 130 ~ 144

第56図 F18区出土遺物

8) F21区出土遺物(第55図111～117)

溝SD2103(111～116) 中世面で検出した遺構から出土したものであるが、いずれも弥生土器である。高杯(111)は皿形の杯部で屈曲して口縁部が外反するもので、弥生時代後期である山城V様式の範囲で捉えられるものである。112は外面にタタキを有する第5様式系の土器であるが、壺の可能性もある。113・114は受口状口縁甕である。

遺構外(117) 東壁際を断ち割った際出土したものである。器台の口縁である。

9) F18区出土遺物(第56図118～144)

溝SD1816(118) SD1816南半部から出土した瓦器の小皿で、ジグザク状暗文を有する。

流路NR1821(119～123) いずれも弥生土器である。119は広口壺で、120も壺か。甕(121)は外面を縦ハケ調整する甕A類である。山城V様式のうち、佐山II-2式以前に位置づけられる。

122は受口状口縁甕で強く屈曲することから、近江地域の変遷観では弥生時代後期の近江V様式の範疇で捉えられるであろう。^(注28)

基盤層中(124～129) 124・125は西壁第17層、126・127は西壁第18層の、いずれも基盤層中から抜き取り採取したものである。128・129は基盤層と流路の漸移層である西壁第20層から抜き取ったものである。125・127～129は外面タタキ調整の第5様式系甕である。125は口径が19.6cmある甕B1で、佐山I-2式～II式(弥生時代後期後葉～古墳時代初頭)に位置づけられる。^(注29)

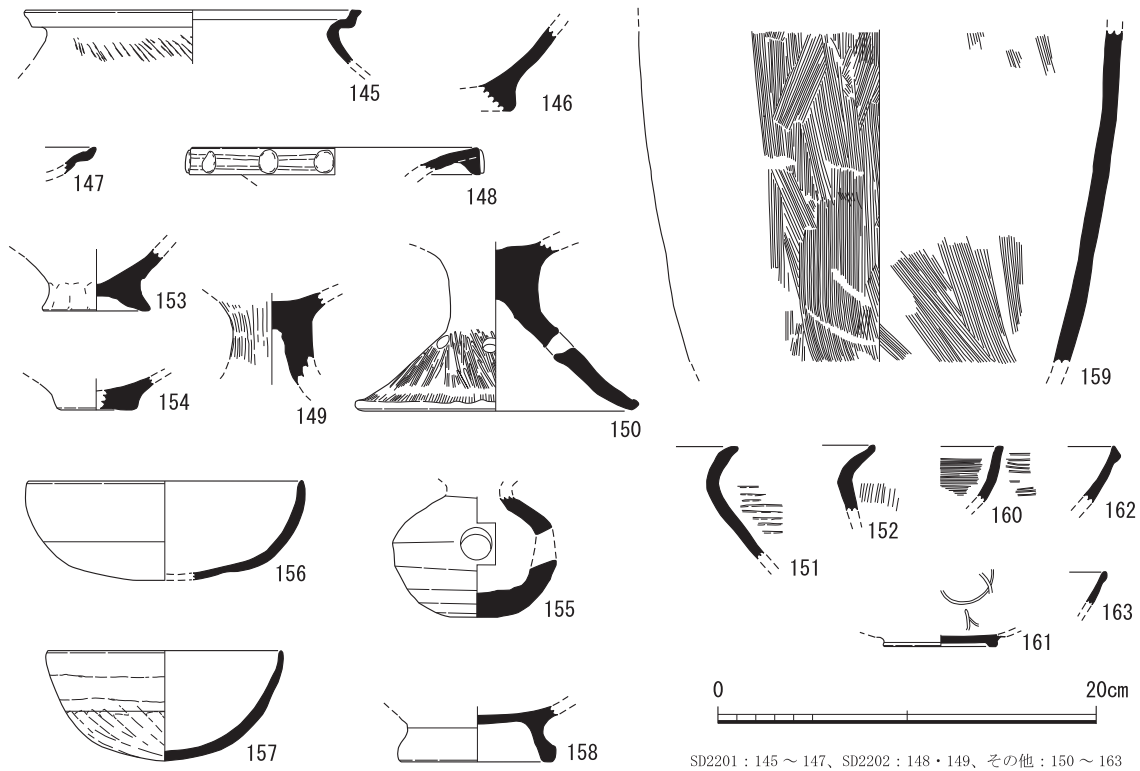
遺構外(130～144) 中世面での調査終了後に基盤層まで掘り下げた際に出土したものであり、島畑間の低位部である溝状遺構SD1822の埋土にあたる。130は二重口縁壺で、体部が大型であることから佐山II式(古墳時代初頭)のものである。134は頸部が屈曲し長く外反する口縁を有する甕であるが、受口状口縁甕と同じ文様構成である列点文と櫛描沈線を施す甕である。外面の下半部はケズリ調整をする。口頸部の形状から山城V様式に位置するものか。外面の体部より下位にススが付着するが、底面から高さ2cm程度の範囲にはススが付着しない。炉での直置きが想定される。135・136は受口状口縁甕で頸部が強く屈曲し、突帯を有数点から近江地域の変遷観では、弥生時代後期である近江V様式で捉えられるであろう。^(注30) 139は土師器の杯CIで底部外面をケズリ調整するものである。140・141は須恵器である。丸瓦(143)は凹面に布目を有し、端部付近を削っている。土錐(144)はF13・20区出土のものに比べて長さ、幅ともに小型である。

10) F22区出土遺物(第57図145～163)

流路NR2201(145～147) いずれも微砂層である、北壁土層断面図の第11層に相当する層から出土した。土師皿(147)は「て」の字状を呈するものである。土師皿の編年で4期にあたり、^(注31) 1020年～1110年の実年代が与えられている。

流路NR2202(148・149) 148・149は、いずれも北壁土層断面図の第12層に相当する層から出土した弥生土器である。

遺構外(150～163) 152・155～157・159・161～163は調査地引き受け後に北辺を断ち割った際に、150は東壁を断ち割った際に出土したものである。160は西壁第1・2層相当層、153・154は西壁第8層相当層からのものである。151は精査時のもので、158は小型重機で掘削時に出土した



第57図 F22区出土遺物

ものである。150は椀状の杯部を有するものと考えられ、佐山Ⅱ式(古墳時代初頭)以降のものであろう。

瓦器(161)は高台の形状と連結輪状の暗文からⅡ段階にあてはまる。12世紀前半を中心とする時期である。162・163は白磁で、小さな玉縁を有する。

9. 総括

1) 下水主遺跡の時期別変遷

本遺跡の時期別変遷については、第1～9次調査を対象に『第173』・『174冊』でまとめられている。^(注32)これに今回の調査成果を付け加える形で時期別に概観してゆきたい。

縄文時代 今回の発掘調査では縄文土器の出土はなかったが、F13区とF21区の基盤層下で当該期の氾濫流路を検出している。F13区検出のNR1304は、関西の土器編年に置き換えれば滋賀里Ⅳ式ないし船橋式～長原式に併行する年代が得られている。F21区検出の氾濫流路は、滋賀里Ⅳ式～船橋式に併行する年代である。

既往のF地区の調査では、F6地区で長原式の土器が1点出土している。他の地区ではL地区で検出された氾濫流路NR42から多量の突帯文土器が出土している。面取した口唇部を刻む一条突帯深鉢を主体とする時期であり、F13・21区の氾濫流路と同年代の可能性もある。同じくL地区では縄文時代晩期の焼土坑と報告されるSX39がある。報告者によっては炉とされる場合もある遺構であり、「地理的環境」で述べたように自然堤防上での土地利用が想定される。またD

2区でも縄文晩期の屋外炉の可能性があるS X 41・42が検出されている。

周辺の遺跡^(注33)では横道遺跡で前期後半の深鉢を納めた土坑、芝山遺跡で押型文と北白川C式土器、森山遺跡で後期中葉の竪穴建物や配石遺構が見つかっている。これらはいずれも宇治丘陵の段丘面や扇状地上に位置する遺跡である。一方の沖積平野においても報告例が近年増加している。現在整理中の水主神社東遺跡第12次調査では滋賀里I・II式頃の木組遺構、小樋尻遺跡で長原式期の竪穴建物・土器埋設遺構が検出されている。小樋尻遺跡を除くと、沖積平野での縄文時代の遺構は地表下数mの深さで検出されている。塚本東遺跡やその西方の第3浄水場では、それぞれ地表下約3mと7mで縄文後期の照葉樹林が検出されている。このような低地での遺跡の在り方は、列島西部における遺跡数の少なさと関連して検討されてきた経緯があり、由良川流域の桑飼下遺跡^(注34)での研究が著名である。同じ京都の木津川流域において沖積平野での報告が増加している点は、今後、列島西部の縄文集落を考える上での好例となるであろう。

弥生時代 今回の調査では弥生時代中期～後期の流路N R 1821を検出した。またF 13区の弥生時代前期後半～中期後半の年代を示す基盤層から、水田層と指摘できる量のプラントオパールが採集されている。既往のF地区の調査では、F 10・12区で後期後葉の竪穴建物跡2棟が検出されている。周辺の調査ではL・M・N地区で弥生時代中期後半～後期初頭の土坑と多数の土器が検出されており、周囲に集落が展開した可能性が高いとされている。B地区では流路N R 22が弥生時代中期後葉の段階に盛土で護岸されている。

古墳時代 今回の調査では古墳時代前期～中期の流路N R 1303を検出した。F 6区S D 0601へと続くものであり、流路を利用するために複数時期にわたり横木や敷粗朶を用いて護岸を行なう状況を確認している。最終の埋没は古墳時代後期である。

周辺の調査では前述のB地区N R 22が庄内式期に再掘削されている。外来系を含め多くの土器が出土していることから、中核的な集落が存在したと想定されており、川津の可能性が指摘されている。F 13区N R 1303とB地区N R 22は、調査で判明した遺構の来歴が異なっており、同一の遺構とは判断できない。ただし古墳時代には同時存在しており、両者の延長線上であるF地区の南側(B地区の西側)において合流ないし交錯していたと考えられる。また飛鳥時代に整地される点でも両者は類似している。

飛鳥時代 今回の調査ではF 13区S D 1302、F 20区S D 2002で飛鳥Iを上限とするまとまった量の土師器・須恵器が出土した。その内容から、元々は集落で使用されていたものが整地に伴って埋められたものと判断した。周辺では、F地区と同じく木津川に近いA地区において同時期の井戸や多数の柱穴群が検出されているのに加え、B地区でも整地と判断される遺物の出土状況が確認されている。A・B地区の調査においても集落の存在が想定されており、7世紀の前半を中心とする時期に木津川沿いの自然堤防上で集落が展開していた可能性が高い。下水主遺跡周辺は、「歴史的環境」に見た通り木津川の渡しが多く存在した渡河点ともなっている。よって単に自然堤防という自然地形だけではなく、水上交通の要衝の場を特定の集団が集落の形で占地していたものと考えられる。またF 7区では、後世の遺構に混入する形で川原式ないし藤原宮式

の軒丸瓦が出土している。周辺に瓦を使用する施設の存在や瓦の運搬が想定できることから、注意が必要とされている。

平安時代(中世) 周辺では奈良時代～9世紀代までの遺構は確認されておらず、遺物自体の出土も少ない。F7区では10世紀頃と考えられる井戸SE0704が検出されている。

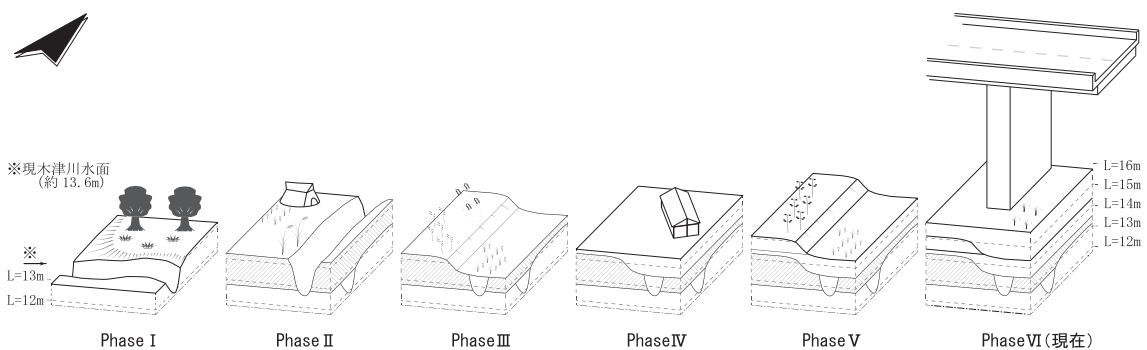
中世には一帯に島畑が作られるようになり、その年代は島畑上の素掘溝や島畑間の低位部から出土した遺物により12～13世紀とされてきた。今回の調査でも、基盤層を掘り込んで作られる最初期の中世島畑を検出した。島畑はF22区でも検出しており、木津川にきわめて近い場所まで島畑が作られていたことが判明した。また島畑の低位部が埋没後に作られる掘立柱建物(SB1723・1801・2104)や井戸(SE1710)を検出した。その時期は、井戸については12世紀のものと判明した。またF22区では島畑低位部堆積土を切るNR2201から、11世紀～12世紀初頭の幅で捉えられる土師皿が出土している。これらのことより、最初期の島畑が作られ始める年代については13世紀を想定せずともよく、12世紀台に収まる可能性が生じてきた。

2) 下水主遺跡F地区の地形変遷

今回の発掘調査で得られた知見を基に、F地区を中心とした下水主遺跡での地形変遷を整理した。以下の通りである(第59図)。

Phase I (縄文時代晩期～弥生時代後期) 基盤層下および基盤層の形成段階である。基盤層下には、湖沼性の堆積と考えられる灰白系の色調を呈する粘質なシルトが存在している。場所によっては、この層を切る縄文晩期突帯文期の氾濫流路(F13・21区)が存在する。氾濫流路中の自然遺物の分析から、周辺はカシ類などの常緑樹やケヤキ・カエデなどの落葉樹からなる混交林が広がっていたと考えられる。周辺既往の調査では焼土の痕跡も検出されており、近傍の自然堤防上で川と林を利用した生活があったと考えられる。

その後、洪水の堆積物により1m強の厚さがある基盤層が上方付加的に形成されてゆく。基盤層の年代分析では弥生時代前期後半～中期後半や、弥生時代中期後半に相当する数値が出ている。基盤層中からは土器も出土している。時期が分かるものは、既存の編年で後期後葉～古墳時代初頭の間で捉えられるものであるが、F10・12区では基盤層上に後期後葉の竪穴建物が作られており、時期は後期後葉と判断すべきと考える。つまり基盤層の形成は弥生時代前期後半～弥生時代中期後半に始まり、後期後葉にかけてである。基盤層中には水田層と指摘できる量のプラントオ



第58図 下水主遺跡F地区地形変遷

パールを含む例があった。また弥生時代中期の土器が、今回や周辺での調査でまとまって出土しており、基盤層の形成過程にも人間活動があったものと判断される。

Phase II (弥生時代後期～) 基盤層形成後の段階である。後期後葉の竪穴建物跡が検出されており(F10・12区)、生活可能な安定した環境であったことが検出遺構から分かる。古墳時代には流路が形成され、土木的に加工することで利用されている(NR1303、B地区NR22)。

飛鳥時代である7世紀前半頃の遺物が多く出土しており、整地と判断される状況も認められることから周辺に同時代の集落が展開していたと考えられる(F13・20区、A地区、B地区)。

Phase III (中世・12世紀) 基盤層を掘削して最初期の島畑が作られる時期で、周辺の調査により条理地割の影響を受けていることが判明している。その時期は、今回の調査から12世紀段階と考える。島畑が作られる原因は、次章に述べる通り、地表付近の水位低下があったものと推測する。低位部は水田として利用され、島畑上は畑として利用される。畑は、水田二毛作が不可能な場所において、稲の減収に対応する性格も有していたと考えられる。

Phase IV (中世・12～13世紀) 最初期の島畑埋没後に、掘立柱建物や井戸が作られる段階である(F17・18・21区)。同じ状況の遺構は、F3区の12世紀後半の井戸SE0308などにもあてはまると考えられる。今回は、調査の経緯からやや偶発的に検出するに至った。今後の調査では注意を要する。

Phase V (中世～近世) 今回は工程上の理由で調査が及ばなかったが、周辺の遺跡では、最初期の島畑の上位に重なるかたちで、新しい島畑が複数時期に渡って作られる状況が確認されている。これは洪水から水田を復旧するために「掻き上げた」ものと考えられている^(注35)。島畑上での作物として近世に梨が導入され、明治には綿や李(スモモ)が名産品となっていた^(注36)。

Phase VI (現代) 近世以降の島畑の多くが明治期に水田化する^(注37)が、一部の島畑は現在まで残存するとされる。条理地割についても、明瞭に残存していることが地図や衛星写真などで分かる。国土交通省水文水質観測所「八幡」「飯岡」の観測値を基に計算すると、新名神渡河地点での木津川の水面高は、およそ13.6mである。

10. 下水主遺跡における島畑の再検討

新名神関連の発掘調査報告のうち、下水主遺跡については本書の刊行をもって一段落がついたことになる。先述のとおり、既往の報告における島畑の評価については問題点が複数存在する。これを指摘するとともに、改めて下水主遺跡の島畑について検討してみたい。

既往の島畑分類と問題点 下水主遺跡で検出した島畑については、『第163冊』において4類型に分類された上で検討が行われている^(注38)。この分類では島畑が造成される場所が「微高地」であるか、あるいは「湿地」かであるかの点に基準が置かれている。すなわち地面に対する水位の違いが、土地改良の種類の違いに結びつく点を重視している。島畑の分類については歴史地理の立場や、河内地域での発掘事例を基にしたものがある^(注39)が、城陽市内平野部における新名神関連の発掘調査の初期段階に提出されたものであり卓見であると言える。しかし問題点が無いわけではない。

その一つ目は、実際の調査事例と分類の各類型の対応が不明な点である。検出された実際の島畑に対して類型が示されていないため、分類が概念的なものになってしまっている。次に分類基準となっている「微高地」と「湿地」の区分が、何を基準に分けているのか示されていない点が挙げられる。そもそも『第163冊』中で報告された場所の現地表の地質は、いずれも「後背湿地」である。そして最大の問題点は分類で示された「掘り下げ田」「掻き上げ田」の語が先行研究や歴史的名称での概念に一致していない点である。^(注40)これは研究の混乱を招くだけでなく、プライオリティ尊重にも反している。そこでまず、『第163冊』での分類を最大限尊重しつつ、先行研究や歴史的名称を基にした整理を行ってみたい。

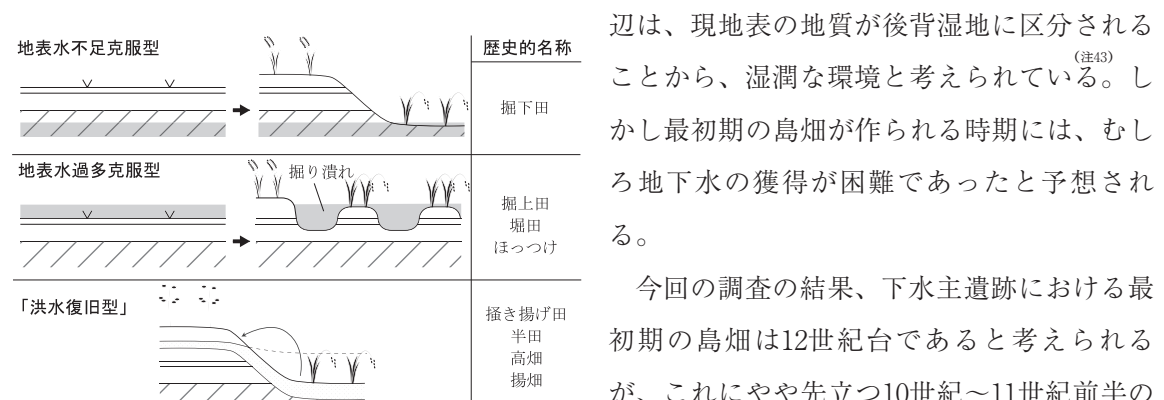
土地改良の分類と歴史的名称 島畑は農業における水利困難を克服する方法の一つである。島畑に限らず水田や畑での用水に過不足が生じ、灌漑施設でもこれを克服できない場合に土木的な土地改良が行われる。それは地表面と水位の関係から、以下の2種類に整理される(第60図)。

ひとつは“地表水不足克服型”とでも言えるものである。地表で十分な用水を得られない場合、地面を掘り下げ、地中の湧水や天水を利用する。掘り下げた低い部分は水田として利用される。この類型にあてはまるものとしては、房総半島の「掘下田」が知られており、^(注41)そこでは掘り上げた土を利用して海風除けの防風林が植えられる。

もう一つは“地表水過剰克服型”とでも言えるもので、湿地や沼地など地表面に水が多すぎる場所で水田を行うためのものである。楯目状に土を掘り、盛り上げることで地盤が高くなった部分で水田耕作を行うもので、掘りくぼめられた部分は“掘り潰れ”となって農業には利用できない。歴史的名称としては「掘上田」があてはまり、埼玉県宮代村の“ほっつけ”が有名である。

上記の2つの型のほかに、歴史的名称として「掻き揚げ田」や「半田」などが知られているが、これらは主に河内地域の島畑を指している。河内地域では池島・福万寺遺跡をはじめ島畑の検討が進んでおり、当該地域では洪水の発生により農地にもたらされた堆積物を積み上げた島畑が多く、^(注42)「洪水復旧型」とされている。

下水主遺跡最初期の島畑 さて、このように水利困難を克服する土地改良を整理したうえで下水主遺跡の島畑に立ち返ると、最初期の島畑はどちらにあてはまるのであろうか。溝状遺構としていたる低位部の幅は広く、島畑頂部まで水で満たされているとは考え難い。確かに下水主遺跡周

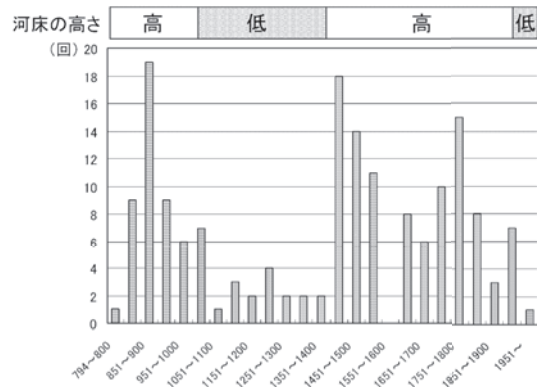


第59図 農地改良の類型と歴史的名称

辺は、現地表の地質が後背湿地に区分されることから、湿潤な環境と考えられている。^(注43)しかし最初期の島畑が作られる時期には、むしろ地下水の獲得が困難であったと予想される。

今回の調査の結果、下水主遺跡における最初期の島畑は12世紀台であると考えられるが、これにやや先立つ10世紀～11世紀前半の時期以降、平安京では河床低下が発生するこ

とにより洪水回数の減少している(第61図)。そして12世紀段階も同じ状況が続いている。^(注44)同様の現象は日本列島規模で見受けられるとされることから、木津川においても河床低下が想定される。^(注45)そもそも調査地周辺は、「地理的環境」で述べた通り、地形の傾斜が緩いため用水路網が未発達である。その中で河床低下やこれに起因する地下水位低下が発生すれば、さらなる用水不足が生じる可能性がある。地下水位を考える上で参考となるのは、第4次調査F7区の井戸SE0704である。



第9図 歴史時代の洪水発生回数(50年単位)と河床の高さ(洪水発生回数の変遷は中島(1983)より作成)
※洪水発生回数は中島(1983)から作成されている

第60図 鴨川の洪水発生回数と河床高
(河角2004)より引用

木製の枠をもつ確実な井戸で、時期は9世紀後半とされている。底部に設置された水溜上端の標高は約12.8mであり、定点となるであろう。島畑低位部の標高は13.6m前後であり、湧水層まで掘削したのではなく水が染み出す程度の深さまで掘削されたのではないかと想定される。木津川の近世以前の河床高についてのデータは乏しいが、河床低下により生じた用水確保困難の対応策として、地表水不足克服型の島畑が作られたとする仮説を提示しておきたい。

近世の島畑 時期が下り15世紀以降になると、一転して河床の上昇が進み洪水が増加するようになる。これを受けて、河内地域では15世紀後半以降に「洪水復旧型」の島畑が増加する。^(注46)木津川流域では堤防の整備や周辺での木材伐採の影響で、特に17世紀以降に河床が大きく上昇し洪水が頻発することが知られている。^(注47)周辺の調査でもこれに呼応する形で、最初期の島畑の上位に重複する近世以降の島畑が確認されていて、洪水により農地が堆積物に覆われた状況への対応であるとすでに評価されている。洪水堆積物が島畑頂部までを覆ったのかは不明であるが、島畑間の低位部の堆積物を島畑上に積み上げており、島畑上であっても洪水が発生すればその影響を受ける。この点は「洪水復旧型」島畑が、畑への被害を予め防ぐためのものではなく、あくまでも発生した洪水への対応であったものと評価できる。また洪水により埋没してもなお島畑を志向する点は、依然として用水面での問題があったものと想定できる。

以上をまとめると、島畑は当初、用水不足を解消する目的で地表水克服型で作られ、その後の自然環境変化により「洪水復旧型」へと性格を変えていったものと推測される。地理学での島畑研究の当初、天竜川下流域の島畑は氾濫からの復旧したものと評価したトレワースに対し、竹内常行は、本来、水田域拡張の目的で作られたものであり、氾濫からの復旧は対応に過ぎないと批判した経緯がある。^(注48)下水主遺跡での島畑は、竹内常行の主張を追認する形となる。

低位部非水田説批判 島畑の構造については一定の整理と理解ができたが、どのように利用されていたかという問題もある。繰り返しになるが、下水主遺跡の最初の報告書である『第163冊』では基本的に島畑の頂部は畑、低位部は水田と理解しており、低位部については水田(遺構記号:

S N)として報告していた。先行研究や現行の島畑の利用とも合致する極めて一般的な理解である。しかし次の報告書である『第167冊』では「用排水路や取水口などの施設が未検出」であるため「確実に水田とは言えない」として、溝状遺構(遺構記号:SD)^(注49)と表記を変更している。『第174冊』においても、水路・堰・畦畔が確認できない点が指摘され、「水田耕作を行っていたと積極的に評価することはできない」と、低位部の水田としての利用をより強く否定する表現となっている。^(注50)

この評価は妥当なのであろうか。まず幕末の寺田の状況を示すとされる「安政4年絵図」^(注51)では、島畑と考えられる「田畑混在」が広範囲に広がっており、確実に水田が存在していたようである。次いで近世絵図である「寺田村水損荒地絵図」^(注52)を見ると、道路で囲まれた一区画に複数の島畑が存在しており、個別の島畑ごとに水口や用排水路があったかは疑問である。「平川村絵図」では畑に井戸が見え、用水路網が行き渡っていなかった可能性を示している。島畑での畦畔については、遺跡で認知できていない可能性と、本来的に畦畔が無かった可能性の両方がすでに指摘されている。^(注53)実際、河内地域の島畑を描いた『綿圃要務』でも畦畔の表現はない。そもそも島畑低位部の水田利用を否定する立場には、用排水が自在に行える乾田が暗黙の前提となっていると指摘できる。しかし島畑低位部は湧水や天水の利用が想定できるもので、乾田とは異なっている。中世段階では、地域差はあるものの湿田が多くを占めていたと想定されている。^(注54)もとより水路で用水が賄えるのであれば、そもそも島畑を作らないであろう。

水口や畦畔を本格的な水田の指標とするのは、弥生時代の開始をテーマとした議論の中で用いられる理論であるが、^(注55)ここまでで見た通り島畑の性格を検討する指標にはなり得ない。島畑本体と低位部からなる島畑景観を評価するためには、地理学を含めた先行研究や他地域での発掘事例を基に検討が行なわれるべきである。^(注56)

島畑出現の意義 ここまでは島畑が作られる理由を地理的な面から検討したが、日本史的にはどう位置づけられるのであろうか。12世紀は荘園公領性が進展する時代であり、島畑を必要とする水利不利な土地にまで開発が及んだものと考えられる。同時にこの時期は、飢饉に備える意味で、二毛作の重要度が高まる時期でもある。12世紀段階の二毛作の有無については評価が分かれているところであるが、^(注57)飢饉対応として畑作の重要性はそれ以前から認識されており、権力側も推奨している。承和6(839)年7月21日の太政官符では稲の凶作時にソバが補助的機能を果たすことが示されているが、秋播のソバは旧暦7月に播種して同9月に収穫が可能で、稲の減収分に応じて応急の作付けが出来るのである。稲の収穫後に田の水を落として畑作を行なう水田二毛作については、文永元(1264)年に鎌倉幕府が田麦課税禁止令を出しており、少なくとも13世紀半ばには広くおこなわれていたと考えられている。下水主遺跡での既往C地区の調査でも栽培種としてソバをはじめ、麦・ナス属・キュウリ属・イチビ属などが分析で検出されており、これらが島畑上で作られていたとみられる。島畑間の低位部で作られるイネも検出されているが、乾田のように用排水が自在ではなく水田二毛作は不可能である。このような土地の制約があるなか畑である島畑は、単に畑作を行なう場所であるだけでなく、水田である低位部を補う役割も有していた

と推測される。

すなわち木津川右岸の最初期の島畑は、荘園公領制の大開墾時代にあつて、地理的要因による水利困難を克服するため、田と畑の両方として土地を活用するハイブリッドシステムであつたと意義づけられる。

11. 今後の課題

最後に今後、下水主遺跡や周辺遺跡での発掘調査における課題と留意すべき点を挙げる。

旧地形の復原 遺跡周辺の地質分類図はすでにあるが、あくまで現地表面を対象としたものであり、旧地形や時期別の地形変遷については不明な点が多い。今回の発掘調査では竪穴建物跡は検出されていないが、弥生時代や飛鳥時代の集落の存在が想定され、それは本来存在したであろう木津川沿岸の自然堤防を利用したものであると想定した。

今後の調査では地理学との協力を深め、旧地形の復原が必要である。また木津川の河床高の変動についてもデータが得られることが望まれる。

弥生水田の有無 F13区では、基盤層に水田層の存在が想定される量のプラントオパールが含まれていた。基盤層は弥生時代前期～後期の間に洪水により上方付加的に形成されたものであるが、弥生時代中期の遺物が周辺も含めて多く認められる。よって基盤層形成中にも人の活動があつた可能性が高い。基盤層中に水田跡を含めた遺構が存在しないか、注意が必要である。

島畑構築年代の追求と他地域との比較 今回の調査の結果、最初期の島畑の年代は、これまでより古い12世紀台となる可能性が生じた。河内地域の池島・福万寺遺跡の福万寺地区では11世紀後半～12世紀前半に「島畑の原型」があるとされている。^(注58) 今回の年代と近いものであり、今後は両者の比較が必要となってくるであろう。加えて列島各地に島畑が展開する現象について、農業指導者のようなものが存在したのか、と言う点も検討課題となるだろう。

これらを考える前提として、出土遺物を根拠とする年代決定が重要となってくるが、既往の報告では「〇〇世紀の土器」のような表現が多く見られた。また、12～13世紀とされてきた島畑の年代決定の根拠も曖昧であつた。年代の根拠となる遺物の出土遺構・層を具体的に明示した上で、依拠する編年のどの段階にそれが位置するかを、まずは示すべきである。

地域の村落史から中世史へ これまでの発掘調査により、中世に木津川右岸の広範囲において島畑という土木行為を伴う農地改良が行われていたことが明らかになっている。12世紀の状況は不明であるが、やや後の鎌倉時代においては調査地周辺は京や南都の寺社領となっている。後の寺田環濠集落の成立(応仁・文明の乱頃とされる)は、地域の村落史上のひとつの到達点であると考えられる。こうした流れを考える上で島畑景観を作つた主体がどのようなものであつたか、文献史学や近年進展しつつある古気候の分析とも協業しつつ、中世史に位置付けていく必要がある。

- 注1 京都府教育庁指導部文化財保護課1972『京都府遺跡地図』松香堂、京都府教育庁指導部文化財保護課編1985『京都府遺跡地図』（第5分冊 第2版）京都府教育委員会
- 注2 肥後弘幸1999「分布調査」『埋蔵文化財発掘調査概報1999』京都府教育委員会
- 注3 城陽市教育委員会1996『城陽市文化財地図』、小泉祐司1999「下水主遺跡」『城陽市史』第三巻 城陽市史編さん委員会、京都府教育庁文化財保護課編2003『京都府遺跡地図』（第3版 第3分冊）京都府教育委員会
- 注4 福島孝行2014「下水主遺跡」『京都府埋蔵文化財調査報告書』（平成25年度）京都府教育委員会、福島孝行2015「下水主遺跡第7次調査」『京都府埋蔵文化財調査報告書』（平成26年度）京都府教育委員会
- 注5 植村善博2008「京都盆地南部、木津川・宇治川の治水地形」『文学部論集』第92号 佛教大学
- 注6 足利健亮 編1996「歴史地理編」『城陽市史』第4巻 城陽市史編さん委員会
- 注7 脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原琢・中野聰志・竹内恵二・田口耕作2013「京都東南部地域の地質」『地域地質研究報告』5万分の1地質図幅 京都(11)第40号 産業総合研究所地質調査総合センター
- 注8 増田富士雄2019「木津川の氾濫流路と破堤ロープの堆積物」『ダイナミック地層学 大阪平野・神戸六甲山麓・京都盆地の沖積層の開析』近未来社
- 注9 村田和弘ほか2009「魚田遺跡第7次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告書』第133冊
- 注10 河原伸治1999「南山城寺田集落の空間構造に関する歴史的研究」『日本建築学会計画系論文集』第515号 日本建築学会
- 注11 金田章裕1982「条理プランと小字地名」『人文地理』第34巻第3号 人文地理学会
- 注12 文化庁記念物課監修2010『発掘調査のてびき』（集落遺跡発掘編）同成社
- 注13 大野 薫1989「島畑の考古学的調査－大阪府池島遺跡の事例」『郵政考古紀要』15 郵政考古学会
- 注14 増田孝彦2015「島畑の検討」『京都府遺跡調査報告集』163冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注15 岡崎研一・筒井崇史2016「A3区の調査 調査区の概要と基本的な層序」の注10『京都府遺跡調査報告集』第167冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注16 増田富士雄2018「付編1 京都府南部、城陽市下水主遺跡の発掘調査で見いだされた弥生時代の氾濫流路とその埋積物」『京都府遺跡調査報告集』第173冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注17 増田富士雄2022「氾濫流路堆積物にみる同時異相 京都府城陽市水主神社東遺跡」『堆積学研究』第80巻第1号 日本堆積学会
- 注18 高野陽子2003「総括 出土遺物の検討 弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡』（京都府遺跡調査報告書 第33冊）
- 注19 深澤芳樹2002「考察 山田寺下層の土器について」『山田寺発掘調査報告』（奈良文化財研究所学報 第63冊）奈良文化財研究所
- 注20 松野元宏2004「考察 市田斉当坊遺跡出土弥生土器の検討」『市田斉当坊遺跡』（京都府遺跡調査報告書 第36冊）
- 注21 森岡秀人1990「山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
- 注22 前掲注18と同じ
- 注23 中居和志2010「古墳出現前後の近江地域－土器編年を中心に」『立命館文学考古学論集』V 立命館大学考古学論集刊行会
- 注24 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史』第12号 京都市埋蔵文化財研究所
- 注25 森島康雄1995「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 注26 山本信夫「陶磁器分類 磁器の分類 白磁」2000『太宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』（大宰府市の

文化財 第49集)大宰府市教育委員会

- 注27 兼康保明1990「近江地域」『弥生土器の様式と編年』(近畿編Ⅱ)木耳社
- 注28 前掲注27と同じ
- 注29 前掲注18と同じ
- 注30 前掲注27と同じ
- 注31 前掲注24と同じ
- 注32 高野陽子・筒井崇史2018「総括 下水主遺跡の時期別変遷」『京都府遺跡調査報告書』第173冊、筒井崇史2018「総括 下水主遺跡・水主神社東遺跡の時期別変遷」『京都府遺跡調査報告書』第174冊
- 注33 芝山遺跡の押型文は(菅博絵ほか2023『京都府遺跡調査報告書』第188冊)。同遺跡の北白川C式は(小池寛1987『芝山遺跡』(京都府遺跡調査概報 第25冊)等で「元住吉山式」とされてきたもの。森山遺跡は(小泉裕司・岡田憲一1997『森山遺跡発掘調査報告書』(城陽市埋蔵文化財調査報告書 第32集 城陽市教育委員会)城陽市教育委員会)。小樋尻遺跡については(喜田貞裕・小泉裕司・岡田憲一・新里 遥・西山 集2018『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第76集 城陽市教育委員会)。地表下の照葉樹林については(中塚良2002「自然環境編 大地の生い立ちと環境の変遷」『城陽市史』第1巻 城陽市史編さん委員会)。
- 注34 渡辺 誠 編1975『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 注35 前掲注14と同じ
- 注36 乾 幸次1981「山城盆地南部における明治期の商業的農業」『歴史地理学』第115号 歴史地理学会。またこの時期の綿作については、既往のD地区S N17の土壤分析で江戸時代～明治時代の層から多産している点からも裏付けられている。『163冊』の注11
- 注37 前掲注14と同じ
- 注38 前掲注14と同じ。『第163冊』63頁第43図の鳥畑分類図ないし本文では、誤植が発生しているようである。図中の斜線表現を「ベース」と理解すると、本文中の「B-1」が図中の「B-2」にあてはまり、本文中の「B-2」が図中の「B-1」を指すようである。なお「A」の「堀り下げ田」は歴史的名称の概念では堀上田にあたり、「掻き上げ田」のキャプションがある図中の「B-2」は歴史的名称では堀下田に該当する。
- 注39 金田章裕1992『微地形と中世村落』吉川弘文館、井上智博2017「総括 古代遺構の土地利用」『瓜破北遺跡2』大阪文化財センター、井上智博2018「中世の河内平野における鳥畑発達の背景」『構築と交流の文化史』(工樂善通先生傘寿記念論集)工樂善通先生の傘寿をお祝いする会
- 注40 原田信男2008『中世の村のかたちと暮らし』(角川選書425)角川学芸出版
- 注41 中島峰広1966「茨城県鹿島半島南部砂丘地における堀下田の経営と畑作経営」『地理学評論』第39巻第2号 日本地理学会
- 注42 前掲注13、注39のうち井上2017・2018と同じ
- 注43 『第163冊』では鳥畑を作るために「水路を開削して湿地をいったん陸化・乾燥させた」と想定している。
- 注44 河角龍典2004「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化」『京都歴史災害研究』第1号 立命館大学歴史都市防災研究所、中島暢太郎1983「鴨川水害史(1)」『京都大学防災研究所年報』26号B-2 京都大学防災研究所
- 注45 笹生 衛2020「古代・中世の景観変化と気候変動－東京湾東岸における沖積平野の変遷を中心に」『気候変動から読みなおす日本史』4(気候変動と中世社会)臨川書店
- 注46 前掲注44、注39のうち井上2018と同じ。河角龍典2000「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人

- 間活動－大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例』『歴史地理学』第42巻第1号 歴史地理学会
- 注47 植村善博・小林善仁・木村大輔・進藤美奈・山中健太・浅子里絵・杉山純平・三宅智志・山下博史2007「木津川・宇治川低地の地形と過去400年の水害史」『京都歴史災害研究』第7号 立命館大学歴史都市防災研究所
- 注48 Glenn T Trewartha 1928 A Geographic Study in Shizuoka PreFecture Japan, Annals oF The American Geographics vol.18 No.3、竹内常行1968「島畑景観の分布について」『地理学評論』vol.41, No4 日本地理学会
- 注49 前掲注15と同じ
- 注50 前掲注32(筒井2018)、その一方「2. 位置と環境 2) 歴史的環境」では「島畑と島畑の間の凹地では水田を行っていたと考えられる」(7頁)と述べており、自己矛盾している。
- 注51 前掲注10と同じ
- 注52 前掲注6と同じ
- 注53 前掲注13と同じ
- 注54 前掲注40と同じ 城陽市の観音堂地区では現在でも湿地地帯がある(城陽市2015)
城陽市2015「農業の有する多面的機能の促進に関する計画」
- 注55 佐原 真1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座 日本歴史』第1巻 岩波書店
- 注56 これまで刊行された新名神関係の下水主遺跡の発掘調査報告書において、島畑に関連する文献として挙げられているのは、発掘調査報告書を除くと文化庁の調査研究報告のみである。文化庁の調査研究報告はあくまで文化的景観のリストであるため、先行研究論文が一切挙げられていないことになる。農林水産業に関する文化的景観の保存・整備・活用に関する検討委員会2003『農林水産業に関する文化的景観の保護に関する調査研究(報告)』文化庁文化財記念物課
- 注57 磯貝富士夫2002『中世の農業と気候 水田二毛作の展開』吉川弘文館
12世紀段階については「讃岐国曼荼羅寺所司等解」(『鎌倉遺文』1992号)や「伊勢太神社檢非違使伊勢某状案」(『光明寺古文書』)について、二毛作の裏付けとする見解とそれを否定する見解がある。
- 注58 前掲注39のうち井上2018と同じ

付編 1 下水主遺跡 4次 F 地区 調査報告の問題点

はじめに

今回の発掘成果と第4次F地点の調査報告(『第168冊』)を照らし合わせると、基盤層や基盤層を掘り込んで作られた最初期の島畑の検出高に齟齬が生じる事態となった。図面や写真で検証してみたところ、第4次調査時の基盤層の認定に違いがあると考えられる。

今回の発掘調査過程においても、F14区で中世以降の堆積土を一時基盤層と誤って判断した。F14区の調査では途中でこれに気がついたが、第4次調査では同様の誤認があったものと推測される。これにより最初期の島畑の認定について誤りが生じたと考えられる。第4次調査時に生じたと考えられる事実誤認について、調査区ごとにここで指摘しておきたい。なお『第168冊』19頁第8図の土層断面柱状図についても注意が必要である。

1) F1区

第8層を上面(標高15.4m)とする「島畑106」が調査区の北半部で報告されていて、素掘溝から出土した遺物の年代から中世後半～近世にかけてのものとされている。「島畑106」下の標高14.4m付近には第10層があり、ここで古代と推測される掘立柱建物跡が検出されている。第10層は調査区の中程で南へ向かって落ち込んでいる。第10層は、「島畑106」に平面的に対応する形で調査区の北半部にしか存在しておらず、古代の掘立柱建物も調査区の北半部のみに限られている。F1区の北側で今回調査したF16区では標高13.7m付近で基盤層を検出しており、今回の基盤層がF1区の第10層に対応すると考えられる。よって中世後半～近世とされる「島畑106」は基盤層を掘り込む最初期の島畑である可能性は低い。一方、「島畑106」の平面的範囲は第10層の範囲と一致している。よって第10層自体が島畑であり、その上位に新しい島畑が重複している可能性がある。なお調査区北半部の上層遺構面で検出された連続的な溝は、天地返しの可能性がある。(増田富士雄2010「木津川流域の人工地形改変:天井川と天地返し」『ダイナミック地層学 大阪平野・神戸六甲山麓・京都盆地の沖積層の開析』近未来社)

2) F3区

第5層を上面(標高15.2m付近)とする「島畑109」が報告されている。F3区のすぐ北側に位置する、今回報告したF14区では標高13.6～13.7mで基盤層を検出している。報告内でも第13層が「地山」とされており、「島畑109」は最初期の島畑の可能性は低い。南壁土層断面図(『第168冊』第28頁第15図)では第13層に若干の比高が見られるが、島畑であるかは図面上では、判断できない。

3) F4区

「島畑104」が報告されている。島畑の時期不明ではあるが、周辺での調査成果から中世後半～近世と推測されている。島畑と判断された根拠は、平均の標高14.8m付近の第7層上面で素掘溝が検出されている点である。島畑の最大の特徴である、島畑と低位部が比高を持つ状況が確認された訳ではない点に注意が必要である。基盤層より上位の自然堆積層に素掘溝が掘られるのは、今回実施したF17・18・21区の中世面でも認められるので、素掘溝の存在のみで島畑が存在する

根拠とはならない。また第7層よりも下位にある第11層が「地山」と報告されており、標高14.3m付近の第11層上面で南北溝が数条検出されている。最初期の鳥畑は基盤層を削るものであり、今回のF15区の調査においても13.8～13.9m付近で基盤層が検出されている。したがって、標高14.9m付近の第7層上面で検出された「鳥畑104」は少なくとも最初期の鳥畑である可能性は低い。

4) F5区

「自然堆積層」である第5層を上面(標高15.3m)とする「鳥畑105」が報告されている。F5区のすぐ南に位置する今回調査したF15区では、基盤層を13.8～13.9mで検出していることから、「鳥畑105」は基盤層を掘り込む最初期の鳥畑である可能性は低い。北壁土層断面図(『第168冊』第39頁第25図)を見ると、「鳥畑105」の下に、他の調査区では弥生時代～古代の遺構面とされる第11・12層が存在している。そして第11・12層は東側へ不自然に高くなっている様子が確認できる。F15区で検出した基盤層の標高とも大きく変わらないことから、この第11・12層の高まりが最初期の鳥畑である可能性が高い。

5) F8区

鳥畑は報告されていない。検出された遺構は、弥生時代の土坑、古墳時代後期の溝、時期不明の井戸・ピットが検出されている。遺構面は、標高14.2m付近で検出した第15層であり、その下には「地山」の第16層があるとされている。南壁土層断面図(『第168冊』61頁第46図)を見ると第16層が東側へ向かって高まっており、第15層は調査区の西半部にしか存在しないようである。第16層の高まりは0.5m程度の不自然な比高がある。F8区の北側で今回調査したF18区では基盤層を掘り込んだ鳥畑114を確認していることから、「地山」とされる第16層は基盤層であり、東側への高まりは鳥畑である可能性がある。第15層は低位部の埋土を誤認したものと考えられる。

第15層が広がる調査区西半部で検出されたS K803は深さ0.25mで、土器がまとまって出土したことから弥生時代後期と判断されている。しかしながら今回の調査で、F17区S X1705からは弥生土器ばかり出土しているが、検出面は確実に中世の堆積土上であったので、S K803出土遺物も再堆積した可能性がある。

6) F9区

調査区の東部において、第13層を上面とする「鳥畑108」が報告されており、周辺の事例から中世後半～近世のものとしてされている。第13層上面は標高14.5m付近である。「鳥畑108」の下には中層・下層と2つの遺構面があり、下層遺構面である第15層上面(標高14.0m付近)は弥生時代後期～古代の「基盤層」とされている。

F9区の南東側にある今回調査したF13区においても基盤層を標高14.0m付近で検出し、基盤層上で飛鳥時代の溝S D1302を検出しているため、F9区第15層が基盤層であると考えられる。よって「鳥畑108」は基盤層を掘り込む最初期の鳥畑の可能性は低い。

7) F10区

「鳥畑110」が報告されており、中世の包含層にパックされていることから、中世の鳥畑と判断されている。「鳥畑110」は調査区西半部に第10層(上面の標高14.5m付近)の高まりがあり、東側

に低位部があるとされている。第10層の下に存在する第16・17層が弥生時代後期の遺構面とされ、
竪穴建物・土器溜まり・溝が検出されている。今回調査したF17区は、F10区のすぐ南に位置し
ており、基盤層上で鳥畑110・113を検出している。F17区の鳥畑は頂部を削平されているため参
考にならないが、低位部の標高は13.6～13.7m付近である。一方、F10区の「鳥畑110」の低位部
であるSD1026の底部(第16層上面)は標高14.1～14.2m付近であり、F17区とは高さが異なっ
ている。F10区の北壁土層断面図(74頁第56図)を見ると、「鳥畑110」の下にある第17層が西に向か
って立ち上がっており、それに伴い第16層も西へ向かって層が薄くなり途中で消滅する。第17層
が西へ向かって高くなる状況は、形状や標高の点においてF17区で検出した鳥畑と同じ特徴を持
っている。第10層の高まりである「鳥畑110」は中世段階のものかも知れないが、最初期の鳥畑
はその下にある第17層を掘り込んだものと判断される。第16層は鳥畑低位部の埋土の可能性が高
い。その証左として、F10区での弥生時代の遺構分布状況は、第17層が広がる調査区西半部に限
られており、第16層が広がる調査区東半部では弥生時代の遺構は検出されていない(時期不明の
溝SD1026が検出されたのみである)。

8) F11・12区

F11区の南壁土層断面図(『第168冊』81頁第61図)では弥生時代～中世の遺構面である第8層が
標高14.3m付近で検出されている。F11区の北側にある、F12区の北壁土層断面図(『第168冊』
88頁第67図)では弥生時代から平安時代にかけての遺構面である第9・10層上面を標高14.4m
付近で検出している。弥生時代の遺構が検出されていることから、どちらの層も基盤層に該当す
ると考えられる。両調査区の間で実施した今回のF22区では、調査区南西隅で基盤層を掘り込む
鳥畑の一部を検出した。鳥畑頂部の標高は13.8mである。鳥畑以外の部分は全て鳥畑低位部に該
当し、標高は13.6～13.7mである。したがってF22区とF11・12区の基盤層には0.6～0.8mの標高
の差がある。基盤層はF22区は低く、その南北にあるF11・12区では高い。F11・12区では弥生
時代の遺構が検出されており、F10区の事例などを考慮すると、F11・12区は調査区の全体が最
初期の鳥畑上に位置する可能性がある。(加藤雅士)

付編 2 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男

1. はじめに

調査区を構成する堆積層の年代情報の取得を目的に、F13区、F18区・F21区から採取した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料

1) 試料の採取状況

ここでは、年代測定試料とともに、併せて採取を行った花粉分析、植物珪酸体分析と大型植物遺体分析の堆積物試料の採取状況を含め報告する。付表1に試料一覧を示す。また、年代試料については、測定試料の測定試料の情報、調製データを付表2に示す。

2) F13区での採取状況

第61図に試料採取位置等を示す。

付表1 分析試料一覧

調査区	柱状図記載地点	試料採取地点	遺構	試料番号	層位	岩質	分析項目					時期		
							花粉	大型植物遺体	植物珪酸体	年代測定	樹種			
F13	-	1地点	SD 1302	2	5	砂質シルト	○	-	-	-	-	飛鳥		
				8	38	粘土質シルト	○	-	-	-	-	古墳前期～中期		
			NR 1303	9	42.43	砂を含む腐植質粘土質シルト	○	○	-	-	-			
				12	46	粘土質シルト	○	○	-	○	-			
			NR 1304	14	31	植物遺体を多量に含む中～粗粒砂混じりの腐植質シルト	○	○	-	-	-	縄文晩期後葉		
				16	34.35	泥炭質粘土	○	○	-	○	-			
		2地点	基盤層(氾濫原)		2	14	粘土質シルト	-	-	○	-	-	弥生前期後半～中期後半	
					3	15	砂を含む粘土質シルト(根痕発達)	-	-	○	-	-		
					5	16	砂質粘土質シルト(根痕発達,炭片含む)	-	-	○	○	-		
					6	17	粘土質シルト	-	-	○	-	-		
7	粘土質シルト				-		-	○	-	-				
F18	A地点	5地点	NR 1821	1	7	植物遺体を含み炭化材片混じる粘土質シルト	○	-	-	○	-	弥生中期後半～後期前半		
				2	9	植物遺体を含む粘土質シルト	○	○	-	-	-			
		3地点	1	14	植物遺体を多量に含むシルト混じりの細粒砂～中粒砂	○	○	-	-	-				
	2地点	-	1	27	植物遺体を多量に含むシルト混じりの中粒砂～粗粒砂	○	○	-	○	-	弥生中期～後期			
	B地点	1地点	-	4地点	-	1	18	砂質シルト	-	-		-	○	-
				1	30	粘土質シルト	○	-	-	-		-	-	
2				32	腐植質粘土質シルト	○	-	-	○	-	-			
				3	33	シルト質粘土	○	-	-	-	-	-		
F21	C地点	6地点	-	1	P	植物遺体を多量に含む砂の薬理を挟在する泥炭質シルト	○	○	-	-	○	縄文晩期中葉～後葉		
				2	P	植物遺体を多量に含む粘土質シルト	○	-	-	○	-			

・無遺物層については、放射性炭素年代値にもとづく

[年代測定試料]

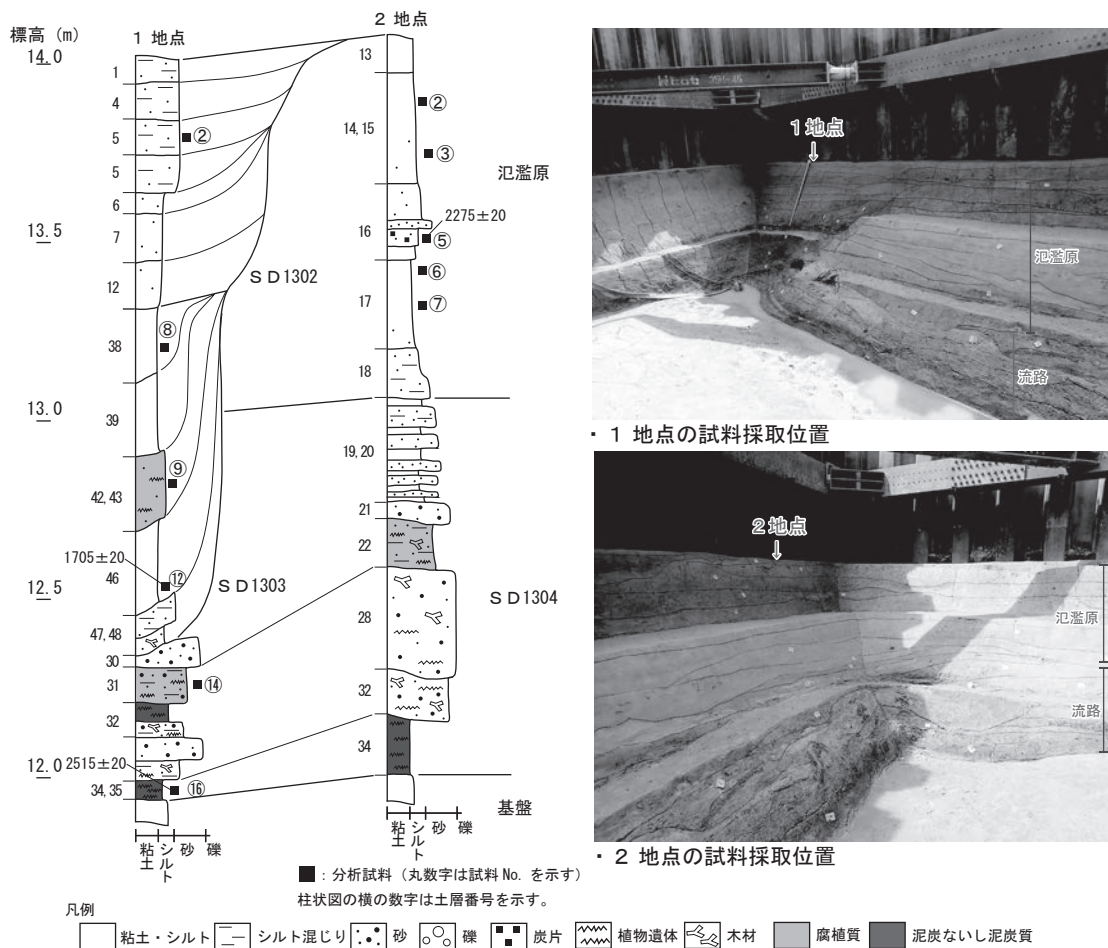
年代測定試料は、調査区の南壁断面で採取した。採取地点は、1地点と2地点の2か所である。1地点では、NR1303で試料を採取した。NR1303は、上位のSD1302の出土遺物および堆積状況から、古墳時代前期と推定されるものの、出土遺物が非常に少なく時期を決定できていない。試料の採取位置は、NR1303埋土の最下部の46層底部(試料No.12)で、挟在する生材片(試料No.12:PLD-42714)を採取した。さらに、NR1303の基底となる流路NR1304堆積物からは、遺物が出土しておらず、堆積年代が不明であったため、測定試料を採取した。試料の採取位置は、泥炭質粘土層の34・35層で、挟在する生の葉遺体(試料No.16:PLD-42715)を採取した。2地点では、氾濫原を埋積した泥質堆積物の16層中に炭化材片の挟在が認められた。氾濫原の埋積層からは、出土遺物が得られなかったため、16層から採取した炭化材片(試料No.5:PLD-42716)の年代測定を行った。

[花粉分析、大型植物遺体分析、植物珪酸体分析の試料]

本調査区では、NR1303とSD1302の基底をなす堆積層について、層相から下部が流路堆積物、上部が氾濫原堆積物と解釈され、双方とも調査区内において概ね層状に累重する(第61図)。飛鳥時代のSD1302と、その下位に連続するように続く古墳時代前期の可能性のあるNR1303は、流路堆積物と氾濫原堆積物からなる基盤層を深く掘削して形成される。SD1302とNR1303の埋土

付表2 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-42714	調査区:1地点 遺構:NR1303 試料No.12	種類:生材 試料の性状:最終形成年輪以外 部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-42715	調査区:1地点 遺構:NR1304 試料No.16	種類:生の葉遺体 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-42716	調査区:2地点 試料No.5	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-44829	調査区:F18区 試料採取地点:1地点 層位:32層 試料No.1-2	種類:生材 試料の性状:最終形成年輪 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-44830	調査区:F18区 試料採取地点:2地点 層位:27層 試料No.2-1	種類:生材 試料の性状:最終形成年輪 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-44831	調査区:F18区 試料採取地点:4地点 層位:18層 試料No.4-1	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外 部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-44832	調査区:F18区 試料採取地点:5地点 遺構:NR1821 層位:7層 試料No.5-1	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外 部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-44833	調査区:F18区 試料採取地点:5地点 遺構:NR1821 層位:7層 試料No.5-1	種類:生材 試料の性状:最終形成年輪 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)



第61図 F13区の試料採集地点の柱状図と試料採集位置

は、粘土質シルトから砂質シルトへ上方粗粒化する泥質堆積物で構成されており、層相から基本的に静穏な堆積環境下にあったと捉えられる。また、埋土中には、溝の肩部から流入した植物遺体や腐植の堆積が観察される。堆積状況から、SD1302とNR1303の埋土に含まれる植物化石は、溝の周辺の情報を反映している可能性が高いと判断されたため、1地点においてSD1302とNR1303で花粉分析、大型植物遺体分析を行った。試料の採取位置は、SD1302埋土の砂質シルトの5層(試料No.2)、NR1303の粘土質シルトの38層(試料No.8)、植物遺体を挟在する腐植質砂を含む粘土質シルトの42層、43層、粘土質シルトの46層(試料No.12)である。

また、NR1303基底の流路NR1304堆積物には、最下部の基底をなす青灰色のシルト層の直上に泥炭層が累重しており、上部を被覆する粗粒砂～極粗粒砂やシルト混じりの中粒砂～粗粒砂主体の砂層に葉や木材など多量の植物遺体が含まれる。これらの植物遺体は、流路沿いに生育していた植物が洪水時などに運搬され、堆積したと考えられる。堆積物中の植物遺体には、脆弱で水中での運搬過程に破壊されやすい広葉樹の葉遺体が多く含まれており、分析地点の比較近傍から再堆積したものが多く含まれると解釈される。そこで今回は、流路沿いの古植生の検討を目的として、NR1303基底の流路NR1304堆積物についても花粉分析と大型植物遺体分析を行う。試料の採取位置は、腐植質で多量の植物遺体を含むシルト混じり中粒砂～粗粒砂の31層(試料

No.14)と、泥炭の34層、35層(試料No.16)である。

1地点で試料採取した流路堆積物の上部には、粘土質シルト～砂質粘土質シルト主体の泥質堆積物からなる氾濫原堆積物が累重するが、1地点では、S D1302、N R1303の掘削によって、氾濫原堆積物が失われている。2地点では、泥質の氾濫原堆積物中に、細粒砂からなる薄層の洪水砂層の挟在が観察された。また、薄層の洪水砂層の直下には、炭化材片が多く含まれ、根痕などの生物擾乱が発達した層準が確認された。層相から、薄層の洪水砂層直下の生物擾乱が発達した層準については、埋没水田層の可能性があると考えられた。このため、2地点では、薄層の洪水砂層直下の生物擾乱が発達した層準とその上下の堆積層で植物珪酸体分析を行い、堆積層中の栽培種のイネ機動細胞珪酸体の含量密度の層位的変化から、水田層の有無に関する基礎的情報を得ようとした。試料の採取位置は、薄層の洪水砂層直下の生物擾乱が発達した層準が16層(試料No.5)、この上部が14層(試料No.2)、15層(試料No.3)、下部が17層(試料No.6、No.7)である。

3) F18・F21区での採取状況

第62図に試料採取位置等を示す。

[年代測定試料]

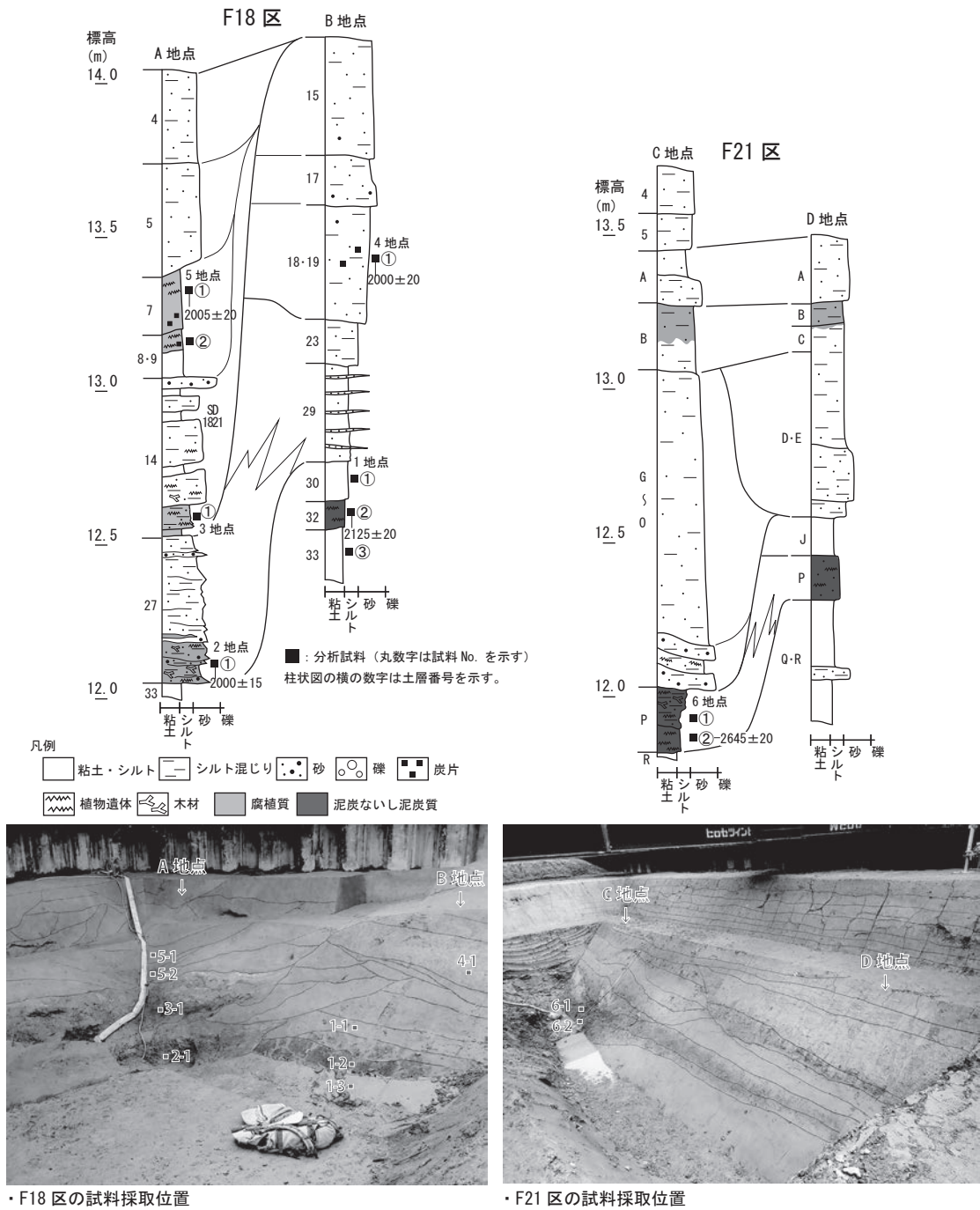
F18区では、N R1821の基底の堆積層から遺物がほとんど出土せず、堆積年代について不明な点が多いため、当該層準を中心に測定試料を採取した。1地点に堆積するのは、N R1821と直下の流路堆積物である2地点の堆積物に侵食された氾濫原の泥層である。1地点では、32層の腐植質粘土質シルト内に挟在する木材片(試料No.1-2:PLD-44829)を採取した。また、1地点で上位に層状に累重する4地点の18層の砂質シルト内からは、炭化材片(試料No.4-1:PLD-44831)を採取した。また、1地点の泥層を侵食する流路埋土が堆積する2地点では、植物遺体を多量に含むシルト混じりの中粒砂～粗粒砂層である27層から木材片(試料No.2-1:PLD-44830)を採取した。さらに、N R1821は、出土遺物が少ないため、N R1821埋土の5地点の7層から採取した炭化材片(試料No.5-1:PLD-44832)の年代測定を行った。

F21区では、掘削深度の基底で確認された、6地点のP層の植物遺体を多量に含む砂の葉理を挟在する泥炭質シルトから木材片(試料No.6-1:PLD-44833)を採取した。

[花粉分析、大型植物遺体分析、樹種同定試料]

植物化石の分析は、流路およびN R1821の底部に堆積した植物遺体を多量に含む層準を中心に実施する。流路およびN R1821の分析層準は、肩部から流入した植物遺体や腐植を多く含む泥質堆積物で構成されており、局地性が高いと考えられる(第62図)。

F18区では、N R1821に上部を削平された流路埋土である2地点の27層の植物遺体を多量に含むシルト混じりの中粒砂～粗粒砂層(試料No.2-1)と、N R1821の埋土最下層である3地点の14層の植物遺体を多量に含むシルト混じりの細粒砂～中粒砂層(試料No.3-1)と、埋土上層の5地点の粘土質シルト層からなる7層(試料No.5-1)と16層(試料No.5-2)において花粉分析を行う。このうち、試料No.2-1、試料No.3-1、試料No.5-1では、大型植物遺体分析も併せて実施する。また、2地点の流路には1地点の堆積層が侵食しているが、この1地点のシルト質粘土層ないし



第62図 F18区・F21区の試料採取地点の柱状図と試料採取位置

粘土質シルト層である30層(試料No. 1-1)、32層(試料No. 1-2)、33層(試料No. 1-3)についても、花粉分析を行う。

F21区では、掘削深度の基底部の流路肩部に堆積した、6地点の植物遺体を多量に含む砂の葉理を挟在する泥炭質シルト層(試料No. 6-1)と粘土質シルト層(試料No. 6-2)について花粉分析を行う。また、試料No. 6-1については、大型植物遺体分析と、層内から無作為に採取した自然木の樹種同定も行う。

付表 3 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-42714 試料 No.12	-29.38 \pm 0.24	1706 \pm 19	1705 \pm 20	264-274 cal AD (10.56%) 349-402 cal AD (57.71%)	258-280 cal AD (19.17%) 330-409 cal AD (76.28%)
PLD-42715 試料 No.16	-30.54 \pm 0.20	2514 \pm 19	2515 \pm 20	772-750 cal BC (16.98%) 685-666 cal BC (14.38%) 636-589 cal BC (32.47%) 579-571 cal BC (4.45%)	776-741 cal BC (21.39%) 692-664 cal BC (18.38%) 647-547 cal BC (55.68%)
PLD-42716 試料 No.5	-30.28 \pm 0.21	2273 \pm 19	2275 \pm 20	392-361 cal BC (52.58%) 273-265 cal BC (8.53%) 242-235 cal BC (7.16%)	396-353 cal BC (57.92%) 285-229 cal BC (36.88%) 215-211 cal BC (0.65%)
PLD-44829 試料 No.1-2	-30.46 \pm 0.13	2126 \pm 18	2125 \pm 20	175-103 cal BC (65.63%) 65- 60 cal BC (2.64%)	340-326 cal BC (4.26%) 199- 93 cal BC (81.54%) 76- 55 cal BC (9.65%)
PLD-44830 試料 No.2-1	-30.21 \pm 0.21	1999 \pm 17	2000 \pm 15	38-13 cal BC (29.20%) 3-27 cal AD (29.27%) 47-57 cal AD (9.80%)	43 cal BC-66 cal AD (95.45%)
PLD-44831 試料 No.4-1	-29.63 \pm 0.34	1999 \pm 22	2000 \pm 20	39-12 cal BC (28.02%) 3-28 cal AD (27.46%) 44-59 cal AD (12.79%)	45 cal BC- 77 cal AD (95.19%) 102-104 cal AD (0.26%)
PLD-44832 試料 No.5-1	-25.02 \pm 0.28	2007 \pm 19	2005 \pm 20	41-10 cal BC (38.95%) 0-25 cal AD (29.32%)	45 cal BC-62 cal AD (95.45%)
PLD-44833 試料 No.6-2	-28.90 \pm 0.20	2647 \pm 19	2645 \pm 20	813-799 cal BC (68.27%)	829-792 cal BC (95.45%)

3. 方法

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5S DH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

4. 結果

付表 3 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

5. 考察

1) F13区

(1)年代値

測定結果(以下の較正年代は 2σ の値)は、1地点の試料No.12: PLD-42714)の ^{14}C 年代が 1705 ± 20 BP、較正年代が258-280 cal AD (19.17%)および330-409 cal AD (76.28%)、1地点の試料No.16: PLD-42715)の ^{14}C 年代が 2515 ± 20 BP、較正年代が776-741 cal BC (21.39%)、692-664 cal BC (18.38%)、647-547 cal BC (55.68%)、2地点の試料No.5: PLD-42716)の ^{14}C 年代が 2275 ± 20 BP、較正年代が396-353 cal BC (57.92%)、285-229 cal BC (36.88%)、215-211 cal BC (0.65%)である。

森岡ほか(2016)の暦年代観にもとづくと、1地点の試料No.12の較正年代は、古墳時代前期前半から中期前半に相当する。小林(2017)と若林(2018)による縄文時代～弥生時代の土器型式および時期区分と暦年代の研究にもとづくと、1地点の試料No.16の較正年代は縄文時代晩期後葉に相当する。また、2地点の試料No.5の較正年代は、若林(2018)にもとづくと、弥生時代前期後半～中期後半に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回試料のうち2地点の試料No.5は、最終形成年輪が確認できない部位不明の生材である。また、2地点の試料No.5は性状不明の炭化材である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

(2)調査区の堆積環境変遷

年代測定の結果、1地点のNR1303底部の試料No.12からは古墳時代前期前半～中期前半の年代値が得られた。これは、上位の飛鳥時代に埋没したSD1302と層位的に矛盾のない結果であるとともに、発掘調査成果からの予想とも整合的である。1地点の試料No.16と2地点の試料No.5は、NR1303とSD1302の基底をなす流路および氾濫原の堆積層である。層相からは、下位の流路から上位の氾濫原へ連続的な層相変化を示すと捉えられる。年代測定の結果、流路NR1304堆

積層(試料No.16)で縄文時代晩期後葉、氾濫原堆積層(試料No.5)で弥生時代前期後半～中期後半の年代値が得られた。

上記の層相と年代値から、調査区では、縄文時代晩期後葉に流路が形成され、埋没が進行して流路が移動した後に、弥生時代前期後半～中期後半にかけて近傍の流路からの洪水によって氾濫原の埋積が生じた状況が確認できる。弥生時代前期後半～中期後半に調査区で形成されていた氾濫原は、2点での層相観察により泥質堆積物を中心とする堆積層が積層する特徴から、しばしば洪水堆積物が流入する比較的不安定な後背湿地の堆積環境下にあったと推定される。調査区付近ではこれまでに多くの発掘調査が行われており、今回の年代測定によって、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期後半～中期後半に、流路や洪水による氾濫原の上方付加的な埋積が生じていた状況が確認できた点は、既往の発掘調査成果の検討において重要な知見であると考えられる。

古墳時代前期前半～中期前半から飛鳥時代のS D1302、N R1303については、2地点の氾濫原堆積層の表層付近を地表として形成されている。N R1303については、肩部から周辺の土壤などを含む地表物質や付近に生育していたと推測される植物遺体が底部付近まで連続的に流入する堆積状況が観察される。さらに、S D1302、N R1303内では、明確に滞水していたとみられるような、止水域に形成される泥層が確認できない。このようなS D1302、N R1303埋土の層相から、溝の掘削から埋没段階の古墳時代前期前半～中期前半から飛鳥時代には、調査区付近の地下水位がN R1303底部よりも低かった可能性がうかがえる。

上記のS D1302、N R1303の遺構構築過程と埋土の層相および年代値から、調査区では、弥生時代前期後半～中期後半以降から、古墳時代前期前半～中期前半以前のある段階に、氾濫原への洪水流入が弱くなるとともに埋積が静穏化して、堆積環境が安定化したと推定される。この氾濫原の堆積環境の安定化については、周辺の発掘調査をふまえ、さらに詳細に検討していく必要がある。

2) F18区・F21区

(1)年代値

測定結果(以下の較正年代は2σの値)は、1地点の試料No.1-2(PLD-44829)の¹⁴C年代が2125±20 BP、較正年代が340-326 cal BC(4.26%)、199-93 cal BC(81.54%)、76-55 cal BC(9.65%)、2地点の試料No.2-1(PLD-44830)の¹⁴C年代が2000±15 BP、較正年代が43 cal BC-66 cal AD(95.45%)、4地点の試料No.4-1(PLD-44831)の¹⁴C年代が2000±20 BP、較正年代が45 cal BC-77 cal AD(95.19%)および102-104 cal AD(0.26%)、5地点の試料No.5-1(PLD-44832)の¹⁴C年代が2005±20 BP、較正年代が45 cal BC-62 cal AD(95.45%)、6地点の試料No.6-1(PLD-44833)の¹⁴C年代が2645±20 BP、較正年代が829-792 cal BC(95.45%)である。

小林(2017)と若林(2018)による縄文時代～弥生時代の土器型式および時期区分と暦年代の対応関係にもとづくと、試料No.1-2は弥生時代中期前半～後半、試料No.2-1とNo.5-1は弥生時代中期後半～後期前半、No.4-1は弥生時代中期後半～後期後半、試料No.6-1は縄文時代晩期中葉～後葉に相当する。

(2)調査区の堆積環境の変遷

年代測定の結果、標高が最も低いF21区の6地点のP層の流路堆積物中の木片(試料No.6-1)からは、縄文時代晩期中葉～後葉の年代値が得られた(付表3)。

基本的に氾濫原の堆積相と解釈される、F18区の柱状図記載地点のB地点では、2地点の流路に侵食される1地点の32層中の木材片(試料No.1-2)は、弥生時代中期前半～後半の年代値を示した。柱状図記載地点のA地点に位置する2地点の流路の埋土27層中の木材片(試料No.2-1)は、1地点の試料No.1-2よりも新しい弥生時代中期後半～後期前半の年代値が得られており、層序関係と矛盾のない結果である。また、B地点で1地点の上位に層状に累重する氾濫原相である4地点の18層中の炭化材片(試料No.4-1)は、弥生時代中期後半～後期後半の年代値を示した。4地点の18層については、弥生時代後期の土器片が出土しており、堆積層中の炭化材片とも概ね矛盾のない年代値と判断できる。B地点では、下位の32層が弥生時代中期前半～後半、上位の18層が弥生時代中期後半～後期後半で、層位的に整合的な年代値を示す。

上記の放射性炭素年代値と層序から、F18区では、弥生時代中期から後期にかけて、流路が一時的に形成される時期を挟みつつ、氾濫原の埋没が進行したと捉えられる。付近の調査区では、今回観察した堆積層の最上部付近の層準で、弥生時代後期の住居跡が検出されている。このような発掘調査成果から、調査区付近では、弥生時代後期のある段階に、氾濫原の埋没速度が低下して、居住などの人間活動が展開できる安定した地表環境が形成された可能性が考えられる。

なお、分析を行ったF18区とF21区の流路については、今回の調査区において全体が把握できないが、継続的な河床堆積物と判断できる砂～砂礫からなる粗粒の堆積物がほとんど堆積しておらず、主に泥質堆積物で埋積されている。このような層相から、分析を行った流路は、氾濫流路と解釈できる(増田編著, 2019)。

今回の分析では、F21区の縄文時代晩期中葉～後葉の年代値を示す堆積層と、F18区の弥生時代中期から後期にかけての堆積層との層序関係を直接観察する機会が得られなかった。ただし、F13区での分析調査結果にもとづくと、調査区付近では、縄文時代晩期中葉から弥生時代後期のある段階まで、流路や洪水による氾濫原の上方付加的な埋積が生じていたと可能性が高い。また、調査区付近では、弥生時代後期のある段階以降から、氾濫原への洪水流入が弱くなるとともに、埋積が静穏化して、堆積環境が安定化したと推定される。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates.」『Radiocarbon』51(1), 337-360
 小林謙一2017『縄文時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－』263p同成社
 増田富士雄編2019『ダイナミック地層学』219p 近未来社
 森岡秀人・三好 玄・田中元浩2016「総括」古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』335-398 六一書房
 中村俊夫2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編『日本先史時代の¹⁴C年代』3-20 日本第四紀学会

- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
- 若林邦彦2018「近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代－石川県八日市地方遺跡の研究成果との対比－」同志社大学考古学研究室編『同志社大学考古学シリーズⅡ 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集』119-129 同志社大学考古学研究室

付編3 花粉分析、大型植物遺体分析、樹種同定

森 将志・バンダリ スダルシャン・小林克也・辻 康男(パレオ・ラボ)

1. はじめに

古環境を検討するために、F13区とF18区・F21区から堆積物や木材が採取された。以下では、試料に対して行った花粉分析、大型植物遺体分析、樹種同定の結果を示し、遺跡周辺の古植生を検討した。なお、試料の採取位置や堆積状況の詳細および堆積時期は、放射性炭素年代測定の報告に記載している(放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料

1) F13区

分析試料は、1地点と2地点の2つの地点から採取されている。花粉分析試料は、1地点から採取されており、放射性炭素年代から縄文時代晩期後葉と推測されるNR1304から2試料、古墳時代前期～中期のNR1303から3試料、飛鳥時代のSD1302から1試料を採取した。大型植物遺体分析試料は、流路から2試料、古墳時代前期～中期の流路NR1303から2試料を採取した(写真1)。植物珪酸体分析試料は、2地点の弥生時代の基盤層と考えられている堆積物から5試料(14層、15層、16層、17層上、17層下)を採取した。このうち、16層が水田層の可能性のある層位である。樹種同定試料は、NR1303の自然木と敷葉、SD1302の自然木である。SD1302の敷葉の同定試料は、サンプル1とサンプル2であり、平面に密に敷かれた枝状ないし茎状の植物遺体を採取した。写真1～6にサンプルの状況を示す。樹種同定のみ、F13区の他にF15区NR1502の自然木が含まれる。

2) F18区・F21区

F18区では、西壁の5つの地点から堆積物が採取されており、下位から1地点(No.1～3)、2地点(No.1)、3地点(No.1)、4地点(No.1)、5地点(No.1、No.2)の順に重なる。F18区では、花粉分析に7試料を、大型植物遺体分析に3試料を採取した。

F21区では、東壁の6地点(No.1、No.2)から堆積物を採取した。6地点では、花粉分析に2試料を、大型植物遺体分析に1試料を採取した。また、6地点(No.1)の堆積層から無作為に抽出した自然木5点の樹種同定を行った。

3. 分析方法

1) 花粉分析

試料(湿重量約4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9：硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣

にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200に達するまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。

2) 植物珪酸体分析

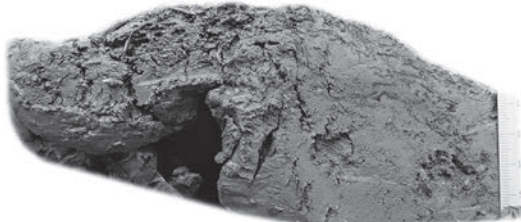
秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビ



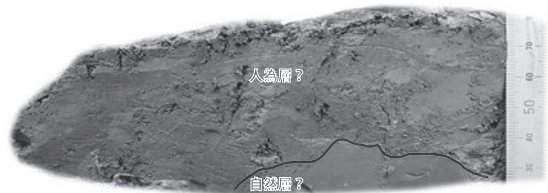
1 NR1303 植物遺体サンプル1



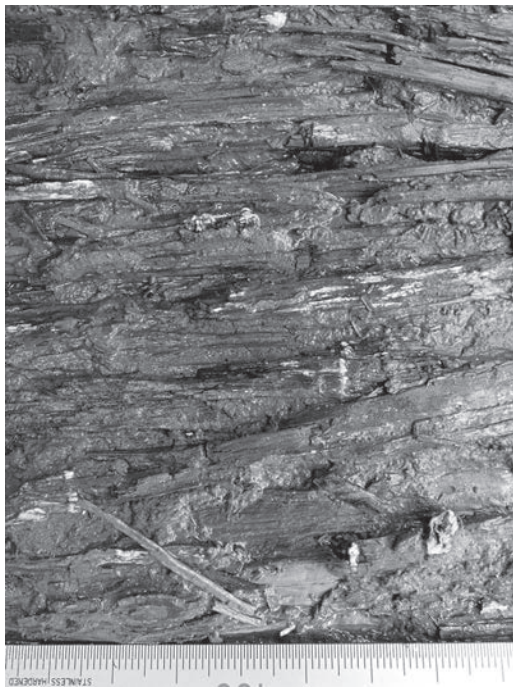
2 NR1303 植物遺体サンプル2



3 NR1303 植物遺体サンプル1の断面



4 NR1303 植物遺体サンプル2の断面



5 NR1303 植物遺体サンプル1接写



6 NR1303 植物遺体サンプル2接写

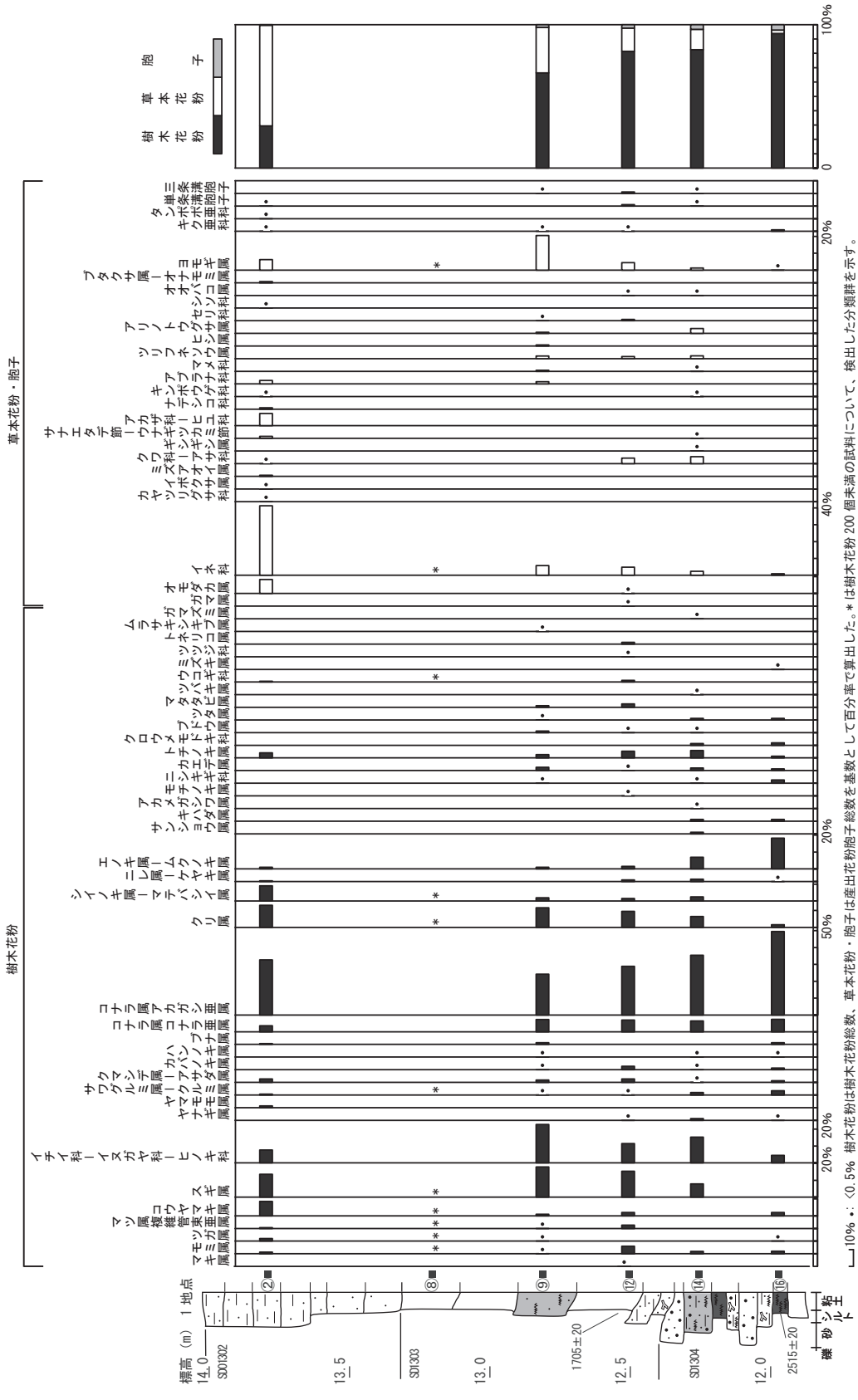
写真1 植物遺体サンプル

付表4 F13区の産出花粉孢子一覧表

学名	和名	S D 1302		N R 1303		N R 1304	
		5層	38層	42,43層	46層	31層	34,35層
樹木							
<i>Podocarpus</i>	マキ属	-	-	-	1	-	-
<i>Abies</i>	モミ属	2	2	1	9	3	3
<i>Tsuga</i>	ツガ属	3	1	1	-	-	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1	1	1	4	-	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	17	1	2	4	-	4
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	28	2	37	31	16	-
<i>Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupressaceae</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	15	-	47	23	31	9
<i>Salix</i>	ヤナギ属	-	-	-	1	2	1
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	2	-	-	-	-	-
<i>Pterocarya - Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	1	1	1	1	3	5
<i>Carpinus - Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	4	-	3	4	1	2
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	-	1	4	1	2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	-	1	-	1	1
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	-	2	-	-	2
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	7	-	15	14	13	15
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	65	-	50	58	72	100
<i>Castanea</i>	クリ属	26	1	24	19	13	3
<i>Castanopsis - Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	18	1	4	3	5	-
<i>Ulmus - Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	1	-	-	2	3	1
<i>Celtis - Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	2	-	2	3	14	37
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	-	-	-	-	2	-
<i>Phellodendron</i>	キハダ属	-	-	-	-	2	2
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	-	-	-	-	1	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	-	-	1	-	-
<i>Celastraceae</i>	ニシキギ科	-	-	1	-	1	4
<i>Acer</i>	カエデ属	-	-	4	1	3	2
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	6	-	4	8	9	2
<i>Rhamnaceae</i>	クロウメモドキ科	-	-	-	-	2	3
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	-	2	1	1	-
<i>Parthenocissus</i>	ツタ属	-	-	1	-	2	2
<i>Actinidia</i>	マタタビ属	-	-	2	4	-	-
<i>Camellia</i>	ツバキ属	-	-	-	-	1	-
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科	1	1	-	2	-	-
<i>Cornus</i>	ミズキ属	-	-	-	-	-	1
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科	-	-	-	1	-	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	-	-	2	-	-
<i>Callicarpa</i>	ムラサキシキブ属	-	-	1	-	-	-
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	-	-	-	-	1	-

草本							
<i>Typha</i>	ガマ属	-	-	-	1	-	-
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	56	-	-	1	-	-
<i>Gramineae</i>	イネ科	279	1	18	12	6	2
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	1	-	-	-	-	-
<i>Aneilema</i>	イボクサ属	1	-	-	-	-	-
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	4	-	-	-	-	-
<i>Moraceae - Cannabaceae</i>	クワ科-アサ科	2	-	-	8	10	-
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	-	-	-	-	1	-
<i>Polygonum sect. Persicaria - Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギソカミ節	8	-	-	-	1	-
<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	アカザ科-ヒユ科	49	-	-	-	-	-
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	6	-	-	-	-	-
<i>Ranunculaceae</i>	キンボウゲ科	3	-	-	-	1	-
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	14	-	4	-	-	-
<i>Leguminosae</i>	マメ科	-	-	2	-	1	-
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	-	-	5	3	4	-
<i>Trapa</i>	ヒシ属	-	-	2	-	-	-
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属	-	-	2	-	7	-
<i>Apiaceae</i>	セリ科	-	-	1	2	-	-
<i>Labiatae</i>	シソ科	1	-	-	-	-	-
<i>Plantago</i>	オオバコ属	-	-	-	1	1	-
<i>Ambrosia - Xanthium</i>	ブタクサ属-オナモミ属	5	-	-	-	-	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	42	1	64	11	3	1
<i>Tubuliflorae</i>	キク亜科	1	-	1	1	-	2
<i>Liguliflorae</i>	タンポポ亜科	3	-	-	-	-	-

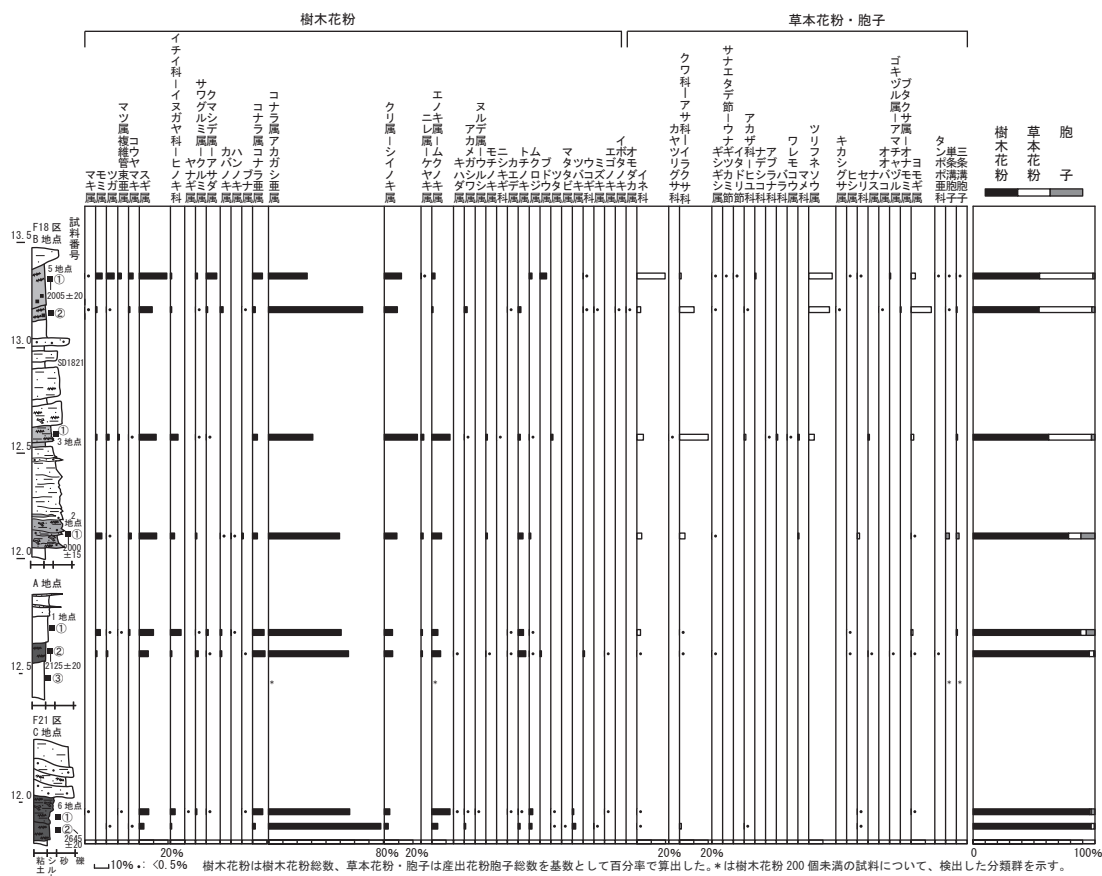
シダ植物							
<i>monolete type spore</i>	単条溝孢子	3	-	-	2	1	-
<i>trilete type spore</i>	三条溝孢子	-	-	1	2	1	-
<i>Arboreal pollen</i>	樹木花粉	200	11	207	201	203	202
<i>Nonarboreal pollen</i>	草本花粉	475	2	99	40	35	5
<i>Spores</i>	シダ植物孢子	3	-	1	4	2	-
<i>Total Pollen & Spores</i>	花粉・孢子総数	678	13	307	245	240	207
<i>unknown</i>	不明	-	-	5	2	6	8



第63図 F13区の花粉分析図

付表5 F18区・F21区の産出花粉孢子一覧表

学名	和名	5地点		3地点		2地点		1地点		6地点	
		No. 1	No. 2	No. 1	No. 1	No. 1	No. 2	No. 3	No. 1	No. 2	
樹木											
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Abies</i>	モミ属	10	2	2	9	7	2	-	-	-	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	12	1	4	1	1	2	-	-	1	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	5	-	2	-	1	-	-	1	-	
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	7	2	1	4	2	-	-	-	1	
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	42	19	24	25	21	13	-	14	7	
<i>Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupressaceae</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2	2	11	6	16	2	-	7	2	
<i>Salix</i>	ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Pterocarya - Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	3	1	1	2	1	4	-	2	-	
<i>Carpinus - Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	16	2	1	-	3	1	-	1	-	
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	4	-	1	2	2	-	-	-	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-	
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	1	-	2	-	1	-	1	-	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	15	4	7	7	17	18	-	15	4	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	59	137	63	102	108	116	2	120	169	
<i>Castanea</i>	クリ属-シイノキ属	26	19	47	18	12	12	-	8	6	
<i>Ulmus - Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	1	-	4	3	2	2	-	-	-	
<i>Celtis - Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	5	2	26	14	9	13	1	27	9	
<i>Phellodendron</i>	キハダ属	-	-	-	-	-	1	-	1	-	
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	-	4	1	-	-	-	-	1	2	
<i>Rhus - Toxicodendron</i>	スルデ属-ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	-	2	2	-	1	-	-	-	
<i>Celastraceae</i>	ニシキギ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Acer</i>	カエデ属	-	1	-	-	1	1	-	1	-	
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	-	4	3	7	8	11	-	1	3	
<i>Sapindus</i>	ムクロジ属	4	-	1	2	1	1	-	5	4	
<i>Vitis</i>	ブドウ属	10	-	-	-	-	2	-	-	-	
<i>Parthenocissus</i>	ツタ属	-	-	3	-	-	-	-	1	1	
<i>Actinidia</i>	マタタビ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Camellia</i>	ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	2	5	
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科	1	1	-	-	-	2	-	-	-	
<i>Cornus</i>	ミズキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	-	-	-	-	-	1	-	1	-	
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
草本											
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Gramineae</i>	イネ科	79	10	15	9	6	1	-	1	1	
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Moraceae - Cannabaceae - Urticaceae</i>	クワ科-アサ科-イラクサ科	5	39	66	10	1	1	-	-	3	
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	2	1	-	1	-	1	-	-	-	
<i>Polygonum sect. Persicaria - Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Polygonum sect. Reynoutria</i>	イタドリ節	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	アカザ科-ヒユ科	-	1	4	-	-	-	-	-	1	
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	3	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Rosaceae</i>	バラ科	-	-	3	-	-	-	-	-	-	
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Leguminosae</i>	マメ科	-	-	3	2	-	-	-	-	-	
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	66	56	13	-	-	-	-	-	-	
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Trapa</i>	ヒシ属	1	-	-	-	1	1	-	-	-	
<i>Apiaceae</i>	セリ科	1	-	-	4	-	-	-	1	1	
<i>Solanum</i>	ナス属	-	-	3	-	-	1	-	-	-	
<i>Plantago</i>	オオバコ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Actinostemma - Gynostemma</i>	ゴキヅル属-アマチャヅル属	3	-	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Ambrosia - Xanthium</i>	ブタクサ属-オナモミ属	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	12	54	6	1	3	1	-	1	-	
<i>Liguliflorae</i>	タンポポ亜科	1	-	-	-	-	1	-	-	-	
シダ植物											
<i>monolete type spore</i>	単条溝孢子	1	1	-	7	-	-	2	-	-	
<i>trilete type spore</i>	三条溝孢子	2	2	3	5	2	-	2	-	-	
<i>Arboreal pollen</i>	樹木花粉	219	209	204	206	213	208	3	212	216	
<i>Nonarboreal pollen</i>	草本花粉	176	166	116	27	11	8	-	3	6	
<i>Spores</i>	シダ植物孢子	3	3	3	12	2	-	4	-	-	
<i>Total Pollen & Spores</i>	花粉・孢子総数	398	378	323	245	226	216	7	215	222	
<i>unknown</i>	不明	3	7	6	18	15	2	-	7	1	



第64図 F18区・F21区の花粉分布図

一カーにとり、約0.02 gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。

3) 大型植物遺体分析

堆積物試料の水洗は、パレオ・ラボにて、各試料200ccを最小0.5mm目の篩を用いて行った。大型植物遺体の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。計数が困難な分類群は、記号(+)で示した。

4) 樹種同定

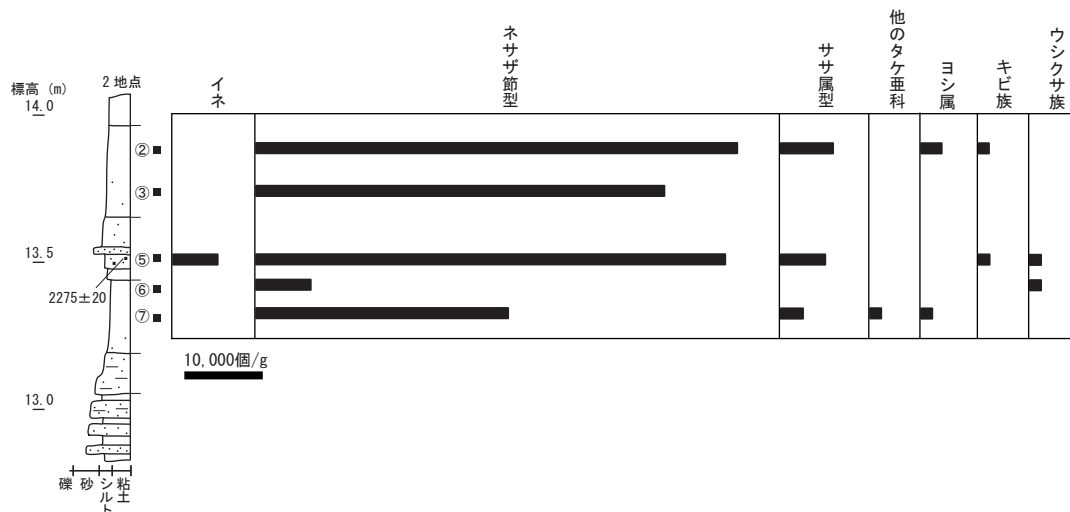
材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柎目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

4. 結果

1) 花粉分析

付表6 F13区の試料1g当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)
14層	0	60,700	6,600	0	2,600	1,300	0
15層	0	51,500	0	0	0	0	0
16層	5,600	59,200	5,600	0	0	1,400	1,400
17層上	0	6,900	0	0	0	0	1,400
17層下	0	31,800	2,800	1,400	1,400	0	0



第65図 F13区の植物珪酸体分布図

(1) F13区

6試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉38、草本花粉24、形態分類のシダ植物胞子2の、総計64である。これらの花粉・胞子の一覧表を付表7に、分布図を第65図に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科-アサ科とマメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、NR1303の38層では十分な量の花粉化石が得られなかったが、それ以外の試料からは十分な量の花粉化石が得られた。樹木花粉では、スギ属やイチイ科-イチガヤ科-ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属、クリ属などの産出が目立つ。NR1304の31層では、スギ属やイチイ科-イチガヤ科-ヒノキ科、クリ属は産出率が増加するのに対し、コナラ属アカガシ亜属は減少している。草本花粉では、NR1303の42層でヨモギ属が、SD1302の5層でイネ科の産出が目立つ。

(2) F18区・F21区

検鏡の結果、1地点のNo.3には十分な量の花粉化石が含まれていなかった。9試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉34、草本花粉23、形態分類のシダ植物胞子2の、総計59である。これらの花粉・胞子の一覧表を付表5に、分布図を第63図に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それら

の分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科－アサ科－イラクサ科やバラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

樹木花粉では、全体的にスギ属やコナラ属アカガシ亜属、クリ属－シイノキ属、エノキ属－ムクノキ属などの産出が目立つ。草本花粉では、試料によって組成が異なり、3地点のNo.1では便宜的に草本類に入れたクワ科－アサ科－イラクサ科が、5地点のNo.2ではクワ科とツリフネソウ属、ヨモギ属が、5地点のNo.1ではイネ科とツリフネソウ属が突出した産出率を示す。

2)植物珪酸体分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(付表6)、分布図に示した(第65図)。検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の7種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。

イネ機動細胞珪酸体の産出が確認できたのは、16層のみである。また、全ての試料で産出が確認できたのはネザサ節型機動細胞珪酸体である。

3)大型植物遺体分析

(1)F13区

結果一覧を付表7に、分布図を第66図に示す。

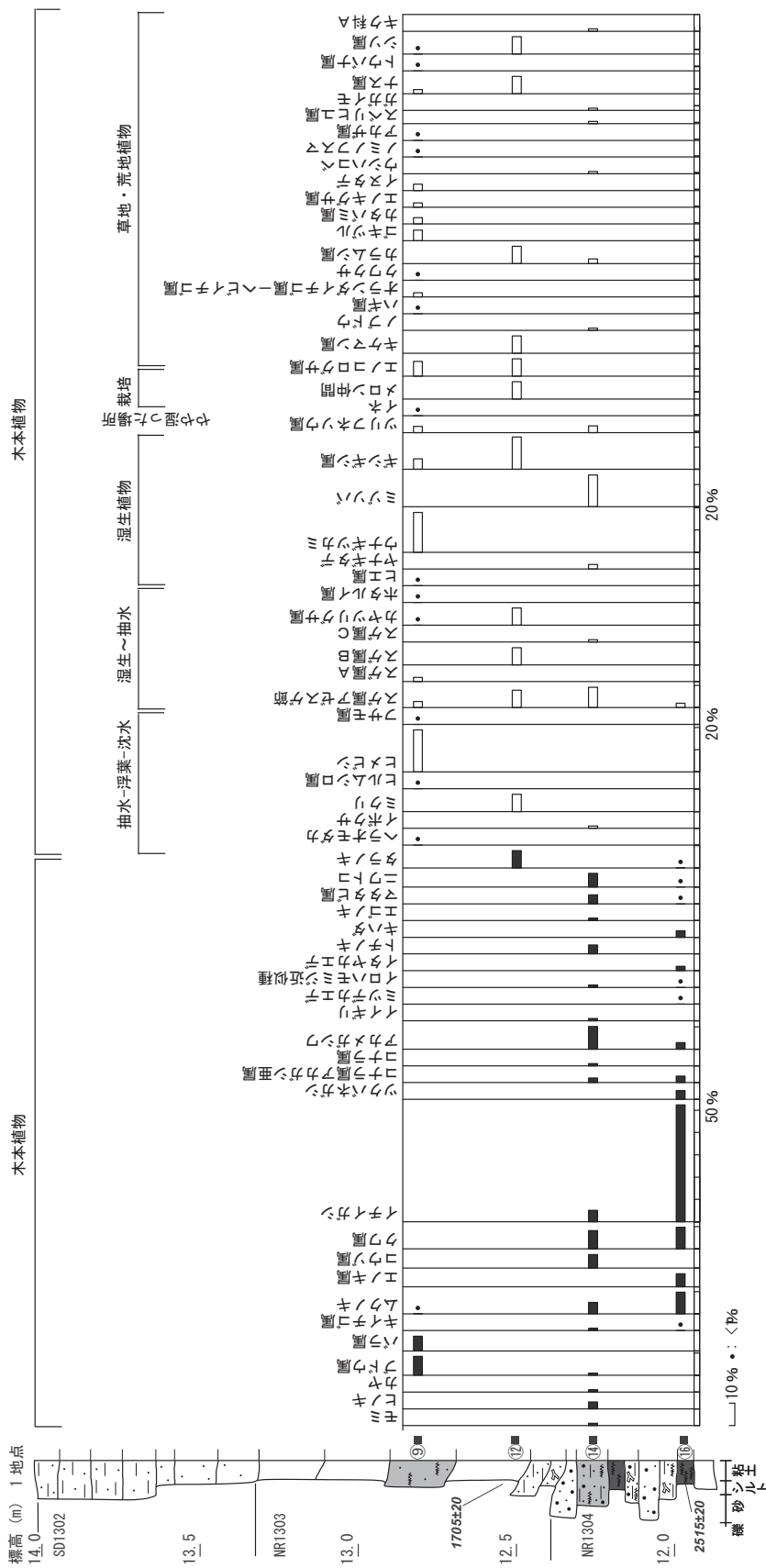
同定した結果、木本植物では針葉樹のモミ葉とヒノキ葉、カヤ葉の3分類群と、広葉樹のブドウ属種子とバラ属核、キイチゴ属核、ムクノキ核、エノキ属果実・核、コウゾ属核、クワ属核、イチイガシ葉、ツクバネガシ葉、コナラ属アカガシ亜属未熟果・殻斗、コナラ属果実、アカメガシワ種子、イイギリ種子、ミツデカエデ果実、イロハモミジ近似種果実、イタヤカエデ果実、トチノキ未熟果、キハダ種子、エゴノキ核、マタタビ属種子、ニワトコ核、タラノキ核の22分類群、草本植物ではヘラオモダカ果実・種子とヒルムシロ属核、イボクサ種子、ミクリ核、スゲ属アゼスゲ節果実、スゲ属A果実、スゲ属B果実、スゲ属C果実、カヤツリグサ属果実、ホタルイ属果実、ヒエ属有ふ果、イネ籾殻、エノコログサ属有ふ果・炭化有ふ果、キケマン属種子、フサモ属核、ノブドウ種子、ヒメビシ果実、ハギ属果実、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属果実、クワクサ種子、カラムシ属果実、ゴキヅル種子、メロン仲間種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、ヤナギタデ果実、イヌタデ果実、ウナギツカミ果実、ミゾソバ果実、ギシギシ属果実、ウシハコベ種子、ノミノフスマ種子、アカザ属種子、スベリヒユ属種子、ツリフネソウ属種子、ガガイモ種子、ナス属種子、トウバナ属果実、シソ属果実、キク科A果実の40分類群の、計65分類群が見いだされた。この他に、残存状態が悪く、破片であるため識別点を欠く同定不能な葉の一群を不明A葉とし、残存状態が悪く、微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な種実の一群を同定不能種実とした。芽は不明芽として一括した。また、種実以外には、不明昆虫遺体も得られたが、同定の対象外とした。

付表7 F13区の大型植物遺体

分類群	水洗量 (cc)	地点			
		1 地点			
		9	12	14	16
		NR 1303		NR 1304	
		遺構	遺構	遺構	遺構
層位	42.43	46	31	34.35	
時期	古墳前期～中期		縄文晩期後葉		
試料番号	300				
モミ	葉				
ヒノキ	葉			3	
カヤ	葉				
ブドウ属	種子	1 (15)			
バラ属	核	4 (8)			
キイチゴ属	核			1	1
ムクノキ	核			(5)	(12)
エノキ属	果実				1 (5)
	核				
コウゾ属	核			(6)	
クワ属	核			(7)	10 (2)
イチイガシ	葉			5 (+)	64 (++++)
ツクバネガシ	葉				5 (+)
コナラ属アカガシ亜属	未熟果			1	
	殻斗			1	1
コナラ属	果実				
アカメガシワ	種子			(9)	(3)
イイギリ	種子				
ミツデカエデ	果実				1
イロハモミジ近似種	果実			1	
イタヤカエデ	果実				2
トチノキ	未熟果			4	
キハダ	種子				3
エゴノキ	核				
マタタビ属	種子			1 (3)	1
ニワトコ	核			(6)	
タラノキ	核		1		1
ヘラオモダカ	果実	1			
	種子	1			
ヒルムシロ属	核	1			
イボクサ	種子			1	
ミクリ	核		1		
スゲ属アゼスゲ節	果実	5	1	5 (3)	2
スゲ属 A	果実	4			
スゲ属 B	果実		1		
スゲ属 C	果実			1	
カヤツリグサ属	果実	1	1		
ホタルイ属	果実				
ヒエ属	有ふ果	1			
イネ	稈殻	1 (++)			
	有ふ果	3 (8)	1		
エノコログサ属	炭化有ふ果	(2)			
キケマン属	種子		1		
フサモ属	核	1			
ノブドウ	種子				
ヒメビシ	果実	1 (35)			
ハギ属	果実	1			
オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属	果実	1 (2)			
クワクサ	種子	1			
カラムシ属	果実		1	2	
ゴキツル	種子	(10)			
メロン仲間	種子		1		
カタバミ属	種子	4			
エノキグサ属	種子	(4)			
ヤナギタデ	果実			(2)	
イスタデ	果実	1 (4)			
ウナギツカミ	果実	2 (33)			
ミンソバ	果実			7 (6)	
ギシギシ属	果実	8 (2)	1		
ウシハコベ	種子			1	
ノミノフスマ	種子	1			
アカザ属	種子	1			
スベリヒユ属	種子			1	
ツリフネソウ属	種子	(5)		(3)	
ガガイモ	種子			1	
ナス属	種子	2	1		
トウバナ属	果実	1			
シソ属	果実	1			
キク科 A	果実			1	
不明 A	葉			5 (+)	
同定不能	種実	(2)		(6)	
不明	芽		(+)	(++)	(++)
不明	昆虫遺体	(++++)	(++)	(+++)	(+++)

+1-9,++10-49,+++50-99,++++100以上

(括弧内は破片数)



第66図 F 13区の大型植物遺体分布図

以下に、大型植物遺体の産出傾向について、時期ごとに、遺構別に記載する(同定不能種実や不明芽は除く)。

[縄文時代晩期後葉]

NR1304：イチイガシが多く、ムクノキとクワ属、アカメガシワ、スゲ属アゼスゲ節、ミゾソバが少量、ヒノキとエノキ属、コウゾ属、ツクバネガシ、コナラ属アカガシ亜属、トチノキ、キハダ、マタタビ属、ニワトコ、ツリフネソウ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が3点未満であった。

[古墳時代前期～中期]

NR1303：ブドウ属とバラ属、エノコログサ属、ヒメビシ属、ゴキヅル、ウナギツカミ、ギシギシ属が少量、スゲ属アゼスゲ節とスゲ属A、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ属、イヌタデ、ツリフネソウ属、ナス属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が3点未満であった。栽培植物では、イネとメロン仲間がわずかに得られた。

なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APGⅢリストの順とした。また、図版に写真を示して同定の根拠とした。

(2) F18区・F21区

結果一覧を付表8に、分布図を第67図に示す。

同定した結果、木本植物では針葉樹のモミ葉とヒノキ葉の2分類群と、広葉樹のブドウ属種子とフジ属芽、バラ属核、キイチゴ属核、ムクノキ核、エノキ属果実・核、カジノキ属核、オオイタビ核、クワ属核、イチイガシ葉、コナラ属アカガシ亜属果実・未熟殻斗・幼果、コナラ属果実、イヌシデ果実、アカメガシワ種子、ウルシ属-ヌルデ内果皮、イタヤカエデ果実・種子、トチノキ未熟果・種子、キハダ小核、ミズキ核、ヒサカキ属核、エゴノキ核、マタタビ属種子、ムラサキシキブ属核、クサギ種子、ニワトコ核、タラノキ核の26分類群、草本植物ではスゲ属ヤガミスゲ節果実とスゲ属アゼスゲ節果実、スゲ属A果実、スゲ属B果実、スゲ属C果実、カヤツリグサ属果実、ヒエ属有ふ果、イネ籾殻・炭化籾殻、アワ有ふ果、エノコログサ属有ふ果・炭化種子(穎果)、ムラサキケマン種子、キケマン属種子、タガラシ果実、ノブドウ種子、ヒシ属果実、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属果実、カナムグラ核、クワクサ種子、カラムシ属果実・炭化果実、ミズ属果実、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、トウダイグサ種子、スマレ属種子、タネツケバナ属種子、ヤナギタデ果実、イヌタデ果実、ボントクタデ果実、ミゾソバ果実、ツリフネソウ属種子、ウシハコベ種子、ノミノフスマ種子、イノコヅチ属果実、アカザ属種子、マルミノヤマゴボウ種子、ナス属種子、キランソウ属果実、トウバナ属果実、シソ属果実、キク科果実、ヤブジラミ総苞の41分類群の、計69分類群が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった炭化種実是不明A炭化種実とし、不明の芽は一括した。また、種実以外には、不明昆虫遺体も得られたが、同定の対象外とした

以下に、大型植物遺体の産出状況を地点別に記載する。

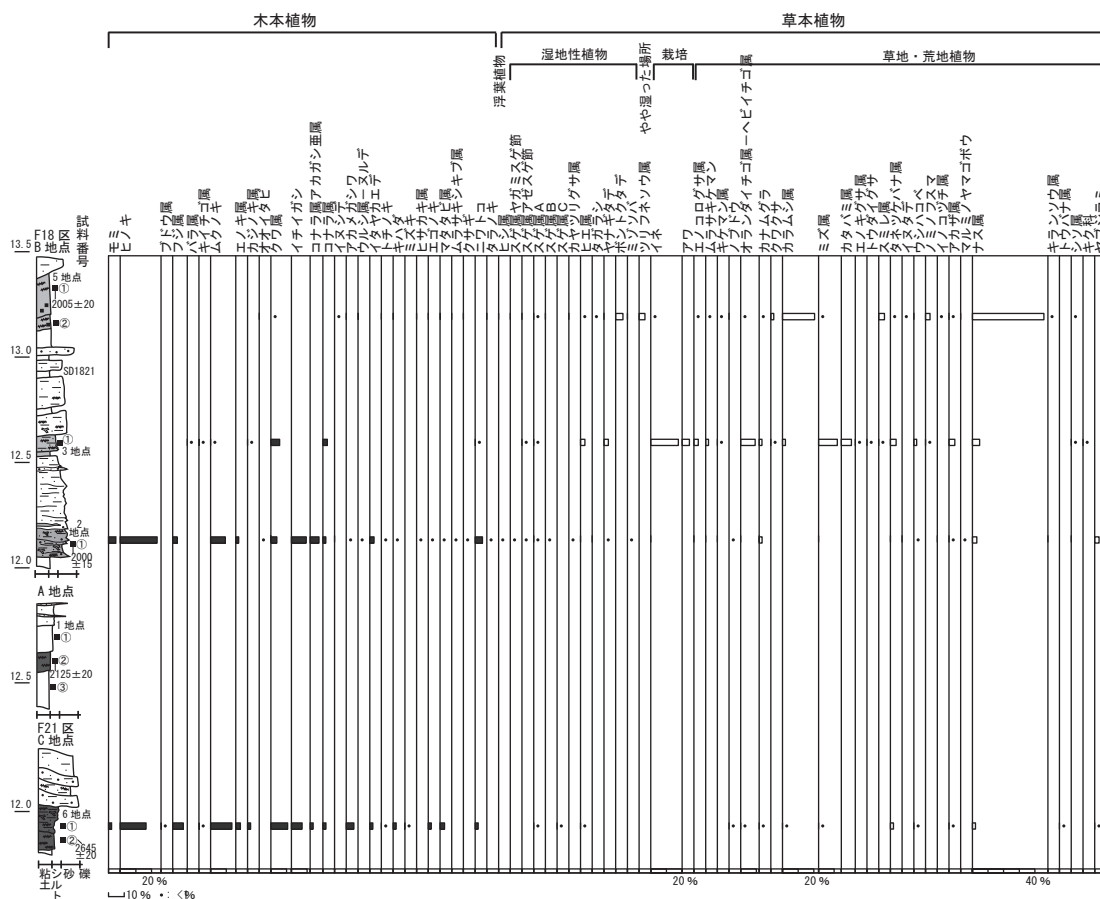
[F21区]

付表8 F18区・F21区の大型植物遺体

分類群	調査区 位置 No. 水洗量 (cc)	F18区			F21区
		5地点	3地点	2地点	6地点
		2	1	1	1
		水洗量 (cc) 200			
モミ	葉			4 (4)	2 (3)
ヒノキ	葉			37	30
ブドウ属	種子				1
フジ属	芽			4 (+)	12 (++)
バラ属	核		1		
キイチゴ属	核		1		1
ムクノキ	核		(2)	(30)	(48)
エノキ属	果実			(2)	(2)
	核			(3)	1 (5)
カジノキ属	核				3
オオイタビ	核			1	
クワ属	核	1	10 (7)	5 (2)	13 (11)
イチイガシ	葉			15 (++)	12 (++)
	果実			(3)	
コナラ属アカガシ連属	未熟殻斗			1	
	幼果			4	3
コナラ属	果実		(14)	(5)	(8)
イヌシデ	果実	2 (3)			
アカメガシワ	種子			1	2 (12)
ウルシ属-ヌルデ	内果皮			1	
イタヤカエデ	果実			2	
	種子			1	(5)
	未熟果			1	
トチノキ	種子				(2)
	小核			(2)	1 (4)
キハダ	核				
ミズキ	核				
ヒサカキ属	核			1	
エゴノキ	核			2	1 (4)
マタタビ属	種子				3 (6)
ムラサキシキブ属	核			1	
クサギ	種子				
ニワトコ	核		1 (2)	4 (4)	2
タラノキ	核				
スゲ属ヤガミスゲ節	果実			1	
スゲ属アゼスゲ節	果実		1	1	
スゲ属 A	果実	1	2	1	2
スゲ属 B	果実			1	
スゲ属 C	果実				1
カヤツリグサ属	果実			1	
ヒエ属	有ふ果	3	7		1
イネ	糠殻	(+)	31 (+++)		
	炭化糠殻		16 (++)		
アワ	有ふ果		7 (9)		
	有ふ果	(4)	2 (8)		
エノコログサ属	炭化種子(穎果)		1		
ムラサキケマン	種子	1	5 (2)		
キケマン属	種子	1	1		
タガラシ	果実	1			
ノブドウ	種子			(3)	1
ヒシ属	果実			(2)	
オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属	果実	2	22		2
カナムグラ	核	(8)	(7)	(5)	1
クワクサ	種子	6	1		
カラムシ属	果実	61 (7)	3 (2)		1
	炭化果実	1			
ミズ属	果実	4	32		2
カタバミ属	種子		16		
エノキグサ属	種子		1		
トウダイグサ	種子				
スマレ属	種子	12	2		
タネツケバナ属	種子	1	10		3
ヤナギタデ	果実		3	2	
イヌタデ	果実	1			
ボントクタデ	果実	4 (21)			
ミゾソバ	果実			1	
ツリフネソウ属	種子	2 (21)			
ウシハコベ	種子		6	1	2
ノミノフスマ	種子	9	1		
イノコヅチ属	果実	1			
アカザ属	種子	1	9	1	1
マルミノヤマゴボウ	種子				
ナス属	種子	147 (8)	12	4	3
キランソウ属	果実	1			
トウバナ属	果実				1
シソ属	果実	1			
キク科	果実		1		
ヤブジラミ	総苞			4	1
不明 A	炭化種実				
不明	芽	(+)	(+)	(++)	(++)
不明	昆虫遺体	(+++)	(+++)	(++)	(+++)

+1-9,++10-49,+++50-99,++++100以上

(括弧内は破片数)



第67図 F18区の大型植物遺体分布図

6地点(No.1)：ヒノキとフジ属、ムクノキ、クワ属、イチイガシ、アカメガシワが少量、モミとブドウ属、キイチゴ属、エノキ属、カジノキ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、イタヤカエデ、トチノキ、キハダ、エゴノキ、マタタビ属、ニワトコ、スゲ属A、スゲ属C、ノブドウ、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、カナムグラ、カラムシ属、ミズ属、タネツケバナ属、ウシハコベ、ナス属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が2点未満であった。

[F18区]

2地点(No.1) ヒノキとムクノキ、イチイガシが少量、モミとフジ属、エノキ属、クワ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、イタヤカエデ、キハダ、エゴノキ、ニワトコ、ノブドウ、ヒシ属、カナムグラ、ヤナギタデ、ナス属、ヤブジラミがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が2点未満であった。

3地点(No.1) イネが多く、クワ属とコナラ属、アワ、エノコログサ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、ミズ属、カタバミ属、タネツケバナ属、アカザ属、ナス属が少量、バラ属とムクノキ、ニワトコ、スゲ属A、ヒエ属、ムラサキケマン、カナムグラ、カラムシ属、スマレ属、ヤナギタデ、ウシハコベがわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が2点未満であった。

5地点(No.1) ナス属が多く、カラムシ属がやや多く、スマレ属とボントクタデ、ツリフネソウ属が少量、イヌシデとヒエ属、イネ、エノコログサ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、カナムグラ、クワクサ、ミズ属、イヌタデ、ノミノフスがわずかに得られた。この他の分類群は、

付表9 F13区・F15区の出土木材の樹種同定結果

試料No.	調査区	出土遺構	位置	器種	樹種	木取り
1	F13区	SD1302	10e区 溝西肩 植物遺体下 小枝1	自然木	コナラ属コナラ節	芯持丸木
2	F13区	SD1302	10f区 溝西肩 横木No.2	横木	ナシ亜科	芯持丸木
3	F13区	SD1302	10f区 溝西肩 植物遺体層下層 横木No.2	横木	ヒノキ	みかん割り
4	F13区	SD1302	10f区 溝西肩 植物遺体層下層 小枝2	自然木	スダジイ	割れ
5	F13区	NR1303	東西溝 木材1	自然木	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木
6	F13区	NR1303	東西溝 自然木2	自然木	ケヤキ	芯持丸木
7	F13区	NR1303	東西溝 自然木3	自然木	広葉樹	芯持丸木
8	F13区	NR1303	東西溝 自然木11	自然木	カエデ属	割れ
9	F13区	NR1303	東西溝 自然木12	自然木	カエデ属	割れ
10	F15区	NR1502	I面上 木質	自然木	ムクノキ	割れ
11	F15区	NR1502	-	自然木	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木
12	F13区	SD1302	植物遺体下 サンプル1	自然木	草本類	丸
13	F13区	SD1302	植物遺体下 サンプル2	自然木	草本類	丸

付表10 F13区・F15区の出土木材樹種同定結果

分析No.	調査区	器種	樹種	試料採取地点
1	F21区	自然木	ツバキ属	6地点No.1
2	F21区	自然木	ツバキ属	
3	F21区	自然木	コナラ属アカガシ亜属	
4	F21区	自然木	ツバキ属	
5	F21区	自然木	コナラ属アカガシ亜属	

産出数が2点未満であった。

なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003)に準拠し、APGⅢリストの順とした。また、図版に写真を示して同定の根拠とした。

4) 樹種同定

(1) F13区

同定の結果、針葉樹のヒノキ1分類群と、広葉樹のナシ亜科とケヤキ、ムクノキ、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属(以下アカガシ亜属)、コナラ属コナラ節(以下コナラ節)、カエデ属の7分類群、双子葉の草本類1分類群の、計9分類群がみられた。ヒノキとアカガシ亜属、カエデ属、草本類が各2点、ナシ亜科とケヤキ、ムクノキ、スダジイ、コナラ節が各1点みられた。また、材の収縮が激しく、広葉樹までの同定に留めた試料が1点みられた。同定結果を付表9に示す。

(2) F18区・F21区

同定の結果、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)と、ツバキ属の2分類群がみられた。ツバキ属が3点で、アカガシ亜属が2点であった。同定結果を付表10に示す。

5. 考察

1) F13区

(1) 大型植物遺体分析

縄文時代晩期後葉の流路NR1304堆積層の31層と34、35層から出土した大型植物遺体を同定した結果、木本植物を中心に、多種類の大型植物遺体が得られた。二次林を構成する落葉広葉樹が

多く産出しており、高木のムクノキとエノキ属、クワ属、イチイガシ、ツクバネガシ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、アカメガシワ、イイギリ、ミツデカエデ、イロハモミジ近似種、イタヤカエデ、トチノキ、キハダ、小高木または低木のニワトコ、エゴノキ、低木のキイチゴ属やコウゾ属、タラノキ、つる植物のブドウ属やマタタビ属が得られた。また、針葉樹ではモミとヒノキ、カヤが得られた。31層と34層の堆積時期には、流路周辺にこれらの森林要素が多く分布していて、流路周辺は陽の当たる明るい環境で、二次林が形成されていた可能性がある。

イチイガシやツクバネガシ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、トチノキは食用可能な堅果類であるが、今回確認されたイチイガシやツクバネガシは葉、コナラ属アカガシ亜属は殻斗や未熟殻斗、トチノキは未熟果で、いずれも食用にならない部位であり、流路周辺に生育していた樹木から自然に落下して堆積した可能性がある。

草本植物では、湿生～抽水植物のイボクサやスゲ属アゼスゲ節、スゲ属Cが産出した。湿地にはヤナギタデやミゾソバなど、やや湿った場所にはツリフネソウ属、乾いた場所にはウシハコベやスベリヒユ属、ガガイモ、キク科Aなどが生育していたと考えられる。林縁に生育するカラムシ属やノブドウも確認されており、林がごく近くに存在した可能性がある。

古墳時代前期～中期の流路N R 1303の42、43層と46層では、木本植物が少なく、草本植物が多く得られた。木本植物では、高木のムクノキ、低木のバラ属、つる植物のブドウ属が得られた。草本植物では、水田作物のイネ、畑作物のメロン仲間(マクワウリ・シロウリ型)が得られており、付近の水田や畑地から流れ込んで堆積したか、もしくは溝周辺に廃棄された残滓が再堆積した可能性が考えられる。溝およびその近辺には、抽水植物のヘラオモダカ、浮葉植物のヒルムシロ属やヒメビシ、沈水植物のフサモ属、湿地性のスゲ属アゼスゲ節やスゲ属A、スゲ属B、カヤツリグサ属、ウナギツカミ、ギシギシ属など、やや湿った場所にはツリフネソウ属、乾いた場所にはキケマン属やハギ属、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、クワクサ、ゴキヅル、カタバミ属、エノキグサ属、イヌタデ、ノミノフスマ、アカザ属、ナス属、トウバナ属、シソ属が生育していたと考えられる。また、林縁に生育するカラムシ属が得られた。木本よりも草本が優勢であり、流路N R 1303の周辺は明るく開放的な植生景観であったと推測される。

(2)花粉分析

ここでは、大型植物遺体の分析結果もふまえて、調査区の古植生について総括的な検討を行う。

縄文時代晩期後葉の流路N R 1304堆積層の34、35層では、コナラ属アカガシ亜属が優占する。また、大型植物遺体でも、34、35層からイチイガシやツクバネガシなどが得られている。よって、縄文時代晩期後葉には、コナラ属アカガシ亜属から成る照葉樹林が流路周辺に広がっていたと考えられる。また、河畔林要素のエノキ属－ムクノキ属花粉の産出も目立っており、大型植物遺体でも基底の34層からムクノキやエノキ属が得られている。流路周辺にはエノキ属－ムクノキ属から成る河畔林も存在していた可能性がある。

その上位の31層の堆積時期になると、コナラ属アカガシ亜属とエノキ属－ムクノキ属は減少し、代わってスギ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科といった針葉樹が増加する。イチイ科－イヌ

ガヤ科－ヒノキ科については、大型植物遺体分析でヒノキやカヤが得られているため、流路周辺にイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の分布が推定されるが、スギ属の大型植物遺体は検出されていないため、スギ属の分布域は周辺の山地や丘陵地などであったと推定される。また、クリ属がこの層準から増加しており、流路周辺の開けた明るい場所に分布していたと考えられる。大型植物遺体分析においてもアカメガシワやイイギリ、マタタビ属、ニワトコなどの陽樹が産出しており、開けた明るい場所に生育していたと考えられる。さらに、31層では便宜的に草本類としたクワ科－アサ科が微増する。大型植物遺体分析では、クワ属やコウゾ属などが産出しているため、開けた明るい場所にはクワ科－アサ科(クワ属、コウゾ属)も分布を広げていたと考えられる。

古墳時代前期～中期のN R 1303の46層では、エノキ属－ムクノキ属の産出率は低く、マツ属複雑維管束亜属やクリ属、マタタビ属、ウコギ科といった陽樹を含む分類群が産出するため、周辺の開けた明るい場所は、溝の基底となる流路の31層や34層、35層の堆積時期よりも増加した可能性がある。N R 1303の46層の大型植物遺体分析では、陽樹のタラノキが得られているものの、それ以外の木本植物は産出していないため、樹木の分布が疎らで陽樹が生育しやすい環境であったと考えられる。さらに、46層では、便宜的に草本花粉としたクワ科－アサ科の産出も目立ち、開けた明るい場所にはクワ科－アサ科も分布を広げていたと考えられる。より広域に分布していた樹木としては、スギ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科といった針葉樹やコナラ属アカガシ亜属が挙げられ、周辺の丘陵地や山地、試料採取地点から離れた平野部に分布していた可能性がある。

その上位のN R 1303の42、43層では、樹木花粉は下位層準と同様の組成を示すため、樹木植生に顕著な変化はなかったと考えられるが、草本花粉ではヨモギ属が突出している。この時期には、溝周辺においてヨモギ属をはじめとする草本類が分布を広げていた可能性がある。

その上位のN R 1303の38層は、十分な量の花化石が得られていないため詳細は不明である。

古墳時代後期のS D 1302の5層では、コウヤマキ属やシノキ属－マテバシイ属といった樹木花粉の産出が目立つ。スギ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科といった温帯性針葉樹のなかでコウヤマキ属も分布を広げ、コナラ属アカガシ亜属から成る照葉樹林にはシノキ属－マテバシイ属も分布を広げていたと思われる。草本花粉では、イネ科が突出しており、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などの産出が目立つため、飛鳥時代のS D 1302周辺には、これらの分類群からなる草地が広がっていた可能性がある。あるいは、イネ科の多産と、オモダカ属やイボクサ属、ミズアオイ属といった水田雑草を含む分類群の共産を考えると、S D 1302周辺に水田も存在していた可能性がある。

(3)植物珪酸体分析

F 13区では、放射性炭素年代測定から、弥生時代中期と判断された泥質堆積物主体の氾濫原堆積物に、砂の薄層で被覆された細かな炭化材片が多く含まれる塊状無層理の泥層の挟在が観察された。この泥層については、畦畔などの遺構が断面上で確認できなかったものの、層相と年代から水田層の可能性が推測された。この層準が水田層かどうかを、イネの植物珪酸体の層位的産状から検討するために、堆積物が採取した。

検鏡の結果、水田層の可能性のある16層のみからイネ機動細胞珪酸体が検出された。イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料1g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており(藤原, 1984)、試料1g当り5,000個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。16層から産出したイネ機動細胞珪酸体の産出量は、この目安を超えており、プラント・オパール分析の結果からは、16層が水田層の可能性を指摘できる。

また、ネザサ節型機動細胞珪酸体については全ての層準から検出されており、産出量も6,900~60,700個/gと比較的多い。試料採取地点の周辺では、ネザサ節が弥生時代を通して生育していたと考えられる。

その他の分類群では、14層と17層下において抽水植物のヨシ属が産出している。弥生時代の試料採取地点周辺は、地表付近が常時水没するような湿潤な状態ではなかった可能性があるものの、14層と17層下堆積時には、試料採取地点周辺の一部にヨシ属が生育できるような湿地的環境が存在していたと思われる。

(4) 樹種同定

横木は、ヒノキとナシ亜科であった。ヒノキは木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良い樹種で、ナシ亜科は堅硬な樹種である(伊東ほか, 2011)。

自然木では、ヒノキとケヤキ、ムクノキ、スダジイ、アカガシ亜属、コナラ節、カエデ属、草本類がみられた。スダジイとアカガシ亜属は常緑広葉樹、ケヤキとムクノキ、コナラ節、カエデ属は落葉広葉樹である。遺跡周辺には、ヒノキが混じる、常緑広葉樹と落葉広葉樹の混交林が広がっていたと考えられる。

なお、SD1302の植物遺体については、横断面では維管束が確認できたが、維管束の配列や形状は確認できなかった。そのため、草本類までの同定に留まった。

2) F18区・F21区

放射性炭素年代測定の結果と層序関係を考慮して、古い順に古植生を検討していく。

縄文時代晩期後葉の年代値が得られているF21区の6地点の氾濫流路の埋土をなす植物遺体層では、花粉分析においてコナラ属アカガシ亜属が優占しているため、調査区周辺にはカシ類からなる照葉樹林が分布していた可能性がある。花粉以外でも、大型植物遺体で幼果とイチイガシの葉、材が検出されているため、流路近傍にコナラ属アカガシ亜属が生育していた可能性が高い。コナラ属アカガシ亜属以外の照葉樹として、花粉分析と樹種同定でツバキ属が確認されており、ツバキ属も流路近傍に生育していたと考えられる。

その他の植物は大型植物遺体で比較的多く検出されており、流路近傍にはモミヤヒノキといった針葉樹も生育していたと考えられる。湿った場所にはムクノキやエノキ属、トチノキといった河畔林要素の樹木が生育していたと考えられる。花粉分析においてもエノキ属-ムクノキ属の産出が比較的多い。そうした河畔林周辺にはスゲ属A、スゲ属C、ヒエ属といった草本類も生育していたと考えられる。また、流路周囲の開けた明るい場所には、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ

属やカナムグラ、タネツケバナ属、ウシハコベ、アカザ属、ナス属、トウバナ属、ヤブジラミといった草本類や、コナラ属、カジノキ属、クワ属、アカメガシワ、イタヤカエデ、キハダ、ミズキ、エゴノキ、マタタビ属、ニワトコなどの落葉広葉樹林が分布しており、その林縁にノブドウやカラムシ属、ミズ属などが生育していた可能性がある。

大型植物遺体では検出されていないが、花粉分析の結果ではスギ属の産出も見られるため、遺跡周辺の丘陵地などにはスギ林が分布していたと考えられる。

弥生時代中期前半～後半の年代値が得られている1地点では、花粉分析のみを行った。1地点のNo.3からは十分な量の花粉化石が得られていないものの、No.2とNo.1では6地点と類似した花粉組成を示す。コナラ属アカガシ亜属が調査区周辺に分布しており、エノキ属－ムクノキ属やトチノキ属は流路周辺で河畔林を形成していた可能性がある。コナラ属コナラ亜属をはじめとする落葉広葉樹林やスギ林も調査区周辺に分布していた可能性がある。ただし、F21区の6地点で産出したツバキ属に関しては、F18区では確認できないため、ツバキ属についてはF21区の縄文時代晩期後葉の時期を中心に分布していた可能性がある。草本花粉では、浮葉植物のヒシ属が産出しているため、溝内はヒシ属が生育できるような湿潤な環境であったと考えられる。

弥生時代中期後半～後期前半の年代値が得られている2地点のNo.1では花粉分析と大型植物遺体分析を行ったが、6地点や1地点の結果と類似しており、植生の顕著な相違は見られない。イチイガシやアカガシ亜属が流路近傍や調査区周辺に分布しており、モミやヒノキといった針葉樹、オオイタビやクワ属、アカメガシワ、イタヤカエデ、キハダ、エゴノキ、マタタビ属、ムラサキシキブ属、クサギ、ニワトコ、タラノキなどは流路周辺の陽の当たる明るい環境で落葉広葉樹林を形成していた可能性がある。林縁部にはノブドウやマルミノヤマゴボウなどが生育しており、乾いた場所にはカナムグラやウシハコベ、アカザ属、ナス属、ヤブジラミといった草本類が生育していたと考えられる。一方で湿潤な環境に生育する植物の産出も見られ、ムクノキとエノキ属、トチノキなどの河畔林要素の樹木が流路周辺の湿潤な場所に生育しており、浮葉植物のヒシ属、湿地性植物のスゲ属ヤガミスゲ節やスゲ属アゼスゲ節、スゲ属A、スゲ属B、カヤツリグサ属、ヤナギタデ、ミゾソバなどの草本類が流路内もしくは調査区周辺の分析地点の集水域となる湿潤な場所に生育していたと考えられる。

3地点のNo.1と5地点のNo.1とNo.2は、流路NR1821の埋土である。NR1821埋土の最下層の3地点のNo.1では、大型植物遺体の木本植物の産出数が少なく、草本植物の産出数が多い。溝の周りは明るく開放的な植生景観であったと推測される。溝周辺の比較的乾燥した場所にはエノコログサ属やムラサキケマン、キケマン属、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、カナムグラ、クワクサ、カタバミ属、エノキグサ属、トウダイグサ、スマレ属、タネツケバナ属、ウシハコベ、ノミノフスマ、アカザ属、ナス属、シソ属、キク科が生育し、湿った場所にはスゲ属アゼスゲ節やスゲ属A、ヒエ属、ヤナギタデが生育していたと考えられる。また、水田植物のイネや畑作物のメロン仲間が得られており、付近の水田や畑地から流れ込み堆積した可能性が考えられる。

花粉分析の結果においても樹木花粉の産出割合が減少しているが、これは便宜的に草本類に入

れたクワ科－アサ科－イラクサ科花粉の産出が増加したために草本花粉の割合が増加したと考えられる。大型植物遺体でクワ科－アサ科－イラクサ科に対応する植物としては、クワ属やカナムグラ、クワクサ、カラムシ属が挙げられるが、溝周辺に生育するこれらの植物から花粉が供給されたと考えられる。

また、3地点のNo.1では大型植物遺体分析では樹木の産出が稀になるため、ここで産出する樹木花粉は、遺跡周辺に生育していた樹木から供給されたと考えられ、他の試料に比べると、コナラ属アカガシ亜属の産出率がやや低く、クリ属－シイノキ属の産出率がやや高いという花粉組成は比較的広範囲の樹木植生を反映している可能性がある。

5地点のNo.2においても、樹木の大型植物遺体の産出が少ない。溝周辺は開けた場所であったと考えられ、エノコログサ属やムラサキケマン、キケマン属、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、カナムグラ、クワクサ、スミレ属、タネツケバナ属、イヌタデ、ノミノフスマ、イノコヅチ属、アカザ属、ナス属、キランソウ属、シソ属などの草本類が生育していたと考えられる。湿地性植物のスゲ属Aやヒエ属、タガラシ、ボントクタデ、ツリフネソウ属の産出も見られ、溝内や周辺の湿潤な場所に生育していたと考えられる。さらには、イネの産出も少量見られ、周辺の水田から流れ込んだ可能性がある。

花粉分析の結果においても草本花粉の産出割合が高くなっており、便宜的に草本類としたクワ科－アサ科－イラクサ科やツリフネソウ属、ヨモギ属の産出が目立つ。クワ科－アサ科－イラクサ科花粉は大型植物遺体で確認されたカラムシ属に由来すると考えられ、ツリフネソウ属については大型植物遺体でも比較的目的立った産出を示すため、これらの植物については大型植物遺体と花粉の産出傾向が一致する。

なお、5地点のNo.2から産出する樹木花粉は3地点のNo.1と同じく、遺跡周辺の広範囲の樹木植生を反映させていると考えられるが、コナラ属アカガシ亜属が優占する花粉組成は、他の試料と顕著な相違を示すものではなく、遺跡周辺の樹木植生に変化はなかったと考えられる。

花粉分析のみを行った5地点のNo.1では、花粉分析を行った。この試料では、コナラ属アカガシ亜属の産出率が減少し、モミ属やツガ属、スギ属といった針葉樹が微増している。遺跡周辺の丘陵地ではモミ属やツガ属、スギ属などの温帯性針葉樹が分布を広げていた可能性がある。草本類では、イネ科とツリフネソウ属の産出が目立ち、溝周辺にはイネ科とツリフネソウ属が分布を広げていた可能性がある。

引用文献

- 藤原宏志1984「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』227, 2-7. ニュー・サイエンス社
- 那須浩郎2017「縄文時代にヒエは栽培化されたのか？」『SEEDS CONTACT』4 27-29.
- 米倉浩司・梶田 忠2003「BG Plants 和名－学名インデックス(YList)」<http://ylist.in.f0>

付表10 出土遺物観察表

〈凡例〉

・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示
 ・()：復元(底・口)径・残存高

・残存率は基本的に口径で表記 ・該当なし：－
 ・口)：口縁部、(受)：受部、(体)：体部、(胴)：胴部、(底)：底部・高台部

番号	種類	器種	遺構	グリッド ・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整/備考
F 15 区出土遺物										
1	弥生土器 /土師器	甕	S D 1501	e23 第1層	13.4	(2.9)	－	3/12	灰白色 (10YR8/1)	体部外面：ハケメカ
2	弥生土器 /土師器	甕	S D 1502	f 21・ e21	29.5	(7.8)	－	3/12	にぶい橙色 (5YR6/4)	口縁部内外面：ヨコハケ
3	土師器	甕底部	S D 1501	f23	－	(8.3)	6.6	7/12	灰白色 (7.5YR8/1)	外面：タタキ、内面：ハケ
		甕口～胴 部	S D 1502	e21・22	25.6	(18.6)	－	11/12	灰白色 (7.5YR8/1)	外面：タタキ、内面：ナデ
4	弥生土器 /土師器	壺底部	S D 1502	f 21	－	(1.9)	4.2	3/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	外面：ミガキ
F 19 区出土遺物										
5	土師器	高杯脚部	S D 1904	h21	－	(3.9)	－	－	灰白色 (5YR8/2)	外面：ハケ
6	須恵器	杯B蓋	－	－	－	(1.3)	－	－	灰白色 (N7/0)	
F 13 区出土遺物										
7	須恵器	杯H蓋	S D 1302	e12	12.4	3.5	－	4/12	灰白色 (5Y7/1)	底部外面：ロクロケズリ
8	須恵器	杯H蓋	S D 1302	f11	13.1	3.4	－	5/12	灰色 (N6/0)	底部外面：ロクロケズリ、 ロクロの回転方向：右
9	須恵器	杯H蓋	S D 1302	f11	11.8	3.8	－	4/12	灰白色 (7.5Y7/1)	底部外面：ヘラキリ未調整、 ロクロの回転方向：右
10	須恵器	杯H身	S D 1302	f11	12.3	4.3	－	5/12	内：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外：灰黄色 (2.5Y6/2)	底部外面：ロクロケズリ、 ロクロの回転方向：右
11	須恵器	杯H身	S D 1302	e11・f11	11.8	4.0	－	3/12	灰白色 (2.5Y8/1)	底部外面：ロクロケズリ、 ロクロの回転方向：左
12	須恵器	杯H身	S D 1302		11.8	4.1	－	3/12	青灰色 (5PB6/1)	底部外面：ロクロケズリ、 ロクロの回転方向：右
13	須恵器	杯H身	S D 1302	f11	11.7	3.9	－	3/12	灰色 (N6/0)	底部外面：ロクロケズリ
14	須恵器	杯H身	S D 1302	e11・f11 ・d11	11.7	3.8	－	6/12	暗青灰色 (5PB4/1)	底部外面：ヘラキリ未調整
15	須恵器	杯H身	S D 1302	e11	10.7	3.5	－	5/12	灰色 (N5/0)	底部外面：ロクロケズリ、 ロクロの回転方向：右
16	須恵器	杯H身	S D 1302		10.4	3.1	－	10/12	灰色 (N5/0)	底部外面：ロクロケズリ、 ロクロの回転方向：右
17	須恵器	杯H身	S D 1302	e11	10.0	3.5	－	5/12	灰色 (N5/0)	底部外面：ヘラキリ未調整
18	須恵器	無蓋高杯	S D 1302	e11	－	(7.0)	－	4/12	灰白色 (N7/0)	透かし：二段二方
19	須恵器	短頸壺	S D 1302	f11	－	(9.5)	－	－	灰白色 (5Y7/1)	底部外面：不定方向ケズリ
20	須恵器	短頸壺	S D 1302	e11	6.9	9.5	－	1/12	灰白色 (5Y6/1)	底部外面：ロクロケズリ、 ロクロの回転方向：右
21	土師器	杯C II	S D 1302	e11	12.4	4.1	－	5/12	橙色 (5YR6/6)	内面：一段放射暗文、底部外面： ケズリ
22	土師器	甕A	S D 1302	e11	9.8	(7.8)	－	2/12	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	体部内外面：ハケメ
23	土師器	甕	S D 1302	f11	19.6	(3.6)	－	2/12	灰褐色 (7.5YR5/2)	
24	土師器	甕B	S D 1302	f11	－	(3.9)	－	－	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	
25	土師器	甕B	S D 1302	e10	－	(4.0)	－	－	浅黄橙色 (10YR8/3)	
26	土師器	甕B	S D 1302	f11	－	(4.1)	－	－	浅黄色 (2.5Y7/3)	
27	土師器	甕B	S D 1302	e11	－	(5.0)	－	－	にぶい橙色 (10YR7/4)	

番号	種類	器種	遺構	グリッド・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整 / 備考
28	土師器	甕B	S D 1302	f10	-	(4.7)	-	-	にぶい橙色 (10YR7/3)	
29	土師器	鏝甕	S D 1302	f10	-	(4.4)	-	-	にぶい橙色 (10YR7/3)	
30	土製品	移動式カマド	S D 1302	f11	-	(6.4)	-	-	灰白色 (10YR8/2)	外面：ハケメ
31	土製品	移動式カマド	S D 1302	e11・d11	-	(12.5)	-	-	灰白色 (10YR8/2)	内外面：摩滅
32	土製品	移動式カマド	S D 1302	f11	-	(6.1)	-	-	灰白色 (10YR7/3)	
33	土製品	移動式カマド	S D 1301		-	(15.4)	-	-	灰黄褐色 (10YR6/2)	
34	土製品	土錐	S D 1302	f11	長さ 5.0	幅 1.3	-	完形	灰白色 (2.5Y8/2)	
35	土製品	土錐	S D 1302	f11	長さ 4.8	幅 1.3	-	完形	灰白色 (2.5Y8/1)	
36	土製品	土錐	S D 1302	f11	長さ 4.5	幅 1.3	-	完形	灰白色 (2.5Y8/2)	
37	土製品	土錐	S D 1302	e11	長さ 4.3	幅 1.2	-	完形	灰白色 (10YR8/2)	
38	土製品	土錐	S D 1302	f11	長さ 2.9	幅 1.4	-	約 1/2	灰白色 (10YR8/2)	
39	土製品	土錐	S D 1302	f11	長さ 2.7	幅 11.5	-	約 1/2	灰白色 (10YR8/1)	
40	土製品	土錐	S D 1302	f10	長さ 4.3	幅 1.1	-	一部欠損	淡黄 (2.5Y8/3)	
41	土製品	土錐	S D 1302	f11 断割	長さ 4.5	幅 1.2	-	完形	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	
42	瓦	平瓦	S D 1302		長さ (9.2)	幅 (4.5)	厚さ 2.0	-	灰白色 (2.5Y8/1)	
43	石器	磨石	S D 1301		長さ 11.4	横 10.4	厚さ 4.4	完形		花崗岩製
44	石器	石鏃	基盤層中		長さ 5.8	横 1.8	厚さ 0.6	完形		サヌカイト製
F20 区出土遺物										
45	土師器	高杯か	S D 2001		-	(3.8)	-	1/12	橙色 (5YR/6/6)	内面：放射状暗文
46	土師器	甕	S D 2001	南畦	13.0	8.6	-	2/12	灰白色 (7.5YR8/2)	体部内外面：ナナメタテハケ
47	土師器	甌	S D 2001		-	(6.0)	-	1/12 以下	明褐色 (7.5YR7/2)	内面：ヨコハケ、外面：タテハケ
48	須恵器	杯H蓋	S D 2002 B		12.0	(4.0)	-	3/12	灰白色 (N7/0)	頂部外面：ロクロケズリ
49	須恵器	杯H蓋	S D 2002 B		12.0	(2.2)	-	3/12	灰色 (N6/0)	頂部外面：ロクロケズリ
50	須恵器	杯H身	S D 2002 B	h10	11.8	(2.3 ㄱ)	-	3/12	灰色 (N6/0)	
51	須恵器	杯H身	S D 2002 B	h10	11.4	(4.1)	-	3/12	橙色 (2.5Y7/6)	底部外面：ロクロケズリ
52	須恵器	杯H身	S D 2002 A	h11	10.0	3.4	-	2/12	灰色 (N6/0)	底部外面：ヘラキリ後ケズリ
53	須恵器	杯H身	S D 2002 A	i11	9.8	2.6	-	2/12	灰白色 (N8/0)	底部外面：ロクロケズリ
54	須恵器	杯H身	S D 2002 A	i11	9.6	(2.8)	-	2/12	灰白色 (N7/0)	底部外面：ヘラキリ未調整
55	須恵器	低脚高杯	S D 2002 A	i11	-	(4.4)	9.2	6/12	灰白色 (N8/0)	
56	須恵器	甌	S D 2002 A	g11	11.6	(5.6)	-	4/12	灰白色 (2.5Y7/1)	
57	須恵器	短頸壺	S D 2002 A・B	h11・i10・i11	9.4	(9.3)	-	4/12	灰色 (N6/0)	体部外面：タタキ後ロクロ調整
58	須恵器	平瓶	S D 2002 A	g11	7.0	(4.8)	-	□) 3/12	灰白色 (N7/0)	
59	須恵器	平瓶	S D 2002 A	h11	7.5	(5.0)	-	□) 6/12	灰白色 (N7/0)	
60	土師器	杯C	S D 2002 A	h11	-	(3.7)	-	1/12	橙色 (5YR6/6)	底部外面：摩滅、内面：放射状暗文
61	土師器か	壺	S D 2002 A	g11	6.0	(3.9)	-	3/12	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内外面：ナデ
62	土師器	甕B	S D 2002 B	i10	-	(5.5)	-	-	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	
63	土師器	甕C	S D 2002 A	h11	20.0	(6.9)	-	3/12	浅黄褐色 (10YR8/2)	体部内外面：タテハケ、口縁部内外面：ナデ

番号	種類	器種	遺構	グリッド・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整/備考
64	土師器	甕C	S D 2002 A	g11	30.0	(8.1)	-	1/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	口縁部内面：ヨコハケ、体部内面：ナナメハケ、外面：タテハケ
65	土師器	甗	S D 2002 B	g10	-	(5.8)	-	1/12以下	灰白色 (10YR8/2)	内外面：タテハケ
66	土師器	甗	S D 2002 A	g11	-	(3.5)	-	底) 2/12	灰白色 (7.5YR8/1)	体部内面：ヨコハケ、体部外面：ケズリ
67	土製品	移動式カマド	S D 2002 A	g11	-	(4.4)	-	-	灰白色 (10YR8/2)	内外面：ナデ
68	土製品	移動式カマド	S D 2002 A	g11	-	(6.1)	-	-	明褐色 (7.5YR7/2)	内外面：ナデ
69	土製品	土錐	S D 2002 B	g10	長さ 5.4	幅 1.3	-	完形	灰白色 (10YR8/1)	
70	土製品	土錐	S D 2002 B	g10		幅 1.4	-	一部欠損	灰白色 (2.5Y8/1)	
71	土製品	土錐	S D 2002 B	h10	長さ 3.9	幅 1.1	-	ほぼ完形	灰白色 (10YR8/1)	
72	石製品	投弾	S D 2002 B	i10	長さ 4.5	幅 4.0	厚 3.4	完形	灰色 (5Y6/1)	砂岩製
73	須恵器	杯H身	S D 2006		12.8	(3.4)	-	1/12	オリーブ灰色 (5GY6/1)	底部外面：ロクロケズリ、ロクロの回転：左
74	須恵器	甕	S D 2006		13.0	(5.6)	-	2/12	灰白色 (N7/0)	体部：タタキ
75	土師器	甕	S D 2006		13.8	(6.6)	-	2/12	内：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 外：黒褐色 (10YR3/2)	体部外面：ナナメハケ、体部内面：ヨコハケ
76	土製品	土錐	S D 2006		長さ 4.9	幅 1.3	-	完形	灰白色 (10YR8/1)	
77	土製品	土錐	S D 2006		長さ 4.9	幅 1.0	-	完形	灰白色 (5YR8/1)	
78	土師器	杯C I	-		-	(4.5)	-		橙色 (5YR6/6)	内面：放射状暗文、外面：ミガキ
79	土製品	土錐	-		長さ (4.2)	幅 1.3	-	一部欠損	灰白色 (2.5Y8/1)	
80	土製品	土錐	-	h10・i10	長さ 5.1	幅 1.2	-	完形	灰白色 (5Y8/1)	
F 14 区出土遺物										
81	弥生土器	甕	-	k11	14.7	(12.2)	-	4/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁部内面：ヨコハケ、体部内面：ナデ 体部外面：タテハケ
82	弥生土器	甕	-	l11	15.3	(11.5)	-	7/12	にぶい橙色 (5YR7/3)	口縁部内面：ヨコハケ、体部内面：タテハケ・ナデ 体部外面：タテハケ
83	弥生土器	甕	-	k11	17.1	(4.7)	-	2/12	淡赤橙色 (2.5YR7/3)	内面：ナデ、体部外面：タテハケ
84	弥生土器	鉢	-	l11	21.0	(6.7)	-	3/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内面：剥離、外面：ナデか
85	灰釉陶器	杯	-	l4	-	(1.7)	7.6	3/12	灰白色 (7.5Y7/1)	
F 17 区出土遺物										
86	弥生土器	壺	S X 1705		14.5	(17.9)	-	10/12	淡黄色 (2.5Y8/3)	口縁部内面：ハケ、外面：ハケ
87	弥生土器	無頸壺	S X 1705		10.6	(4.3)	-	6/12	橙色 (2.5YR7/8)	内外面：摩滅
88	弥生土器	鉢	S X 1705		18.0	(6.5)	-	10/12	灰白色 (10YR8/2)	内面：ミガキ、外面：ナデ
89	弥生土器	鉢	S X 1705		15.2	(7.0)	-	6/12	灰白色 (10YR8/2)	体部内面：ハケ
90	弥生土器	鉢	S X 1705		13.0	(4.3)	-	7/12	灰白色 (7.5YR8/2)	内面：ナデ
91	弥生土器	高杯か	S X 1705		-	(3.4)	13.6	4/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内面：ナデ、外面：ミガキ
92	弥生土器	高杯	S X 1705		-	(5.2)	8.1	9/12	灰白色 (10YR8/1)	内面：ナデ、外面：ミガキ
93	弥生土器	甕	S X 1705		14.2	(3.0)	-	3/12	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	口縁部内面：ハケ、口縁部外面：ナデ
94	弥生土器	甕	S X 1705		14.0	21.4	3.5	口) 3/12	灰白色 (7.56YR8/1)	内面：ハケ、口縁部外面：ハケ、体部外面：タタキ
95	弥生土器	壺	S X 1705		14.4	(15.0)	-	4/12	灰黄色 (2.5Y7/2)	体部内面：ハケ、外面：

番号	種類	器種	遺構	グリッド・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整/備考
96	弥生土器	甕	S X 1705		14.4	26.7	5.0	6/12	橙色 (5YR6/6)	内外面：摩滅
97	弥生土器	甕	S X 1705		-	(11.9)	-	-	褐灰色 (7.5YR5/2)	内面：ナデ、外面：ハケ
98	弥生土器	-	S D 1709	97	-	(2.5)	5.7	4/12	内：灰色 (N4/0) 外：灰白色 (2.5Y8/1)	内外面：ナデ
99	土師器	皿	S E 1710		13.8	2.7	-	完形	淡橙色 (5YR8/3)	内面：ナデ 口縁部：横ナデ、底部外面：オサエ
100	土師器	皿	S E 1710		10.6	2.0	-	6/12	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	口縁部：横ナデ、底部外面：オサエ
101	土師器	皿	S E 1710		9.8	2.1	-	7/12	灰白色 (10YR8/2)	口縁部：横ナデ、底部外面：オサエ
102	土師器	皿	S E 1710		9.5	1.8	-	完形	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	口縁部：横ナデ、底部外面：オサエ
103	土師器	皿	S E 1710		9.4	1.8	-	10/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	口縁部：横ナデ、底部外面：オサエ
104	土師器	高台付杯	S E 1710		-	(3.3)	7.8	6/12	灰白色 (7.5YR8/2)	内外面：ナデ
105	瓦器	椀	S E 1710		15.6	(4.6)	-	3/12	灰白色 (N7/0)	
106	瓦器	椀	S E 1710		16.0	5.6	6.3	4/12	灰色 (N6/0)	見込：連結輪状暗文
107	瓦器	椀	S E 1710		-	(0.8)	-	-	暗灰色 (N3/0)	見込：ジグザク状暗文
108	白磁	皿	S E 1710		11.3	3.5	5.0	完形	釉：灰白色 (10Y8/1) 胎：灰白色 (5Y8/1)	
109	弥生土器		基盤層中	e23	19.8	(4.7)	-	4/12	灰褐色 (7.5YR6/2)	内面：ナデ
110	弥生土器	甕	基盤層中	e23	16.8	(2.1)	-	1/12 以下	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内外面：ナデ
F21 区出土遺物										
111	弥生土器	高杯	S D 2103		28.0	(4.2)	-	1/12 以下	灰白色 (7.5YR8/2)	内外面：ナデ
112	弥生土器	甕	S D 2103		15.0	(6.3)	-	1/12	灰白色 (10YR8/2)	内面：ナデ、体部外面：タタキ
113	弥生土器	甕	S D 2103		-	(5.9)	-	-	灰白色 (10YR8/2)	体部内面：ハケ、外面：ナデ
114	弥生土器	甕	S D 2103		-	(2.9)	-	-	内：灰赤色 (2.5YR5/2) 外：にぶい橙色 (2.5YR6/3)	内外面：ナデ
115	弥生土器	甕	S D 2103		-	(3.7)	4.2	底) 11/12	灰白色 (7.5YR8/2)	内面：板ナデ、外面：タタキか
116	弥生土器	甕	S D 2103		-	(2.2)	4.8	3/12	内：黒褐色 (7.5YR3/1) 外：にぶい橙色 (2.5YR6/3)	内面：板ナデ、外面：タタキか
117	弥生土器	器台か	-		-	(1.4)	-	-	橙色 (2.5YR6/8)	内外面：ナデ
F 18 区出土遺物										
118	瓦器	皿	S D 1816		9.9	12.0	-	1/12 以下	灰白色 (N7/0)	
119	弥生土器	壺	S D 1821	畦第4層	13.6	(3.4)	-	2/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内面：ナデ、外面：ハケ後ナデ
121	弥生土器	甕	S D 1821	畦第15・16層、西壁第14層	15.7	(17.5)	-	□) 12/12	褐灰色 (7.5YR4/1)	内外面：ハケ
122	弥生土器	甕	S D 1821	畦第4層	15.9	(2.7)	-	□) 3/12	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内面：ナデ
123	弥生土器	甕か	S D 1821	畦第9層	-	(1.5)	-	-	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内外面：ナデ
124	弥生土器	高杯	基盤層	西壁第17層	-	(2.2)	11.6	2/12	灰白色 (10YR8/2)	内面：ナデ、外面：ミガキ
125	弥生土器	甕	基盤層	西壁第17層	19.6	(12.2)	-	3/12	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	内面：タテハケ、外面：タタキ
126	弥生土器	甕	基盤層	西壁第18層	15.0	(4.3)	-	1/12	明褐灰色 (7.5YR7/2)	内外面：ナデ

番号	種類	器種	遺構	グリッド・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整/備考
127	弥生土器	甕	基盤層	西壁第18層	-	(6.1)	3.9	12/12	灰黄褐色 (10YR5/2)	内面:ヨコハケ、外面:タタキ
128	弥生土器	甕	基盤層 漸移層	西壁第20層	-	(7.8)	-	3/12	灰白色 (7.5YR8/2)	内面:ナデ、外面:タタキ
129	弥生土器	甕	基盤層 漸移層	西壁第20層	-	(4.0)	4.2	5/12	褐灰色 (10YR5/1)	内面:ハケ、外面:タタキ
130	弥生土器	壺	-	l24	-	(5.1)	-	3/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内外面:ナデ
131	弥生土器	器台	-	l23	-	(12.8)	20.6	底) 2/12	浅黄色 (2.5Y7/3)	内面:ナデ、外面:ハケ
132	弥生土器	高杯	-	l24	-	(10.4)	14.7	底) 5/12	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内面:ナデ、外面:ミガキ三方円孔
133	弥生土器	鉢	-	k24	15.6	13.3	4.8	口) 10/12	灰白色 (10YR8/2)	内面:ナデ、外面:工具ナデ
134	弥生土器	甕	-	k23	14.9	21.4	3.9	口・底) 12/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内外面:ハケ、外面下半:ケズリ
135	弥生土器	甕	-	l24	15.8	(6.0)	-	6/12	灰白色 (10YR8/2)	内外面:ナデ
136	弥生土器	甕	-	l24	-	(3.7)	-	-	灰白色 (10YR8/2)	内外面:ナデ
137	弥生土器	壺か	-	l23	-	(4.5)	5.7	底) 12/12	内:黄灰色 (2.5Y4/1) 外:灰白色 (10YR7/1)	内面:ナデ、外面:ハケ後ナデ
138	弥生土器	甕	-	l24	-	(3.2)	2.0	底) 12/12	内:灰白色 (10YR8/1) 外:橙色 (5YR7/6)	内面:ナデ、外面:ケズリ
139	土師器	杯C I	-	k24	15.8	(5.7)	-	2/12	橙色 (5YR6/6)	内面:ミガキ 底部外面:ケズリ、口縁部外面:ミガキ
140	須恵器	杯H	-	k24	-	(2.8)	-	受) 2/12	灰白色 (N7/0)	底部外面:ケズリか
141	須恵器	杯B	-	k1	-	(1.6)	11.4	底) 5/12	灰白色 (N7/0)	
142	土師器	皿	-	j24	9.7	(0.9)	-	1/12	灰白色 (10YR8/2)	内外面:ナデ
143	瓦	丸瓦	-	l24	長さ (5.4)	幅 (6.7)	-	-	灰白色 (10YR8/2)	凹面:布目
144	土製品	土錐	-	k25	長さ 2.7	幅 0.8	-	-	灰白色 (7.5TR8/2)	
F 22 区出土遺物										
145	弥生土器	甕	S D 2201	北壁第11層相当	17.7	(2.9)	-	3/12	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	内面:ナデ、外面:ハケ
146	弥生土器	甕	S D 2201	北壁第11層相当	-	(4.5)	-	-	内:黒褐色 (2.5Y3/1) 外:灰白色 (2.5Y8/2)	内面:ハケ、外面:ナデ
147	土師器	皿	S D 2201	北壁第11層相当	-	(1.4)	-	-	灰白色 (7.5YR8/2)	内外面:ナデ
148	弥生土器	器台	S D 2202	北壁第12層相当	15.0	(1.5)	-	3/12	灰白色 (7.5YR8/2)	内面:摩滅、外面:ナデ
149	弥生土器	高杯	S D 2202	北壁第12層相当	-	(4.8)	-	-	浅黄褐色 (10YR8/3)	内面:ナデ、外面:ミガキ
150	土師器	高杯	-	-	-	(9.0)	14.3	底) 12/12	にぶい褐色 (10YR7/4)	内面:ナデ、外面:ミガキ四方円孔
151	弥生土器	甕	-	h8	-	(6.0)	-	-	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内面:ナデ、外面:タタキ
152	弥生土器	甕	-	-	-	(3.5)	-	-	にぶい褐色 (5YR7/4)	内面:ナデ、外面:ハケ
153	弥生土器	甕か	-	h8	-	(3.2)	5.6	底) 12/12	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	内外面:ナデ
154	弥生土器	甕か	-	h8	-	(1.8)	3.8	底) 6/12	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	内外面:ナデ
155	須恵器	甗	-	-	-	(6.5)	-	体) 12/12	灰色 (5Y6/1)	底部外面:ロクロケズリ、ロクロの回転方向:右
156	土師器	杯	-	-	14.4	5.3	-	口) 4/12	灰白色 (7.5YR8/2)	内面:ナデ、底部外面:ケズリか

番号	種類	器種	遺構	グリッド ・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整 / 備考
157	土師器	杯	-		12.4	5.8	-	口 9/12	灰白色 (10YR8/1)	内面：ナデ、底部外面：ケズリ
158	土師器	高台付杯	-		-	(2.9)	8.1	底 12/12	にぶい橙色 (5YR7/4)	内外面：ナデ
159	土師器	甗	-		-	(25.6)	-	胴 3/12	灰白色 (7.5YR8/1)	内外面：ハケ
160	瓦器	椀	-		-	(2.9)	-	-	灰色 (N5/0)	
161	瓦器	椀	-		-	(0.6)	6.0	底 3/12	灰色 (N5/0)	
162	白磁	椀か	-		-	(3.0)	-	-	灰白色 (7.5YR7/1)	
163	白磁	椀か	-		-	(1.8)	-	-	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	

圖 版

(1) 調査地遠景(南東から)



(2) 第1トレンチ遺構検出作業
(北東から)



(3) 第1・2トレンチ遠景
(東から)



図版第2 北野台遺跡第7次



(1) 第1 トレンチ全景(上が北)



(2) 第1 トレンチ全景(南から)



(3) 掘立柱建物 S B01 全景
(南西から)

(1) S B01 - P13検出状況
(西から)



(2) S B01 - P13掘形分割
調査状況(西から)



(3) S B01 - P12検出状況
(西から)





(1) S B01 - P12掘形分割
調査状況(から)



(2) 焼土坑 S X03検出状況
(南から)



(3) 焼土坑 S X03埋土分割
調査状況(南から)



(1) S X03完掘状況(南から)



(2) 第1トレンチ南東角断割土層
(北から)



(3) 第1・2トレンチ遠景
(西から)

図版第6 北野台遺跡第7次



(1) 第2トレンチ全景(上が北)



(2) 沼状地 N X 20 調査状況
(東から)



(3) 水路 N X 21 全景(東から)

図版第7 北野台遺跡第7次



(1) 第2トレンチ全景(南東から)



(2) NX20セクション1 土層
堆積状況(東から)



(3) NX20セクション2 土層
堆積状況(東から)



(1) N X 20 須恵器杯 B 出土状況
(西から)



(2) N X 20 須恵器蓋 出土状況
(南から)



(3) N X 20 墨書土器 出土状況
(南東から)



(1) N X 20碧玉製管玉出土状況
(東から)



(2) N X 20第3区板材出土状況
(北から)



(3) N X 20第3区板材出土状況
(東から)

図版第10 北野台遺跡第7次



(1) N X 20第1区北壁断割1土層
(南から)



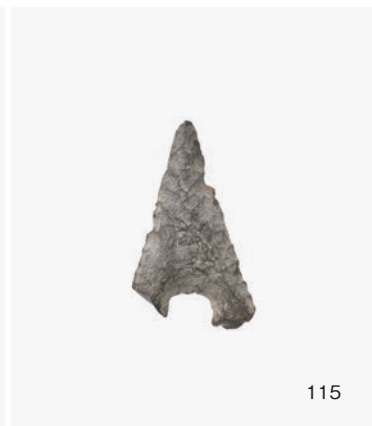
(2) N X 20第3区北壁断割2土層
(南から)



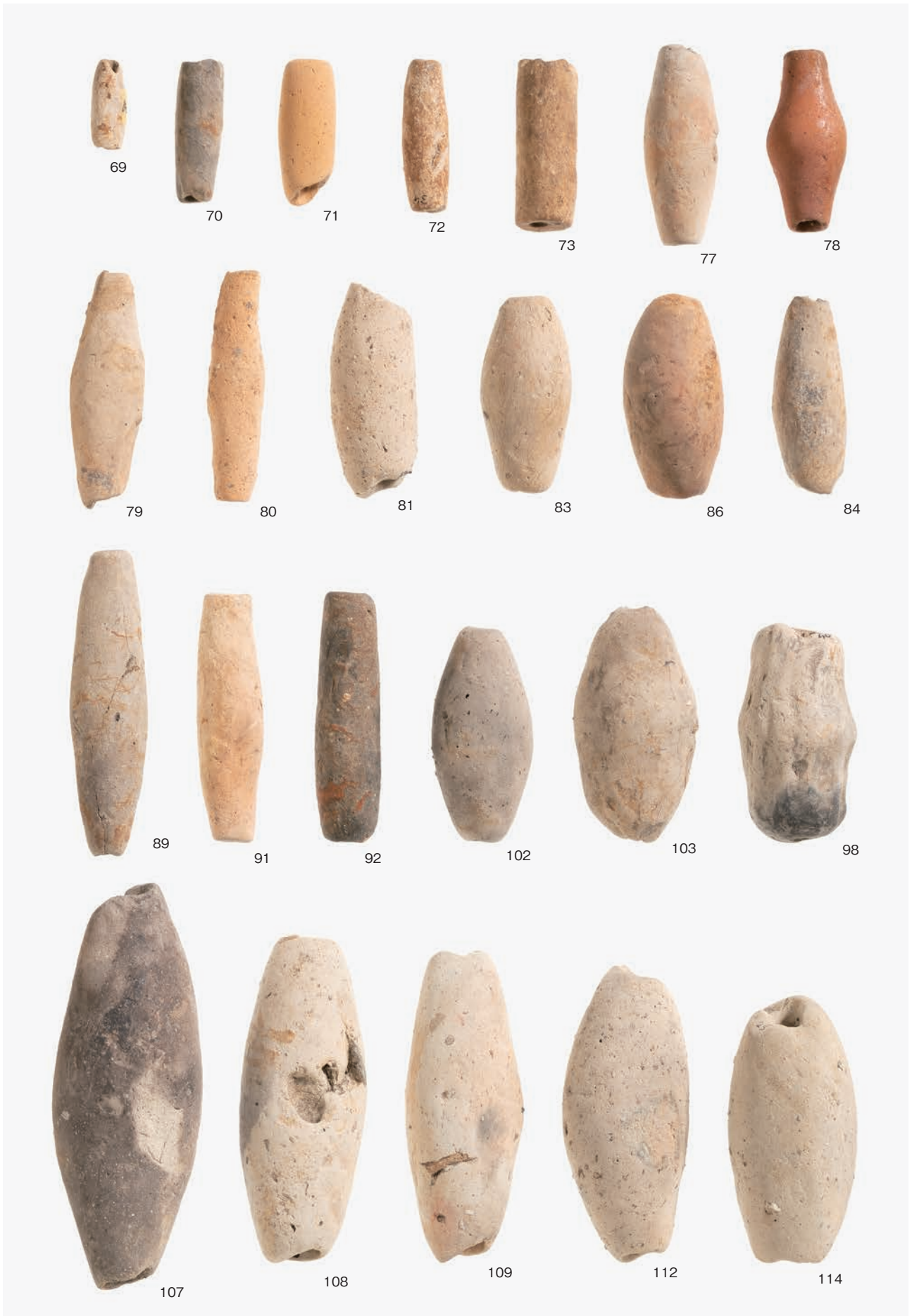
(3) N X 20第4区北壁断割3土層
(南から)



出土遺物 1 弥生土器・土師器・須恵器



出土遺物 2 須恵器・墨書土器・石鏃・管玉



出土遺物 3 土錘



120



125



126



122



123



124



(1) A地区 調査区全景(南西から)



(2) A地区 土師器・須恵器出土状況(北から)



(1) A地区 堰堤(南西から)



(2) A地区 調査区東壁断面(西から)

図版第3 平野古墳群



(1) B地区 1・3トレンチ全景(南東から)



(2) B地区 1トレンチ東側斜面(西から)

図版第4 平野古墳群



(1) B地区 1 トレンチ全景(南から)



(2) B地区 断ち割り1(北から)

図版第5 平野古墳群



(1) B地区 2トレンチ(北から)



(2) B地区 断ち割り2(西から)



(1) B地区 3トレンチ全景(西から)



(2) B地区 3トレンチ西側断面(北東から)



出土遺物 1



12



11



6



16



15

図版第1 小樋尻遺跡第13次



(1) 調査地西半遠景(西から)



(2) 調査地東半遠景(東から)

図版第2 小樋尻遺跡第13次



(1) 調査トレンチ西半全景
(上が南)



(2) 調査トレンチ西半全景
(西から)



(3) 調査トレンチ西半全景
(東から)

図版第3 小樋尻遺跡第13次



(1) 調査トレンチ東半全景
(上が北)



(2) 調査トレンチ東半全景
(西から)



(3) 調査トレンチ東半全景
(東から)



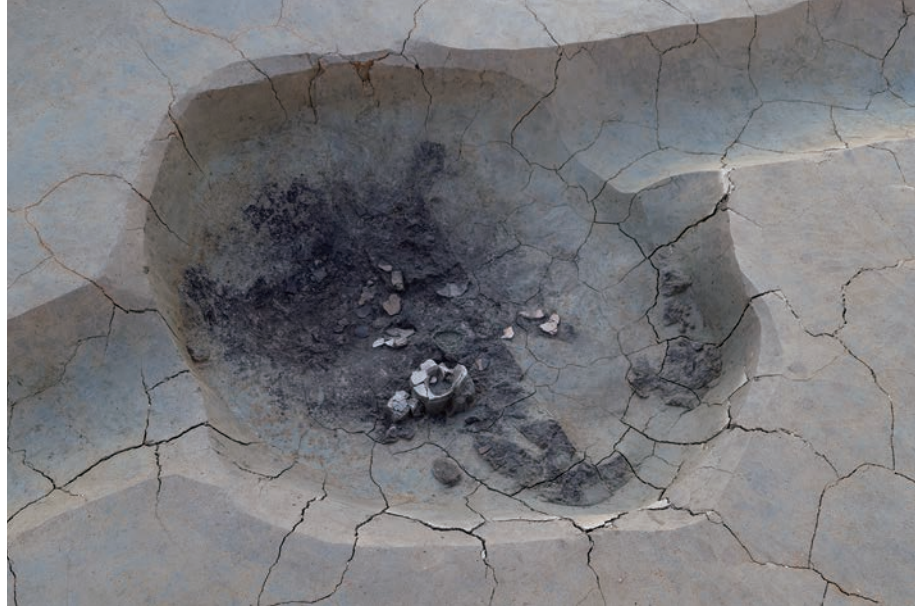
(1) 井戸 S E11 上層検出状況
(北東から)



(2) 井戸 S E11 下層土器出土状況
(北東から)



(3) 井戸 S E11 完掘状況
(北東から)



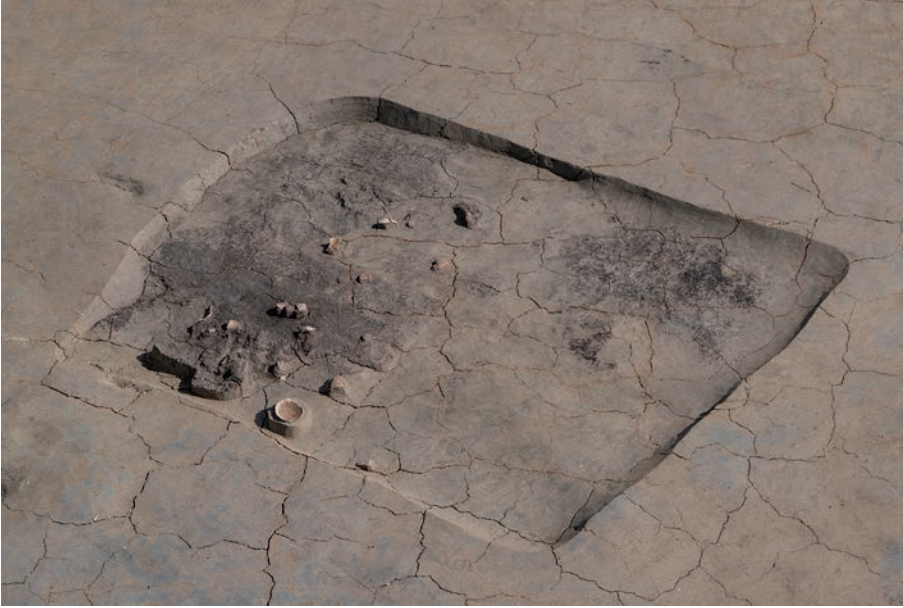
(1)土坑 S K13(北東から)



(2)溝 S D06・土坑 S K13
(南東から)



(3)溝 S D06・07・08・09
土坑 S K13(南から)



(1) 竪穴建物 S H02(西から)



(2) 竪穴建物 S H02・21
(北東から)



(3) 溝 S D01(北東から)

(1)溝 S D05(南東から)



(2)溝 S D24・35(北西から)



(3)溝 S D14(北西から)





(1)井戸 S E34(北から)



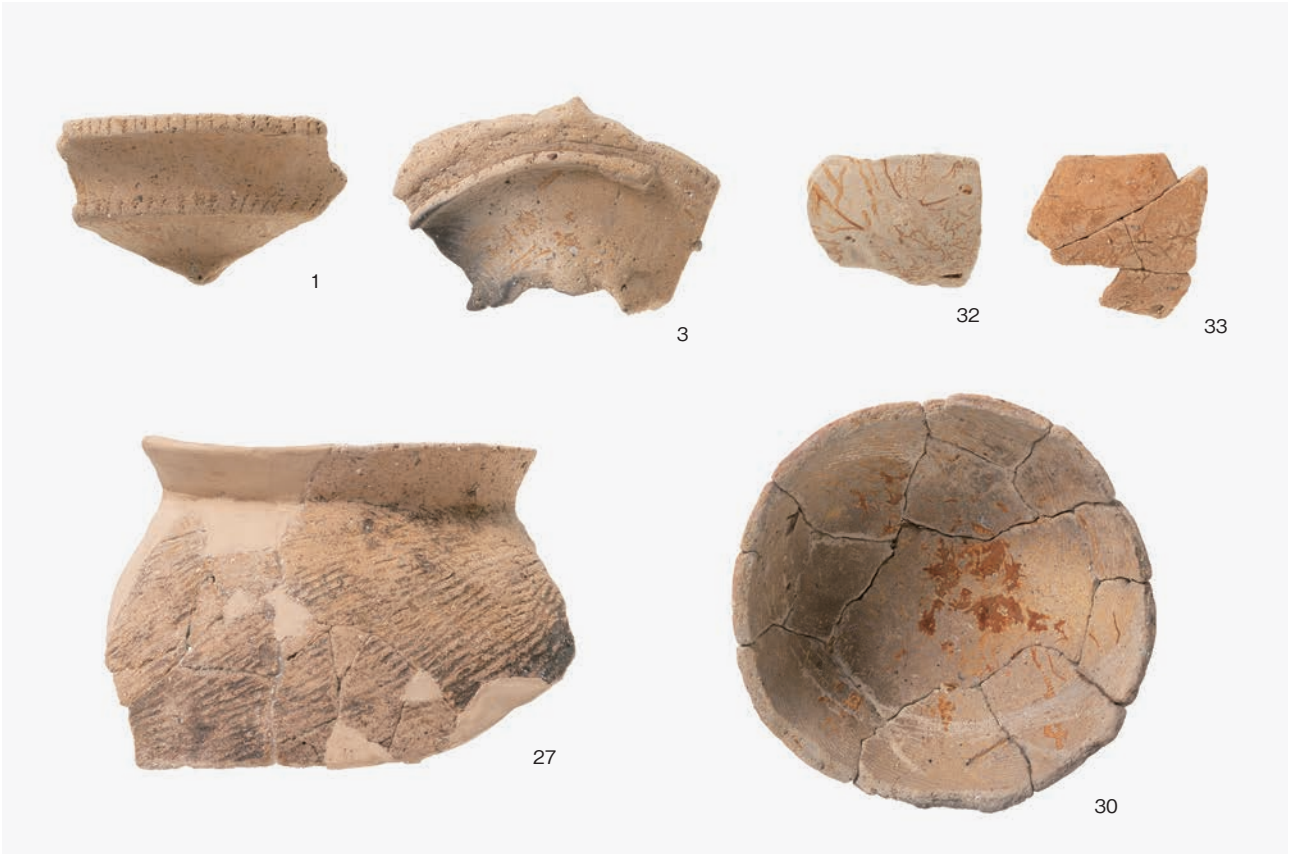
(2)土坑 S K33(北から)



(3)土坑 S K16・溝 S D19
(東から)



出土遺物 1



(1) 出土遺物 2



(2) 出土遺物 3

図版第1 下水主遺跡第10～12次



(1) F15区完掘状況(北西から)



(2) F15区完掘状況(西から)

図版第2 下水主遺跡第10～12次



(1) F15区 S D1502遺物出土状況
(北西から)



(2) F15区北壁土層断面
(南東から)



(3) F15区下層調査西壁断割
土層断面(北東から)

図版第3 下水主遺跡第10～12次



(1) F19区完掘状況(南から)



(2) F19区完掘状況(南東から)

図版第4 下水主遺跡第10～12次



(1) F19区 S D1904検出状況
(北から)



(2) F19区北壁土層断面
(南東から)



(3) F19区下層調査北壁断割
土層断面(南東から)

図版第5 下水主遺跡第10～12次



(1) F16区完掘状況(北東から)



(2) F16区完掘状況(南東から)

図版第6 下水主遺跡第10～12次



(1) F16区完掘状況(東から)



(2) F16区北壁土層断面
(北西から)



(3) F16区下層調査東壁断割
土層断面(南西から)



(1) F13区基盤層面完掘状況(東から)



(2) F13区基盤層面完掘状況(西から)

図版第8 下水主遺跡第10～12次



(1) F13区 S D1302検出状況
(東から)



(2) F13区 S D1302遺物出土状況
(北西から)



(3) F13区 S D1303敷粗朶検出
(1面)状況(北から)

(1)F13区 S D1303敷粗朶検出
(1面)状況(東から)



(2)F13区 S D1303敷粗朶検出
(2面)状況(北東から)



(3)F13区 S D1303南半部護岸
横木検出状況(東から)





(1) F13区 S D1303南半部護岸
横木検出状況(北東から)



(2) F13区 S D1303完掘状況
(北から)



(3) F13区 S D1304検出状況
(南東から)



(1) F13区下層調査S D 1304自然木出土状況(東から)



(2) F13区下層調査S D 1304自然木出土状況(南西から)



(1) F13区下層調査西壁断割
土層断面(東から)



(2) F13区下層調査南壁断割
土層断面(北から)



(3) F13区下層調査完掘状況
(南から)



(1) F20区完掘状況(東から)



(2) F20区完掘状況(北東から)



(1) F 20区遺構検出状況
(北西から)



(2) F 20区島畑112(北東から)



(3) F 20区 S D 2002・2003
完掘状況(北から)

(1) F20区SD2001北畦土層断面
(南から)



(2) F20区SD2006土層断面
(南西から)



(3) F20区下層調査北壁断割
土層断面(南東から)





(1) F14区完掘状況(北から)



(2) F14区完掘状況(北東から)



(1) F14区 S D1402完掘状況
(北西から)



(2) F14区遺物(第55図84)
出土状況



(3) F14区南壁土層断面
(北西から)

図版第18 下水主遺跡第10~12次



(1) F17区中世面完掘状況(西から)



(2) F17区中世面完掘状況(北西から)



(1) F17区中世面S E1710遺物
出土状況(北東から)



(2) F17区S E1710断割土層断面
(北から)



(3) F17区S X1705遺物出土状況
(西から)



(1) F17区中世面S P1707
(S B1723)土層断面(西から)



(2) F17区中世面S P1712
土層断面(南から)



(3) F17区中世面S D1709南畦
土層断面(北から)



(1) F17区基盤層面完掘状況(西から)



(2) F17区基盤層面島畑113(南西から)



(1) F17区基盤層面高畑110
(南東から)



(2) F17区基盤層中遺物出土状況
(西から)



(3) F17区下層調査南壁断割
土層断面(北から)

図版第23 下水主遺跡第10~12次



(1) F21区中世面完掘状況(南東から)



(2) F21区中世面完掘状況(北東から)



(1) F21区中世面遺構検出状況
(南から)



(2) F21区中世面 S P2101
(S B2104)土層断面(南から)



(3) F21区中世面 S D2103
土層断面(東から)



(1) F21区基盤層面完掘状況(南西から)



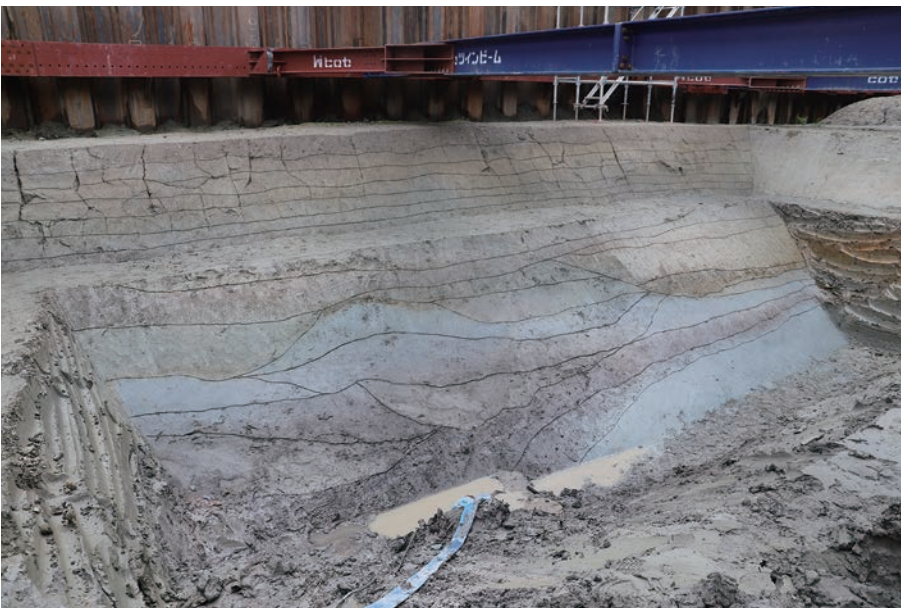
(2) F21区基盤層面完掘状況(北西から)



(1) F21区基盤層面島畑114
(北東から)



(2) F21区北壁土層断面(南から)



(3) F21区下層調査東壁断割
土層断面(北西から)

図版第27 下水主遺跡第10~12次



(1) F18区中世面完掘状況(西から)



(2) F18区中世面完掘状況(南東から)



(1) F18区中世面 S P1810(S B1801)土層断面(北西から)



(2) F18区中世面 S P1806(S B1801)土層断面(北西から)



(3) F18区中世面 S P1817(S B1801)土層断面(南東から)



(4) F18区中世面 S P1818土層断面(南西から)



(5) F18区中世面 S D1808土層断面(北から)



(6) F18区中世面 S D18109南畦土層断面(北から)



(7) F18区中世面 S D1816土層断面(北から)



(8) F18区中世面 S D1815土層断面(北から)

図版第29 下水主遺跡第10~12次



(1) F18区基盤層面完掘状況(西から)



(2) F18区基盤層面完掘状況(南東から)



(1) F18区下層調査完掘状況
(北から)



(2) F18区下層調査有機物層面の
検出状況(北から)



(3) F18区下層調査西壁断割
土層断面(南東から)



(1) F22区完掘状況(東から)



(2) F22区完掘状況(北東から)



(1) F 22区 S D 2202検出状況
(南東から)



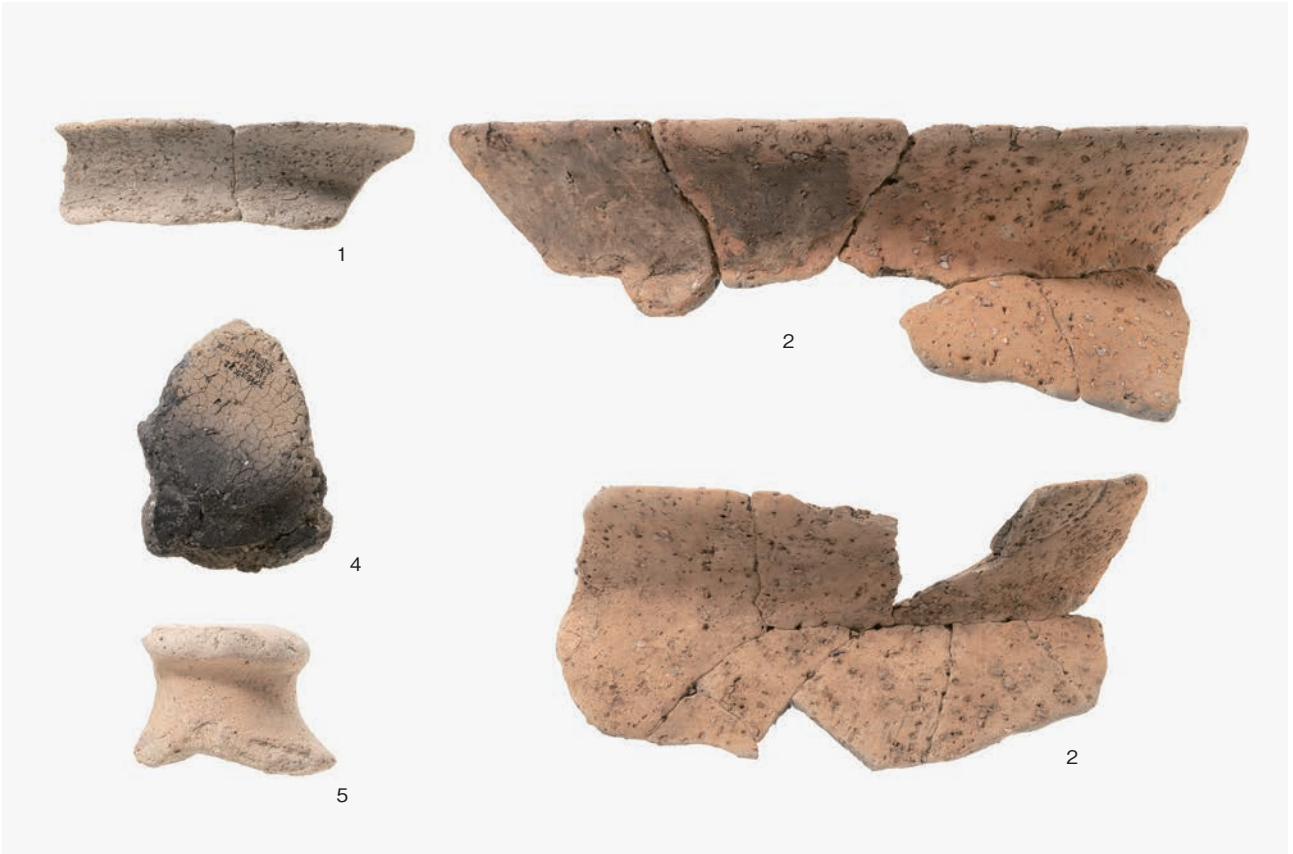
(2) F 22区 島畑115断割状況
(北から)



(3) F 22区北壁土層断面
(南東から)



下水主遺跡調査対象地全景(木津川右岸から宇治丘陵を望む、西から)



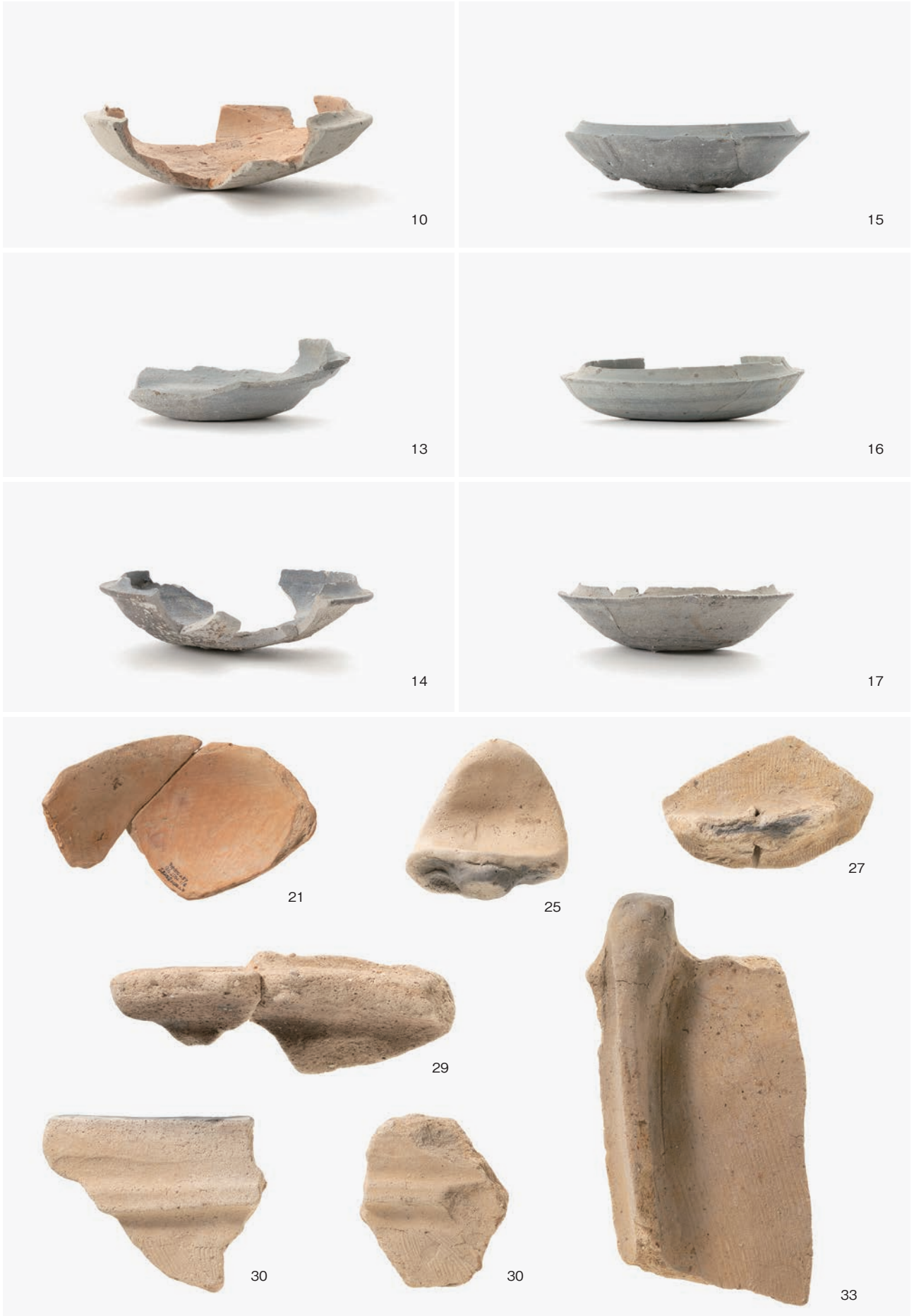
(1) 出土遺物 1 下水主遺跡 F15・F19区出土遺物



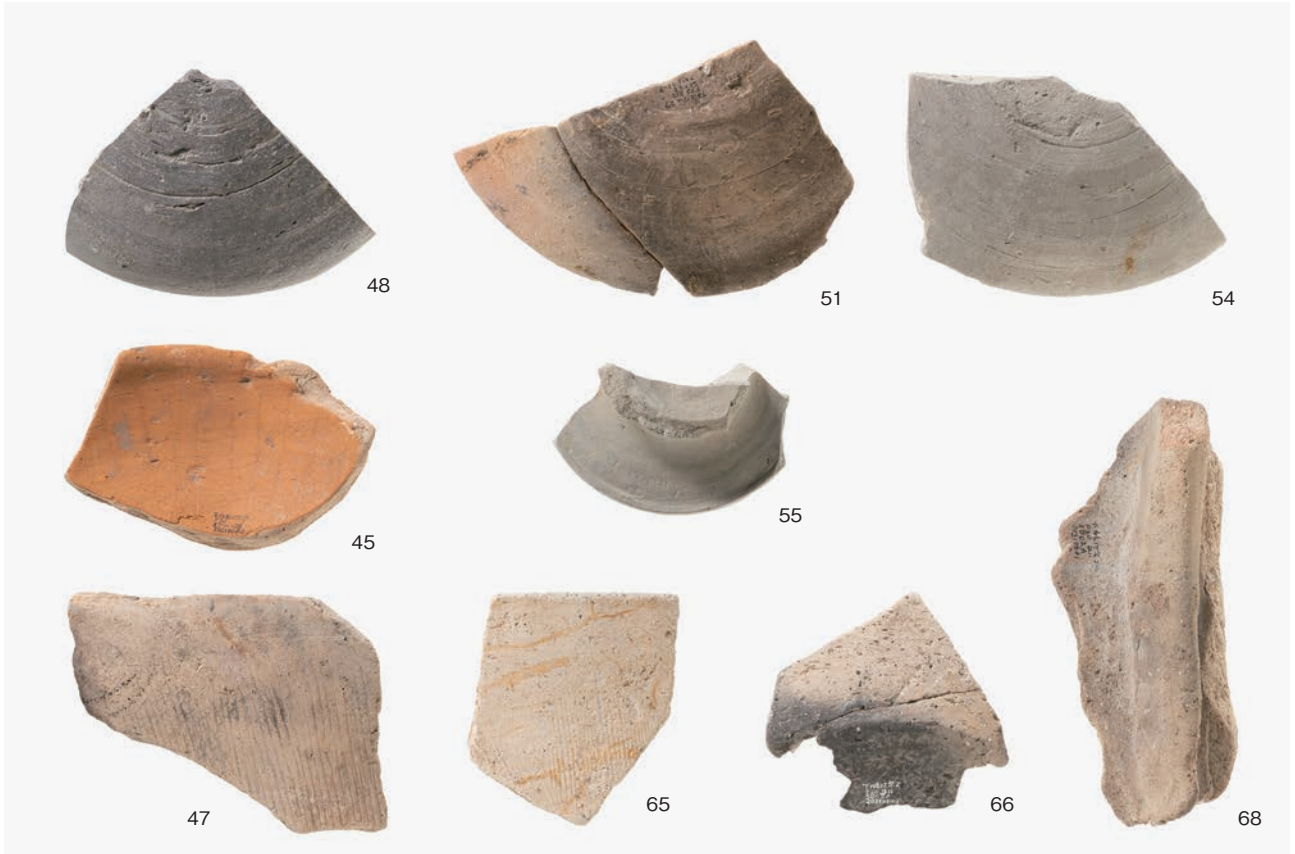
3 口縁~胴部

3 底部

(2) 出土遺物 2 下水主遺跡 F15区出土遺物



出土遺物 3 下水主遺跡F13区出土遺物



(1)出土遺物 4 下水主遺跡 F20区出土遺物



(2)出土遺物 5 下水主遺跡 F14区出土遺物



出土遺物 6 下水主遺跡F17・F21区出土遺物



(1) 出土遺物 7 下水主遺跡 F18区出土遺物



(2) 出土遺物 8 下水主遺跡 F18区基盤層出土遺物



95



88



132



121



134



133

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第192冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第192冊
編著者名	竹原一彦、中尾真琴、小泉裕司、加藤雅士
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2023年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
きたのだい 北野台遺跡第7次	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう 京都府綾部市 位田町	262030	A 118	35° 18' 51.98"	135° 14' 4.16"	20220908 ~ 20221221	1,150	農地整備
ひらの 平野古墳群	きょうとふかめおかし 京都府亀岡市 千歳町千歳	262064	10	35° 04' 3.24"	135° 34' 22.3"	20221108 ~ 20230106	100	砂防
こひじり 小樋尻遺跡第13次	きょうとふじょうようし 京都府城陽市 富野小樋尻	262072	91	34° 50' 46.67"	135° 46' 57.18"	20210906 ~ 20220302		道路建設
しもみずし 下水主遺跡第10次	きょうとふじょうようし 京都府城陽市 みずしだいしょうぐん 水主大將軍・ くらがい 寺田金尾	262072	88	34° 50' 47.73"	135° 45' 33.02"	20200130 ~ 20200227	712	道路建設
しもみずし 下水主遺跡第11次						20200528 ~ 20200921	1,050	
下水主遺跡第12次						20210426 ~ 20210921	650	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北野台遺跡	集落	奈良・平安	掘立柱建物、沼状地形	土師器、須恵器、墨書土器、土錘、柱材	
平野古墳群	古墳	古墳	墳丘盛り土状遺構	須恵器	
小樋尻遺跡	集落	弥生～古墳、奈良	井戸、竪穴建物、溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器	
下水主遺跡	集落	弥生、古墳、中世	弥生時代・古墳時代の流路、飛鳥時代整地層、中世島畑	弥生土器、土師器、須恵器	

所収遺跡名	要約
北野台遺跡	2地区で調査した。第1トレンチでは、官衙関連とみる奈良時代後期から平安時代前期の建物跡(2間×8間以上)を検出した。第2トレンチでは沼状地を検出し、多量の須恵器供膳具・土錘などが出土した。須恵器には墨書土器・円面硯が含まれる。
平野古墳群	古墳状隆起(盛り土状地形)4か所を調査した。1か所は古墳墳丘の裾部と想定され、6世紀後半の須恵器が出土した。他の3か所については近代の礫積みや自然堆積であった。
小樋尻遺跡	弥生時代後期後半から末にかけての井戸を検出。古墳時代後期から飛鳥時代にかけて集落が営まれ、古墳時代後期の方形竪穴建物2棟を溝などを検出した。
下水主遺跡	新名神高速道路に伴う下水主遺跡の最終調査。平成25年に調査を実施した第4次調査のF1～F12地区の内側で、橋脚部にあたるF13～22の10地区の調査を実施。弥生時代、古墳時代の流路、飛鳥時代整地層及び中世島畑を検出。既往の成果も含めて遺跡を評価。

京都府遺跡調査報告集 第192冊

令和5年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
Tel (075)467-5151 Fax (075)467-5152